

---

## TIERRA DE NADIE/The second act

さきは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TIERRA DE NADIE / The second act

### 【Nコード】

N8568W

### 【作者名】

さきは

### 【あらすじ】

・ はじまりは玉座への叛逆の剣。白亜の帝都を握るのは、叛徒か女帝か教会か。爛熟の帝国に踊る造反劇。多分おそらく異世界ファンタジーな西洋中世風味架空帝国史。の、第二幕。基本物騒です。で、苦手な方はご注意を。 片足靴屋 / Leith bhrogan (<http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>) に掲載しているものと同一内容です。

## **T h e   s e c o n d   a c t - 0 1   (前書き)**

実在の人物・事件・地名等とは一切関係ありません。  
基本物騒ですので、苦手な方はご注意ください。

## The second act - 01

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Prologue

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

透明な大気が大地を駆け巡るのなら、それはきっと、窓の軋みや樹のざわめきとなって我々の耳に届くのだろう。

既に黄昏の煌きが溶け果てた夜空には星屑が沈み、もはや陰影と成り果てた茂みを撫でる潤んだ風はざわめきを生み出す。

「ひとつの勝利の話をしよう。瓦解へと繋がる勝利の話を。他でもない我々が、今、こうして語り合える状況を生み出すに至った契機とも見なしうる、勝利の話を」

ぱらぱらと雨粒が踊るように弾け散る音律は見上げるような大窓の硝子を風にそよぐ大樹の葉が叩く音であり、部屋の大きさに対してあまりにも仄かすぎる灯火がゆらぐ空間に響く音律は、青年と少年の狭間にたゆたう年頃の、金の髪少年が紡ぎ出す声音だった。

大きく仰がざるをえないほどに高く高い天井の、その自重を支える梁がひとつになる天蓋の下。そこに佇む金髪の少年はこの場所の主癖毛なのか収まり悪く肩下あたりまでうねる金髪を持つ少年に横顔を見せながらひとり窓の外を眺めていた客人たる人影は、わずかに顎を擡げ、鷹揚に首を傾げながら、壁際に置かれている精緻な細工の施された銀の燭台から零れさざめく不安定でやわらかな灯によつ

て浮上する目の前の人物を、灯火の橙が宿るその董色の目に映す。金髪の少年とさほど変わらぬ年の頃と見受けられるその黒髪の少年は、大人びているというよりは老成したと形容する方が相応しい、感情が閃くことも動揺に揺れることすらも想像することのできないような、ひどく落ち着き払った目をしていた。

「勝利、ですか？」

穏やかな無表情を崩さぬ客人の背後で、風に押された窓枠が軋む。

「あの出来事がなければ彼の帝国が疲弊することはなかった。いや、あの出来事がなければ、彼の帝国は、あのようなかたちでその疲弊を露呈することも、その疲弊が露見することも、なかった。そうは思わないか？」

金髪に縁取られたやや気難しそうな顔に試すような笑みが広がる。どこか挑むような色を含むのは、やや吊り気味の、幾重にも重なった薄氷を陽に透かしたような煌きを孕む透きとおった碧の目。くすり、と、客人は微笑う。

「お戯れを。あの出来事がなくとも、おそらく、私たちは遅かれ早かれ同じような結果を目の当たりにすることになったでしょう。当時、偶発的に彼の帝国の片隅に身を置くことになった私にすら、強大と謳われた彼の帝国が人々の口に上るようなそれとは異なっていることを、感覚においては、捉えることができてしまっていた。あの当時、私などよりもずっと帝国の動きに敏感である位置に身を置いていた貴方がその可能性を看過したなどとは、考えにくいにも程がある」

静かな瞬きの後、董色の目は薄氷の目を正面から見据えた。

「ファウストウス暦423年に終結したシュタウフェン帝国における帝都包囲。帝国が内部にて分裂したその動乱において、結果的に勝利を手にしたのは他でもない帝国皇帝。ですが、その勝利は、一時の平穩をすら、帝国にもたらすことはなかった」

ここで客人はひとつ息をつき、

「そのおかげで、こうして私は貴方の前に立てるのですけれどね」

わずかに眼を落としながら、失笑のような自嘲めいた笑みをその唇に刻ませる。すると、それまでは客人とどこか距離を測っていた金髪の少年が、不意に、かすかな笑みを零した。

「感傷か？」

ささやかな嘲りを孕むこの問いに、

「思い出、ですよ」

客人はやわらかく微笑する。

屹立する大窓が相對するふたりの少年を映し出す。水面のような光沢を撒く灯火のゆらめきが、やわらかな金と硬質な黒に艶やかな橙を閃かせ、塗り潰したかのように平坦な夜の闇に散じていった。

漣は海嘯となつて大地からすべてを呑み去り、埋もれていた諸事象を抉り出した。

件の勝利より数年

なおも瓦解と崩壊の残滓が鮮烈に渦巻く大陸において、休息する暇すら得ることもできず、各々の目的のために、ふたりの少年は対峙する。

耳が痛いほどの静寂の中、蠟燭の芯の焦げる音が弾けて響き、軽や

かに舞い落ちていった。

さわさわとやわらかな新緑がそよ風に揺れていた。夏に向かって次第に鋭さを増していくものの、初夏の陽光はまだ白く、穏やかであたたかだ。

どこことなく平面的な蒼い空にぼつかりと浮かんだ鮮やかな白の雲が流れてゆく。空の高いところと低いところでは風の速さが違うのか、地上から空を見上げると、ゆったりと流れる雲の向こうにそれよりも急いで流れる雲の姿が重なって見えた。

「ひとつの滅びの話をしようか。理想と願望、野望と思惑。混迷を顕現し、変革を実現し、各々が各々の大切としたいものを護ろうと悲痛なまでに渴望して      未だその結末を詳らかにしていない滅びの話を」

響いたのは玲瓏で耳に心地よい青年の声音。四方を壁に囲まれた圧迫感を覚えるほどの小さな中庭で、繁茂する緑に埋もれるように置かれている長椅子に腰掛けた青年が場違いなまでに枝葉を伸ばす樹樹たちを眺めながら静かに語り始める。青年の傍らに座る亜麻色の髪の子が、困惑した様子で青年の横顔を見上げた。青年は幼子に向き直り、ふわりと微笑する。

「そんなにかまえることはないよ。別段、難しいことを話そうとしているわけでもない」

わずかに身を屈めて大きな蒼の目を瞬く幼子の目線に己のそれを合わせ、青年は静かに瞼を落とした。風にそよぐ大樹の葉に合わせてゆらめく緑陰が、風に揺れる青年のやわらかな白金の髪に流動的な濃淡を描いて踊る。

白い雲が蒼い空をゆったりと流れていった。

ほどよく冷えた爽やかな風に、さらりと下草が、ざわりと樹樹の葉が、軽やかに、重々しく、そよいでいて。

「端的に言つなれば、これはただの愚か者たちのおはなし」

世界のすべてに祝福をもたらすかのようなやわらかな音律は吹き上がる風にさらわれて、果てのない蒼穹に散じてゆく。



The second act - 01 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 02

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 1 / 01

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

すべての音を呑み尽くす雪原に似た静寂に鼓膜は圧され、そのあまりの冷ややかさに意図せずとも強張る肌が宵闇の昏さに映える。

ひとりで棲むには広大すぎる館の一室に、この館の主たる亜麻色の髪青年が長椅子に寛ぎながらひとりまどろんでいた。長椅子の前に広がるカーテンの閉められていない窓は夜の青褐に沈む庭園を切り取り、清廉なる月明かりを導き入れている。優美な曲線を描く肘置きには組んだ脚が無造作に投げ出され、もう一方の肘置きには背凭れに顔を向けるように傾げられた首筋が預けられていて、辛うじて背凭れに肘を預けている片腕の手の甲が青年の目許を隠していた。青年の他には誰もいないはずのこの館においては、時折かすかに柱や窓枠が軋む以外は、大気が揺らぐことすらない。

青年の目の上でゆるく何かを掴むようなかたちを描いていた指が、不意に、揺れるように、動いた。

わずかに持ち上げられた瞼の下から現れた蒼の目が、宵闇を映しこみ深さを際立たせながら、腕の下からぼんやりと天井を眺める。擡げられるように緩慢に動く首筋は月明かりに曝されて    頬や腕は勿論、冷気に強張っているのは緩められた襟から覗く肌すら例外ではなく    どこか白磁の陶器めいた無機質さとまるやかさを放っていた。

それまで無表情であつた青年の表情筋がわずかに動き、失笑のような自嘲のような笑みを、たゆたわせるよりも薄く刻む。

わずかな身じろぎに青年の硬質な短髪が揺れた。どうやらそれは否定の仕草らしく、先ほど青年が気づいた何かを、それは勘違いであると認識したがゆえのものであるらしかった。

だが、すぐに青年はそれとは別の何かを確信として認識する。

浮遊感めいた一瞬のおぼつかなさや床が震えた証。床に投げ出された指先を伝うのは、水よりもかすかな感触で流れる大気の動き。ほどなく振動は靴音となつて青年の耳に届き、青年が嘆息しながら億劫そうに身を起こすと同時、扉の形に現れた光が扉の開放された音響が霧散するより速く光の道を床面に走らせる。

「デシエルト総督にしてアルバグラード戦線総司令官     アクイレ  
イア子爵ウォルセヌス」

こつり、と、靴音が響いた。

率いてきた数人を廊下に待たせたまま、ひとり室内に踏み出して廊下の灯火を背に立つ紅の制服に身を包む男が青年の名を響かせる。

「アルバグラードは余計だ。彼の地の総指揮権は既に対アレス国境駐屯部隊隊長に戻っている」

窓を満たす夜に、扉から伸びる光の川に足を浸して窓と対面するように置かれている長椅子に座る青年の横顔が映った。無表情のままほのかに苦笑めいた雰囲気をたゆたわせながら青年は片手で襟元を治しつつ立ち上がり、廊下のあたたかな灯火を呑み尽す紅の人影に正面から相対する。

「一応、確認しておこう。この館は私の館であり、言うまでもなくこの家の家長は私なのだが・・・」

淡々と、どうでもいいことを語るように、越権行為だ、ということ  
を青年は言外に滲ませる。

「門の鍵は、開いておりましたゆえ」

堅苦しいだけのこの返答に青年の目許が少しだけやわらかくなり、

「夜分にいらぬ騒音で近所に迷惑をかけるのは、心苦しいことこの  
上ない」

施錠されていなかったことはこの館の主たる自分の意図によるもの  
であると表明して、廊下に待機している近衛兵へと声を投げかける。

「館の中は好きに搜索するといい。お望みのものが見つかるかどうかは、保障しかねるが。ちなみに、言っておくが、この館には私の他には誰もいない。家人を捜しても無駄だ。遅くとも二週前には暇を出してある」

これに青年と相對している男がわずかに眉根を寄せた。怪訝さを隠  
そうともしない男に、青年は小さく肩をすくめる。

青年から眼を逸らさぬまま男が軽く片手を挙げると、背後に控えて  
いた男の部下たちは一度の敬礼の後に散っていった。  
凍てついた静寂に月光が踊る。

「訊かないのですか？」

と、ひとりその場に残った紅を纏う男が唇を持ち上げた。何を、と  
問い返すことすらなく、夜を弾く金縁眼鏡によって安易には表情の  
読めない目の前の男を、青年は静謐を纏う蒼の目で見返す。

「近衛兵がここにいる。つまり私に拒否権はない。この状況を理解するには、それだけで十分に過ぎる」

この帝国において皇帝直轄の指揮系統を貫く近衛軍を意のままに動かせる人物はただひとり 帝国皇帝。要するに、その者のみが、通常であれば不可侵権を保障されているはずの諸侯の館に踏み入る許可を近衛軍に与えることができる。そこでは疑惑や容疑や罪状を問いただしたところで何の意味もない。ふ、と、青年の口許を微笑のような穏やかさが過ぎった。

「怪我はいいのか？」

男は淡く微笑し、返礼と敬いをその目に宿らせる。確かに、微熱にでも浮かされているのか、ただ立っているというその行為すら相当の重労働であるようにも見受けられた。襟首までをきっちり着こんでいるにもかかわらず、男の首筋や袖と手袋の間にはひきつった無数の傷痕が見え隠れしている。

「貴方を迎えに来たのです。礼を欠くわけにはいきません」

柔和に屈託無く笑う男につられてか かすかにではあるが、それでも青年を知る者にとっては目を瞠るまでに劇的な変化として映ることはない 青年の顔に誰の目から見ても明瞭である微笑が浮かぶ。

最低限一通りの身支度を整えた後、館の玄関にて、ああそうだと、青年は傍らを歩く男に眼を遣った。

「できれば庭は荒らさないでほしい」

その要望が無意味であることなどは他でもない青年自身が重々承知  
していて。

「あの庭での芽吹きを楽しみにしているひとがいる。踏み荒らされ  
てしまつては、彼女が哀しむだろうから」

思い出した何かをいとおしむように仄かに細められた蒼の目はどこ  
までも優しく。

軋みを上げて開かれた扉の隙間からは、ふわり、と、かすかな薔薇  
の香が漂つてきたような気がした。

果ての知れない、茫漠とした、高く高い蒼穹。白というよりは風化  
し霞んだ色合いの石によつて形成される背の高い建造物が隙間なく  
左右に立ち並ぶ石畳の隘路。夏であればきららしい緑に、秋であ  
れば黄や紅に色づくのであろう今は芯だけの乾いた蔦が飾るのは、  
黒々しい鉄柵のついた窓。道を挟んだ窓と窓との柵に結び付けられ  
た紐が空に網の目を描き、それらに干された洗濯物が冬と春の狭間  
に吹き荒ぶ鋭利な風に翻った。やわらかな陽光に曝されてはためく  
それらは、例外なく目に眩しい。

大陸の三分の二をその版図に収める史上空前の大帝国　シュタウ  
フェン帝国。その東部に位置する南北を峻嶲たる山に挟まれた天然  
の要塞こそが、大陸交易中継の拠点としての栄える、帝都ティエル  
大陸に名を馳せる白亜の城塞都市にて市が開かれ洗濯物がはためき  
喧騒が渦巻くのは、七層から成る帝都の第一層　最も大地に根差  
し、あらゆる者に門戸を開く、開放感と無秩序とが混交する場所だ  
った。

空を切り取る建造物の間の石畳を不安定に荷馬車が通りぬけ、そ  
の度に周囲で遊んでいる子どもたちがはしゃぎ声を上げながら道の

両脇に散る。露店の客引きと痴話喧嘩とが崩壊した建物や城壁を修復する工具の音とが絢い交ぜになった船酔いでもしてしまいそうな大きくゆるいうねりが、隘路を駆け抜ける風にさらわれて上昇し、蒼穹に散じていった。

「では、隣のおばさんよろしく。風邪をひいたりしないように。来月には仕事も一段落着きそうだから、必ず家に顔を出す。それまでどうか元気で」

ひとりの男が誰かに伝えたい言葉を口にする。その声音は文字となつて紙に刻まれ、手紙となつて男の家族に届けられるのだらう。その証明に、道に面して並ぶ家々のひとつ玄関扉の前、扉と道との高低差を埋める段に腰掛けた青年が、その辺で拾ったらしい木板を膝に置いて台にし、光景を描き留めるかのように男の言葉を書き留めていた。

「はい、できたよ」

と、青年は傍らに座る男に完成した手紙を差し出す。それを恭しく受け取った男は、何がそんなに嬉しいのか、満面の笑みを浮かべて青年に硬貨を手渡した。その終結からまだ一月も経っていない戦いによつて破壊された城壁の修理のために帝都に出てきたというその男は、これから 基本的には商業文書や通達文などを運んでいる故郷へと向かう郵便馬車に走つてその手紙を託し、手紙を受け取った男の家族は身近な誰かにそれを読み上げてもらうのだらう。どうも、と、薄い笑みをつくる青年の周囲に、青年が仕事を終えるのを待っていたのか、よくこの辺りで遊んでいる子どもたちが集まり始めた。それによつて立ち上がったその場を立ち去りかけていた男は、道を失つて、再び同じ場所に腰を下ろすことになる。

子どもたちのひとりが差し出した紙切れを受け取った青年は、その

表面を一瞥し、露骨に眉をひそめた。遠目には長方形がいくつか並んでいるように見える細かな文字の羅列が印刷された紙切れを映す青年の深い緑色の目に、億劫そうな色が隠しようないほどに明瞭に浮かぶ。

「なんて書いてあるの？」

「それ読んでたおじさん、真っ青になったと思ったら、急に真っ赤になって怒り出したの」

子どもたちは各々に首を傾げ、その大きな蒼の目は好奇心できらきらしている。青年がふと横を見遣ると、そこでは子どもたちと同じように目を輝かせて男が青年を見ていた。

青年は瞼を落とし、指で眉間の凝りをほぐしながら、溜息をつく。子どもたちが拾ってきた紙切れは新聞の一頁であり、それにはちょっとした出来事が大仰に綴られていた。

「いや、大仰でもないか」

再度の溜息と共に吐き出された言葉に、青年を囲むひとびとが反応する。好奇心に身を乗り出す彼らに結果として詰め寄られるかたちになった青年の視界に街並みとは異質なそれがちらついたその時。

地を震わせるような硬質な振動が大気を切り裂いて、どこか階調の異なるそれらが幾重にも重なって増幅し打ち消し合い、まるで驟雨のごとく鼓膜を叩きのめし地に降り注いだ。

帝都の三層と四層を跨ぐように存在する聖テルム大聖堂の、時告げの鐘が鳴り響く。

「急がないと、そろそろ馬車が出るんじゃないかな」



手紙、届くの遅れるよ。と、青年は男に助言をして、

「ほら、お母さんが呼んでる」

ひとりの子どもの肩に手をかけ、その後方を指差した。

単純にして複雑に絡み合う音階が時を奏で、たった今誕生した響きと残響とが生み出す音律に鳩が飛び立つ。晴れ渡った蒼穹を泳ぐ彼らに白んだ陽光が降り注ぎ、その煌きは閃光となって蒼穹を駆けていった。

どこか夕刻の翳りを窺わせる光と肌が裂けてしまいそうな冷ややかさを孕んだ大気に街は沈んでいる。ひとりを除きそれまでそこにいた人々の立ち去った誰かの家の、玄関扉の前。やわらかな陽光が生み出す陽だまりに埋もれるように座る青年の、短髪なのか長髪なのか判断に迷う中途半端な長さの明るい橙の髪の際が、あたたかな陽光に透けて黄金に輝いた。

時告げの鐘はまだ鳴り響いている。

陽光を弾く石畳に、一筋の黒が現れた。透きとおったその影に気づいた青年は、面倒そうに視線を上げ、その影をつくり出しているくすんだ色彩の外套を纏った人物を見上げる。

青年の口許に、どこことなく皮肉っぽい、薄い笑みが浮かんだ。

「代筆屋がそんなに珍しい？」

そこに立っていたのは、ひとりの小柄な少年だった。小柄であることは青年も変わらないが、青年と少年の狭間に位置するのであろう年の頃と見受けられる少年のそれは、これから成長するであろうしなやかな伸びやかさを滲ませていた。

意志の強そうな聞き分けのなさそうな澄んだ蒼の目が、やや眇められている深い緑の目と出会う。森に棲む苔むすほどの時を経た樹木

の幹のような、乾いていてやわらかな色をしている、少年の左右に分けられたやや長めの前髪が風に揺れた。

「何が書いてある？」

少年が問う。その眼が無造作に手にしている紙切れに向けられていることから、青年は問いの要旨を大まかに理解した。

光を背負うことで顔が影になっている少年を見上げ、青年は軽く肩をすくめる。

「誰かを喜ばせて誰かを哀しませるような、いくつかの出来事と、それにまつわる物語」

真偽のほどは知らないけどね。

口にすることなく、そんなことを青年は呟いた。そこに在るものが真実であれ虚偽であれどうでもいい、とも。大概において大切とされるのは、同調できるか、とか、感情の捌け口を見出せるか、とか、そういった何かにすぎない。

時の基準を指し示す鐘の残響を、少年は疑問を声にすることで打ち消してゆく。

「アルウェルニー族、か」

「そうだけど？」

透明で深い緑の目の上の片眉を上げておどけたように問い返す青年の耳に、雑踏をすり抜けて、聞き慣れた声が滑りこんだ。

「悪いね、待ってたひとが来た」

そこに在ったのは皮肉っぱさを覗かせる穏やかな笑み。立ち上がり、

木の板を放り出し、身を屈めて青年はぱたと両膝の埃を払った。そしてそこには誰もいないかのように少年の傍らを通り過ぎ、道を横切り、翻り踊る洗濯物の影の下を歩んでゆく。

年齢の割に幼さを醸し出す大きな蒼の目を眇めて雑踏に紛れゆく小さな後姿を追っていた少年の視界を、零れ落ちそうなほどに芋を山と積んだ車を牽く驟馬が通り過ぎていった。

行き交う人々を背後に歩んできた青年を、露天の前に立っていた淡い栗色の髪の女が迎える。女が首を傾げると、顎のあたりで揃えられたやわらかに波打つ髪が軽やかに揺れた。

「セルヴ」

ほのかに垂れ気味の淡い翡翠の目が不思議そうに青年を映し、ふつくらとした唇がおつとりと青年の名を紡ぐ。

「どうしたの？」

さほど高さの変わらない青年の目を覗きこむ女に、

「どうもしないよ」

何事もなかったかのように、青年は小さく笑んでみせた。女が抱える荷物を半ば奪うように手に持って、数歩進み、青年は笑みを含んだ目で肩越しに背後を振り返る。

「帰ろう」

頭上に広がるのは果てのない蒼穹。どこまでも澄み切っていて、逆に平坦さすら覚える空に、地上にて生まれ蟠る喧騒が風に乗って舞い上がる。

どこか白んだやわらかな陽光が、燦然と、白亜の城塞都市に燐光を湧き立たせ纏わせるように、慈雨のごとく降り注いでいた。

月光よりも冴えた煌きを放つ星々が、触れれば肌が裂けてしまいそうなまでに鋭い光を地上に零す。透明な青褐が広大な夜空と茫漠たる砂丘を覆い、含んでいる水の粒子が凍てついていると錯覚するほどに冷えた大気に細やかな砂が軋んだ。陽光に曝されれば、たとえそれが日の高い日中であっても、この土地においては暁と茜の色彩は地に封じられて蒼穹と相對する。この地に自治領を形成する帝国において異民族と呼称される者たちの神話によれば、この砂漠は、きらきらしい緑と数多の湖に溢れていたこの土地において、水底より湧き出でた一族と対峙した銀の腕の神がこの世と彼らとを繋ぐ道を塞ぐためにすべての湖をその強大な力をもって一瞬にして蒸発させたことにより生まれたとされていた。

シユタウフェン帝国北東部、丹砂の砂漠のオアシス都市キール・タトリノウアンテス族自治領領都であるこの都市には、シイ教を奉じるトリノウアンテス族とテウト二族の自治領を統括するデシエルト総督府が置かれている。

星屑ごと掬えそうな潤んだ印象の乾いた夜空を切り取る窓に、間断なく揺れ踊る薪の爆ぜる暖炉の炎が映りこんだ。

「総督が連行された？」

腕組みをしながら暖炉の前に立つ老将が傷の走っていない方の蒼の目を書類が雪崩を起こしかかっている執務机についている同僚に向ける。デシエルト総督の留守中にキール・タを預かる、総督の副官たるアレン・カールトンは、空高く飛翔する鷹ですら射落とせるのではないかと思ってしまうような老将の炯眼を受け止めて、子ども

に懷かれそうな穏やかさの中に　もつとも、帝都にいる家族の許では、彼は二児の良き父だ　困惑を滲ませながら小さく溜息をついた。

「予想の範囲内ではありません。だからこそヘルツォーク殿も、帝都に自分を置いて兵を率いてキールタに戻れ、という総督の命を受け容れた。違いますか？」

帝都からキールタに到着したばかりの黙したままの老将　ヴァルター・ヘルツォークに、帝都からの鳩により得た事柄を告げたカールトンはそれこそ困ったような笑みを見せる。

「そして、もし仮に総督の立場に立たされたのならば、貴方も私も同じ行動を採ったでしょう。率いる兵が近くにいたのなら　たとえそれがいかに少数であろうとも　総司令官が理由も判らずに連行されるような事態になった場合、最悪、彼らが陛下へ弓引く可能性を廃することはできない。それ以上に状況を悪化させることなく、表面上だけではあっても穏やかさを保つための、一般論としては最善の方法です」

やんわりと、しかし明瞭に言い切るカールトン。老将は太い苦笑を浮かべ、

「相変わらずの氣に障る物言いだな」

からかっているような面白がるような声音で、人によってはカールトンに負けず劣らず氣に障るであろうことを、それこそさりと口にした。

ファウストウス暦422年、帝国はひとつの危機を迎えた。

聖俗五選帝侯によって皇帝に選出される権利を有する帝国三大公爵

家のひとつ　アクイレイア家当主カトウルス・アクイレイアを中心とし有力諸侯によって結成されたアウグスト同盟。現帝国皇帝たる女帝ラヴェンナに叛旗を翻した彼らは、女帝の退位を求め、帝都ティエルを包囲した。帝都が膠着状態のまま約半年に亘る籠城を余儀なくされたこの事態を打開する直接的な契機となったのが、帝国二大騎士団との呼称を持つ騎士団の片翼　ヴァルーナ神教カテル・マトロナ派のオールルク騎士団とウォルセヌス・アクイレイア率いる帝国軍による、帝都を包囲する諸侯連合軍の　結果として挟撃となる　東西からの後背への攻撃だった。これにより諸侯連合軍は瓦解し、アクイレイア公爵カトウルスは戦死。帝都内部にてアウグスト同盟に連なっていた当時の宰相メルキオル・マデルノは帝都第一層に聳える監獄　レーム塔に送られ、アウグスト同盟に連なった諸侯の多くは女帝の粛清を逃れるために隣国アレス王国に亡命した。

市民軍のオルトヴィーン・ヴァースナー、近衛軍のヨハン・ラングミューラー。そして、帝国軍のウォルセヌス・アクイレイア。

アウグスト同盟と対峙し、帝都を、ひいては皇帝を解放すべく尽力した各軍を率いていた帝都解放時の指揮官たちは、ファウストウス暦423年現在、帝都のみならず帝国全域より尊敬と憧憬をその身に集める存在となっていた。

そのウォルセヌス・アクイレイアが近衛軍　つまりは女帝によって身柄を拘束されたというこの事態は、帝国民　特に彼によって数ヶ月にも亘る籠城から解放された帝都市民　にとっては、奇妙であるばかりか女帝の忘恩としか受け止められないようなものであり。

「だが、どうやって彼らを宥める」

やれやれといった調子で嘆息する老将の零す言葉が端的に表しているように、帝都解放に貢献したウォルセヌス麾下の兵にとって、そ

れは帝都市民が受け止めている以上に腑に落ちない事態だった。

「私だって、できれば食ってかかりたいですけどねえ」

にこにことそんなことを言い出すカールトン。今度こそ、誰の目にも明らかに、老将は茶目つ氣たつぷりの笑みを浮かべながらわざとらしく太い片眉を上げてみせる。

「貴殿がそれでは、誰が皆の熱を冷ますというのか」

「おや。と、いうことは、ヘルツォーク殿も皆の先頭に立つ気満々ということですね？」

これは心強い、と、あえて笑顔を崩さない同僚に、

「冗談だ」

勘弁してくれ、と言わんばかりにかぶりを振りながら老将は軽く諸手を挙げ、

「勿論、冗談ですよ」

カールトンが楽しげに笑う。哀しいことに我々の立場ではそう安易には動けません、などと口にしながらカールトンは書類に塗れた机の上に眼を遣り、そこにあつたはずの何かを探して手を這わせた。やがて家族の肖像画が収められている小さな木枠の下に目的のものを発見した彼は、そこにあつた巻き癖のついている紙片を人差し指と中指とで挟み、老将に見えるよう己の目の高さまで持ち上げてみせる。

ぱちり、と、暖炉の薪が爆ぜた。

「総督の近況を教えてくれた鳩とは別の鳩が運んできてくれた命令です。ここキイルータにて身柄を押さえている、帝都包囲時に宰相メルキオルレ・マデルノを逮捕する決定打を与えてくれた証人を、帝都に移送しろ、と」

わずかに、老将の纏う雰囲気呆れのようなものが含まれた。

「正規文書ではなく鳩とは」

「相当、急いでいるのかもしれませんが。常に絡み合い纏れ合っている帝都の内情など、幸いにも、遠く離れたこの地からは見通すことなどできませんが」

「連れていくのは誰だ？」

「こちらの責任をもって」

ここでカールトンはゆっくりと椅子から腰を浮かせる。

「護送というかたちを採るのが無難なところでしょう。陛下の許へ送り届ける前に大切な証人を何者かに奪われる、などといったことは、断じて避けなければなりませんから」

口許の笑みを深くする老将を、その愉快そうに細められた隻眼を、正面からカールトンは捉えて。

「帝都へ赴く口実ができましたよ」

デシエルト総督の副官は、にっこりと、どこまでも穏やかに微笑んでみせた。



カウンターに置かれたグラスの中で、琥珀色の液体に浮いた透明な氷がくると回転して涼やかな音を立てる。

ティエル第一層東部　通称異民族街。その街の路地裏、出入り口の扉のみが地上に在り階段を下りて床に到達するつくりになっている半地下のその場所の、天井近くに並ぶ横に長い採光窓からは、夕暮れの銅がまろく光を弾く金属の光沢をもって差しこんでいた。

「それにしても、落ち着くことがありませんねえ」

カウンター席だけでいっぱいになってしまうような狭い酒場の、まさしくそのカウンター席で、カードゲームに興じているふたりのうちのひとりが口を開く。壮年で丸顔のその男は、ころころした印象の短い人差し指と中指でカードを一枚挟み、山積みになっているカードの山の一番上にそれを抛った。その傍には何枚かの硬貨が重なっている。隣に座っている半月眼鏡の金髪の青年がどこか気弱そうな苦笑を見せながら手の内のカードに眼を落とし、そんなふたりを横目で見遣りながらひよろりとした長身でしつとりとした赭の短髪の店主がカウンターの内側でグラスを磨いていた。

「余裕のなさが上辺の繕えなさに直結してるだけだろ」

店内唯一のテーブル席で酒を舐めていた大柄な青年が冷笑とともに口を挟んだ。伸ばしているのではなく間違いないく伸びつばなしの明るい金茶の癖毛が肩口で元氣一杯に跳ねている、どこか眠たそうなつくりの蒼の目がともに苦笑するカウンターの三人を映す。

「闇医者殿、もう一杯いかがですか？」

燦燦と降り注ぐ太陽のような笑顔が弾ける丸顔の男　ユベール・ギイは、さして長くもない付き合いから底なしであることなど判り

きつっている口を挟んできた酒豪の闇医者　　エイステン・ヴィロツクに水でも勧めるように酒を勧めた。薄めた酒なぞいらねえな、と、冗談めかして毒づくヴィロツクに蜜蝋色の垂れ目の店主　　シャヴィエル・ディアスはのんびりとした穏やかな笑みを浮かべる。

その時、あることに気づいた半月眼鏡の淡い金髪の優男　　フィリップ・オーギュストが首だけをめぐらせて背後を見遣り、ひらひらと軽薄に片手を振った。

「おかえり、トウルスくんにリーザちゃん」

店内からは一段高くなっている出入り口の扉の前、にこやかに手を振り返すリーザと苦々しい顔をするトウルス。三人分の蒼の目とひとり分の蜜蝋色の目が向けられている中、トウルスの手から荷物を抜き取ったリーザは、今日もまた屯している常連客たちにやわらかく明るい挨拶を振りまいて、カウンター脇の扉の向こう　　この酒場の店主が家主をしている下宿している部屋　　へと消えて行ってしまう。結果、こっそり部屋に戻ろうとしていたトウルスは結果的に店内で最も目立つ場所に立ち尽くすことになり　　。

「まあまあ、セルヴくんもこっちにきて座ってください」

厄介事だけを持ちこんでくる育て親のひとり　　どんな厄介なことを抱えていたとどこまでもにこにこしているユベール・ギイの誘いを断る理由を失ってしまった。

「僕は賭け遊戯なんてするつもりないんだけど」

溜息をつき、山積みになっているカードと硬貨を見遣りながら、トウルスはギイの隣の席に腰を下ろす。

「人生なんてそれ自体が賭けみたいなもんです」

なぜか自信満々なギイに、トウルスは深く深い溜息をついた。厄介なことを話される前にこちらから手を打たなければ、といったいささか単純な考えのもと、店主がつくってくれた飲み物を口に運びながらトウルスは遊戯に興じ続けている傍らの人物を見遣る。

「で、何の用？ 今回のオルトの契約が切れたとか、そういった話なら喜んで聴くよ」

どこことなく刺々しいトウルスに、ギイは幼子を宥めるような笑みをつくる。

傭兵オルトヴィーン・ヴァースナー。かつては一領主にも匹敵するとされる勢力を誇った傭兵一門の当主であり、弟にその座を追われてからは流れの傭兵として各地を巡ってきた高名な傭兵。傭兵ユベール・ギイを右腕とし、遍歴の途中で拾ったトウルスとリーザの育て親でもあるその大傭兵は、現在、帝都に雇われていた。

「それに関しては、残念ながら、当分、契約が切れる気配はありません」

「なんで？ 帝都包囲はもう解消された。帝都の解放までが契約の期間だったはずだ」

約半年に亘って帝都が籠城を強いられたアウグスト同盟諸侯による帝都包囲。陥落は逃れられないと目されていた帝都が息を吹き返した際、オルトヴィーン・ヴァースナーが市民軍を率いていたことは記憶に新しい。そして、その結果、帝都が解放されたということも。

「帝都解放における功労者のひとり デシエルト総督ウォルセヌス・アクイレイア。この名前を聞いて、予想はつきませんか？」

これにトゥルスはとても嫌そうな表情をした。いや、面倒そう、といった形容の方が相応しいかもしれない。とにかく、トゥルスの中でギイの言わんとしていることが厄介事に分類されたことだけは間違いなかった。

「まあそう嫌がらずに」

にこにこトゥルスのグラスに酒を注ぐギイと、それを見てわずかに瞠目するオーギュスト。困ったような笑みを浮かべる店主と愉快そうに目を細めるヴィロックの前で、グラスを口に運ぶことなくトゥルスは反駁する。

「嫌がらない要因がどこにあるっていうのさ」

「そこは否定しませんよ」

「なら断ればいいじゃない」

「そうもいかないのが切ないところでして」

笑顔を崩さないギイと、不機嫌さを隠そうともしないトゥルス。むくれるトゥルスが両手で頭を抱えてカウンターへと突っ伏す。

「これだから、ややこしいのが目に見えてる依頼なんて受けるもんじゃない」

あのお人好し、と、この場にいない育て親に舌打ちするトゥルスの語尾をすかさずギイが拾う。

「まったくです。ですが、受けた依頼は最後までやり通すのが我々。そんなことをしたら以後の信用問題に発展しかねません。よって、帝都が落ち着きを取り戻せないでいる今はまだ契約完了とならない

のです」

諭すように語るギイをトゥルスは横目で睨めつけた。理屈では解つてはいても不服を掻き消すことのできないでいるのは明らかで、それは結果として長年一緒に過ごしてきたひとりをこの契約によって失っていることに所以するのかもしれない。

同じ蟠りを抱えているであろうギイを、組んだ両腕の上に顎を置いたトゥルスが見上げる。

「帝都が解放されたにもかかわらず情勢は安定していない、ということ？」

そうです、と、相変わらずの笑顔でギイはひとつ頷く。

「結果として皇帝に敗北したアウグスト同盟は事実上空分解しましたが、今度は皇帝に味方した諸勢力が各々自己主張を始めましてね。賠償金を得たわけでも戦利品を得たわけでもない皇帝が、彼らに報えるものといったらいたい何なのか。諸侯と皇帝の関係が忠義だけで成り立っているわけではないでしょうし、たとえそうだとしても、諸侯は麾下の兵にその働きに報いるための何かを与えねばならないでしょう？」

「ただ働きなど、やってられんよ」

このヴィロックの合いの手に、大方そんなところです、と、ギイは軽く肩をすくめる。

「で、どうしてそれがオルトの契約続行に結びつくわけ？ どう考えても、オルトひとりでどうこうできるようなものじゃないと思うんだけど」

上体を起こしたトゥルスがギイに向き直りながらグラスに手を伸ばす。青年の深い緑色の目を正面から捉えて、大傭兵と青年との橋渡し役を務めるこの壮年の傭兵は問いを投げた。

「ウォルセヌス・アクイレアが帝都解放後キールタに戻る事が許されなかったこと。そして、先日、その彼が近衛兵によって連行されたこと。知っていますね？」

「まあね。新聞の一面を賑わす程度には一大事みたいだし、知っているよ」

気のない様子で答えるトゥルスの視線の先で、ギイの指からカードが一枚放たれた。それは山積みになっているカードの一番上に重なる。

「要するにそういうことです」

トゥルスの返答の内容にかそれとも遊戯の進捗状況にか、とにかく満足そうにギイは頷いた。トゥルスが眉根を寄せる。

「まったく解らないんだけど」

「セルヴくんを読みで正しいと思いますよ。少なくとも一般論としては」

「いや、だから……」

もはやオーギュストとの遊戯に集中してしまったギイにトゥルスの声は届かず、その代わりにヴィロックが青年の相手を買って出る。

「総督の身柄拘束の理由は、先の帝都包囲にて皇帝からの勅命がないにもかかわらず兵を率いて進軍したこと、だそうだ。それだけを聞けばそうかと納得できるが、総督のその働きがなければ今頃帝都

など陥落していたであろうこともまた事実。だが、帝都解放によって提督の得た支持が問題だった。皇帝を超えるまでの、皇帝が封じることのできないまでのそれは、一歩間違えば皇帝の地位を揺るがしかねない。そして、先の進軍において僭称に近い状況を生み出した総督をすんなりと手放すことなど、皇帝にはできない相談なんだろうな」

ヴィロックの声聞き流しながら、トゥルスはグラスを持ち上げる。

「別にどうだっていいけどね、そんなことは」

重そうな瞼で見るともなしに前を眺め、どこまでもやる気のない佇まいでグラスを口に運ぶ。その様子を目撃した店主が一瞬だけグラスを磨く手を停めた。

ほどなくトゥルスの深い緑の目が茫洋とした色を湛え始め、重たそうだった瞼は重いだけの瞼となって上体が頼れるとともに閉じられてゆく。

案の定、下戸を通りこして酒に弱いトゥルスは、酒が誘引した睡眠に吞まれていった。

「口にしなくともその程度は理解していますよ。なんせ私たちが育てたんですから」

オーギュストの手からカードを抜き取りながら、ギイ。ヴィロックが当然の疑問を呈する。

「養育環境はどんなだったんだ？」

「さて、なんのことですかね」

軽く受け流すギイと、大仰に溜息をついてみせるヴィロック。

そして。

「あ、私の勝ちです」

最後のカードを手放して、天井を見上げて肩を落とすオーギュストを視界に納めながら、につこりと笑ったユベール・ギイはさも当然とばかりに硬貨を獲得した。

「お喋りをするのなら貴方とがいい、って」

と、白亜の城の回廊で偶然に遭遇した緑髪の小柄な女が口許に手を遣つてくすくすと微笑しながら言ったことを思い出し、客人を前にした初老に近い壮年のその男は髭の中の唇を苦笑のかたちに歪めた。男が手にした葉巻の紫煙が、夜の闇に燭台で不安定にさざめく灯りの届くぼやけた際を通り抜け、やけに目に映える道筋で、ゆるく逆巻きながら昇ってゆく。

ティエル第三層の住宅街。豪邸が建ち並ぶその住宅街に構えられた邸の庭に佇む小さな離れ。夏であれば噓せ返るような草いきれと辛うじて鬱蒼と呼ばれない程度の緑に埋もれるそれは、一年の中で最も凍てつく時期に近い現在の、凍った土に根を這わせる乾いた幹の樹樹に囲まれている。

冷えて軋む大気が世界に満ちて、皓い月はどこまでも冴え冴えとした姿を曝し、零れんばかりに満ち溢れる星たちのその煌きで潤む夜空は今にも滴り落ちてきそうなまでに透きとおっていた。それでも樹樹が芽吹き色彩をその体内に満たし始めたのは確かであるらしく、張り詰めた大気そのものが細やかで鋭利な結晶となって肌を引き裂くようなあの感覚は、一時に比すれば、どことなくゆるんでいる。



立ち昇り霧散する紫煙を傍らに、机を挟んで目の前の椅子に座る客人を男が見据えた。

「まったく。候は、いったい、エマヌエーレの小娘に何を吹きこんだ？」

口調だけは、不機嫌さを表明する。だが、この邸の主たる大商人である男　ユスキュダル・バニヤスのその蒼の目は明らかに笑っていた。それを受けた客人も、口調だけは遺憾の意を表明してみせる。

「吹きこんだとは人聞きの悪い。金の無心でもされたかね？」

邸の主と同じような年の頃のどちらかと言えば瘦身に分類される客人は、書斎としても使われているこの離れの片隅で燃え盛る暖炉の炎をその単眼鏡に弾かせ、大仰に肩を竦めてみせた。曝されている蒼の片目には茶目つ気と炎の橙が宿り、そのゆらく熱が発する明るさがゆるく束ねたしなやかな白い髪があたたかな光沢を与える。バニヤスは笑いながら机の上に置かれていた葡萄酒が湛えられている杯を手にした。

「帝都には貸せても、あの小娘には貸せぬよ。こちらが弱味を握ったように見えて、おそらくは、どこかで逆手に取られるだろうからな。まったく、あれで傀儡とは聞いて呆れる」

おやおや、と、己の目の高さにまで杯を掲げて、客人。瑪瑙を蕩かしたかのような深紅の液体が杯の中でまろやかな漣を立てる。

「と、いうことは、帝都はまだ大傭兵を手放さないのだね」

「今度は儂が出資したわけではないがな。だが、帝都を拠点に伸し上がろうとしている者にとっては、参事会に恩を売っておいて損は

しないだろうよ」

バニヤスはゆつたりと笑み、客人の目が面白そうに煌く。

「それは皇帝への剣としてかな？」

「どちらかと言えば諸侯へのあてつけだろう？」

「だが、大傭兵との契約が継続されるということは、帝都包囲にて成立した帝都市民による市民軍が 解体されたとはいえ、呼びかけがあればすぐに集まることの可能な市民軍が 存続するということだ。他ならぬ大傭兵こそが、陥落を約束されていたのであろうあの帝都包囲において、帝都の解放に尽力する動きを果たした彼等を統べ率いた者なのだからね」

「では、近衛軍へのあてつけとしておこつか」

「なぜだね。 よりもよって、帝都包囲において近衛軍とともに戦った市民軍が、皇帝とともに帝都を護った帝都が、どうして対峙する必要があるのかな？」

これに声を上げてバニヤスは笑い、そんな彼を仄かな笑みを含んだ目でどこことなく上目遣いに眺めながら客人は杯を口に運ぶ。

皇帝の勅命のみにおいて動き、皇帝の居城を戴く帝都をはじめ皇帝直轄領に展開する紅を纏う近衛軍。通常、帝都の警固は近衛軍帝都駐留部隊が担っている。ちなみに、各諸侯の領地においては諸侯の私軍が警固を担っており、この諸侯の私軍を総称して帝国軍と呼ぶ手にした杯に波打つまるやかな光沢に眼を落とし、バニヤスが口の端を持ち上げた。

「有象無象の集まりなど、それこそ皇帝の狗には取るに足らぬよ」

「だが、やりようによってはその有象無象すら脅威になることが証明されたわけだ。アウグスト同盟に向けられた剣が自分たちに向けられたらどうなるか、考えてみるのはなかなか愉快だろう？」

降参だ、とでも言うかのようにバニヤスは軽く肩をすくめ、何かに気づいたのか客人から眼を逸らした。

「ともあれ、帝都が皇帝を警戒しているということだけは確かなようだな」

バニヤスの目が近くにある何かをあえて遠く眺めるかのような焦点の結び方をする。

「そして、皇帝がアクイレイア子爵を警戒しているということも、確かなことなのでしょうね」

どこからか紛れこんだ冷気が微かな気流となつて床を這い回った。冷氣とともに流れこんできた漲る精力がそのまま響きのかたちを取ったかのような男の声に、わずかに頭を傾げた客人はバニヤスの眼を追って視線だけで右を見遣る。

わずかな軋みを伴って閉じる扉。ゆつたりとした一定の歩調を崩さずに靴音を響かせて、白を基調とした衣装を身に纏う砂色の髪を撫でつけた青年が笑みを孕む唇から言の葉を撒く。

「アクイレイア子爵ウォルセヌスはアウグスト同盟の盟主であつたアクイレイア公爵カトウルスの腹違いの弟。たとえ先の帝都包囲の帰結を決した戦いにおいて彼らが剣を交えたとして、彼らが本当に手を組んでいなかったと心の底から信じるなどは困難なこと。どちらかが斃れたとしてアクイレイア公爵家の血を絶やさぬための方便だった、と、そう勘繰られたとしても仕方はない」

秀でた額と、泰然とした自信が当然のように宿る蒼の目。

「これはこれは。ラエルティオス殿だけではなくアリンガム卿まで  
がおいでとは、珍しいこともあったものだ」

朗朗と言葉を振り撒く突然の闖入者のその背後にひっそりと佇む長  
身の青年に目を遣り、特に驚いた様子もなく、バニヤス。ラエルテ  
イオスと呼ばれた黒髪を無造作に括った長身のその青年は、暖炉の  
炎に濡れる白皙の細面にやわらかさとは程遠い晴れた日の雪原に煌  
く細やかな氷の粒子のような硬質な微笑をたゆたわせ、一礼した。  
切れ長の紫紺の目に、焰の橙が艶めく。

単眼鏡の奥の細めた蒼の目に三人のウエネティー人の中に紛れこん  
だ黒髪のテウトニー族を映していた客人は、椅子に座ったまま青年  
たちに向き直り、組んだ脚の膝に組んだ手を置いて 当人の意図  
はともかく、どこことなく芝居がかった様子で につこりと笑った。

「君が彼の有名なウイリアム・アリンガム卿か。お目にかかれて光  
栄だ。私はヨーヴィル・ファルフアツロ・クリオ。銀行業と侯爵と  
選帝侯をやっている。帝国どこるか世界の海を股にかけて活動する  
君のような人物に巡り合えたのはこれ以上もない僥倖。先日、諸侯  
として帝国議会に議席を確保したと小耳に挟んだが、他の者たちと  
は異なる基盤を有する貴殿の発言があゝの閉塞した空間に新たな風を  
吹きこんでくれること、心から願っているよ」

謝意を表し深く身を折るアリンガムをサディヤ侯爵ヨーヴィルは懐  
かしいものを目の当たりにしたかのように眺める。ゆったりと身を  
起こしたアリンガムは、穏やかな紳士が纏うその生きてきた歳月が  
練り上げてきたどこまでも穏やかな雰囲気正面から受け止めなが  
らひとつの問いを口にする。

「ところで、候はウォルセヌス・アクイレリアの件をどう捉えてお  
いででしょうか？」

ヨーヴィルの目がすうと細められ、すべての事象を透徹し組み換えることも難しくはないであろう繋がりとは機知とに富む男の目線がアリンガムを射抜く。うつすらとした笑みのかたちを模る唇とは裏腹に底知れない深淵を覗かせるその蒼に臆することなく、アリンガムは鷹揚に笑んでみせた。

「お気に触れたのでしたのなら、謝罪を」

これにヨーヴィルが声を上げて心底愉快そうに笑う。そして、笑みの残滓をたゆたわせたまま、ゆったりと椅子に寛いでいるヨーヴィルはアリンガムを見上げた。

「なかなか豪胆だね。確かにウォルセヌス・アクイレイアは私の娘の夫だった男ではあるし、私も彼を気に入ってはいるよ。だが、侯爵としての私はクリオ家と我が家に連なる貴族ならびに地主とその所領における人々の営みを護るために彼を切り捨て、銀行家としての私は不利益を被ることは容易に予測できても全く得はないために彼を切り捨てる」

そこでサディヤ侯爵ヨーヴィルはにっこりと笑み、

「これでよろしいかな」

アリンガムから眼を逸らすことなしに、まろく紅く芳醇を秘めた葡萄酒の湛えられた杯を口に運んだ。

The second act - 02 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 03

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 1 / 02

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

静寂を叩くのは馬蹄の音と具足の鳴る耳障りで華やかな金属音。夜の闇に馬の吐くぼやけた白い息が霧散する。

森を抜け、耕地の間を走り、溪谷を跨いで町や村や都市を繋ぐ石畳の街道。帝国全土に張り巡らされたその始点と終点はそのどちらかを帝都に置き、ゆえに帝都には迅速に帝国全土の事物が集まる。

街道沿いに存在する都市は人々の営みにとって要衝と言っても過言ではなく、街道の主目的が人や交易品や輜重をはじめとする物資の輸送であることは疑う余地もない。

その街道を、彼らが立てる物音以外は完璧に闇に溶けこんだ小隊が疾駆する。

わずかに潤み始めた風と重なり合う枝振りの隙間から覗くわずかに潤み始めた星の煌き。黒々とした平坦な影にしか見えない樹樹の間、森を満たすのは戦ぎにも似た枝の軋み。

土の中で眠っていた何かが蠢き、蠕動を開始する芽吹き。春は近い。

蒼穹には女神が棲むという。

莊嚴の白亜、絢爛の伽藍。帝都に聳え立つ聖テルム大聖堂。

宵闇に月光に曝されたその立ち姿が映える時刻、蜜蝋の炎がさざめく大聖堂。冷えた闇とあたたかな橙とがぼやけるその空間で、壁一面に展開されている啓典的一幕を模した絵画が艶めく。

金髪の青年と黒髪の青年。水の流れを間に挟み、背を向けて立つ彼らふたりの聖人のその頭上で、膝を抱いて丸くなった女神が穏やかに眠っていた。

「先日の第二次ヴォルガ河防衛戦におけるフィアナ騎士団の勝利は明白。そして、帝都包囲においてオルルク騎士団の存在が戦局を左右したことも明白。それらの動きの影の功労者たる貴殿にこうしてお目にかかれるなど、私は本当に幸せ者だ」

厳肅がそのまま凝ったかのようなその場所に、どこか場違いな、きつちりと整えられているにもかかわらず調子のよさが覗く青年の声音が響く。その声の主は、黒衣に身を包んだ、すらりとした印象の蒼の目を持つほのかに紅がかった深い茶の短髪の青年。その青年とやや距離を開けて佇むのは、相対している青年と同じような黒衣を纏った、その青年よりもやや若い、ゆるい巻き癖のあるプラチナブロンドを背中に流す端整な顔立ちの小柄な青年。長い睫毛に縁取られた淡い藍の目は、蜜蝋の灯のゆらめきに気まぐれに紫にも似た色彩を浮かび上がらせていた。

ヘッセン・ダルムシュタット大司教イエレミアスとシルザ大司教シャグリウス。

各々ベルナドット家とアクイレイア家という帝国三大公爵家に連なる大司教たるふたりの青年が、啓典における聖人の決裂を　ヴァルーナ神教におけるファウストウス派とカテル・マトロナ派の誕生の契機を　表す絵画を横に、ただ静かに相対する。

「貴殿が率いる我らがファウストウス派のフィアナ騎士団。そして、



貴殿が表舞台に引き摺り出したカテル・マトロナ派のオールルク騎士団。帝国二大騎士団の競演など、それこそ神代における聖パトリックと聖ヴェルベアの決裂以来目の当たりにすることなど不可能だと思われていたのに。シルザ大司教、貴殿はいつたいどのような奇跡を繰り出してみせた？」

親愛の情をこめての冗談なのか単なる嘲弄なのか判然としない物言いのイエレミアスが眼前の青年を見遣った。正面からその眼を受け止めたシャグリウスの両の口の端がわずかに持ち上げられ、やわらかな微笑がつくられる。

かたちのよいその唇が音律を紡ぎ出そうとかすかに震えたその時。

「まったく、貴殿らは初めて合ったというわけでもなかるうに。そう畏まらず本題に入ったらどうだ」

呆れていることを隠そうともしない、どことなく神経質そうな壮年の男の声が響き渡った。

絢爛たる絵画に更にひとつ透き通った影を落としたのは、白いものが混ざり始めた髪を後頭部でゆるくひとつに束ねた、尖った顎と細い目を持つ黒衣の男。教皇空位の現在において帝国国教会ヴァルーナ神教ファウストウス派の頂点に立つ枢機卿長アルノー・アルマリック。

威厳よりも透徹した冷やややかさが目立つ佇まいの枢機卿長に、イエレミアスが向き直る。

「畏まっているわけではありません。それに、本題に入るも何も、既に結論は出ています」

この言葉足らずな回答に、淡く苦笑しながらシャグリウスが補足を

加えた。

「率直に申し上げますが、現在、フィアナ騎士団には小競り合いに耐え得る余力すらないと見ていただいてかまいません。第二次ヴォルガ河防衛戦による疲弊から彼の騎士団は未だ回復してはいない。そして、ヴォルガ河の向こうには、フィアナ騎士団と同じように疲弊していたカルヴィニア公国をどさくさに紛れて併呑したアレスの軍。とてもではありませんが、こんな状況のシルザに皆様をご招待などできませんよ」

語られる内容の、どこで何をという肝心な点を曖昧にしたまま、三人の会話は続いてゆく。

「それに、明日の宴では、ヘッセン・ダルムシュタットやシルザとは別の、もっと適した候補地が見つかるかもしれません」

ふわり、と、やわらかく微笑するシャグリウス。

「だが、最良の回答が見つからない場合の答えを準備しておかねばならないのもまた常」

どこまでも穏やかな眼前の青年につられてか枢機卿長の目許がわずかに緩み、

「その際は、ご期待に応えてみせましょう」

泰然とした中にもどこか鋭利な笑みを浮かべ、イエレミアスが一礼した。

蜜蝋の甘い香が鼻腔をくすぐり、冬から抜け出し春へと芽吹こうとしている夜の凍てついた大気をほのかに緩める。

枢機卿長がその場を辞し、それに続いて立ち去りかけたシルザ大司教が扉の前で足を停めた。

「ああ、そうだ。これだけは申し上げておきましょうか」

ほのかな笑みの気配を漂わせるかたちのよい唇が、啓典を詠うにふさわしい玲瓏な音律を紡ぎ出す。申し訳程度に反転した身体と、正面から絢爛の絵画の前に佇む青年を見据える淡い藍の目。熱に融けて透き通った雫となり己の側面を伝い落ちる蜜蝋の灯を宿すその目は、灯の不安定さをそのままにさざめいて、藍とも橙ともつかない艶やかな色彩が流動する。

「フィアナ騎士団は私が率いているわけでも、ましてや私のものでもない。そして、あの件においてオールク騎士団が動いたのはあくまでも彼らの意思。どうかそこを履き違えることのなきよう」

ゆるい巻き癖のあるプラチナブロンドが緩慢に渦巻き、相手の反応などかまうことなく常と変わらないやわらかな物腰でイエレミアスに背を向けたシャグリウスは扉の向こうへと姿を消した。

帝都に根差す月光を透かしたかのような清廉なる白亜の建造物

聖テルム大聖堂。天井と壁に描かれるのは啓典的一幕。ひとりその場に残された美麗にして荘厳な絵物語の中に佇むほのかに紅がかった深い茶の髪の青年は、口の端を吊り上げて冷笑に似た笑みを刻みながら、静寂に満ちる絢爛の大聖堂を陽光に氷の微粒子が煌く大気のようなその蒼の目に映していた。

絢爛の大聖堂の扉をくぐった先にある先刻までの壮麗さなど微塵も残していない。それでも細工の精緻さは疑うまでもない。回廊。

等間隔で配置された燭台のささやかな橙が照らし出す、整然と立ち並ぶ円柱の、その一本の傍ら。それまで闇に融けていたひとつの気配が、ゆらぐ灯の同心円状に広がる明るさの、その重なり流動する明るさの濃淡に曝されて長身の青年の影をかたちづくる。

「猊下」

暗がりに映える銀の短髪。カドベリー・カースル族の特徴である淡い桃色がかった藍の目が、ひとり回廊を歩む小柄なプラチナブロンドの青年を映した。人気のない回廊に銀髪の青年の姿を認めて、シルザ大司教たる青年の目許がかすかに蕩ける。先刻までのどこことなく硬質さを残していたものとは異なるとこまでもやわらかな微笑が浮かんだ。

長身のカドベリー・カースル族　ダリオ・ファルネーゼ。シルザ大司教シャグリウスではなくシャグリウス・アクイレイア個人の従者にして側近。ウエネティー人が構築する帝国に多数存在する異民族　ウエネティー人以外の民族を帝国では便宜上こう呼ぶ　の中でも自治領というかたちで形式上の自領が存在する四つの民族のうちのひとつたるカドベリー・カースル族の血は、アクイレイア公爵ガイウスの側室であったその母を通して、帝国三大公爵家に生まれ帝国国教会で大司教を務める青年の体内にも流れている。小柄な主の傍らを歩幅を合わせて歩みながらわずかに身を屈め、従者が耳打ちをした。

「デシエルト総督麾下の者がこの帝都を目指しているようです」

主の長い睫毛に縁取られた淡い藍の目が、前に続く回廊を映したまま、わずかに瞠られた。

「名目は証人の護送。ですが、彼らがその気になれば帝都に駐留す

る近衛軍と対峙することができる数ではある」

天井の高い回廊に靴音は響き続け、主従の歩が休まることはないことを証明する。

シルザ大司教シャグリウスの異母兄　デシエルト総督ウォルセヌス。先のティエル包囲にて皇帝に叛旗を翻したアクイレリア公爵カトウルスは彼らの異母兄。

「とりあえず、結論を出すことは保留、かな」

前を向いたままわずかに目を細めるシャグリウスに、わざとらしくファルネーゼは肩をすくめてみせた。そして話題を転じる。

「それにしても、随分とおおっぱいな相談会でしたね」

これにシャグリウスが苦笑する。

「枢機卿長は聞かせたかったんじゃないかな」

「誰にです？」

歩を停めたシャグリウスは、首を傾げるファルネーゼの少しだけ高いところにある二藍色の目を見上げて、

「おそらくは、君のような、誰かにね」

同じように歩を停めて目を瞬かせる従者に、どこか悪戯っぽく微笑してみせた。

窓から差しこむやわらかな陽光に、ゆつたりと浮遊する微粒子がきらきらと煌いた。今にもひび割れてしまいそうなまでにひどく乾燥した骨組みが剥き出しになっているその室内で、板張りの床に布を敷いて薬草を仕分けしている薬師の前に十歳ほどのふたりの子どもがしゃがみこんでいる。あたたかな陽だまりとなっているそこに、薬師の、わずかに低い、穏やかでおっとりとした声が響いた。

「すりむいた時にはこれをこのまま傷に塗って……。そうそう、咳止めにはこれを使うの」

ティエル第一層　異民族街。本来ならば市当局に申請しなければ構えることなどできないはずの診療所　もつとも、帝都への人口流入が多くなり教会が戸籍を把握できなくなってきた昨今、大概においてその流入先となる異民族街はそれこそそこに住まう者たちによって構成され、基本的に市当局は手を出さない。ゆえに、正規の医者領域を侵さない限り、異民族街の中のことは異民族街の中で解決されることがお互いに至上であるとの位置づけから、闇医者の存在は問題さえ起こさなければ黙認される傾向にある　で、作業する手を休めることなく、リーザは好奇心に目を輝かせて薬草に見入っている子どもたちにもやんわりと説明する。

「じゃあこれは？」

男の子と同じように膝を抱えて目をきらきらさせている、男の子よりも年下と見受けられる同じ色彩を纏う女の子が期待に満ちた目で薬師を見上げる。その拍子で女の子の高い位置でふたつに括られた髪が元気に跳ねた。

「それはね」

やんわりと慈愛に満ち溢れる微笑を零しながら、自分を見上げてくる兄妹　シグルとアニタをその翡翠の目に映してリーザが説明を始めようとした時　。

「ねえリーザ、僕にも教えてよ」

薬師の背後から腕が伸びてきた腕が彼女の首筋に回され、その腕の主が薬師の耳もとで囁く。

だが、そんなことに動じる薬師ではなかった。

「あら、セルヴ。暇ならこれを斜向かいのおじいさんに届けてきてもらえないかしら」

仕分けしてあった薬草の数束を小さな布袋に入れ、わずかに首を傾げて横目でトゥルスを見遣ったリーザは微笑みながら青年の手にそれを握らせる。

「暇じゃないよ」

薬師の淡い翡翠の目に己の深い緑の目を合わせたまま、青年は首を傾げてみせる。しかし、リーザの笑顔が崩れることはなかった。

「忙しいところ悪いわね、お願い」

「・・・・・・・・」

そして、お遣いを頼まれたトゥルスは反駁することもできずに出立する。

隘路を挟んで立ち並ぶのは、背の高い薄汚れた白壁の建物。通りを挟んだ窓と窓とに渡された縄が網の目の様に張り巡らされていて、蒼穹を背に陽光を反射しながら洗濯物がはためいている。

「なアに子ども相手に嫉妬してんだ？」

ひるがえって踊る洗濯物の影と立ち並ぶ建物の影とが重なる玄関先。所々ささくれ立っている今にも崩壊しそうな長椅子に腰掛け煙管を燻らせていたヴィロックが、意地の悪そうな笑みを浮かべながら上目遣いに背後の扉から出てきたトウルスを見遣った。あからさまに不機嫌な表情をつくってトウルスは家主を見下ろす。

「寝言は寝て言うからこそ寝言なんだけど」

そんなトウルスをさらりと流して、ヴィロックは広げていた紙を畳んで差し出した。

「読むか？」

トウルスはわざとらしく肩をすくめる。

「めんどくさい」

「どうやらアクイレイア子爵は皇位篡奪を企んでいたらしいぞ」

「はア？」

「と、街では結構な噂だ」

「なんでそれが公爵家のお家騒動じゃなくて、直接的な反逆になるのさ？」

「知るか。それに、そんな小難しいこと考えるのはお前さんくらいだ。まあ、強いて言うなら、その方が判りやすく面白いかからじゃないか？」

あらぬ方向に眼を遣って丸めた紙で肩を叩き出すヴィロックにトウルスが眉根を寄せる。



「そういう問題なわけ？」

これに、どことなく芝居がかった仕草でヴィロックが両の腕を広げてみせた。

「だが、全く事実無根ってこともないだろうよ」

「どうでもいいけどさ」

溜息をつきながら視線を露店の呼びこみや駆け回る子どもたちや荷馬車を曳いた驟馬が行き交う雑踏に投げたトゥルスの動きが停まる。

「どうした？」

と、見上げてくるヴィロックの手にトゥルスはリーザからの預かり物を押し付け、

「急な用事を思い出した。悪いけどそれ届けといって」

どこの誰にという最も重要なことを忘れ去った無茶な要望を置くだけ置いて駆け去ろうとする。

そのトゥルスの外套の襟首を、後方から、すらりとした長い指の手が遠慮というものを微塵も感じさせない豪快さで掴んだ。

ぎこちない笑みを浮かべながら恐る恐る背後を振り返ったトゥルスの深い緑の目に、にこやかな笑みを浮かべた淡い金髪で長身の青年が映る。半月眼鏡の向こうで細められている蒼の目はどこまでも穏やかだが、トゥルスの襟首を掴む手のその力が緩まることはない。

その半月眼鏡の優男　フィリップ・オーギュストが爽やかに口を開いた。

「やあ、トウルスくん。そんなに急いでどこに行くんだい？」

「やあ、フィル。僕はこれからリーザに頼まれたお遣いに行かなきゃならないんだ」

きつぱりとそう答えるトウルスの背後から、先刻トウルスに押し付けられた品を弄いながら、お世辞にも行儀が良いとは言えない粗雑な所作で長椅子に座るヴィロツクが声を投げる。

「嘘つけ。それなら俺の手にあるこれはなんなんだよ。確実に逃げようとしてただろうが」

背後を振り返って目で抗議を表明するトウルスをどことなく眠たそうな目つきの悪いことだけは確かな蒼の目に映して、ヴィロツクがせせら笑うかのように口の端を持ち上げる。そんなヴィロツクに、トウルスを捕まえたままのオーギュストが無駄に爽やかな笑みを浮かべてみせた。

「これはこれは闇医者殿。少しばかりこちらのトウルスくんをお借りしてもよろしいでしょうか？」

これにヴィロツクが愉快そうに笑む。

「これはこれは侯爵の犬。そいつは偶々ここにいただけなんだが。もし嫌だと言ったら？」

対するオーギュストは笑顔のまま。

「不法開業を市当局にお報せでもしますかね」

「あんたが言うて冗談に聞こえんな。ま、好きにするといい。別に俺はそいつがどうなるうとかまわん。そいつの相方はいてくれると

助かるが」

呆れたように肩をすくめるヴィロックと、

「これはまた素晴らしい言われっぷりだねトウルスくん」

にこにこと笑いながら、どこまでも爽やかに、オーギュスト。

「リーザ嬢の方が稼ぎいいだろ」

にやにやと笑いながら、どこまでも一筋縄ではいかなそうな眠たげな目で、ヴィロック。そんな彼らにトウルスがげんなりと肩を落とす。

「あのねえ、ふたりともいくら僕だって」

「安心しろ。これはうちのシグルとアニタが責任もって届けるさ」

手にした袋を軽く放っては受け止めるを繰り返すヴィロックの背後からふたつの小さな人影が現れて、

「任せとけ！」

自信満々にシグルがその小さな胸を叩き、

「まかせとけっ！」

それを真似したらしいアニタがなぜか両腕を挙げてその場で跳ねた。絶句するトウルスにオーギュストがしみじみと言葉を零す。

「いい友人を持ったねトウルスくん」

「いやそれなんか違うから」

「さあ行こうか！」

「フィル。君さ、ひとの話聞いてる？」

立ち去るオーギュストにひきずられながらばやくトゥルスの声は、

「行つてきます！」

「ますっ！」

「おー、気をつけて行つてこい」

という、やけに気合の入った兄妹の声とやる気のないヴィロツクの声と雑踏の喧騒とに紛れて、もとよりなかったもののように、空に散じる風に馴染んでゆく。

蒼穹を背にひるがえる洗濯物は眩くて、わずかに肌を裂くような感触の残る風は快い冷ややかさではあるものの少しだけ肌寒い。

人々が日常を営み雑談し行き交う隘路を眺めたまま、煙管を燻らせていたヴィロツクが口を開いた。

「止めないんだな」

自らに投げかけられたその言葉に、ヴィロツクの背後の扉から姿を現したリーザが困ったように微笑む。闇医者と薬師。前だけを眺めるふたりの眼が絡むことはなく、よって、互いの表情を互いが知ることもない。

「嫌ならどんな手を使つてでも逃げてくるわ」

ぽつり、と、リーザ。その精一杯の妥協を滲ませる返答にヴィロツクは軽く肩をすくめて。

「難儀な奴等」

整然としているはずの街並みの雑然とした雰囲気に、逆巻きながら昇ってゆく紫煙がすんなりと霧散していった。

燦々と降り注ぐ陽光が眩く煌く白亜の城塞都市ティエル。帝都第三層にある近衛軍の官舎の一室にて。

「何しにおいでですか？」

寝台に横たわったまま上体だけを起こした金縁眼鏡の男が、見る者によつてはそのどこことなく漂う軽薄さに胡散臭さを覚えるような笑顔で来客を迎えた。

「それが見舞いに来た客に言う科白なのか？」

金縁眼鏡の男の来客　上背のある壮年の男が眉をしかめると、服に隠されていない肌がやつと塞がったばかりといった創傷で埋め尽くされている金縁眼鏡の男は愉快そうな色をその蒼の目にちらつかせる。どこことなく熱に潤むその目からも、男の全身に創傷が刻まれているのであることが容易に予想できた。

口許の笑みを深くしながら、金縁眼鏡の男　近衛軍帝都駐留部隊隊長ヨハン・ラングミュラーは来客に問いかける。

「何か、難しいことでも？」

寝台の傍らに置かれた椅子に腰掛け、来客　近衛軍長官ロバート・ベルナールは嘆息した。

「私がこの肩書きを得てこの方、問題がなかった例などないのだが」  
「お忙しい時にこんな優雅な生活をしておりまして、大変申し訳ありません」

どことなく悄然としたラングミュラーをベルナールが横目で見遣る。それはどこか睨んでいるようにも見えた。

「隠せているとでも思っているのか？」

「おや、見つけられてしまいましたか」

目敏いですね、などと嘯くラングミュラーの視界の隅に、木箱に押しこまれたものの蓋が浮いている書類の山がちらついた。どうやら療養中にもかかわらず隠れて書類処理だけでもこなしていたことは隠しおおせなかったようだ。

「無理はするな」

溜息をつくベルナールにラングミュラーが申し訳なさそうな笑みを向ける。それが、気持ちだけでもらっておく、という意味の表明であることは誰の目にも明らか。

だからというわけではないが、ベルナールがこう切り出す。

「と、そんなことを言った傍から悪いのだが、情勢だけは伝えておこうと思ってな」

指を組んだ手を膝に落としながら、ラングミュラーに心持ち近づくかのように、ベルナールが上体を傾ける。

「五日後、ウォルセヌス・アクイレイアの法廷が開かれることが決

まった。嫌疑は、先の帝都包囲の際に浮上した僭称疑惑について、  
だ」

ラングミュラーの蒼の目に、怪訝そうな色が浮かんた。

「これはまた急ですね。宰相よりも先に、ですか？」

「先の帝都包囲の黒幕である宰相は、当分、レーム塔にいてもらう  
ことになるのだろうか」

状況が腑に落ちていないことを言外に滲ませながら、ベルナールは  
ぼやくように嘆息する。

「ともあれ、それに関連して、キイルタより証人が呼ばれている。  
デシエルト総督麾下の者　ヴァルター・ヘルツォークが護送中で、  
今日あたりこちらに到着する予定だ」

ここでラングミュラーが首を傾げた。

「その証人は、宰相の行動を裏付ける証人ではないのですか？」

ベルナールが答える。

「宰相の行動を裏づけ総督の行動を裏づける証人、だそうだ」

「妙ですね」

「そう思つか？」

「はい。もしおっしゃる通りなら、少なくとも、証人の引渡しにデ  
シエルト総督府が難色を示さないのはおかしい。その証人を確保し  
ていたのはそもそも総督府ですし」

「自らの足場を危うくするような真似は、普通ならば、しない、か」  
「総督を切り捨てたという線も考えられないわけではないですが。」

それでは何の解決策にもならない。むしろ、対アレス国境の情勢が安定していない今、総督の挿げ替えなどというのは総督府としてはできることならば避けたいところでしょう？　どんな有能な人物であれ、あそこまで繊細かつ複雑に絡んだ状況を把握し舵取りをするのには、それなりの時間を必要とする。その間に攻めこまれてもしたたらまつたものではない。それに、北方異民族自治領の動向をすら気になければならないのですから」

天を仰ぎ、ベルナルが大きく息を吐いた。

「何かが起こっている、と、そう考える方が無難か」

どことなく白んでいるやわらかな陽光が窓から差しこんで、あたかな陽だまりをつくり出す。大気は冷ややかであつても、そこに生まれるこの穏やかさに、どことなく、生き物は春の息吹を感じるのだろう。

椅子から腰を浮かせたベルナルが気遣いのちらつく目でラングミユラーを見遣る。

「邪魔をした」

いえ、と、そんな上司に金縁眼鏡の部下は穏やかな笑みを深くしながらかぶりを振る。窓を背に立つベルナルが己のつくる淡い影の中でほのかに目許を緩め、雰囲気の和やかさを残したまま、その蒼の目だけにささやかな鋭利さが過ぎる。

「総督は、どんな様子だった？」

これに、先の帝都包囲にて帝都開放の決定打となった戦闘で負った傷がいまだ癒えていないにもかかわらず、身柄拘束の命を受け自ら



デシエルト総督の前に立つた寝台の上の男は困ったように微笑した。

「氣遣いを、受けてしまいました」

そんなラングミュラーと語られる人物の言動に思わず苦笑を零して、

「そうか」

ベルナルが背筋を伸ばすと、淡い陽光のわだかまる陽だまりに横たわっていた透きとおった影がわずかに伸びた。

そして、白亜の城塞都市の、聖テルム大聖堂を挟んで官舎の並びと対極に位置する住宅街の一角にて。やわらかな陽光の生み出すあたかな白んだ床に、芽吹きのためのきらきらしさを秘めた枝ぶりが透きとおった影をもって綾なす紋様が刻まれる。

とある邸宅の、はちきれんばかりの生命力をその幹の内に漲らせた樹樹に護られるように囲まれた離れ。黒々とした土に映えるのは肉厚でやわらかな草の芽吹き。押し上げたばかりの土塊をその身に纏わせるそれらは、いまだ冬の色彩を残すその場所に、絢爛の氣配を覗かせる。

「トーマス・ワーディング」

そんな光景を、窓辺に立ち、あたたかな陽だまりに身を浸して眺めていた明るい橙の髪の青年がその深い緑の目に映していた。青年の背後にて椅子に座して紫煙をたゆたわせるこの邸宅の主など、もともとからその場にいないように振舞っているようにも見える。だが、紫煙を燻らせながら一枚の紙切れを弄うこの邸宅の主　ユスキュダル・バニヤスは、一見、自分のことを蔑ろにしているような青年の態度などそれこそ取るに足らない子どもものがままであるかのよう

に、淡々と話を進めるのだった。

「フィツジェラルド大学の教授の名だ。馴染みのある名前だろう？」

紫煙の名残をたゆたわせる唇から、確信を表明する問いかけが投げかけられる。

「知りませんよ、そんな名前」

軽く肩をすくめながら振り返ったトゥルスは、窓の棧に後ろ手をついて体重をかけ、心の底から嫌そうに眉根を寄せてみせた。

だが、ささやかに不愉快さを主張してみたところで、それによって話題が変わってくれるほど世の中そんなに甘くない。

「ちよつとした昔話をしよう」

淡い陽だまりと、床に折り重なる樹樹の透きとおった影。口にしたいすべてを無理矢理に呑みこむトゥルスの髪の際が、豊穣を約束された撓む麦穂のような煌きを撒いていた。

「かつて、岩塩で繁栄した領地があった。岩塩鉱山の採掘権を有していたのは領主たるリトア家だったが、交易権は領内の商人に流しっていてな。豪商と呼ばれる商人も数多くいた。それこそ、そこらの諸侯よりよほど富み栄えた商人が、な」

ふわり、と、紫煙が気まぐれに立ち昇る。

「そんなリトア家の領都に岩塩交易で巨万の富を築いた女傑と呼ばれた商人がいてな。詩人や画家の庇護者となったり、俗に言う知識人と呼ばれる者たちの交流の場を主催したり。ともかく、華やかで賑やかな女だった。もっとも、十年ほど前的大火によって一族諸と

も文字通り灰燼に帰したが」

不機嫌さを隠そうともしないトウルスがわずかに目を細める。見えない何かを絡め取るかのように渦巻きながら、紫煙は立ち昇ってゆく。

「よって、もとより親交があつたのであろうワーディングが、一連のごたごたによつてフィツジェラルドにいられなくなった際、女傑の許に身を寄せたとしても不自然ではない」

そこでバニヤスは葉巻を口から離し、トウルスを見遣つた。

「自治を認められている大学都市フィツジェラルドが他ならぬ皇帝に干渉されたのは、ここ最近においては二度。十年ほど前、冷酷帝時代に一度。そして、数年前、女帝によつて一度。理由は・・・直近のものを挙げるのが例としては解りやすいだろう」

眇められた深い緑の目に諒解の色が過ぎる。

「現象としては、ウエルラミウムの蜂起。もつともワーディングその人はその一年前にレーム塔に放りこまれた後に処刑されているが」

「彼が語つたとされる言葉は生き永らえた」

バニヤスの言葉尻を、トウルスがとらえる。

「ブランデンブルク伯爵領領都　海運都市ウエルラミウム。司祭の先導による委任統治者への叛旗。司祭はどうか知らないけど、武器を取つた領民が掲げたのがワーディングの言葉。いまだ蜂起の成功不成功そのものは曖昧なまま、その混乱を治めた海運商の有力者

ハンスユルゲン・ザリエルが市長として立ち、ウエルラムウムは自治都市に移行した」

太く、バニヤスが笑う。

「よく知っている」

「僕でもそのくらいは知っている、の、間違いです。その程度には有名な話だ」

瞼を落とし、トウルスは嘆息めいた息を吐く。そんな青年をその蒼の目に映したまま、バニヤスが問うた。

「では、その裏にあるであろう奔流については？」

答えを音にすることなくトウルスは軽く肩をすくめてみせる。

「その身に灼きつけられた家紋はこのものだ？」

ゆらり、と、紫煙が逆巻いた。

「女傑に夫はいなかったが、子ならばいた。生涯に亘る良き付人と成るよう貴族がその子息とともに同じような教育を施しながら奴隷の子を育てることは珍しいことではないが、豪商がその真似事をするのも珍しいことではない。そして、十年ほど前　ワーディングが女傑の許に身を寄せていたのであるう当時、あの館にはそういったアルウェルニー族の子どもがいたことが判っている。いや、見知っている、とでも言うべきか」

わずかに持ち上げられた瞼と、陽光の白が宿る深い緑の目。逸らされることのない蒼の目を知ってか知らずか、感情の読めない横顔を晒

しながらトウルスは床に眼を落とす。

「彼に感化されたとされる者たち　ワーディングの子どもたちが引き起こした一連の出来事の総称、出来事のどこかに彼の気配が見え隠れするそれらは、最終的にワーディング事件と呼ばれることになるが。三大公爵家襲撃計画の露見により大学を追われ処刑されるまで　事件の始まりから終わりまで　の約十年に及ぶ期間、彼はそういった目的を語ることもなければ確たる証拠も挙がることはなかった。が、まあ、そんなことはどうでもいい。確かなのは、当時、一時的に女傑の許に身を寄せていたワーディングが彼女の子の教育係をしていたということ。そして　」

ゆつたりと立ち昇る紫煙と、

「ここに一枚の紙片があるということだ」

ゆらぐことのない蒼の目の、二本の指に挟まれてその高さに掲げられた紙切れ。

「今日ここに君を呼んだのは、紛い物が本物か、君ならばその判断をつけることができるのではないかと思ってな」

引き結ばれたままの唇と、床に落とされた緑の眼。煌きを秘めたあたたかな陽だまりに身を浸しながら、青年は緩慢に瞬きを繰り返す。この邸宅の主の低い声が、どこか軽口を叩くようなその響きを帯びた。

「それこそ文字通り帝国中を駆けずり回ってた時分、もちろん仕事の関係上ではあるが、僕は女傑に会ったことがある。そして、君を拾ったのは大火によって混乱しているリトア近郊であった、と、大

傭兵にして君の育て親でもあるヴァースナー殿より聞いた」

青年の頬がわずかに強張り、一瞬だけその目を動揺が駆け抜ける。横目で見遣った語り手は、器用にも葉巻と紙切れを挟んだまま組んだ指で口許を覆いながらまっすぐに青年を見据えていた。

「あの大火は我々の総意だ」

睜られたのは、深い緑。たゆたう微粒子の煌きと紫煙とがゆるやかに踊るその場所で、淡々と、バニヤスは言葉を紡ぐ。

「独占まではいかなくとも、寡占とはそういったもの。それが富をもたらすものであるのなら尚更。そしてそれは往々にして硬直と停滞とを引き起こす。共有が発展を生み出す礎であるように、奔放が新たな発見をもたらす礎であるように」

かすかに蒼の目が細められ、

「表明による他者からの共感が、その者の身を守るように」

その声音のからかうような余韻から、その唇の描く笑みが深くなったことを青年は推測する。だからというわけではないが、トゥルスはバニヤスに向き直り、呆れたかのように大仰に肩をすくめてみせた。

「どうもそれは、毒にも薬にも成る、といった意味合いにしか汲めないのですが」

これに、細められたままの蒼に明瞭な笑みの色が浮かぶ。

「天空に棲まう理の女神」

唐突すぎるその名称に青年は眉をしかめた。

「ヴァルーナ神教を奉じていない君は、どこの教会にも籍はないはずだ。ついでに言えば、所有者の明確ではない奴隷は存在を証明する書面など公式にはどこにもない。これは君の連れにも言えることだが、彼のオルトヴィーン・ヴァースナーが帝都に雇われる際に提示した条件の中に君たちの他市民と同等の保護があった。帝都がそれを呑まなければ契約はない、と、それが彼の者が固執したほぼ唯一の条件だ。書面上存在していない君たちは、極論すれば、殺されたとしてもそれは殺人とは認識されない。もし帝都に雇われれば君たちの傍にいれないことは明白。恐慌状態一步手前の帝都に、だ。彼の大傭兵は、少なくとも、最悪の事態だけは避けようとしたのではないかな」

だからこそそのサディヤ侯爵の私兵。だからこそその帝都総督府ともつながっているシルウア族の許への滞在。ゆるやかな庇護の腕はそれそのまま大傭兵の枷ともなるのだろう。ふ、と、トウルの唇が失笑をかたどった。

「当面の観測を述べよう」

太い笑みを浮かべるバニヤスの蒼の目が、どことなく皮肉めいた様で口の端を持ち上げているトウルの深い緑の目に据えられる。

「今はまだいい。先に包囲にて完全に外部とのつながりを絶たれた帝都が、もともとの営みを回復するために数多の人手を必要としている。破壊された城壁の修復しかり、底をついた必需品の補給しかり。それこそ帝都に人と物が運びこまれ、そしてそれらはそれなり

に消費されている。だから、今は、まだいい。余所者であっても選ぶことをしなければ職にありつけるだろうし、それなりに金が回っている。だが、それは一時的なものだ。ある程度の時間が経ち、帝都において彼らの需要が低下するのなら」

絶えず逆巻く紫煙の流動的な微粒子が陽光を弾いて。どことなく薄暮の艶やかさを帯びてきた、それでも眩く白いやわらかく包みこむかのようなあたたかな陽光が深い緑の目に宿り。

「やがて飽和が訪れる」

持ち上げられた青年の唇が、想定の中で繰り広げられる物語におけるひとつの結論をもたらした。

「確かに、この辺りの他の土地に比べて帝都には職があるし、物だつて集まるだろうさ。だけど、それは無限つてわけじゃない。いずれは限界がくる。いくら帝都であれ包囲にて焦土と化した土地にもともとあつた営みをそれそのまま恒常的に吸収することができるとは思えない。まあ、目算は所詮目算でしかありませんが」

青年は軽く肩をすくめ、バニヤスは小さく笑う。

「だが、もしそれが極限状態にまで到達したら、帝都第一層にてどんなことが起こるか。先の帝都包囲で君はその片鱗を目にしただろう?」

やわらかな白んだ陽光。蒼穹に網這う枝ぶりを切り取る窓を背に、ゆるく腕を組み、青年は黙したまま眼を落とす。問いを投げた方の人物はといえば、気のない様子で紙片をためつすがめつしながらゆつたりと紫煙を吐いた。



「もしもこれの内容が本物であるのなら、出来事の底流にその思潮があるという意味で、もはや彼の者を戴くことなどできないとてワ―ディング事件はまだ終わっていない。歡喜に絶望が隠され、やがて多くの者の希望が状況によって絶たれるであろうことが容易に予想される現在、彼の者たちが種を蒔き浮上するに適していないなどという見方は樂觀的にすぎる。過敏と嗤われるは結構だ。杞憂で済むのならそれに越したことはない。だが、儂は判断をつけたい」

試すような笑みを浮かべながら面白そうにそう語るバニヤスに、その言葉をそのまま受け止めるべきか否かやや判断に困りながらもそんな素振りは微塵も見せず、眼を上げたトゥルスは光景を映すだけの静かな目を向ける。

「穏やかな眠りとあたたかな食事。力を貸してくれるのならば、君と君の周囲にそれを約束しよう」

深い笑みとともに泰然と提示された条件に、

「さて、どうする？」

自らの持つ選択肢などもとよりひとつしかないことを最初から理解しているその青年は、これ以上もなく不愉快そうに眉根をよせてみせた。

The second act - 03 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
1 2 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

<http://id>

## The second act - 04

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 1 / 03

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

澄み切った蒼穹、高いところで照り輝く太陽。

堆く積み上げられた書類が目立つ執務机。書類を捌くアレン・カルトンの傍らには妻とふたりの娘を描いた小さな絵。窓から差しこむ陽光は丹砂に反射したそれも雑じるからかどこか赤味がかつていて、砂漠のオアシス都市は常に銅の艶やかさを帯びていた。

「トリノウアンテス族とテウトニー族の動きがやや活発化しています。総督の身柄拘束が伝わってからは尚更、いつ我々に刃を向けたとておかしくはない、といったほどに物が流れ、緊迫化している。そんな情勢を前に、我が軍においては逃亡者が出始めています」

報告書を読み上げる扉の前に立つ濃紺の制服に身を包んだひとりの青年に、書類に眼を通すことを停めることなくカルトンが口を開く。

「逃亡者は、放置してください」

そう断言したのは、総督不在の現在における、デシエルト総督府の現最高責任者。

報告文を見つめたままの青年の目に腑に落ちない苛立ちが浮かんだ。

「ですが、それでは更なる逃亡者を誘発します。それに、もしそんなことになるのなら」

書面から眼を上げたカールトンが至極当然の主張を繰り広げようとした青年を見遣り、穏やかに微笑する。

「北方異民族の更なる増長を誘発し、我が軍は崩壊する、ですか」

青年が退室した後、カールトンは筆記具を置いた。

銅に艶めく陽光に、斜陽の翳りがどことなく雑じる。

デシエルト総督ウォルセヌスが第二次アルバグランド会戦が終結すると同時に援軍として帝都に馳せ参じたこと。ほんの一月前ほどのその事実が、現在において総督府の総督不在という自体を引き起こしている。独断がその理由であるのなら、その合理性が然るべき人物によって然るべき証明が成されなければ、おそらくは、事実など何の意味も持たない何かに絡め取られ都合の良いようにその命が使われるだけだ。

「不安になるのはね、解るんです」

ウォルセヌス・アクイレアという総督によって繁栄をもたらす礎を与えられている、と、そう認識されているデシエルト地方。例えそれが偶然でしかなくとも、状況の象徴としての人物をその状況を左右する決定的な要因と見なすことも、そう不自然ではないだろう。だが、そうなってくると、この状況において栓の役割を果たしている者はいつまでその役目を果たすことができるのか。

デシエルト総督は帝都に。

老将ヴァルター・ヘルツォークをはじめとし、その最低限だけをキ

イルータに残し、総督の兵は帝都へ。

今、キイルータで動きがあればどうなるか。

組んだ指の上に顎を載せ、カールトンは瞼を落とす。

「今回はまたいつにも増して面倒なことになりましたねえ、総督」

閉じた瞼に感じる陽光はあたたかくて、陽に透ける血脈はあたたかな暖色を浮かび上がらせる。

どちらに転んだとしても、否、その転び方すら予定の上に操られていそうな雰囲気がある。要するに、どう足掻いたとて結果は変わらない。そこでの足掻き方すら予定の中なのかもしれない。外堀が完全に埋められているのなら、そういうことになる。

ゆつくりと瞼を持ち上げながら、片手で頬杖をつき、カールトンは空いたもう一方の手を机上の妻子の絵を収めた木枠に遣った。斜陽の艶を秘めた陽光に横顔を染められながら、わずかに首を傾げつつ、木枠の中の変わることのない笑顔にカールトンは蒼の目を細める。穏やかな微笑のようなものがその口許にたゆたって。

「今度、ゆつくりどこかに遊びに行こうか」

いとおしむように慈しむように、木枠の中の変わらない笑顔をとつと、その親指が撫でた。

ふわり、と、わずかな苦味を孕む芳香が湯気と共に漂って。

大窓が取りこむ、やわらかな熱の、白く眩い陽光に囲まれて。

「お砂糖は？」

かすかにどことなく鋭利な朱の艶を含んだ閃光となつてはちきれてしまいそうな光の中、大窓を横手に開かれているささやかなふたりだけの茶会。蜂蜜色の髪を結い上げた貴婦人が淡く微笑みながら、客人たる艶やかな黒髪をゆるくひとつに束ねている少年に問いかける。けっこうです、と、董色の目でまっすぐに相手を見つめてどこか申し訳なさそうに礼儀正しく断ってくる少年に、そうかしこまることもないのよ、と、貴婦人は穏やかな微笑に彩られていた目許を更に緩めた。

ティエル第五層　サディヤ侯爵邸。白亜の帝都に構えられたこのサディヤ侯爵の別邸は、領地たるサヴリナを本拠とする侯爵領の面々の帝都出先機関ともなっている。そして、同じ時間の同じ館。貴婦人と少年　サディヤ侯爵令嬢アルシエティナ・クリオとカルヴィニア公国よりの留学生リラ・コトウスのお茶会とは別の部屋にて。

「還俗する気は？」

常にそこはかとなく胡散臭い雰囲気館の主の突然のこの問いに、芯の通ったやわらかく優美な佇まいの来訪者は困ったような淡い苦笑を浮かべてみせた。

「私ではなく、兄が公爵位を継ぐのが、順当ですよ」

長椅子に腰掛けた青年の色彩のゆらめく藍とも紫ともつかない目に向かい合うように置かれている長椅子で寛いでいる単眼鏡の男の飄々とした佇まいが映る。大きくとられている窓が並び、そこから差しこむあたたかな陽光に満ち満ちているその応接間は、どこか礼拝堂めいた荘厳さすら漂わせていた。

「だが、そんなに悠長に構えていてもいいものかな」

組んだ脚に指を組んだ手を載せ、その薄い唇にうつすらと笑みを刻ませて、試すような蒼の目で侯爵は来訪者を眺める。

「私が動くのならば、目立ってしまいますから」

ふわりと微笑む青年のプラチナブロンドの髪は、白んだ陽光に曝されて、透きとおった煌きを放っていた。

「その割には動き回っているようだ」

面白がるような笑みを浮かべる侯爵に青年は微笑を崩さない。眼を落とし、わずかに顎を引いた侯爵の単眼鏡が光を弾いて金属めいた光沢を撒く。

「アクイレシアに連なるもの、彼らが負うすべて。そこで生きる誰かと、そこで紡がれゆく営み。それらの後ろ盾となるのが、他ならぬアクイレシア公爵。カトウルス・アクイレシアに関連していた者たちがその息子も含めアレス王国に亡命した今となつては、もしウオルセヌス・アクイレシアに最悪の事態が訪れるとしたら」

侯爵が息を継いだその間隙に響くのは耳に心地よい玲瓏な声音。

「そこに息づき営まれているすべてのものが、弱体化し統率を欠いたアクイレシアを喰らい尽そうという何者かによって、完膚なきまでに叩き潰されるかもしれません。もっとも、わざわざそんな非効率的なことをして、それから先の統治のし易さと土地の生産力を落とそうとする領主も珍しいですが」

青年のどこか硬質なそれでもやわらかな微笑は常のまま。しかし、

そこには冷笑めいた淡い彩りが見え隠れする。おやおや、とても言いたげに侯爵は首を傾げてみせた。

「三大公爵家はそんなに切羽詰っているのかね？」

呆れているのか面白がっているのか判然としない調子で、侯爵。

「私には何とも」

静まり返った湖面のような、大気と水の決して相容れない境界をそれそのまま体現するかのような微笑を浮かべ、やんわりと青年は返す。

「君の異母兄もそうだが、それとは別な趣で、君もまた食えないね」

まったくガイウスはいつたいどんな子育てをしたのだから、と、感心と疑念とが縋い交ぜになった目を向けてくる侯爵に、侯爵の友人でもあった人物を父に持つその青年は困ったような納得しているようないささか複雑な苦笑を浮かべる。それは、啓典の言の葉を撒くに相応しい近寄りがたい大司教のそれではなく、やわらかで心もとなくてどこかあどけなくて、そこにいる青年の年相応の内面を覗かせていた。

ひとつ、青年は息をつき、あつかましいことは重々承知しているのですが、と前置きして侯爵を正面から見据える。

「この先、私に何かがあったのなら」

かたちのよい唇から紡がれるのは、

「リラを、お願いします」



懇願めいた、ひとつの請願。

これに侯爵は片眉を跳ね上げ、ややわざとらしい程に瞬きを繰り返す蒼の目で淡い微笑を崩さない青年を見返す。申し訳なさそうに、それでも退く気配など微塵もなく、青年は言葉を繋げる。

「現状においては、あらゆる方面に根を下ろしてらっしゃる侯爵以上に適任な人物が思い浮かばないもので」

暫しの沈黙の後、どこか意地の悪そうな笑みをつくって侯爵が問うた。

「だが、君が庇護していて私に預けようとしているリラ・コトウスは、言うなれば、亡国の公子だ。彼の祖国　カルヴィニア公国は、現在、第二次ヴォルガ河防衛戦の敗北の隙をつかれ、東の領土大国アレスに吞まれている。では訊こう。私の得は何かな？　言っておくが、我が愛娘と君の異母兄の婚姻関係が解消されている今、我がクリオ家にアクイレリアを助ける義理はないよ」

青年の口許を彩る微笑が深くなる。

「ヴォルガ河近辺の対小国群立地帯における金融業展開における教会の黙認」

長い睫毛に縁取られた色彩の安定しない透明感のある目が、自らの向けた眼から相手の目を逸らすことなど許さずに、侯爵の眼を絡め取る。

「諸侯が参入するよりも先にその分野に根を張っていた教会によって築かれている壁は、活動するに当たって煩わしくはありませんか

？ ある場所においては当たり前にあるものをそれが無いところに持ちこみその希少さをもつて商品価値を上げるということは、利益を上げるための判りやすい手法。物々交換ではない限り、そこにおいて扱われるのは同じ基準を共有されているあらゆる種類の通貨。あの一帯は、文化も習慣も地勢も、生み出されるものすべてが帝国とは異なる境界線。投資に値する活動をする者も多いでしょうし、その面において群立する小国の幾つかに食いこむことも可能でしょう。あまり期待のできる債務履行者とはならないかもしれませんが満ちる静寂に、ふ、と、侯爵の唇が緩んだ。

「随分と口が達者になったものだ」

につこりと、帝国国教会において小国群立地帯に隣接する大司教座を得ている青年は微笑う。

「お褒めに与り光栄です」

「昔は素直で大人しくて可愛らしい子だったのに」

嘆かわしいものでも見るかのような目を向けてくる侯爵に、いつの話ですか、と、青年は苦笑するしかない。

「だが」

わずかに身を前傾させ、わずかに上目遣いに、侯爵は青年を見遣る。

「どうしてそこまであの子を気にかける？」

それまでのどこか浮ついた調子が拭い去られた純粋な問いとしての問いに、それこそつくりもののような面で少しの間だけ侯爵の眼を

受け止め、やがて青年は瞼を落とした。

「アクイレアである以前に、私は教会に属する者。そして、帝国教会が求めるのは、第一義的には、ヴァルーナ神教ファウストウス派が構築している現状を維持すること」

窓の内のあたたかな陽光と、窓の外の鼓膜が軋むのであろう破璃の硬さと繊細さを併せ持つ澄んだ大気。ささやかな光沢めいた翳りを打ち消す眩さに囲まれて、シルザ大司教シャグリウス・アクイレアはゆつくりと瞼を持ち上げる。

陽光に曝された淡い藍の目に、斜陽の朱とも芽吹きの新緑ともつかない色彩がゆらめき、ほどなくして透きとおった紫に収束した。

「シルザ大司教として、私はヴォルガ河の向こう側が安定さえすればそれでいいのです。それがシルザを護ることになる。いくらファイアナ騎士団が前面に立つとはいえ、小競り合いほどシルザを荒廃させるものもない。シルザという街の賑わいが主に帝国と小国群立地帯とを行き交う人々の流れによって営まれているのなら、尚更に」

玲瓏な声音が、それこそ啓典の言の葉を撒くかのように、音律となつて大気をさざめかせて蕩けて馴染んでゆく。

得心がいったのか、かすかに顎を引いて頷くような仕草とともに侯爵は身を起こし背凭れにその上体を預ける。そして、青年の目を見据えたまま、どことなく試すような響きを帯びた声を響かせた。

「なるほど。あの子が公国を背負つて立つのなら君のその企みは容易に実現しそうだ。だが、本当にそれだけかな？」

ゆるく、青年は口の端を吊り上げる。

「どのような答えを、お望みですか？」

その纏う雰囲気と語り口のやわらかさとは裏腹に、そこにたゆたう微笑にはそれ以上は踏みこむことを許さない頑なさがちらついで。

それに気づいた侯爵は、

「愚問だった。忘れてくれ」

貴重な何かを目撃したかのようなささやかな驚愕に湧き立つ胸の裡をそのまま表現するかのように芝居がかった仕草で大仰に諸手を挙げると、単眼鏡の向こう側の蒼の目に愉快そうな色をちらつかせ、常と変わらないどこか胡散臭い飄々とした笑みを浮かべてみせた。同じ館の違う時間。光に満ちる回廊を歩いていた侯爵が、貴婦人と少年の茶会を遠目に眺めることのできる位置で、不意に足を停めた。その数歩後を歩んでいた青年も足を停める。そのわずかな反動で青年のやわらかなプラチナブロンドの髪が揺れ、陽光に曝されて透明な煌きを撒いた。

「私はね」

と、前を向いたままの侯爵が声を響かせる。

「必ずしも世間の多くの者が描くであろう生き方をする必要はない  
と思っっている」

唐突すぎるこの切り出しに、青年は目を瞬く。

「こう生きるべきと世の多くの者が見なしているような生き方を何  
がなんでも選ぶべきだとは、私は思っていない」

細めた目に遠くで談笑する侯爵令嬢と少年を映し、侯爵はかすかに笑みを浮かべる。

「彼らにとつて、それは苦痛と苦悩の始まりなのかもしれない。私にとつても、そうなのかもしれない。だが、ね」

ここで侯爵は背後を振り返り、きょんとしてゐる青年に光湧くかのような笑顔を向ける。

「生きる術は常に流動していく。生きるに必要な諸々も然り、だ。固執することで順応できず、結局は身の破滅を招くのなら、冒険するのもそれはそれでまた一興だろう？」

ゆつたりと、侯爵は再び貴婦人と少年との茶会に眼を戻す。反射的に目を眇めてしまうまでの光が満ち溢れたあたたかで穏やかなその場所には、楽しいお喋りが跳ね回っているのだろうか。瞼を落とし、笑みを描く侯爵の唇が持ち上げられて。

「アルシエティナも」

声に乗せる名には情愛を。

「あの少年も、君の異母兄も」

思い描く誰かには慈しみを。

「そして、勿論、君も」

持ち上げられた瞼と、陽光に曝される蒼の目。立ち尽くす目の前の

青年をまつすぐに見つめるその蒼には、どこか、すべてを透徹しているかのような犀利さと悪戯を企んでいる子どもの目のようなきらきらしさが宿っていた。

見上げる城門は重厚な石の重なり。空の低い位置に弓なりにたなびく雲は薄暮の茜に黄金の煌きを放ち、中天の青褐と地平の黄金が混ざり合う黄昏が世界を覆い尽くす。

響いたのは時告げの鐘。白亜の帝都に聳え立つ大聖堂の鐘楼。大気を切り裂き遠鳴りをもらすことを求められて到達したその金属の造形は天空の歌を奏で、夜の帳が落ちかかっている帝都に普遍の時を刻む。

雑踏を沸かせるのは城門に詰めかけたひとびと。帝都の内と外との境目に位置するその門は普段は夕暮れの時告げとともに閉められるが、門から伸びる道を空けて集まったひとびとの周辺で真昼のごとく開放されたそれに反響した鐘の音は眩暈をもたらしようなうねりと成って渦を巻き、もはや陽光のゆるやかさなど微塵も残していない風にさらわれて空に散じてゆく。

銅と薄闇の境目。城門を挟み、帝都の内に現れたのは深い紅。彼らの軍靴が石畳を叩き、帝都の外よりこの場所に到達した馬車とそれを護衛するかのように併走してきた五騎の濃紺を迎える。騎乗の者のひとり 威圧感と威厳とを兼ね備えた隻眼の老人が流れるような動きで馬を降り、迎えの近衛に身を折った。

溢れかえる観衆に紛れてそれを眺めていたのは青年と少年の狭間に位置するのであるう年の頃の小柄な男。純粹と潔癖ゆえに澄み切った蒼の目が、人の頭に邪魔されながらも目の前で繰り広げられる光景を映している。そこには周囲のような熱も面白がるような気配など微塵もなく、ただ真っ直ぐに前だけを見据える目と引き結ばれた唇の横顔には無機質という形容こそが相応しい。

「あれが証人、か」

無機質な少年の傍ら、少しだけ年上と見受けられる赤毛の男が濃紺と紅の遣り取りを眺めながら言葉を零す。その遣り取りが周囲の喧騒に紛れてしまうように、赤毛の男の呟きも幾多なる大気の振動に馴染んで地に落ちてしまう。

これであの宰相だった男も終わりか、などといった声がそこで囁かれる中、濃紺から紅に証人とされる人物が乗っているのである。馬車の引渡しが行われて。

好奇心と興味とが渦巻くその場所を遠巻きに囲むように配置された黒の制服が、斜陽の艶めきと宵闇の翳りの中、静かに佇んでいた。

白亜の帝都のその最上、皇宮と呼ばれる皇帝の居城。

大理石に埋め尽くされた謁見の間、斜陽に染まる白。燭のゆらめきと薄暮の銅とが溶け合って、冷やかで心地よい静寂に鋭利な艶めきが混ざりこむ。

紅の玉座に寛ぐ緑髪の女が、数段低くなっている床に跪く恰幅のよい壮年の男に、蒼穹の雫を掬ったかのような澄んだ蒼の目を細めた。

「御心を問うことをお許してください。先の動乱にてアクイレシアとキャンティロンをはじめアウグスト同盟に名を連ねた諸侯が軒並み亡命するか粛清された今、その封土をどうなさるおつもりであるのかを」

面を伏せたままの男　ブランデンブルク伯爵カーク・クルアル。

選帝侯でもある男の口にしたその内容に、漆黒を纏う女の小振りな朱唇がゆるい弧を描く。

「おねだりをしに来たの？」

畏怖か恐怖か、からかうような女の声に伯爵は弾かれたようにかぶりを振った。

「お戯れを。しかし、見放された領地に早急に領主を封じることができねば、領地の奪い合いが始まることは必至。治安は悪化し法はその在り様を無きものとされ、ひいては帝国の秩序、そして富と繁栄に翳りをもたらすでしょう。それは陛下の本意ではないはず」

男を見つめたまま可愛らしく小首を傾げてみせる若い女　女帝ラヴェンナ。シユタウフェン帝国第五三代皇帝たるその女の異名は漆黒の女帝。しなやかな肢体を包む黒と硬質な短髪が斜陽の銅に鋭く艶めいている。

銅の艶に潤む朱唇が持ち上げられ、落日の一抹と伶俐さを宿した蒼に微笑が浮かんだ。

「あら。我が臣は、当人が一瞬でも不在であればたちまちに破綻するような、その程度の組織力しか持ち合わせてはいないの？」

まろやかで透きとおった声音が男の耳を撫で、面を伏せたまま、男はすぐさま否定の言葉を自らの声音に乗せる。

「否、領主不在にてすら領地を治めることは可能でしょう。領地の稼動に空白を生まぬこと。そう官吏を組織するは当然にして、また、それこそが他ならぬその利点。しかし、その空白が長くなれば自ずと綻びが露呈することもまた必至。帝国は広大。その程度と規模によつてはその土地を治める者をどこかに求めねばならないという可能性を看過することはなりませんまい」



くすり、と、女が微笑った。

「議会の動向でも気にかけているのかしら」

長い睫毛に縁取られた、つくりの甘さを裏切って研ぎ澄まされた伶俐さの覗く、斜陽の煌きが宿る澄んだ蒼。

平伏し、面を伏せたままの男。

臣を見下ろし、玉座に寛ぐ女。

磨き抜かれた大理石の、その透き通った白。斜陽の銅が大気を艶めかせ、冷やかな静寂に燭台の熱がゆらめいて。

「わずかでも慰めになれば、と」

灰の髪を撫でつけた小柄ながらも威容のある初老に近い壮年の男が、斜陽の艶めきに窓枠を透かした影が精緻な文様を落とす床に、黒々とした影を横たえる。

皇宮の一角、女帝の応接間。斜陽の陽、長椅子に寛ぐ緑髪の女と、その正面に置かれた椅子に腰掛けている灰の髪の男。

男の背後の扉が開き、ひとりの少女がひとつの影をつくる。硝子細工のような明るい蒼の目を頬杖について目を細めているこの城の主から逸らすことなく、顔の横の高い位置で纏めた巻いた黒髪を揺らしながら十六歳ほどの少女は軽く腰を屈めた。

「帝都を訪れている友人が貸してくれてな。あらゆる者の庇護を受け、あらゆる絵画を世に生み落としている画家だ。奇矯な話も聞けよう」

灰の髪の壮年の男　アクイーノ侯爵ヴァレリアス。女帝の叔父とされる男であり、現在における実質的なエマヌエーレ公爵家の長。

「友人？」

姪はわずかに小首を傾げる。

「理の女神の婢だ。祈りの家にて集いがあるという」

「では、叔父さまは？」

「いったいなぜ、この帝都に？」

この姪の問いに、ほのかな笑みの気配を漂わせるだけの叔父は何も答えない。

女は小さく肩をすくめ、眼を叔父の背後に立つ黒髪の少女に転じた。

「貴女、名前は？」

澄んだ蒼の目を明るい蒼の目で見返し、

「ジジ、と、申します」

少女は軽く膝を折る。

静寂にざわつくのは燭台にて焦げる蠟燭の芯。斜陽に馴染むのは蠟燭の炎のちらつき。その翳りを帯びた熱を澄んだ蒼に映しこみながら、女帝は静寂に佇む少女に微笑みかける。

「貴女、ヌアザという名を知っている？」

少女の陶器のように冷ややかですべらかな頬がゆらぐことはなかったが、長い睫毛が影を落とす肌理の細やかな透けるような白の中、

ともすれば冷酷な印象を与える透明な明るい蒼の目がかすかにゆらいた。

斜陽の銅が淡い熱を大気にもたらず。

頬杖を解いて身を起こした女帝が、凜冽たる蒼穹に似た硬質さを残したまま、ふわりと微笑った。

「友人が聞かせてくれたことがあるの。緑溢るる大地を丹砂の砂漠に変えた神　又アザがそれによって水底の一族による地上への侵攻を阻んだ、というおとぎばなし」

これに押し黙ったままの男がやや渋い表情をした。少女の表情は動かない。

「そういつた絵も、描くのかと思って」

にこり、と、女が笑った。

暫しの談笑。やがて、燭台のゆらめきが青褐の薄闇に橙を閃かせる。退室の意を表明した侯爵を、長椅子に腰掛けたままの女帝は悪戯っぽい笑みを浮かべながら上目遣いに見つめた。

「その子を泣かせるようなことをしたら許さないわよ」

先に少女を退かせた侯爵は女帝に横の立ち姿を見せつつ、

「申し伝えておきます」

淡く苦笑しながら捻った上体をわずかに傾げた。

落日の残滓がたゆたう大気に、蠟燭の熱がさざめきを生み出す。

「北方の伝承よ。王たるヌアザは光の子たるルーグと手を携え、水底より現れた敵と対峙した。敵を率いていたのはプレスという彼らの眷属。かつての同胞を目の当たりにしながらも、彼らは銀の腕と光の剣をふるう」

楽しいものを諳んじるように響くのは、透明でまろやかな女の声。

「すべての眷属を生み出した母神、狩りを司る牡鹿。時の三姉妹、戦の三女神。豊穡の父、言語を生み齎す者。水に棲む馬、化身たる大鴉。他にも沢山」

長椅子に横たわるその女は闇そのものが凝っているかのような部屋の隅に目を遣り、そこに沈んでいた人物の表情を見て取った。紅を身に纏う細身で長身のその人物は、収まりの悪い金の短髪の癖毛をすら宵闇に馴染ませてそこに佇んでいる。女よりも幾らか年上で細い蒼の目の、今は近衛軍に属しているその青年　ラモン・ド・ペレラの乏しい表情を読み取ることができるのは、ふたりが幼年からの主従であるからに他ならない。同じ人物を父とされ出会ったふたりは、やがて女のそれが異なるということを確認しながらも、変わらぬ距離を保っている。

くすりと女が微笑った。

「どうしてそんなことを知っているのか、不思議そうな表情をしているわね」

青年が答えることはなかったが、肘掛に両肘を置き、両手で頬杖をつきながら女は語る。

「昔ね、私がまだ公爵でも皇帝でもなかった頃、あの子が教えてくれたの」

そこで現れたあの子というのが誰を指すものなのか、勿論、女と共に生きてきた青年は熟知していた。その者を語る時にだけわずかにやわらかくなる女の纏う空気を、青年は感知する。迷懷するように懷古するように、女は宙を見遣った。

「正統を見失わないために異端に触れよ、だったかしら。立脚しているものというのは、最も近いくせに最も遠くて。それゆえに、それがどんなものであるのかを鮮明に捉えるためには他との比較対照を避けることはできない。勿論、師の受け売りではあるのでしょうけれど」

くすくすと微笑する女につられてか、青年の目許がかすかにやわらかくなる。

「あの子はつよいわ。傾倒することも耽溺することも、陶醉することと他者を潰すこともなく、芯を見失わずにいる」

わずかに眼を落とした女に、

「会いたいですか？」

明瞭な発音で、青年が問う。弾かれたように面を上げた女は目を瞬き、やがて、困ったように笑んでみせた。

「それこそ怒られるのじゃないかしら。現状においてアクイレイアと皇帝が接触することの意味と波紋を無視できるような子じゃないもの」

大切すぎて触れられないような、そのままそこにいてほしいからこそ声をかけられないような、そんなものを目の当たりにしてしまつてどうしようもなくなってしまうている子どものように嬉しさと哀しさの境目のような笑みを浮かべながら、女はわずかに目を伏せ、ゆるく指を組む。

「そうね、だけど」

黄昏は落日を約束し、落日は夜を約束する。

組んだ手に額を押し当て、女は静かに瞼を落とした。

「護ることができるのなら」

静寂にさざめくのは微風にすら掻き消されるであろう小さな願い。

宵闇に沈みゆくのは祈るような音律。

歓びと哀しみが感情の衝動を生み出すように、渴望することと絶望することは、なんだかよく似ていた。

帝都近郊、ラズ河河畔の町　ノヴァーラ。重厚にて堅牢な門と跳ね橋とを兼ね備え、交易路に面した、帝都に最も近い町。

「アレン・カールトンより言伝です」

差し出されたのは丸まり癖のついている親指ほどの縦幅の一葉の紙片。宿の一室、夜の冷気が滲む窓の前。橙の灯が不安定に光景を照らし出した名残の、部屋の隅に残るやわらかな闇。実物は初めてであつても肖像画では見慣れている人物の突然の訪問に驚きを覚えて

いることを隠しきれない隻眼の老将は、女のほっそりとした指からそれを受け取ると、そこに書き付けられた文字の筆跡にその言葉が嘘ではないことを確信した。

「先日、鳩で。あなたが帝都近くに到着したのなら渡すように、と」

決して目立つ容姿ではないもののやわらかな栗色の髪を結い上げた小柄なそのひとは、厳ついただけの老将の蒼の目を怖じることなく見返す。

女を通した部下より宿の食堂にて女の娘であるふたりの女の子が待っているという報告を受けていたヘルツォークはひとつの可能性に思い至り、それこそ世間話をするかのような調子でひとつの問いを投げかけた。

「帝都を離れるのですか？」

女はひとつ頷き、

「わたくしの実家へ。夫からの指示です」

紅を刷いた唇に笑みを描かせ、高いところにある老将の目を見据える。

「差し支えなければでかいませんの。あなたほどの方が、キイルータではなく、ここにいる理由をお教え願えませんかしら」

気圧されたのかわずかに上体を反らして口を噤んだ老将に、女は優美に微笑む。

「これだけは申し上げておきましょう。もし夫に何かがあったのなら」

ら、いくら偉大とされ崇められるような者であっても、いくら夫が価値を認めたような相手であつても、縊り殺すほどに憎んで差し上げますわ」

これに、一瞬きよんとした後、老将は腹に響くような大声を上げて笑った。

「流石はあのアレン・カールトンのご伴侶だ」

笑いの残滓を残したままの老将に、

「最高の賛辞、感謝いたします」

微笑を浮かべたままの女は優雅な所作で膝を屈める。

夜の静寂に蠟燭の芯の焦げ落ちる音が雑ざった。寄せては返す波のように不安定な伸縮を繰り返すあたかな灯にその身を浮かび上げらせながら、紙片を手に老将はひとり思索に耽る。

「おそらくは最善の策だ、カールトン」

ぽつりと、低く響く声音が同意を示した。

「だが」

紙片に落とされる眼と、感情のゆらめかない蒼。わずかに寄った眉間の皺が、さざめく灯火に濡らされてその影を濃く落とす。

「本当に、それでいいのか？」

同じ材料から同じ結論を推測し、できれば抗いたくもそれに代わる



ものなど見出せないでいる者の、諦め切れずとも呑みこまねばならないという認識と他に方法があるのかもしれないと夢想に縋る感情の鬩ぎ合いが、簡潔な言の葉となって夜に滲んでいった。

The second act - 04 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 05

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 1 / 04

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

「慈雨の如き恵みは豊穰を齎し、大地を肥せしめる。一時の安息は永続の平穩を齎し、悠久の繁栄を約す。卑小たる我らは理の裡に生き、理によつて生かされる。定理を表す蒼穹こそ其処に在れ。我らが神の意思を表する蒼穹こそ、常に在れ」

平坦にして躍動を孕みながら大氣に旋律をもたらす落ち着き払った男の声が啓典の言の葉を撒く。

高い天井を持つ石造りのその広間には食卓が用意され、精緻な彫刻の施された冷えた石壁はさざめく燭台の灯に曝されて複雑な紋様を床へと横たえる。その場に居合わせるのは細長い卓を囲む黒衣の者たち。彼らは一様に瞼を落とし、その場において至高とされる人間が奏でる祈りの音律に身を任せる。

やがて啓典の漣はひとつの旋律に収斂し、

「さすれば地に安寧は齎されん」

音程も調子も異なる幾つかの音が折り重なって、最後の一節を唱和した。

帝国国教会ヴァルーナ神教ファウストウス派、その総本山とされる

聖テルム大聖堂。莊嚴と絢爛を兼ね備えた白亜の大聖堂に付随する枢機卿長の邸にて、偶然帝都に集ったとされる面々が談笑を愉しみながら食事を楽しむ。

ゆるやかな晩餐の一時が暫く流れた後。

「時に」

と、この会食の主催者である枢機卿長が口を開いた。

「カジミュシエ司教ユーグ。例の件を皆に話してはもらえないだろうか」

食器の奏でるかすかな音と、静謐に覆われた囁き。晩餐に光を与え、卓上の蠟燭の不安定なその灯。熱を帯びた橙によって、壮年の司教の整えられた髭が見事である面が闇に浮かび上がる。その蒼の目はそこに集った者たちを一瞥し、卓を囲む面々は、静寂の中に饗宴を愉しみつつ、会食とは名ばかりの協議が開始されたことを悟った。

「カルヴィニア公国の重臣であったジルベルト・ヴェリより、亡命を請う文書が届いた」

議題の発端を告げる司教のこれに、葡萄酒の満たされた杯を傾けていたヘッセン・ダルムシュタット大司教イエレミアスが疑念を抱く。

「皇帝ではなく、教会宛てに？」

そうだと、枢機卿長はわずかに顎を引き、卓に肘を載せて組んだ手を口許に置いた。

「アレス王国が彼の公国を併呑したのは記憶に新しい。そして、政治的理由による亡命の請願は無条件に受理される。これは慣習にして成文化された自然の法だ」

「だが、それは原則として庇護を求める相手が国家の場合のはず」

さざめいたのは闇を駆逐する灯。

峻厳たる岩山のような気配を齢を重ねることによって獲得した温和さでくるみ、綿菓子のような髪と髭を持つ老人が乾いた唇を持ち上げた。傍らに座るその老人　オリヴィエーロ枢機卿を横目で見遣り、枢機卿長は座を見渡す。

「いかにも。我ら理の女神の婢が俗界の些事にかまう必要性はない。しかし、ヴェリほどの人物がそれを知らぬとも考えにくい。なれば

」

「何らかの意図が、そこには在る、と？」

明瞭な発音で、イエレミース。沈黙という間隙に、オリヴィエーロが言葉を挟む。

「よもや、皇帝と教会を反目させようなどと企んでいたりはすまいな」

ゆるく、枢機卿長はかぶりを振った。

「それは穿ちすぎというもの。もしそうであっても、ヴェリは苦勞の割りに得るものがない」

「アレスの狗であると仮定したとしても？」

このイエレミースの問いに、

「今のアレスには帝国を掻き回す暇も余力もないだろう。ヴォルガ河でその足が停まったことが何よりの証拠だ。対帝国となる緩衝地帯の地固めだけを、まずは急いでいる」

憶測でしかないが、とは言い置くも、枢機卿長はそれ以上の言及を避けた。そして、瞼を落とし淡い微笑をたゆたわせて黙したままのシルザ大司教シャグリウスに視線を投げ、一同を見回してから言葉を繋げる。

「その件に関しては、現在、ファイアナ騎士団が協定の作成に勤しんでいる。公国はもはや名実ともに存在しないが、公国を呑んだアレスが議場に座っていることは確実だ。ともあれ、そのどさくさに紛れてヴェリは帝国領に潜りこみ、国境から比較的近いカジミューシエ司教の許に身を寄せた。英断では、あるのだろう。俗界と聖界は別なもの。教会の地に手を出すことは皇帝ですらやや面倒な手続きが必要になる」

そして、ヴァルーナ神教ファウストウス派を奉じる帝国国教会の庇護下に在るということは、アレス王国が国教とするヴァルーナ神教カテル・マトロナ派の教皇からの干渉に　ファウストウス派とカテル・マトロナ派との緊張という均衡の崩壊を望まないのならではあるが　ある程度の慎重さと思慮深さを求めることを意味した。卓を囲む誰もが口にするのではないそれはもはや暗黙の了解と言っても過言ではなく、それゆえに、舞い落ちた沈黙には蠟燭の芯の焦げる音しか混ざることはない。

枢機卿長の眼がわずかに持ち上げられ、晚餐の席を一望した。犀利たるその蒼に鋭利さが閃く。

「我々が庇護するとはそういうことだ。そこで諸君に問う。彼の者にそれだけの価値を認めるか？」

衣擦れすら響かない静寂を、どこか調子のよい、型通りに整った張りのある青年の声音が侵蝕する。

「カルヴィニア公国に、聖パトリックの理がもたらされるのならば」

傲然と言い放つイエレミアスに、カジミエシエ司教は目を瞠り、オリヴィエーロ枢機卿は訝しげに若者を見遣りながら片眉を上げた。あたたかやや翳りを帯びた光の漣に濡らされているシルザ大司教の、落とされていた瞼が持ち上げられ、光に曝された淡い藍があらゆる色彩を流動させながら澄んだ紫にゆらぐ。芳しい葡萄酒の香は酩酊を誘い。

「混沌たるこの世に、祝福たる理を」

結論を明確にすることのない主催者のどことなく神経質そうな声が、この晚餐の終焉を告げた。

聖堂より伸びる冷えた回廊。等間隔に配置された燭台の灯火がゆらめき、それらのぼやけた明るさが折り重なって、薄い影と淡い光の濃淡を生み出す。

広い空間を整然と並ぶ柱によって区切ることで造られている回廊を歩むのはブラチナブロンドの髪的青年。夜の冷やかさと仄暗さに満たされた回廊を、歩調を緩めることなく、青年は灯されゆらめく淡い光の点を幾つもあり抜ける。

そこに、声が響いた。

「随分と大人しくしていたようだが」

青年が歩を休めることは　ましてや足を停めることは　なかったが、かまうことなく、声は厳肅たる大気を振るわせ続ける。

「第二次ヴォルガ河防衛線の事後処理の権限がフィアナ騎士団に委任されていることを枢機卿長が示したこと。そして、元カルヴィニア公国よりの亡命者を教会が受け入れるであろうこと。ほぼ貴殿の思惑通り、といったところか？　少なくとも、これで貴殿が庇護している子どもが教会という後ろ盾を得るであろうことはほぼ確実だ。当分の命の保障はできよう」

青年の前方、悠然と柱の影から現れた声の主が、歩みを休めることのない青年の名を紡ぐ。

「シャグリウス・アクイレイア」

灯が明るみに出す青年の表情の無い顔はつくりもののように端整なそれであり、そして、それ以上でもそれ以下でもない。陶器のような白皙を濡らす橙ですら、その穏やかなあたたかさをそれに与えることはできていないようだった。

途切れることのない靴音が高い天井に反響し、残響に新たなそれが刻まれる。

「庇護と監視は表裏一体だ。貴殿の異母兄の件、貴殿が期待しているのは、貴殿への女帝の寵愛に派生するものか？」

そこで初めて、青年の足が停まった。  
前を向いたままの青年の傍らには、その横顔を眺めるように立つ声の主。いかなる感情もゆらめかない横顔の、灯火の閃きを宿す色彩の安定しない目が、その動きだけで己の歩みを阻害した人物を見遣



る。

「憶測でものを言うものではないな、イエレミアス・ベルナドット」

玲瓏でしかないシャグリウスの声音にその目線を捉えたまま唇に弧を描かせ、イエレミアスは年下の大司教の足を停めるために指に絡ませたやわらかなプラチナブロンドの一房に冗談めかして軽く口づけてみせた。ここで初めてシャグリウスの表情に変化が現れる。もつとも、不愉快そうにかすかに眉をしかめただけではあつたが。いくつもの灯火の、いくつもの光の漣。いくつもの影が、ひとつの点を中心に幾重ものそれを長く伸ばす。

「三日後、メルキオルレ・マデルノが裁かれる。その為の証人が帝都に到着したらしい」

相對するふたりの大司教の、どこか愉しげなひとりが、淡々と言葉を紡ぐ。

「元宰相はともかく、ウォルセヌス・アクイレシアについては帝国軍が裁きを管轄するがゆえにごく少数の関係者以外にはその日程を知ることなどできないが。もとより秘匿が原則だ。貴殿は異母兄を次期公爵として立たせようと駆けずり回っているようだな」

相對するふたりの大司教の、無感動な優美さを纏うひとりが、不意に踵を返す。その動きに合わせて青年のやわらかなプラチナブロンドが優雅な残像とあたたかな光の流動をもたらした。

「失礼させていただこうか。君が言う通り、私はまだまだ必死になつて駆けずり回らなければならないのだから」

置き去りにした人物を一瞥することもなく、シャグリウスはその場を後にする。

整然と並び立つ柱、広大にして厳肅なだけの回廊。精緻な細工が震える影となつて浮き彫りにされるその場所に、イエレミアスの何かを楽しんでいるような声が響き渡った。

「陛下に直に掛け合つたらどうだ？ 貴殿の願いであるのなら聞き容れてくれるであろうに！」

自らが生み出す微風によつて、淡い煌きを撒くプラチナブロンドと青年の纏う黒衣とが緩慢にたなびく。苛立たしげな小さな舌打ちが、壮麗と厳肅との調和を意図されて存在する回廊に響く靴音に紛れた柱の影から現れた銀髪の従者が、足早に進む主の後に続く。

「肝心な点をイエレミアスは忘れている」

ぼつり、と、シャグリウスが零した。主に合わせて歩を進めるダリオがわずかに眼を上げる。

「兄上の身柄拘束を命じたのは、女帝に他ならないということを」

二藍の目に映るのは小柄な主の華奢な背中。その左右に連なっている近づくにつれ次第に大きくなつてくる淡い光の球が重なつて、さざめく波の光の濃淡が流動し続ける。

言い捨てられた言葉が舞うことはなく、静謐に泡立つ残響に押し潰されて消えていった。

独房と言ふには小綺麗な、かといって客室と言ふにはあまりに簡素な、書き物机と椅子と寝台とでいっぱいになってしまふ窓のない小さな部屋。数日の間をそこで過ごしている寝台に腰掛けて読み物をしていた男は、食事を運んでくる以外には縁遠いはずの室外の床の軋みに頁を捲る手を止め、傍らの机の上に眼を遣った。そこに置かれている燭台のその元にて、細工を組み合わせて立てられた懐中時計が時を刻んでいる。文字盤にて指し示されているのは夜半でしかない時刻であり、それゆえに男は首を傾げた。名ばかりの見張りの交代時間だろうか。

金属が擦れ、蝶番が外れる音がした。軋みをあげて扉が開き、そこに現れた人物に男は思わず立ち上がる。

皇宮の深部、諸侯が拘留される独房。当然ながら、そこは気軽に足を踏み入れることができるような場所ではない。

「どうして」

驚きを隠せないでいる男の高いところにある蒼の目を、閉まった扉を背に、男の妻であった女が見上げるように見返す。

「お父様に無理を聞いてもらいました」

サディヤ侯爵令嬢アルシエティナ。たおやかで物静かなそのひとの眼の先には、無表情に困惑が滲んでいるアクイレイア子爵ウォルセヌス。

滅多なことでは崩れないウォルセヌスの無表情が、

「逃げませんか？」

アルシエティナのこの一言で、明瞭な困惑を描き出した。これに、ウォルセヌスを見上げたままのアルシエティナの目許がやわらかく

なる。

「できませんか？」

否定も首肯も表すことなく沈黙を守るウォルセヌスに、アルシエテイナはほのかに苦笑する。

「貴方が動くということは、巷間で囁かれている北方異民族の後押しを受けた僭称という噂を肯定したことになる。そして、貴方とアクイレイア公爵カトウルスが手を組んでいたかもしれないという憶測をも肯定する、とまではいかなくとも、そういった印象は与えるでしょう。となれば、アルバグランド会戦によって獲得した帝国北東部における国境の安定は危ういものとなりかねない。対アレスという意味だけではなく、帝国内における異民族自治領と帝国諸侯との均衡も、三大公爵家の勢力における均衡も。そして、貴方が陛下の命を拒否するのなら、真っ先にキイルータが叩かれる。その先に展開するであろう諸々は、おそらくは、冷酷帝時代の再来」

そこで女はひとつ息を吐き、

「ですが」

夫であつた男を正面から見つめ、

「そんなことはどうでもいいのです」

ふわりと微笑した。

ゆらり、と、蠟燭の灯がゆらぐ。

ウォルセヌスの蒼の目がわずかに瞠られた。

ベルナドット家が輩出した帝国皇帝      冷酷帝エドワード。聖俗

五選帝侯が女帝を即位させるに至ったその治世に始まる動乱期はいまだ人々の記憶に生々しい。

忘却を歓迎する記憶として、生々しい。

女は淡い紅を刷いた唇を持ち上げる。

「貴方がいなくなることに比べれば、そんなことは私にとってどうでもいいことです」

怒りますか？ と、男から眼を逸らすことなく女は微笑しながら小首を傾げた。

「私は罪とされるようなことは何もしていないよ」

だから心配は無用だ、と、相手を安心させるための笑みのようなものをかすかに浮かべた男はわずかに身を屈め、女のやわらかな蜂蜜色の前髪の上からその額に軽く唇を落とす。女は眼を落とし、その微笑からやわらかさが消えた。

わずかに近くなった男の肩を、女はその細い指を揃えた手で軽く押す。

半歩ほど退いた男の膝の裏が寝台に当たり、後退の勢いを殺せぬままに、男は寝台に腰掛けた。女を見上げる顔は常と変わらない無表情ではあったが、やんわりと突き放されたことに 沈黙の裡に距離を取られたことに 男は気づいている。

こつりと、靴音が響いた。切れ長の蒼にゆらめく灯火の橙が過ぎり、そこに、女の微笑でしかない微笑が広がる。

背中に回した手を組んで、女は身を傾げ、男と眼の高さを合わせた。

「どこで嘘を吐くことを覚えたんです？」

小首を傾げた女の髪が、ふわりと揺れる。

「逃げませんか？」

再びの問い。それまで無表情に女を見上げていた男の目がかすかに揺れ、片手で目許を隠しながらかぶりを振った。不安定な蠟燭の灯に曝された硬質な亜麻色の髪にあたかな艶がゆらぐ。

「それは、できない」

笑みを描かせた唇から搾り出される答え。そんな男を見守るように見つめる女。

「できないんだ」

失笑の吐息と共に吐き出された答え。男の指の長い手が、女の蒼からその目許を隠す。

「貴方はアクイレイアですよ」

寝台に座り目許を覆い俯く男と、背筋を伸ばし凜と立つ女。

「貴方は、アクイレイアです」

語ることで重みを与えるように、その重さによって事実と成すかのように、女は同じ内容を繰り返す。

アクイレイア公爵ガイウスと名も無き野の花の間の庶子。本人の与り知れぬ理由によって立ち位置を変えられた少年のそこでしか生きていけないことを悟った聡さは、いかにして自らの存在の肯定を己

に証明しようとしたのか。

「貴方の為してきたことは、貴方の自信にはなりませんか？」

卑近な例を挙げるだけでもウォルセヌス・アクイレイアの名を外すことができない出来事は華々しい。例えば、第一次ヴォルガ河防衛戦の勝利。そして、第二次アルバグラード会戦での勝利。

絶対の勝利を約束しなければならぬのが帝国三大公爵家のひとつたるアクイレイアであるという認識と、その定義の上に立ってのみ肯定される己。勝利という犠牲を見据えながらも、それを齎すために先頭に立つことから逃れることのできない臆病さと傲慢。

自らが生きる世界で自らが異物でしかないとを思い知らされた少年は、自らを世界と同化させるために、勝ち続けることを己に課した。

世界の期待に応えるという勝利を世界にもたらし続けることを、己に課した。

いつの間にか背負わされてしまった多くのものを護るために。

それによつて異物たる自身を世界から護るために。

多くのものを蹂躪しながら、多くのものを奪いながら。そうしてしか寄つて立つものを護れない自分自身を嫌悪しながらも、生きることから逃れられずに、身勝手なだけの罪悪感を抱えてそれすらも欺瞞であると自嘲する。

相手を理解することができるのであれば、望む言葉のひとつを与えられることなど容易なのだろう。だが、自らが理解と信じているそれが単なる勘違いでしかないのなら、おそらくそれは相手を決るだけだ。それを解っていてすら、女は同じ言葉を繰り返す。

「貴方は、紛うことなき、アクイレイアです」

どんなに重苦しく枷のようなものでしかなくとも、それが男を繋ぎ

とめるのなら、最も心穏やかであつて欲しい相手を苦悶の底に突き落としたとて女は同じ言葉を繰り返すのだらう。

女の手が目許を覆う男の指に伸ばされ、その手の甲を撫でるように亜麻色の髪を梳く。

「貴方の弟さんが、貴方を助け出そうと、それこそ形振りかまわずに奔走しています」

開廷が確定した時点で既に容疑者とされた人物の行く末は決している。それが帝国軍の法廷。ゆえに、それは合意を取り付ける儀式としての意味合いが濃く、政治的意味合いが濃い。

だからこそ女は繰り返す。

「逃げませんか？」

添えた手を解いて、女は男と指を絡める。そつと指を絡めたその手を下ろすと、無防備な男のどこかあどけなさの漂う表情が露になった。

「貴方の他に、アクイレイアを名乗るに値する人物が、どこにいますか？」

呟く男の茫洋とした蒼が映すのは、唇を結んで伏せ気味の眼を向けてくるたおやかな女。蠟燭の灯がゆらぎ、男は薄い冷笑を浮かべながら眼を落とす。

「もう、既に、天秤は傾いてしまっているんだ」

男の護ろうとしているものが現状における最大限の安定だとするのなら、女の望みは男のそれを最大限に破壊する契機となることなの



だろう。男の主張は正論であり、女のそれも間違っていない。何がこのまま維持されるのかというその一点が異なるだけであり、犠牲と名づけられるであろう何かが逆転するという、ただそれだけのこと。

すらり、と、絡んでいた指が解けて。

ふわり、と、大気がゆらいだ。

ぎしり、と、寝台が軋んで。

「お願い、愛していて」

面を上げ目を瞋る男の鼓膜を、そのごく近いところで、甘やかな女の声が震わせる。

「貴方を、愛していて」

前を向いたままの男の首筋に女の細い腕が回され、亜麻色の髪が艶めく耳元で淡い紅の潤む唇が囁く。

ゆらり、と、蠟燭の灯が踊って。

「貴方自身を、貴方が、愛していて」

戯れるように愛するように、判っている結論にあえて触れずに、女は囁きに微笑を雑ぜる。

それは零れるように綻ぶ薔薇の蕾にも似ていて。

さざめく灯の艶に曝されながら、動かないでいる男を高いところから抱きすくめるように女はその腕を回し、寝台に片膝をついて男よりもわずかに高い位置に肩を並べているその身を前に傾げる。女の肢体を覆う豊かな布地は床に折り重なって渦を巻いていて、女の手が床から遠ざかるにつれかすかな衣擦れの音を立てた。

芽吹きが近いとはいえ、夜の大気は軋みを喚起するほどに澄

んでいて鋭い。

ゆらめく蠟燭の熱は鮮烈な閃きを放ち、滞留するだけの静寂をささやかに掻き乱した。

仰いだ先には果ての知れない蒼穹がどこまでも広がっていた。それほど涼やかな軋みをあげているようで、透き通った宙そのものが静止している中天を固定したまま浮上しようとしてもしているようだった。

心地よい冷ややかさの大気が肌を撫でる。そのまるやかな冷ややかさは、それでも鋭利さの名残は隠すことができなくて、肌が裂けるかのような錯覚に芯まで冷えた指先が少しだけ赤い。それでも吐く息が白いわけではなくて。

「どうして晴れるかな。晴れるから寒いんだ」

いつもならまだ毛布に包まってまどろんでいるそんな時刻であることも手伝って、トゥルスの機嫌は若干斜め寄りだ。

玄関先の段差に腰掛けて、膝のに乗せた腕の上に顎を置き、背の高い薄汚れた建造物に挟まれた隘路で追いかけてこのようなことをしているシグルとアニタの兄妹を眺めながらトゥルスは小さく身震いする。

「子どもは元気だ」

知り合いの闇医者に子守を頼まれたトゥルスは、燦燦と降り注ぐ陽光の下、なぜかその恩恵から外れてしまっている日陰で寒風の中を元気いっぱい走り回る子どもたちを逞しいものを見るかのような目で眺めながらその寒さに震えていた。

人々が活動を始める時刻、街の上には凜冽たる蒼穹。

「朝、か」

一筋の光が、白く淡く、浮遊し沈降する微粒子を煌かせながら暗がりに走る。

ティエル第一層、レーム塔。

鉄格子の嵌められた小さな明かり取りの窓を頭上に、壁に背を預けて座る、かつて宰相と呼ばれていたひとりの老人が瞼を持ち上げる。そこで曝された蒼は、老人に滲み出る極度の憔悴を裏切つて、牢獄の闇と夜明けの光が雑じりあうばやけた薄明かりの中で炯炯と前を見据えていた。

「さて、どうしたものか」

窓の向こう、蒼穹に照り映える白亜の城塞都市を見据える老将がいた。

帝都近郊、ラズ河河畔の町      ノヴァーラ

動くべきか、留まるべきか。

このノヴァーラにおいて、その存在だけで牽制となりうる数の兵が臨戦態勢に近い緊張のままに、数日を過ごしている。

降り注ぐ陽光に曝された白亜の帝都の、その眩さに目を眇め、老将は独りごちる。

「こういった駆け引きはお前の方が得意だろう?」

なあ、カールトン。

晴れ渡った蒼穹はどこまでも遠い。

「お話が」

帝都ティエル　近衛軍長官執務室。控え目に叩かれたものの返事も待たずに開かれた扉に、扉の正面の最奥に置かれた執務机にて、近衛軍長官ロバート・ベルナルが手にしていた書類から眼を上げる。

そこに立っていたのは肩で息をしているひとりの近衛兵。

「どうした？」

あえて鷹揚に問うてやるベルナルは、事前に連絡がなかったことから間にも人を挟まなかったことから、何より所属の明示すら失念している近衛兵の様子からも、これからもたらされるであろう報告が厄介事であることを推測している。

だからというわけではないものの眉を顰めていたベルナルは、近衛兵の報告を聴き、更に眉間の皺を深くした。

「生き延びたくは、ないのか？」

絶対的に優位であることを確信している者の、嗜虐のちらつく愉悅が響いて沈む。

ティエル第三層近衛軍兵舎。小奇麗で簡素な個室には、ひとりの青年とひとりの壮年の男。男は部屋に一脚だけの椅子に腰掛けて優雅に足を組み、数歩離れたところに立つ青年を見遣る。返答に窮した青年が思案する時間を稼ごうと俯いたところで、男にすべてを見透かされているのなら、それは時間稼ぎにもならない。

「宰相を告発するとて、総督を告発するとて、それが終わればお前は用済みだ。そしてお前は本来ならば宰相の犬。正義の体現者とされるか、裏切り者とされるか。ともあれ、これが済めば元の暮らしに戻るなどと、本気で考えているのか？」

ならば、随分とおめでたい頭をしている。

愉しげに喉を鳴らして笑う男と、俯いたまま拳に力を籠める青年。

「機会を与えてやる、と、言っている」

男は青年を見遣り、その口許に笑みを這わせた。そして、青年を見据えたままゆったりと立ち上がり、数歩の前進の後、肩を揃えた青年の手に何かを滑りこませる。

「文字通りの血路だ。その手で切り拓いてみせるといい」

笑みを浮かべ、男は再び歩を進め始める。

そこに、ひとつの声音が響いた。

「我々の管轄する領域での勝手は困りますな、アクイーノ侯」

男の行き先、開けられた扉が切り取る光の正方形を人影によって塞ぐように身体を置くのは、近衛軍長官ロバート・ベルナル。その肩に負っている責任をもって帝国屈指の大貴族と相對するその男は、皮肉でも警告でもなく、ただ淡々と職務上当然のことを口にする。

「その者はメルキオルレ・マデルノの法廷にて証言するまでは我々近衛軍の保護下にあります。いくら侯爵といえど、面会を求めるのなら我々を通してからにしていたきたい」

ベルナルのこれに、アクイーノ侯ヴァレリアスの悠然とした笑みに冷笑が雜じる。

「帝国三大公爵家に連なる者として、帝国軍を管轄する者として、

私はこの者に会いに来た。この者は先の帝都包囲にて陛下の命に反したあの男の、まさにその瞬間をキルータにて目の当たりにしている。これ以上の適任者がどこにいるというのかな？」

漲る自信に裏打ちされた物言いの奇妙さに、ベルナールが眉根を寄せる。

「この者はマデルノについての証人のはず」

「だが、ウォルセヌス・アクイレリアについてもこの者の証言は有効」

噛み合う噛み合わない以前に、同じ俎上にすら上っていない言葉の応酬。

「陛下の御心は？」

図らずも鋭くなる蒼。正面から見据えてくるベルナールに、ヴァレリアスはそれこそ優雅に微笑んでみせる。

「帝国軍を担うエマヌエーレとして、その名に恥じぬ振る舞いを」

もはやそこには誰もいないかのようにベルナールの傍らを通り過ぎながら、ヴァレリアスは証人たる青年に追従を求める。意思を表明する術を持たない青年は吸い寄せられるかのようにヴァレリアスに続き、回廊と部屋の境目に残されたベルナールは沈黙を崩さない。

「……長官」

気遣いの滲む近衛兵の呼びかけにも常のように磊落に応えることは

なく、ベルナールはすべてを射抜くかのような眼で中空を貫きながら、ただ苦々しげに奥歯を軋ませていた。

The second act - 05 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /



## The second act - 07

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 1 / 05

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

清廉なる大気に混ざる仄かな甘さは溶け落ちる蜜蝋の香。澄んだ淡い闇に、透かしの細工の繊細さもそのまま、冷えた床に嵌め殺しの窓を透過した陽光が煌きの絵画を綾なす。

白亜の帝都に聳える信仰の家    聖テルム大聖堂。その告悔室にて、各々ひとひとりが座ることがやつとほどの空間の、薄壁を挟んだ向こう側とこちら側で会話がなされる。

「アルバグリード駐屯部隊ならびにティエル都市参事会、トリノウアンテス族長とテウトニー族長、主として先のアルバグリード会戦において他界したナツセレディーン候に連なるテルム家を筆頭に帝都解放時に陛下についた諸侯、そしてフィアナ騎士団よりの嘆願書か。この短期間でよく揃えたものだ」

感嘆を表するのは嘆れた老人の声音。

「だが、開廷の回避は難しい。そして、そこは秘匿の場だ。場所も時刻も、事実さえも、な」

わずかに顎を引き、同意を示したのはひとりの青年。青年のやわら

かなプラチナブロンドが、小さな明かり取りの窓から差し込む精緻な紋様を流動させながらふわりと揺れる。

「ノヴァーラの彼らにも、話を」

耳に心地よい玲瓏な音律に、

「抜かりないな」

苦笑めいた笑みを孕んだ声が応える。

そこに、板戸を叩くどこか湿っていて硬質な音が紛れこんだ。

「猯下」

猯下と呼ばれた青年が許可を与える間もなく板戸が空けられ、青年が背後を振り返る頃にはその従者が主の耳許で何事かを囁く。

それに青年の長い睫毛に縁取られた色彩の安定しない目が大きく睜られて。

「シャグリウス・アクイレイア」

囁れた声が青年の名を呼んだ。声の主が自らと青年とを隔てる壁に設えられている小窓を開き、その皺に埋もれそうな双眸を露わにする。

「行くがいい」

と、老人は言った。

「劇場を教えてやる」

「宣誓する」

と、ひとつの声が大気を震わせた。

「正義を貫きここに真実を提示するということを」

その声は高いところから沈みながら滲んでゆき。

「理の満ちるこの蒼穹に懸けて」

その場において最も低い位置に立つ人物が最後の音律を言葉にする。帝都ティエル第七層皇城　白の大理石が織り成す法廷。上段に並ぶ判事と、底からそれを見上げる被告。そして秘匿が原則のはずのこの場にて、底辺より一段高い棧敷に居並ぶ傍聴人。昼なお暗い法廷には蠟燭の灯がゆらめき、澄んだ橙を大理石の白にさざめかせている。

淡々と進む遣り取りは、それこそ優雅な球戯にも似ていて。

「陛下の命もなく陛下の兵を動かすこと、これは越権たる愚行ではない」

弾む戯れの中に、一矢の意思が紛れこんだ。

「発言を」

白亜の空間の、最も低い位置に立つ男。堂々と立つその者は、切れ長の蒼の炯眼を、臆することなくこの場を司る者へと投げかける。

「許可しよう」

鷹揚な許可に、

「感謝する」

深く礼を返すと、ウォルセヌス・アクイレシアはその長身をもって周囲を見渡した。

「我々は帝国の安寧の為に存在する。我らはその為の剣。それ以上のものではない。だが、それだけが我らの存在を裏付けする。先の帝都包囲において、私は、陛下の御身を護るに、叛徒を討つに、最善の道を歩んだにすぎない。責務を果たそうとするは批難されるべきか？」

そこに至極当然の主張が飛んだ。

「争点を逸らさないでいただきたい。ここでは貴殿の行為が背命か否かであり、それ以外を論じてはいない」

そんなことは判っている、といった笑みを、本当にかすかな笑みを、ウォルセヌスは浮かべる。

「現実との乖離が否めないのだからこそ、貴殿らはそこに座っているはずだ」

唐突に現れた主張の根底に在るのは、この場をかたちづくる定理と、この仕組みを存続させる原則と、それによって解消され維持されるものへの理解。それゆえに男はこの場に立つことから逃れることが

できず、それゆえにこの場を貫く原理に則った己の行く末を的確に  
予見する。

この場における正論を体現することができなければ、この場において自らを立てることはできない。この場における正論とは、現実の不合理を解消しようとした数多の人間と時間とによって培われ同意を得、かつ成文化という承認を受けた文言そのもの。その文言に則って、この場がかたちづくられる否かがまず決する。訴状に挙がっている事象がどのように定義されているのか、その文言さえ把握していれば先を読むことはさほど難しいことではない。

なれば、正論に相對するがゆえにそこに立つ男が予見するこの場における結末は 。

「この法廷そのものがその準拠するところから乖離しているとするのなら」

この発言そのものが、帝国を覆う理への冒瀆でしかないと自覚して尚。

勝ち目のない戦いに挑んだ者が、自らの勝機などどこにもないことを始めから理解している者が、せめて声高に叫びたいものがあるとするのなら。

「そこで争うべきは正当性以外の何ものでもないだろう」

己の理不尽さを己で屈服させながら、男は戦場を見渡してきたその蒼で白のすべてを見回した。

「この先に立ち入ることは禁じられています」

白亜の回廊を護るのは帝都警察。進路に立ちはだかるその黒の間を通り抜け、青年は足早に歩を進める。

当然のことながら進入者を止めようとする黒の喉元に、

「私も止めようとはしたんですけど、持ち前の頑固っぷりを発揮されてしまいましたね。まあ、たまにはあの人の我が儘も聞いてあげてください」

得物の切っ先を突きつけて銀髪の従者は笑う。

「馬鹿を救えるのは、おそらくは、馬鹿だけなんですから」

先を急ぐ主の靴音は確実に遠のいてゆき。

苛立ちとも怒りとも、絶望ともつかない笑みを浮かべたまま、従者は主とその異母兄のためにすべての障害を足止めする。

「陛下」

皇城の一室にてアクイーノ侯ヴァレリアスと談笑していた女帝の背後にて、金髪の従者がその気配を現した。従者はその長身を屈め、前を向いたままの女帝の耳許にひとつの報告をもたらす。数度の瞬きと、蒼がゆらぐ一瞬の動揺。

目の前にて優雅に茶を嗜む叔父を、姪は上目遣いに睨めつける。

「どうした？」

悠然と微笑む叔父に、膝の上に置いた両手に震えるほどの力を籠めて微笑を向けると、

「失礼するわ」

椅子から立ち上がったラヴェーナはヴァレリアスを一瞥することもなく踵を返した。そして冷ややかな回廊へと歩を進める。

「来なさい、ペレラ」

振り返ることなく主は従者を呼び、

「それは捨て置いてかまわないわ」

ひとり置き去りにされたヴァレリアスは、姪が出て行った扉をのんびりと眺めつつ、その唇に描かせていた笑みを更に深くした。

「では、あの動きは、カトウルス・アクイレシアとの呼応ではない、と」

ざわつきはすぐに厳粛に取って代われ、淡々と問答は続いてゆく。

「無論だ」

首肯するウォルセヌスの背後の扉、

「証人を」

そこから現れたのはキイル・タにて見慣れたあの帝国官吏。その瞬間、デシエルト総督たる青年が得たのは予想が現実となったという確信。

総督の傍らに立ち、証人たる官吏はまっすぐに判事を見上げる。

「この者がカトウルス・アキレイアと繋がっていたことは間違いないありません。キイルータにて、私は何度も鳩が行き交う光景を見ましたし、私を使って帝都を内部から崩壊させようともした。帝国の北東の国境を護ると見せかけ、それによつて北方異民族の支持を勝ち取り、陛下を玉座から引き摺り下ろした後、手を組んでいた兄公爵をすら廃して自らが皇帝となり帝国を治めよう、と」

ふ、と、ウォルセヌスの口許に失笑が過ぎる。

「もしそうであるとするのなら、万人に判るかたちでその根拠を提示していただく」

判事が頷き、傍聴人がざわついて。

「では、それについて証人」

傍らを見遣った総督は、官吏の手に持ち上げられた震える銃口を正面に捉えて。

判事の背後の扉が開け放たれると同時に、被告の背後の扉が開け放たれると同時に、そこから現れた漆黒を纏う女の耳朵を、そこから現れたプラチナブロンドの青年の耳朵を、乾いた銃声が叩きのめした。

扉を開けると、そこには糸を失った操り人形のように頽れる背中があった。

その軌跡を追うように、朱という色彩が飛沫を飛ばした。それと重なるように、小銃を構えた格好のままの男がどこから飛んできた銃弾にその胸を撃ち抜かれ、沈んでいった。



頬を掠った朱は生温く、床に崩れ落ちた肉体は丸まって眠る幼子のように肢体を投げ出す。大理石の無垢なる白を、亜麻色の髪に隠れるこめかみから流れ出る朱が、いまだ残る温もりをもって浸蝕していった。命の熱は無機物の熱に取って代わられ、やわらかさは硬化への道のりを駆け出し始める。

一点の曇りもない白には、命の朱はやけに浮いてしまう。ざわめきと緊迫と、恐慌寸前の沈黙と。

喧騒としか取れない混乱に、強く毅然、玲瓏たる声音が響き渡る。

「シルザ大司教シャグリウスとしてではなく」

色彩の流動する藍の目が冷えた熱をもって足許を見つめ、

「ガイウス・アクイレシアが第三子」

かたちの良い唇が、

「シャグリウス・アクイレシアとして問う」

震えの均衡を保つ一線を維持する音律を紡いでゆく。静まり返る白の空間。

その最上に佇むひとりの女、白に相對する漆黒。無言のまま、笑むことも嘆くこともなく、血溜まりに青年を見下ろすのはひどく澄んでいるだけの蒼。

わずかに青年の顎が上がり、

「いったい何を命じた？」

やわらかなプラチナブロンドが優美に揺れる。

「何を画策し、何を泳がせている？」

鷹揚に持ち上げられる面と、女を捉える静謐な目。

「その先に在るものは何だ？」

かすかに持ち上がる口の端。わずかに沈んだ肩と、流れるプラチナブロンド。

「答える」

女を見据えたまま、女を睨めつけたまま。

「答える、ラヴェンナ！」

警護の黒に両脇から上体を沈められながら、それでも青年はその声音を持って大気に割れんばかりの振動を与える。

それはまるで、限界まで抑圧されていた感情が撓り爆ぜるような。それはまるで、限界まで抑圧していた感情を呈さずにはいられないような。

無表情のまま、ともすれば酷薄に青年を見下ろしているだけの女と。感情を剥き出しにし、引き摺られ押さえつけられながらも女を睨めつける青年と。

白に血溜まりをつくるそのものと、しんと静まり返った法廷と。混乱がさざめく傍聴席。それこそ人形のように動かない黒髪の少女が、感情のゆらめかないその硝子玉のような蒼に、ありのままの光景を灼き付けていた。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日

通説として、この日は帝国三大公爵家のひとつたるアクイレイア家が消えた日とされている。

「すみません」

光に溢れる部屋の大窓の前。顔を両手で覆った蜂蜜色の髪の女が、その場に座りこんでしまうことを、涙が溢れることを、何度も詫びながらかぶりを振り続ける。

女の前にしゃがみこんだこの邸の主は、噎び泣く愛娘を包みこむようにその背中に腕を回しながら臉を落とす。

かつり、と、靴音が響き、ひとりたちつくしていた少年の前に長身の青年が到達する。

愛娘を抱いたままその様子を横目で伺うヨーヴィルと、陶器の面のようなすべらかさと硬質さを崩さないダリオと、それを董色の目で見上げるリラ。

銀髪のカドベリー・カースル族が差し出したものを、黒髪の少年はその両の手で受けとる。そして、手の中のそれを確認し、何度か瞬きを繰り返した後、感情というものがあまりにも希薄に見受けられるダリオを見上げ、訊いた。

「これは？」

それは確信を得ている者が否定を得ただけの問いであり、否定をもたらしたい者が肯定を呈するしかない問いでもあった。

少年の手の中に在るもの。それは、陽の光に優美な煌きを撒く、ゆるい巻き癖でやわらかな、一房の。

「遺髪、だよ」

銀の髪に従者が刻んだ確信に少年の大きな董色の目が揺れ、弾かれたように面を上げたアルシエティナが無言のまま青年と少年を見遣る。

当時の一級史料とされるラモン・ダルファロの手記においては以下のように記されている。

背命を理由に開廷された帝国軍の法廷にてウォルセヌス・アクイレアは隠し持っていた拳銃で自害。この法廷にて明るみに出たアクイレア公爵家の三兄弟による帝都包囲におけるカトウルス・アクイレアとの繋がりによってシャグリウス・アクイレアはレーム塔に送られ、獄中にて死亡。

「嘘だ」

少年の唇が、言葉を零した。少年を見つめる高いところにあるダリオの目が、無表情の中で、わずかに細められる。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！」

叫びは嘆きに酷似し、静寂を切り裂く。

少年の手が青年の服の裾を掴み、突然身ひとつで大海に放り出されたかのように、わずかに眉をひそめたまま震える歯の根を必死に抑えこんで、微塵も熱を感じさせない青年を見上げながら首を横に振り続ける。

「そんな、だって、こんな」

その目に宿る潤んだ煌きは透明な雫となってそのあどけなさを残す頬を伝い落ち、

「こんな！」

俯いてしまった少年の肩に、青年はそつと手を置く。

「ごめんなさい」

と、少年が言った。

「君は何も間違つてなどいないよ」

と、青年は返した。

逆巻く限界を迎えた炎が穏やかさを呈するように、荒々しく渦巻き流動を繰り返す湖面を覆う氷が静謐を呈するように。  
青年の二藍の目には冷えたさざめきが宿っていて。

「謝るべきは、あの馬鹿だ」

静寂に落とされた言の葉は、鋭く深く、地に突き刺さった。  
ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日。

この日、数百年に亘る帝国三大公爵家のひとつが消失し、諸侯の勢力均衡に劇的な変化が生じた。

以降、帝国は更なる混迷に身を浸すこととなる。

それは闇であると、おそらく人は呼ぶのだろう。

手燭に縋るように溶けた蠟になんとか刺さっている芯が貧弱な炎をゆらめかせ、それは石を噛ませて造られた壁のその隙間から吹きこむ風と噓せるような湿気にそれこそ風前の灯だった。

壁に何か弾力のあるものが押し付けられた鈍い音。それと同時に石に金属がぶつかった時に立てる賑やかな金属音が爆ぜ、金属が石の

床を擦る音がそれを追いかける。

「答えてもらおうか、カトウルス・アクイレシアに同調した輩の名を」

壁を背にずり落ちる青年の前に立つのは、抜き身の剣を手にした恰幅のよさだけが光源の乏しい闇でも目立つ男。長い髪が顔にかかり鎖に繋がれている青年の表情は見えないが、引き結ばれた唇の端から伝うのは紛れもない血液。

「言えないか。そうだろうな、言えぬのだろう？」

かつり、と、剣の切っ先が石を奏で。

「保身ほどに大切なものもないからな。だからこそ貴様は我が息子を見殺しにした」

震えるように持ち上げかけられた青年の唇は、餓えた空気だけを吸って再び結ばれる。

それは闇である、と、おそらく、ひとは呼ぶのだ。

男が動き、大気がゆらぎ、そのささやかさに蠟燭の灯が消えた。

青年の髪が掴まれ、男を仰がされ、闇が染める藍とも紫ともつかない片目が細められ、鎖が引き摺られた。

剣が踊り、肉が裂かれ、放された手に支えるものを失い、辛うじて石壁にその背を預けるも自らの片足の腱から広がり行く血溜まりに噛み殺し切れない苦痛をもって青年は身を浴す。

肩で息をし、ぎこちなくしか思い通りにならない身体を持て余す青年を、男は冷えた目で見下した。

「答えてもらおうか、カトウルス・アクイレシアに同調した輩の名

を」

嘲るように弄するように、青年は掠れた息を吐く。

「そんなもの」

吊り上がるのは両の口の端。擡げられるのは強がりにも似たいまだ力を失わないでいるその面。

「知るはずもないだろう？」

纏れた髪から覗くのは、それこそ数多の色彩の流動する闇が融けた、鋭いだけの挑むような炯眼。

煙の残滓がたゆたうように、纏れた白金は暗がりに映え。

それこそが闇である、と、そう人は呼ぶのだ。

The second act - 07 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /



## The second act - 07

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 2 / 01

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

そのひとについて覚えていることはさほど多くない。

なにしろ子どもの時分であつたし、それに、実際に会つたのは数えるほどで、僕自身が発言を許されるといった意味での言葉を交わしたことは一度もなかった。

そのひとはいつも片手で頬杖をつきながら机上の書見台の分厚い古文書を捲る。眼鏡越しに文字を追う蒼の目は、鋭利な舌鋒を隠すというよりは、犀利な内面を馴染ませたどこか緊迫感を秘めた温厚さを湛えていた。

黒めいた焦茶の窓の格子、白くぼやける陽光。穏やかな静寂に羊皮紙の擦れる音だけが交じる。

そのひとの傍らにはひとりの少年。眼鏡をかけた灰色の髪の男と利発で気の強そうな少年の組み合わせは父子のように見えなくもない。もつとも、男はこの館の主の客人で、この館の主とは少年の母であるから、実際の関係はそれとさほど遠くもないのかもしれない。まあ、でも、そんなことは僕にはどうでもいいことで。

雨風を凌げる屋根と、餓えないばかりかそれなりに味わえる食事。

少年という主と、主を利用する為ならば身につけることが許される技能と知識。

それらが、所有の印を灼きつけられるのと引き換えに僕が手に入れ

たもの。

他人にはどう見えていたのかは知らないけれど、捨てられれば野垂死ぬただだと自覚していたあの頃の僕は身につけられるものなら何でも身につけようと決めていて、だからこそ目の前に並べられるすべてのものに節操無しに手を伸ばした。この身以外に何も持たない僕はこの身を立てることのできる何かを身につけるしかなくて、脅迫観念にも似たその意識に派生する必死さが熱心さと受け取られていたとしたら、それはそれで放置しておいて損をするものでもないともあれ、その意味において僕とそのひととの出会いが劇的で、そのひとが少年に与えると同じものを会得することを許された僕は、それこそ灼熱の砂漠を彷徨い続けた末にやっとのことで見つけた泉の水を呑み干すように、目の前に並べられていくものを握り締めた。あの頃の僕はそのひとの名前など知らなくて、勿論、そのひとがどんな肩書きを得ていてどんな立場に在るのかも知らなかった。あの館が街ごと焼失した後に僕を拾って育ててくれた傭兵たちから聞いた話の中で語られたそのひとは、僕の知る静けさと文献に埋もれていればそれだけで満足しているように見えたそのひとはどこかずれていたけれど、愉しみと願望と好奇心とが織りこまれて広がってゆく噂というものはそういったものなのかもしれない。

あの館から前触れも無く突然に姿を消したそのひとは、名をトーマス・ワーディングといった。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日　燦然と降り注ぐ眩いばかりの陽光に艶めいた斜陽の翳りが雑ざり始める時刻。

帝都が見下ろす平地に展開するのは整然たる濃紺。帝都を望む小さな街の堅牢な城門を背に展開するのもまた同じ色。

対峙する濃紺のその一方を率いる老将は、高く高く澄み切っている

蒼穹に黄昏の冷やかさを感じ取る。

「要するに、そういうことか」

帝都近郊　ノヴァーラ。街並みを護る石壁の上、ぬるい風にその身を遊ばせながら、相対する濃紺の背に庇われるように聳え立つ白亜の帝都をヴァルター・ヘルツォークは苦々しげに見遣った。

「陛下のご許可は？」

帝都第三層　近衛長官執務室。一枚の書状を手に、その身に纏う厳然さを崩すことなく近衛軍長官ロバート・ベルナルが問いを投げる。

「尾を振る相手を間違えないことだ、ベルナル」

組んだ手を膝において悠然と椅子に座るアクイーノ侯ヴァレリアスが鷹揚に笑んだ。

侯爵から眼を逸らさずに立つベルナルと己の指に眼を遣っているヴァレリアス。戦場においては紅と濃紺を纏うのであるうそのふたりの眼が交差することはない。

ベルナルの蒼に呆れに似た色が過ぎる。

「勘違いしないでいただきたい。近衛が服するべきは陛下の勅命のみ。受諾を拒むのは貴殿の命であるからだけではありません。たとえそれがラヴェンナ・ヴィットーリオ・エマヌエーレ私人の命であったとしても同じこと」

この上もなく愉快そうに、ヴァレリアスの喉が鳴った。

「随分と酷薄なものだ。もしあの小娘が玉座から引き摺り下ろされれば、もはやその声など耳に入れぬか」

わずかに眼が持ち上がるベルナルと、ゆったりと腰を浮かせるヴァレリアス。深くなる笑みとともに侯爵はベルナルが手にした書状に眼を遣る。

「援護しろなどと贅沢は言うまい」

そして、受容されるのが当然とそれ以外の可能性など存在しないことを確信している響きをもって、ベルナルを正面から見据えた。

「動くなよ。後背から叩かれたらたまらん」

「それが陛下のご意思なれば」

近衛を率いる者の目礼に、侯爵はかすかな冷笑を浮かべて見せる。

世を満たすのは燦然とした陽光と黄昏の静謐が緬い交ぜとなった艶やかな翳り。

アクイーノ侯が退室してさほど間を置くことなく、ベルナルの執務室をひとりの男が訪れる。

「お呼びでしょうか」

紅を纏うやわらかな物腰の金縁眼鏡の男  
近衛軍帝都駐留部隊  
長ヨハン・ラングミュラー。

「すまない、無駄足をさせてしまった」

窓を前に外を眺めていたベルナルがゆったりと身体を反転させ、穏やかな苦笑を零した。

「それは」

ベルナルが手にしているもの。ラングミュラーからは紙に染みこんだ鏡面となる。それでもそれが何であるのかを判別するには充分であるほどに決定的な、見紛うことのない 名を記した筆跡とそれを透かす御璽しか目にすることはできないが、その図形が捺されている紙片が何であるのかを間違える者はいない。

部下の目に閃いた緊張を見て取ったベルナルはほんのわずかな時間だけ押し黙り、

「気にするな、ただの牽制だ」

場を取り直すような笑みをつくり上げ、アクイーノ侯によって届けられた、手にした書状を握り潰した。

馬の蹄が大地を抉った。

蹴り散らかされる土塊は地に落ちる前に後続の軍馬の脚を叩き、碎け散る。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日 薄暮に染まる夕刻、夜の青褐に同化する濃紺が辛うじて黄昏に色彩を交ぜこむその時刻。

薄闇に浮き立つ白亜の城塞都市を臨むその場所で。

同じ色彩の、同じ出で立ちの、同じ剣が。

剣戟の奏でられるその大地を睥睨する帝都を前に交差する。

ノヴァーラにおけるこの衝突は、女帝の命を受けたアクイーノ侯とデシエルト総督麾下の老将ヴァルター・ヘルツォークによる帝国軍の内部分裂であるという見方が定説である。だが、デシエルト総督の法廷と同日のその日、その幕開けの時刻からしてヘルツォークがデシエルト総督の去就を知っていたとは考えにくい。

ともあれ、史料にて語られるこのノヴァーラ戦では、叛徒の残党を皇帝が鎮圧するという図式が成立している。

しかし、ここで叛徒とされる人物はウォルセヌス・アクイレシアではない。

では、この出来事において叛徒とされるのは誰であるのか。

帝国末期、皇帝勅書が濫発された時代。

アレン・カールトンというひとつの名が、叛徒の名として浮上する。

帝都第一層異民族街　半地下で石壁の狭い酒場。天井近くに並ぶ

明り取りの曇り硝子から差しこむ斜陽の艶やかな銅と店内に置かれている燭台から球をかたちづくるようにさざめく蠟燭のあたたかな灯が雑じりあい、光によって拓かれているはずの視界のどこかが漠然と奪われているような錯覚を覚える。それは不安に近いゆらぎであるのかもしれない、街が家路を急ぐ人々で賑わっているはずの時刻に満ちている静寂のせいなのかもしれない。なかった。

カウンターに両手をつき、椅子に膝立ちになって同じ格好で並んで座っている小さな兄妹の兄の方が黙々とグラスを磨き続けている店主に問う。

「ヴィロツクは？」

そして兄の問いを妹が復唱する。

「ヴィロツクはー？」

どこか困ったような笑みを浮かべ、グラスを磨く手を停めて、店主はシグルとアニタの兄妹に向き直った。ひょろりとした長身の店主は、身を屈め、兄妹と目線の高さを合わせる。

「今日は僕の家泊まるうか」

これに兄が首を傾げて、

「でも、ヴィロツクの家、近いよ」

妹も首を傾げた。

「ちかいよ」

そうだね、と、店主は兄妹の言に頷いて、それからこう付け加える。

「だけど、もし今日中に帰れなかったら君たちを泊めてやってくれ、と、闇医者殿に頼まれてしまっているんだ。そろそろお泊りができてもいい頃だ、って言ってたよ」

黙りこむ兄の傍ら、店主を見つめるアニタの大きな蒼の目がかすかに揺れた。

「ヴィロツク、どこいったの？」

アニタの背後、店内唯一のテーブル席。テーブルの上に置いた組んだ腕に顔を埋めてぐったりとしていたトウルスが緩慢に面を上げる。

「酔狂で悪趣味な貴族の尻拭いじゃないの？」

振り返るアニタの背後で苦笑を浮かべる店主。そこに耳にまるやかでやや低い女の声が滑りこむ。

「ふたりともこっちにいらっしやい。焼き菓子を買ったの」

いっしておいで、と、店主は兄妹を促し、兄と妹はカウンター脇の扉の前に佇んでいたリーザの方へと駆けてゆく。

ふと、その光景を眺めていたトウルの深い緑の目と扉を閉めるリーザの淡い翡翠の目が合った。穏やかさを消し去った冷徹とも取れる面立ちの中、唯一感情を量る窓口となるのである。翡翠はひどく鋭い。

貸し部屋となっている上階へと繋がる階段を駆け上る軽やかな足音は、扉が閉められるとともに沈黙へと姿を変える。

「後で叱られるのは確実かな？」

扉を眺めたままの店主に、

「言い方がまずかったことは認めるよ」

トウルスはげんなりと軽く諸手を挙げた。

そこに、来客を告げる、店の出入り扉に付けられた小さな鐘の音が響く。

纏っていた夕暮れの空気を拡散させながら段を降りてくるその客は、店主とトウルの視線を受けながらカウンターのいつもの席に落ち着いてから上体を捻り、背後のトウルスを見遣った。

「随分とお疲れなようだね」



薄暮の雜じる薄闇に映えるのは淡い金の髪。今にもずり落ちそうな半月眼鏡をかけているその青年は首を傾げてみせる。

「一日中シゲルくとアニタちゃんの面倒を看てたからかな？」

飲み物を作りながらの店主の言に、半月眼鏡の優男はわずかに目を瞠る。

「それはまたどういう風の吹き回し？ どうせならシャルに代わつてもらえばよかったのに。シャルなら夜泣き宥めから離乳食作成から難なくこなすし、何より子ども好きで子育て経験者だからね。トウルスくと違って子どもに遊ばれるようなこともないだろうし。この店、客は来ないんだろ？」

どこまでも爽やかな笑顔で、優男は言い放った。

「あのね」

「フィル、ちよつとそれは聞き捨てられないかなあ。それでもここ酒場なんだけど」

腕に顔の半分を埋めて目付きの悪くなるトウルスとやんわりと難色を呈する店主。店主の手から果汁に満たされたグラスを受け取りながら、ふたりの反応などどこ吹く風といった風情で優男は話を切り出す。

「幕が上がった。場所はノヴァーラ」

わずかにトウルスの顔が上がり、流れるような動作でグラスを磨いていた店主の動きが一瞬だけ停まる。誰が何を始めたのかを明白に

しない発言だけを投げて、優男はグラスに口をつけた。店主が眉根を寄せる。

「大丈夫かな、闇医者殿。そんな状況じゃ、いくら行き先が雲の上とはいえ、ぴりぴりしてることに変わりないだろ？」

焔の熱が明るさとなってさざめいている石壁を眺めながら、気のない様子でトウルスが口を開いた。

「大丈夫だよ。ヴィロックはトリノウアンテス族だからぱつと見はウエネティー人と変わらない。ヌアザよ我らに力を！ とかやらかさなければ大方は誤魔化せる」

「それはそうだろうけどねえ」

困惑気味の曖昧な笑みを浮かべるしかない店主と、

「ノヴァーラとは別な意味でぴりぴりしてるかもしれないけどさ」

いい加減にしてくれとばかりに溜息を吐くトウルス。

「これじゃオルトの契約が切れたところで身動き取れないじゃないか」

思わず零れたトウルスの本音に優男は爽やかに笑う。

「契約が延長される可能性は高くなるね」

「あえて言わないでおいたのに。そうなったら嫌だから」

腕の中に再度沈んでいったトウルスの、くぐもった嘆きが聞こえた。笑みの気配を纏ったまま、優男は上体を元に戻し、眼を店主へと転

じる。

「だけど、街を歩きにくくなってることは確かだね。いくら離れて  
いるとはいえ、少なくとも城壁の向こう側では流血沙汰。しかも  
今通ってきた道しか判らないけれど 城壁の内側には帝都警察  
の姿がいつも多いときてる」

店主の穏やかな蜜蝋の目に、半月眼鏡の向こうからの探るような目  
が映った。

「それなのに城門は開けっ放し。まだ完全に陽が沈んだわけではな  
いからいつもの時間になってないというだけかもしれないけど、そ  
れにしたって街道を通ればすぐのところでは軍馬が嘶いているんだ。  
無用心と見ることでだってできる」

そこにトゥルスの声が飛ぶ。

「何か知ってるんだろ？」

背後を振り返った優男は困ったように笑い、

「いくら俺がサディヤ侯の私兵だといってもね、下っ端が知れるこ  
となんて瑣末事だよ。もっとも、手に余るような大事なんて知りた  
くもないなあ」

腑に落ちない表情をしているトゥルスに向かって持論を投げる。

「物事というのは、どうこう好き勝手言えるくらいの距離にいるく  
らいで丁度いいんだ」

冷えた石壁を濡らす熱は、どこか翳りを孕みながらも明るくあたたかで、その小刻みなさざめきが安定することはない。

鮮烈にして不安定な橙を深い緑に宿しながら、笑みを崩さない優男を見据えて黙したまま、トウルスはわずかに目を細めた。

斜陽の残滓は黄昏の仄青く澄んだ薄闇に馴染んでゆき、落日の名残はいまだ遠くの山稜に燃えるように鮮烈な銅の艶やかさとなって留まっていた。ラズ河から昇ってくる狭霧の細やかな粒子は夜の帳が落ちゆく世界に緩慢にたゆたい、白亜の建造物が並ぶ人気の無い街並みを、夜のはじまりたる薄闇を透かしながら音もなく覆い尽くしてゆく。

剣戟も嘶きも血の香をすらその身に取りこみながら、間断なく流動し濃淡を逆巻かせながら広がってゆく霧は静寂と冷ややかさとを帝都にもたらしていった。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日 黄昏  
の鈍い煌びやかさと昏さとが夜の闇へと変じてゆく時刻。  
静寂を切り裂くのは時告げの鐘、蠢いたのは。

「我らが同胞を救い出せ」

帝都を覆い渦巻き拡散する鐘の音に混じるのは軽やかな破裂音。夜霧に閃いたのは火薬の花。

帝都第一層 レーム塔。帝都下層に聳え立つ牢獄。

それは闇の深淵。澄んだ闇が狭霧にばやけ、逆巻きながら渦巻く潤んだ粒子に冷えた大気が凍てゆるむ。

霧と闇と硫黄臭の中、破碎された石が崩れ落ち、地を這うように粉塵が舞う。割れた石畳が砂利となって積み重なり、たゆたう煙は喉と涙腺を刺激した。

視界ばかりか足場すらも定かではないその場所で。

「不当なる支配と抑圧の象徴を破壊せよ！」

少年と青年の境目にたゆたう小柄なひとりが後に続く同胞に檄を飛ばす。

銃剣を掲げるその者の名はクロード・シャル。

鳴り響くのは時告げの鐘。

鐘に隠れるのは馬蹄の旋律、霧に隠れるのは蠕動する者たちの姿。

鳴り止まない鐘、閉まらない城門。

白亜の帝都、帝国の楔。霧と硝煙に塗れて下界を睥睨する塔の、その対岸。

綻んだのは、崩壊と騒乱との酷薄な蕾。

「物事というのは、どうこう好き勝手言えるくらいの距離にいらく  
らいで丁度いいんだ」

冷えた石壁に染み渡るのは黄昏と夜の狭間の澄んだ薄闇。

鮮烈なまでに熱を主張してさざめく灯火の明るさに濡らされながら、  
半月眼鏡の優男は空になったグラスを顔の高さに持ち上げてみせる。

「ところで、鳩は飛んでいるかな？」

そんな問いを放ちながら同じものをと注文する優男に、グラスを磨く手はそのまま、店主は申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「悪いけどそれで最後なんだ。今がその実の旬じゃないということ  
もあるんだけど、この時期の輸出入になる南の商人が帝都近辺のき

な臭さを感じ取ってかあまりこっちに寄りつかなくなってしまったみたいだね。このところの朝市といたら、帝都包囲前のそれを知っているからかもしれないけど、淋しいくらいに閑散してるよ。近場の面々はともかく、大陸を駆け回って商売してる彼らの姿はほとんどない。これで今回のノヴァーラの件が長引けばどうなるのかは、まあ、数ヶ月前において僕らは既に経験済みだ」

あんなもので済めばいいと思うようになるのかもしれないけど、なにと零しながら店主は琥珀色の液体が称えられたグラスを優男の前に置き、優男の手から空のグラスを回収する。

「あまり酒は好きじゃないんだけどなあ」

苦笑しながらグラスを手取る優男に、

「何を言ってるんだい、底なしのくせに」

店主は朗らかに笑った。

「ところで、さっきの質問についてだけどね」

常と変わらない穏やかな店主の声音の根底に立ち現れた薄氷に似た鋭さに、ふたりの背後、それまで卓上に置いた組んだ腕にぼんやりと顎を載せていただけのトゥルスの緑の目がわずかに細められる。グラスを磨く手に眼を落とし、店主は続けた。

「北が不安定になっっているようだ。僕に言えるのはこれだけ。その理由は、おそらく、君の方が詳しい。もっとも、多少の時間的な遅れがあることは致し方ないから、今現在の状況までは判らない」  
「それは承知してる。しかし、北か。テウトニー族とトリノウアン

テス族、どちらだい？」

グラスを手に店主を見上げる優男に、

「どちらも」

ゆらめく灯にその横顔を与えながら店主は瞼を落とした。

喧騒や雑踏が街の営みの息吹であるのなら　いくら石壁を隔てて  
いるとはいえ　蝋燭の芯の焦げる音すら奇妙に響くこの静寂は、  
まるで街そのものが息を殺しているようで、そこにおいては人々の  
気配はどこまでも希薄なものでしかない。

一日の営みが眠りへと導かれるまでの時の間隙。漆黒たる宵闇と黄  
金たる陽光の残滓とが緋い交ぜとなる、夕刻とも夜ともつかない世  
界。

そこにおいて、透明なグラスの中、琥珀色の酒が跳ねた。

「なんだろう？」

上体を持ち上げたトゥルスが反射的に店の扉を見遣る。

地を伝わる振動は不規則。遅れて、遠雷めいた何かを穿つような鈍  
い音が地を圧するように何度も鳴り響く。そのどちらもが媒介を震  
わせた帰結であるというのに、まるで別のもののように重なり合い  
絡み合い浸透してゆく。

それは、抗うことを許さない、轟き地を抉りすべてを押し潰してゆ  
く激流にも似ていて。

「ノヴァーラの火種がここまで届いた？」

グラスを磨く手を停め天井を仰いでいた店主がぼつりと呟くと、同  
じように天井を仰いでいた優男がかぶりを振った。

「いや。おそらくは、違う」

間隔を置いて小刻みに震える度に、棚に並べられた酒瓶が硬質な悲鳴を上げる。

問いかけるような店主とトゥルスの眼を集めたまま半月眼鏡の優男はわずかに首を傾げ、

「これが饗宴の始まり、なのかな？」

苦笑を零すしかない店主と呆れを隠そうともしないトゥルスを前に、どこまでも曖昧な主張を曖昧な笑みに乗せて提示してみせた。

ここで時は数日前に遡る。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第15日。

山稜から迸る朝陽に夜に澄み沈んだ大気は流動を始め、氷塊に封じられた暁と茜を蕩かしたかのような細やかな砂は沈殿することも滞留することもなく砂漠に訪れた陽光に煌いている。緩慢に地を撫でる風は冷ややかではあってもどこか潤んでいて、肌を刺すようではあるものの、まるでやかでやわらかい。

丹砂の砂漠のオアシス都市　キイルータ。北方異民族自治領  
テウトニー族自治領とトリノウアンテス族自治領　通称デシエル  
ト地方と呼ばれる土地において、総督府が置かれているその都市は  
帝国においては北方安定のための重しと認識されている。

鮮烈な朝陽が差しこむのは、どこに平面があるのかと疑念が湧くほどに堆く積まれた書類が並ぶ執務机。夜明けの澄んだ大気はまだ暖まっていない室内に独特の弾性を満たし、明るいだけの陽光の道筋にはたゆたいながら沈殿する埃がきらきらと舞い踊る。



それはデシエルト総督府の一室、副官と呼ばれる男の執務机。夜明けからほどないというのにその机の主は書類を前に椅子に座り、手にした茶器から立ち昇る湯気は 室内を満たす大気に圧されてか  
その道筋を気まぐれに変えながら白い粒子をたゆたわせてゆく  
夜に満ちた静寂はいまだ地に留まり、すべてを曝け出す陽光が訪れたとしてもそのかたちを崩す気配はない。

窓の外、凍てついた砂の赤が目眩しい地平線の上に広がる澄んだ蒼穹。そこに閃く無数の白。それは伝言を携えて羽ばたく鳥の道筋。静寂が崩れるために必要なのがわずかな空氣のゆらぎであるのなら。

「ああ、来ましたか」

ことり、と、茶器を机に置き、デシエルト総督府の現在の長たるアレ・カールトンは呟く。

朝の喧騒が訪れないのは過度の緊迫によるものであり、何によつてそれがもたらされているのかなどといったことはこの土地に身を置く者であるのならさほど考えずとも予想がつく。

直接的であれ間接的であれ、それに対峙しているのなら尚更。

響いてくるのは軍靴が奏でる複数の音律、それに混じるのは金属の摩れるかすかな音。

「おはようございます」

扉を開けて入ってきた蒼の目と紫紺の目を持つ者たちへカールトンは挨拶とともに穏やかに眼を向けて、

「今日は本当にいい天気ですね」

首の左右に交差した二本の剣の腹と喉の正面に突きつけられた一本の剣の切っ先などそこに無いもののように、厳然とした表情を崩さ

ず無言のまま眼前に並ぶ来客たちを悠然と見上げ、にっこりと微笑んだ。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第16日。

いまだささやかな芽吹きの気配すら凍てついた土塊と氷に覆われている帝国の北東、地を満たすは無垢にして潔癖の雪の白。その白を冠するは峻厳たる峰の連なり　シユタウフェン帝国とアレス王国の国境たるアルバグラード山脈。

雪原に弾かれて爆ぜるのは晴れ渡った蒼穹から降り注ぐ陽光。それは絶望的ともとれる圧倒的な輝度と貫通力とをもって世界に散乱する。

視界が白一色に塗り潰されるまでに鮮烈な反射光に囲まれた帝国軍アルバグラード駐屯部隊　事実上の国境警備隊　の兵舎の一室にて、濃紺を纏うひとりの青年が手にした紙切れに眼を落としたまま沈黙していた。もっとも、常においてその青年が磊落であるのかと問われれば十人中十人が否と即答するのだろうが。

紙切れを手にしたまま黙然と立ち尽くしているように見える上官を、その場に居合わせた十人中十人が磊落であると首肯するであろうどこか気安さの滲む青年が、脚を組んで簡素な椅子に腰掛け、持参してきた湯気立つ杯を口に運びながらそれとはなしに見遣る。行儀悪くも組んだ足の踵が載せられている卓では、もうひとつの手つかずの杯が湯気を立てていた。

アルバグラード駐屯部隊隊長クラウディウス・ディオと副長クリストフ・レーヴィ。

その纏う雰囲気、剥き身の剣の研ぎ澄まされた鋭利さそのままに。

「キイルータを鎮圧する」

切れ長の蒼に無感動な冷徹さを湛えたまま、その所作や立ち姿から他者に直線的な印象を与える上官は、命令書の内容を簡潔に副長に告げた。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第18日。

地に満ちる色彩は銅。蒼穹はどこまでも澄み、また、どこまでも高く遠く果てもない。

トリノウアンテス族自治領の領都にして帝国四大異民族自治領の中のふたつを管轄するデシエルト総督府が置かれているのが、丹砂の砂漠のオアシス都市 キイルータ。そのキイルータの中央に息づく広場にて、そこに集まった人々を前に立つ紫紺の目を持つ男が、暁の残滓をたゆたわせる煌きを秘めた破璃のような透き通った硬質な大気を切り裂いてゆく。

「我々は忘れたことなどない。富を奪われ神を奪われ安息を奪われたあの瞬間を、我々が我々であることを踏み躪る帝国の非道を、片時も忘れたことなどない」

訪れるのは沈黙。大勢が息を殺し、そこに撒かれる次なる言の葉を待つということに付随する期待にも似た緊張。

テウトニー族の男の声の余韻を絡め取り、その傍らに立っていた蒼の目を持つ男が口を開く。

「我々は忘れることなどない。子を奪われ友を奪われ土地を奪われたあの瞬間を、我々が我々として生きることと剥奪し続ける帝国の愚行を、片時も忘れることはない」

トリノウアンテス族の男がもたらした残響。紫紺と蒼の間にたゆた

うその只中に、ひとりの濃紺が歩み出る。

「そして、今まさに女帝はこの地を手にしようとしている」

それは場違いなほどに穏やかな口調。背後で手を組み、ものやわらかな物腰をくずさぬまま、微笑すら浮かべてその濃紺は並び立つ北方異民族の間を通り、一步先じた位置で足を停める。

閉じられていた瞼が緩慢に持ち上げられ、ぼやけた微笑のようなものを湛えたまま。そのウエネティー人は広場を埋め尽くす人々を見渡し、明瞭な発音をもって確信を撒く。

「アルバグランドよりじきに兵が到達するでしょう」

確信はざわつきとなり、ざわつきは安定を欠いた波となって人々の間を伝播する。

「総督ウォルセヌス・アクイレシアによって富み栄えた、豊かにして美しい、この地に」

それは、デシエルト総督府において姿はともあれ総督と並ぶほどにその名を知らぬ者がいない確かな存在感を有する人物の、傲然なまでの断言。

恐れと不安がもたらした静寂。そのさざめきの間隙にトリノウアンテス族が声を張り上げ、その語尾を繋ぐように傍らのテウトニー族が掬う。

「冷酷帝の所業を思い出せ」

「コルチエスターの悲劇を忘れたか？」

それは、上下左右に大きく揺れ振れる波のような音響。

黙したままの濃紺は、その蒼をもって次第に熱を抱き沸き立ってゆく群衆を見据えている。

「我らが誇りを掲げよ」

「我らが祖国を我らに」

地を満たすのは鮮血にも似た銅。

「我らが安寧を今こそこの手で取り戻さん！」

放たれる唱和は大地を震わせるほどのうねりを生ぜしめ、熱を孕むそれらは渦巻き逆巻きながら凜冽たる蒼穹に散じてゆく。

アレン・カールトン造反 通称キイルータの曙光。

それは、どこまでも予定調和的でそれゆえに違和感が拭えない、ただそれだけの。

地には銅、空には蒼。閃光が廻り尾を引く陽は中天。

「降伏を」

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日。

砂漠に突如現れる都市を背負う男と、整然と並ぶ濃紺を背負う男。馬上の同じ濃紺を、鋭くもどこかまるやかな風が弄る。砂漠に気まぐれな風紋をさざめかせながら走るそれは細やかな氷の粒子を孕んでいるようでもあり、潤んだ水の香を孕んでいるようでもあった。各々に落ち着かない馬を宥めつつ、ゆるやかに踊るように、絶えず手綱を捌きながら早春とも言いがたい肌を刺すような冷えた大気に濃紺が沈む。

クラウド・デウス・ディオの炯眼を、アレン・カールトンの穏やかな蒼が受けとめて。

「できるのなら、初めからこんな派手なことはしませんよ」

私の柄ではありませんからねえ、と、背後のキール・タを眺めながら苦笑するカールトン。無感動な無表情に見えるだけのディオの目に、迷いでも同情でもなく、ましてや嚇怒や狼狽でもない何かがかすかに浮かぶ。激情とは程遠いそれが、普段は畳み掛けることも相手をあるひとつの結論にひきずるうともしない寡黙なディオの唇をこじ開けた。

「降伏する気はないのか？」

手綱を繰り馬首を返しかけたカールトンに、ディオが声を投げる。

「帝国の北の重したる自覚を棄てられるのならば」

声音を落とし振り返ることのない後姿は、遠のくにつれて、蜃気楼のごとく丹砂に霞む街並みと同化してゆく。

凜冽たる蒼の下、鮮烈なる銅の丘。風に巻き上げられて地に霞む砂の、そこに消えてゆく濃紺を見遣るディオの目を　遠のく背中の持ち主と同じ結論を得てしまった者の、納得するしかない無力さを呑みこむことへの抗いと、抗うことすら許されないことを自覚してしまう責任感とが緋い交ぜとなった　齒痒さという苛立ちが過ぎっていった。

The second act - 07 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 08

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 2 / 02

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

ファウストウス暦432年、マルティウスの月の第19日    夜の  
帳が天空と大地とをほぼ覆いつくした夕刻。

「随分と好き勝手やらせているようだが」

帝都第七層    皇城。落日の名残のほのかな飴色と夜の蒼が緋い交  
ぜとなった薄闇。すべてが世界を塗り潰す透明な漆黒へと転じてゆ  
くその過程にたゆたう薄闇は、穏やかに硬質に、ちらつく燭台の蝋  
燭の灯に鮮烈な残像を与えている。

「らしくもない」

帝都を見下ろせる大窓を持つこの城の主は長椅子に寛ぎながら来訪  
者の試すような声を聞く。さざめく橙の閃きに横顔を与えながら、  
背後より声をかけられた女は気配でしかないかすかな笑みを吐息と  
ともに大気に溶かした。

「そつでもないわ」



確固とした確信だけを滲ませる短い答えに来訪者は小さく笑む。そして、特に許可を得ることもなしに、少しだけ間隔を置いて女と同じ長椅子に腰を下ろした。

漆黒を纏う小柄な女と、黒を纏う長衣の老人。

女帝ラヴェンナと枢機卿オリヴィエーロ。そのふたりの眺める先では、闇に白亜が映える帝都と、夜霧が蟠る平野と、常に間断なく生まれ消えて踊りちらつく様々な色彩の閃光が闇に情景を描いていた。そこで響いているであろう轟音も、そこに滞留しているであろう煤けた熱も、そこで終わりを迎える肉塊の断末魔も、雲の上と称され下界を睥睨するその場にあつては静寂の裡に展開され風にさらわれてゆく。

陽光に満たされている昼日中には意識することのない冷えた大気に強張りそうになる頬に蠟燭の熱を曝しながら地から眼を逸らさない女に、同じように地に眼を向けたまま、長椅子の対岸に座る老人が唇を持ち上げた。

「十日ほど前からヘッセン・ダルムシュタットで始まった都市会議で審議されている議題、そろそろ纏まりそうとのことだ」

穏やかに語られたこれに、眼を地に向けたまま、女が小首を傾げる。女の顔を縁取る短い緑髪がその首筋を遊びながらさらりと流れた。

「随分と耳が早いね」

「なに、偶々ヘッセン・ダルムシュタットの主が近くにいるだけだ。開催都市は彼の大司教都市だからな。小賢しかった子どもの時分をそのままに大きくしたかのようなイエレミアスが」

当時を思い出してか微笑を浮かべる女と、女の幼少をも知る老人。エマヌエーレの家名を持つ老人が言葉を繋ぐ。

「主導はハンスユルゲン・ザリエル　西部都市同盟の盟主、元ブランデンブルク伯領領都ウエルラムウムの現在の事実上の長。皇帝の承認無しでの開催要件　帝国に存在する自由都市の八割の参加を取りつけたこと　を満たすほどの技量と狡猾さはある意味において脅威だが・・・。議題そのものは、内容だけを見るならば、数年前に諸侯会議で審議されていたものの焼き直した。都市会議で承認されたとして諸侯会議で否決されればそれまでだが、しかし、単なる蒸し返しなのかそれともまったく別の思惑あつてのことか、意見が分かれるところではあるだろうな」

もつとも諸侯会議で承認されたとして皇帝に拒絶されればそれまでだが、と、本来ならば開催から帰結までのすべてが皇帝の任意であるはずの帝国議会の一般的な理解を一通り表明しながら老人は女を窺う。

微笑を描いて黙したままの女に、老人は小さく息を吐いた。

「ともあれ、見たところ、他の諸侯はともかくブランデンブルク辺境伯は多少神経質になっているようだ。ウエルラムウムは本来ならば自らが本拠とできたはずの都市であるし、あの者にとっては遺恨もあるう。嫡子を喪った出来事を契機としてその上に築かれた現在のウエルラムウムだ。いくら手元に置いておいたとて、御せなければ意味はないぞ」

そこで初めて女は老人を正面から見据え、くすり、と、微笑った。

「もしも私の手に余ったのなら、頼ってもいいのかしら？」

上目遣いに、試すように甘えるように、そんなことを訊いてくる血族として見守ってきた娘に、老人は苦笑しながら諸手を挙げた。

「君の手に負えないのであればそれこそ私ごとにはお手上げだ、お嬢さん」

「頼りにしているわ、おじさま」

口許に手を遣り、女は楽しげにくすくすと笑う。

ゆらり、と、蠟燭の灯が踊った。

「しかし、似ているな」

この唐突な切り出しに、女は横目で老人の横顔を見遣る。女の澄んだ蒼に映りこむ横顔からは苦渋も歓喜も読み取れず、その耳に心地よいながらも囁れた声は淡々と言の葉を紡ぐ。

「表層だけが似ているだけかもしれないが、諸侯会議で審議されたものと同じ内容　土地の所有者がその土地を譲渡するにあたって、その相手が奴隷ではない限りにおいて、割譲以外に売買という手法を合法とするもの　を再び持ち出しているわけだ。もっとも、前者においてはその労力は水泡に帰したわけだが。しかし、それに触れるというそのことが生じさせたのがウエルラムウムの蜂起である、ということは今や暗黙の了解だ」

囁れた声音の間隙に滑りこんだ静寂に、耳にまるやかな澄んだ音律が響く。

「当時ウエルラムウムを治めていたのは領主たるブランデンブルク辺境伯に統治を委任されていたイルクリー伯。辺境伯カークは当時から子に自領を任せて帝都で隠居生活を送っていたも同然だったから、それに関わることになったのは事実上の辺境伯であったマーシリス卿。そして、議題を肯定する側に立ったマーシリス卿に領民が剣を向けたのが、ウエルラムウムの蜂起」

「領民を煽動したのは、聴罪司祭フェルナンド、だったか」

どこか苦いものを滲ませる老人と、小さく肩をすくめてみせる女。女の小振りな朱唇がさざめく灯の橙に潤む。

「イルクリー伯の立ち位置が特殊だったのよ。土地を売買することを法として確定することは諸侯の既得権益の侵害を意味するもの。勿論、これに限って言うのなら教会も同じこと。そしてそれは帝国の存在そのものを解体しかねない。諸侯と帝国国教会によって組み上げられている帝国そのものを、解体しかねない。当然ね。領主は領地を護ってこそ、領民はその土地を耕してこそ。そういった領地の集まりが、他でもないこの帝国。いくつもの民族を包括しながら辛うじてであつても纏まりを保って存在する、それがこの帝国よ。そう考えるのならば、イルクリー伯の立ち位置が特殊であることは明白」

「まともな神経の持ち主であるのなら肯定ではなく潰しにかかる、か」

見解を零す老人に、女は臉を落としてひとつ頷き、

「だけど、イルクリー伯の立ち回りは理に適っていた、と、私は思うわ。西方の領主だからこそその感覚ではあつたのでしょうけど」

老人の蒼が疑問をちらつかせる。静寂に響くのは疲労めいた嘆息に混じる澄んだ声音。

「そして、諸侯としては一般的ではないその判断を、使われた」

沈殿する沈黙と、それを掻き乱す理解の帰結をかたちとする囁れた音律。

「現在、西方にて表立って活動している彼らに、か」

女の瞼が持ち上げられ、そこから覗く蒼にゆらぐ灯の橙が透き通った色彩を流動させながらちらついた。わずかに顎を引いて、女は同意を表す。

「そう、西部都市同盟を構成する彼ら。イルクリー伯が襲撃されたのは、冷酷帝の侵攻や天災による疲弊から回復し切っていないことからの不満と、領主交代の名目で事実上の侵略と略奪が白昼堂々で行われるかもしれないという不安から。無理もないわね。踏み躪られた経験の傷口が真新しく、生きる糧さえままならず、努力は実を結ばない。イルクリー伯の尽力も、判りやすい成果としては目に見えない。その状態で売り飛ばされるというかたちで領主が変わるかもしれないという噂でも立ったのなら、見棄てられると感じたとしてもそう不自然ではないわ。そして、何者であっても、基本的には生まれた土地から動くことはできない。そこから動くということは、自由を放棄するということ。自由都市に逃げこんで巧くその同業者の纏まりに食いこむことでもできなければ、自らの属する世界の規律の改変に自らの意思を反映する手段が失われ、何者かが決したそれに無条件に隷属するという意味で、もはや彼の者に自由はない」

そこで女は横目で老人を見遣る。

「煽動されたとされるけれど、聴罪司祭の行動は、彼としてみれば、至極真つ当なものよ。皇帝とは秩序たる理の体现者である限りにおいて帝国に君臨するもの。それこそが皇帝たるものへの万民の同意。地上の秩序は理の女神によってもたらされたものと自認する教会に属するものなら尚更、イルクリー伯は神に背を向ける者と映ったか

もしれない。そして、その立ち位置を揺らがせることなどできない教会　この場合はウエルラムウム司教　は、それゆえにイルクリー伯に手を差し伸べることなどできなかった」

やわらかさや感情の熱といったものが希薄なつくりもののような横顔をもって下界へと戻される女の眼を誘導されるように追いながら、老人は盛大な溜息をついてみせた。

「それを見越していたからこそ、西方の彼らは状況からくる激情を伯へぶつけさせるまでの静観の後、統治者不在の空白に入りこみ、ウエルラムウムはすんなりと自由都市に移行できた、か。空白のままでどちらにせよ周辺諸侯に喰らわれるだけなのは、そこに住まう者たちが一番よく解っているからな。我らのような上澄みよりも経験として、それこそ深く。なんにせよ狡猾なことだ。抜け目が無いな、商売人というものは」

語る内容とは裏腹に、老人の声音にはどこか愉快がっているような響きがある。それは、好敵手を前にした圧倒的な強者が相手をするに足る者を見つけたことを悦ぶような、倦んだ目が輝き出すに似たそんな響きだった。微笑する女の前で、老人は持論を展開する。

「ともあれ、過去の審議の原動力が冷酷帝ならびに無冠帝への反感であるのなら、現在のそれはアクイレイアをはじめアウグスト同盟に連なった諸侯が消失したことによる領主不在への不安。それを後押しするのは、宙に浮いた土地という生産基盤を確保できると自負できる者が増加したという事実と、その野心が夢物語ではなくなっただという確信。だが、時流に乗っていると見えるそれも、どうやら一概にそうとは言えぬらしい」

女は正面から老人を見つめ、小首を傾げながら目を瞬かせた。畳み

かけるように老人は続ける。

「どうしてウォルセヌス・アクイレシアは先の裁きにおいて冤罪だと自ら兵を率いなかった？ 先の帝都包囲においては僭称を誤解されることすら恐れずに帝都に駆けつけたあの者が、どうして自らの剣で自らの身を護らなかった？ それは彼の者が帝国におけるデシエルト地方の意味合いを理解していたからだ。それは彼の者が帝国において北方異民族の後押しを受けることの意味合いを理解していたからだ。たとえその意思がなくても、あの状況で自らの身の証を立てようと兵を率いたとなれば 軍律に反したと裁こうとした輩にであれ、あの者を利用して帝国の軛から逃れようとする北方異民族にであれ 僭称者に仕立て上げられることは明白。帝国を乱すことはあの者の本意ではなかっただろうからな」

小さく、どこか疲れているかのように、女は嘆息する。

「でしょうね。彼ほどに頑なに臣たろうとしている者もいなかった。まるでそう在れないことを怯えるかのように、意固地なまでに、頑なに」

「果敢と謳われた男を、臆病者と？」

愉しげな色をその目に浮かべ、老人。女はあらぬ方向を見遣りながら小さく肩をすくめる。

「さあ、それはどうだったのかしら。本人以外がその真意を語ることはできないことだけは確かだけれど」

「虚像を丸呑みにしてやるのも、時に、ひとつの思いやりではあるがな」

老人の湛える笑みが深くなる。探るような老人の蒼は、外界に接す

る硝子から滲む冷氣に翻弄されて奇妙なまでにゆらぎ踊る蠟燭の炎が彫り上げる、漆黒の闇と化した夜を透かす硝子を見つめるだけの女の横顔を逃すことはない。

唇に笑みを描かせたまま瞼を落とすと、老人はゆったりとした所作で腰を浮かせた。外を眺めたままの女を横目で見遣りながら、老人は長椅子の背に回り、女の頭上からひとつの言葉を落とす。

「君もよく知るアクイレアの小僧がいくつかの名を私に遺した。アクイレアに組みしてもよい、と、そう表明したも同然な者達の名だ」

青年が属していた教会ではなく青年が生まれながらに得た亡んだ名をあえて持ち出し、老人は続ける。

「おかしいとは思わないか？　いくら枢機卿であるとはいえ私はヴァレリアスと同じエマヌエルだ。あの小僧にアクイレアを絡め取る黒幕が見えていなかったはずはない。ならばどんな意図があったのか、と、勘繰ってみてな」

漆黒を纏い、漆黒を見つめる女。闇に溶ける熱が照らし出すその姿は、名匠に生み出された彫像のごとく繊細で優美であっても、何の感情も過ぎらなければ衣擦れをもたらすこともない。

ひどく緩慢に、その眼で女の様子を伺いながら、老人は踵を返してゆく。

「その名をやろう。泳がせるもよし、裏切り者と罵るもよし」

ゆるく笑む老人が視界の隅に捉えたのは動くことのない女の後姿と、

「あの小僧からの最後の贈りものと取るもよし」



漆黒を透かす硝子に映し出された、つくりの甘い女の蒼がゆらめく灯を宿しながら鋭くなるその様。

蠟燭の芯の焦げる音が、冷えた静寂にひどく際立つ。

「カトウルス・アクイレイアが遣した不安定すぎる足場の中で、廣大にして質の悪過ぎる網の中、あのふたりはよくあそこまで足掻いたものだよ」

長椅子に座る女と長椅子に背を向けて立つ老人。

漣のごとく闇に浸透してゆく熱を帯びた不安定な光。

肌がごわつくほどに冷えた大気が満ちるその場所の、やわらかであたたかな色彩の中で。

どこか満足そうに、老人は笑んだ。

それは夜に似た薄闇だった。

崩壊する石壁は瓦礫となって石畳を打ち、細やかな粉塵が霧のごとく地を這いながら緩慢に広がってゆく。妙に闇に映えるその流動は、ゆらりと風に運ばれる硝煙の残り香と焦げ臭さを孕んだ爆煙の名残に同化して、新たな破裂音と鮮烈な火薬の花とをその身に含んだ。

帝都第一層　　レーム塔。

地にたたゆたうことなく淡い闇が、大気がまるやかな触感を増すにつれ、漆黒のそれとなり世界を塗り潰す。

舞い踊り沈みゆく粉塵に、曇った火花が浮かんでは消えた。

帝都を睥睨していたはずの塔がほぼ半壊し、闇と粉塵と喧騒と爆音と熱とが渦巻くその周辺では、無いに等しい視界の中で、帝都警察の黒とレーム塔を襲撃する青年たちと　どこから現れた野次馬と、この機に便乗して常ならば忌避するに近い黒に襲いかかろうと

する者たちと　　がそれこそ先の見えない乱戦めいた攻防を繰り広げている。

爆発の振動に崩落する天井。辛うじて隅の形状を保っている石壁に背中を預け、ひとりの老人が天を仰いでいた。おそらくは漆黒に澄み星が煌いているのである。夜空は瓦礫と硝煙とに翳んでしまっていて、その視界は粒子の絶え間ない流動で埋め尽くされている。

砂礫に埋もれかけているその老人の前、辛うじて闇を透かしながら白く煙る世界の中、影にしか見えないゆらめきが場違いなまでに慇懃な響きの誰何をもたらす。

「メルキオルレ・マデルノ卿ですね」

間隙を置いて響く銃声を背に響く呼びかけに、老人はゆったりと瞬きをした後にゆっくりと眼を影へと向ける。

「お迎えに参りました」

最敬礼にゆらぐ影。老人はそれに何かを見出し、

「あの女の差し金か」

窪んだ眼窩の蒼をわずかに眇め、どこか皮肉めいた、鋭いだけの失笑を零した。

帝都第七層　　皇宮、女帝の居室から続く回廊。その両端に整然と並ぶのは、精緻な彫刻が施された柱と、高い位置に並び等間隔にゆらぐ蠟燭の灯。

「いかがでしたか？」

回廊を歩む枢機卿の前に現れたのは歳若い大司教。

「そう簡単に胸の内を見せてはくれぬな、あの小娘は。相変わらずだ」

苦笑しながら歩を停める老人と、上体を傾げ礼を尽くす青年。

「では、感づいてはいない、と」

両人の間において共有されている事例を持ち出しながら眼だけを上げる青年に、老人は宥めるような声音をもって苦笑する。

「そう急くな。あの小娘がどこまで得ているのか、残念ながら私には量ることなどできぬよ。だが、そうだな。もし気づいているのなら、相手が相手だ、早急に手を打っているだろうな。その程度の可愛げは持ち合わせているはずだ」

回廊に佇むふたりの理の女神の婢に降り注ぐ蠟燭のもたらすあたたかなさざめきは、中心を一点に据えたふたり分の幾重もの影をほのかな明るさを与えられた床に円形に展開した。

「カジミュシエ司教より報告が。カルヴィニア公国よりの亡命者を受け入れて後、所属不明の騎馬の領内進入を確認とのこと」

面を伏せたままの青年　ヘッセン・ダルムシュタット大司教イエレミーアスの報告に、委任というかたちでカジミュシエ司教領を治める枢機卿は首を傾げてみせる。

「聞いていないな」

「彼の地は森に覆われた土地。それゆえ、確信を得るほどの確認を得るまでに時間がかかった、と」

軽やかに謳うように、それでもどこか浮ついている調子を滲ませつつ、青年の顔を縁取る長髪とも短髪ともつかない長さの茶の髪がその口許の薄い笑みだけは隠せずに地に零れる。

「何を悠長な。彼の地を横切るとなれば、アレス絡み以外の何者でもないだろうが」

嘲弄めいた冷笑とともに、枢機卿。やがて老人の唇を歪めるだけの笑みは深い哄笑となつて高い天井に反響し回廊に響き渡る。

哄笑の残響の中、青年はわずかに面を上げ、眼前の老人の様子を伺う。

「名ばかりの司教がなけなしの裁量を主張してみせるか。これはいい、傑作だ。面白い、面白いよ」

老人は両の口の端を吊り上げ、皺に埋もれたその蒼が爛々と輝く。

「そのくらいやってくれなければ、こちらとて張り合いがない」

それは、実を得ている者が虚と見なす者へと向ける眼差し。強者が弱者と見なす者が覆しようのない壁に立ち向かってきたことを悦ぶような、そんな響き。

愉悅の滲む哄笑の残響に囲まれながら、青年はひとり、ゆつたりと礼を尽くす。

ささやかな熱が濡らすあたたかな光が青年に降り注ぐ。薄い笑みをたゆたわせたまま、青年はゆっくりとその瞼を落とした。

帝都第三層 近衛軍長官執務室。

蠢く夜へと繋がる窓をそこに何かがあるかのように凝視しながら佇む上官の背に、金縁眼鏡をかけた男が平坦な声を投げた。

「動きますか？」

金縁眼鏡越しに状況を見渡す蒼に薄氷めいたささやかな緊張を湛えながら、近衛軍帝都駐留部隊隊長ヨハン・ラングミュラーは静寂の中に佇む近衛の長を見遣る。

部下に背を向けて夜を眺めていたのは近衛軍長官ロバート・ベルナル。黙したまま、ベルナルはゆったりと身体を反転させ、部下へと向き直る。

「いや、今のところこちらには命令も要請もない。そもそもこれは帝都警察の領域だ。後々の遺恨や心証問題を考えるなら、できることなら動きたくはない、というのが本音だな」

やれやれとでも言いたげに息を吐くベルナル。その背後に深まる夜をラングミュラーは見遣る。

「彼らの目的は何なのでしょうね」

「さて。よもやレーム塔に同志が収監とされているなどと本気で信じているわけではあるまい。ならば、元宰相でも解放するつもりか？　だが、それからどうするつもりだ。報告では襲撃者は反帝国を謳っているらしい。いくら投獄されているとはいえ、陛下に弓引いてすら帝国というものに身を捧げた人物だ。その行動、矛盾するにも程がある」

「でしたら」

少しの沈黙の後、ラングミュラーは正面からベルナールを見据えた。

「陽動、ですか」

これ以上もなく簡潔なこの分析にベルナールはわずかに目を瞠り、

「ならば、辻褄は、合うか」

ゆつたりと、深く、頷く。

では、彼らの真の目的とは？

蟠るのは当然の疑問。

窓枠をがたつかせるのは不均衡な振動。

ベルナルの背後、夜を切り取る透明な硝子に、ぱたり、と、一滴の雫が降り落ちて伝い零れた。

帝都第一層 異民族街の裏路地、半地下の酒場。

天井近くに横倒しの長方形に並ぶ夜をぼやけさせた曇り硝子。日中であればぼんやりとした陽光が石壁の酒場に注ぎこむその窓に、ぱたり、と、何かが当たった音がした。大樹の幹から離れた葉が地に落ちるように水気を孕んで軽やかなその音は、次第にその間隔を短くしながら冷えた流れを窓へと刻む。

カウンターを眺める位置にある店内唯一のテーブル席で、酒ではない液体が注がれたグラスを傾けていたトウルスが、陽だまりに包まれて眠りに沈んでいた猫が首を擡げるに、至極億劫そうに天井を見上げながら呟いた。

「降ってきたね」

その音が踊るような軽やかさを纏っていたのは少しの間だけ。徐々に強くなる雨脚は金属めいた重々しさと氷柱めいた鋭さを増しながら地を叩きのめす。

「本当だ。随分とまあ降ってくる」

カウンターでこちらも酒ではない液体の湛えられたグラスを傾けていたオーギュストが上体を捻ってトウルスの眼を追った。そこに、もはや何度目なのかも判らない振動が地を走る。

「飽きないなあ」

そこはかとなくげんなりと、皮肉めいた笑みをトウルスが浮かべる。わずかに首を傾げたオーギュストは、ずりおちてきた半月眼鏡を押し上げ、抱いた疑問を口にした。

「さっきまでとは火薬地震の発生源の方角が違うような感じがするんだけど、どうかな？」

「火薬地震って、またそういう語弊招きそうな表現を。おそらく間違っていないんだろうけどさ。と、いうより、震源地が変わったとかなんだとか、そんなの判るの君くらい」

オーギュストに対して呆れを隠そうともしないトウルスの深い緑の目が、話し相手の背後にあるものを映しこんで驚愕と狼狽にゆらぐ。目の前の青年が一瞬にして常の冷笑めいたふてぶてしさを失ったことに疑問符を浮かべながら、半月眼鏡の優男は背後を振り返る。

そして、気の置けない友人たちと呑んでいた気安さは、一瞬にして緊迫へと姿を変えた。

「シャル？」

地を叩く雨と、地を揺るがす破碎を伴っているのであろつ音という振動。ゆるく、渦巻き、絡みつくように、地面を圧迫するようなそれらは溺れてしまいそうになるくらいに重々しく息苦しい。

普段は人によつては神経を逆撫でられるまでの馴れ馴れしさと軽薄さしか湛えていない半月眼鏡の向こうの蒼の目が、探るように窺うように、冷徹さと酷薄なまでの透明さをもつて眇められる。

「顔色が悪い。今日はもう休んだ方がいいんじゃないか」

すべてを透徹するかのような蒼が氣遣つていたのは、そこに立てているのが不思議なまでに血の気の引いた友人。

思い出したように再びグラスを磨き始めながら、その蒼白さを隠せずにぎこちなく表情筋を動かして、にこりと店主は笑つ。

「いや。別に、なんでもないよ」

友人を見据える蒼に、怒りに似た色が閃く。

「シャヴィエル」

古くからの友人を珍しく愛称ではなく名で呼ぶ声は、この青年にあつては珍しく低く鋭い。そんな優男に困つたように笑いかけようと表情をつくろうとするも、それが完成する前に、長身のシルウア族は身体の均衡を崩して床へと崩れ落ちた。

カウンターの中、店主たるシャヴィエル・ディアスが倒れる過程でその身が触れた酒瓶やグラスが硬質できらびやかな音を奏でながら



砕け散る。

「おい、シャル！」

床に叩きつけられ、細やかな破片となつて宙に浮き、灯火の橙を弾きながら落下する硝子片に己の声を混ぜこみながら、オーギュストは、目の前の台に手をかけ片腕に体重を預けて身体を浮かせ、カウンターを越える。そして硝子片に塗れながら床に倒れている友人の脈拍を確かめながら声を張り上げた。

「トウルス君、悪いけどリーザちゃん呼んできて！」

状況は呑みこめないながらもオーギュストの判断が正しいことだけは確信したトウルスは、椅子を蹴って立ち上がり、カウンター脇の扉から薬師がいるであろう部屋につながる階段を駆け上つてゆく。曇り硝子を叩く雨脚が弱まることはなく、不均等な間隔で生じる振動が収まることもない。

もとは酒瓶であつたりグラスだつたりしたものの硝子片で肌を裂かないように気をつけながら、オーギュストはカウンターの中から外へとディアスを引きずり出し、壁にその背を預けさせ、うつすらと汗ばむ血の気の引いた喉元を包む服の襟を弛めた。浅い呼吸と、額に浮かぶ汗。意識があるのかないのか、その境界にあるのか、どうも判然としない。蜜蝋の目は薄い瞼に隠され、体温というものが希薄な肌には血色というものは微塵もなく、倒れた際に硝子片で切つたのであろう小さな裂傷の朱が妙に浮き立って見える。

半月眼鏡の優男は壁を背に床に座る友人を見下ろし、安堵とまではいかないものの、ひとつ、息を吐いた。そんなオーギュストの鼓膜を、安定を欠いた、どこか掠れた声が震わせる。

「おかしいな。もう、とつくの昔に、忘れているものだ」と

どこか熱に浮かされているようなそれが友人のものであると気づいた青年は、呼吸することすら苦痛でしかないように見受けられるディアスの色褪せた唇が失笑を描く様を目にする。言葉を持ちえないオーギュストの前で、わずかにディアスの瞼が持ち上げられ、蜜蝋がゆらぐ灯に曝されるとともにその笑みは自嘲に深くなった。

「情けない」

肺からすべてを吐き出すように、感情そのものを吐き捨てるように、小刻みに震える身体を御することすらできない己への嘲弄にその蜜蝋が苛立ちで揺らぐ。

四方を囲み、周囲を圧するのは、雨音と破裂の振動。

それまで無言でディアスを見ていただけのオーギュストが唇を持ち上げた。

「ここにはトウルス君がいる、すぐにリーザちゃんが来る。シグル君もアニタちゃんも、明日になればヴィロック氏だってきつと帰ってくる。この店はいつだってにぎやかだ」

語るその顔に表情はなく、語るその声はどこまでも淡々としている。だが、その響きが有しているのは。

「誰も泣き叫んだりしない。誰もいなくなったりしない」

願望に似た決意と、それを握り潰したとて手にしたいという欲望と。

「安心していい」

まやかしかあれ虚偽であれ、そうあって欲しいと疑いもしない、切

望に近い確信。

「君は、何ひとつ、失いも喪いもしないから」

そう断言するオーギュストの蒼はひどく優しく、穏やかでしかないその笑みは、なぜか、泣いているようにも見えた。

帝都第七層　皇城。夜を翳ませる滝のような雨を前に、その中で時折生じ蠢くささやかな閃光を見下ろしながら、長椅子に寛ぐ女が唇を持ち上げる。

「ノヴァスコシア、だったかしら」

女の背後、長椅子の傍。女の従者たる納まりの悪い金の癖毛を持つ長身の青年が、常と変わらずに無感動を湛えたその細い目に、漆黒に包まれた主のしなやかな背中を映す。

「ヘッセン・ダルムシュタットの北　ドレーク山の麓の、小さな村の名。今からだと十年以上前になる、冷酷帝の北方異民族侵攻の通り道になった場所よ。ほんの数年前まで不安定だった、ウエネテイ人と主に北方異民族が渾然一体となって生きていた、そんな土地」

下界の騒々しさを遠くに聞きながら、女は水底のようなまろやかに冷えた静寂にその身を浸す。

「枢機卿は今回の議案が出されたのは二年ほど前みたいなことを言っていたけれど、実際はもっと前からその動きはあったの。冷酷帝

の異民族自治領侵攻のどさくさに紛れて潰されてしまった小貴族や異民族自治領との交易で財を成した商人がその領内に多く居住していたがゆえに税収というかたちで間接的に利を得ていた諸侯や、立案者となつたのは主にそのあたりの面々。色々ではあるけれど、平穩であれば享受できたであろう利益が損なわれたことへの憤慨と自らの権益が侵されることへの反感。だから、本来ならば自らの領域が新興の商人あたりに削り取られてゆくような議案が他ならぬ諸侯会議で審議され始めたというのは、彼らの不満を解消することも怀柔することもできなかった冷酷帝への当てつけみたいなもので、一方では冷酷帝によつて奪われた領地を自らの手に合法的に取り戻す手段でもあつた。ともあれ、条件さえ揃えば皇帝直轄領すら分割可能としたのだから、少なくとも、皇帝の力を殺ごうとする意図があつたことだけは明白ね」

蠟燭の灯がさざめく闇に気配を溶かしたまま、従者たる青年が沈黙を手放すことはない。

女のまろやかな声が静寂をざわつかせる。

「ただ、これには当然反対を表する者も現れた。皇帝の後ろ盾を得ている者と、そうではなくとも、それがゆくゆくは帝国解体への端緒となるかもしれないということに気づき懸念を覚えた者。その対立の舞台が、ノヴァスコシア。といっても、実際はあの一帯を舞台に各々の立場に立つ諸侯に雇われた傭兵と各々の立場に立つ諸侯が後押しした異民族が剣を交わしたと言つた方が正しいのかもしれないわね。そして、ノヴァスコシアが、火山の麓であり、耕作が難しい土地であつたこともその対立を呼び寄せる一因となつてしまつた。穀倉地帯とはなれず、帝国に張り巡らされた街道網からも外れていたので、舞台としてはもってこいだつたのよ。自領であるのなら勿論、他領であっても、わざわざ流通経路になつて整備された街道や肥えた耕作地を潰してまで軍馬を駆ろうなどとはしないわ。せ

つかくそこに存在している富と繁栄と安寧の礎を壊滅させるなんてことは、攻める方だって、後にそこを得るつもりであるのならないでしょう？ 何もないところからそれを再び構築するのは、それこそ途方もない時間と労力と金が必要であることが目に見えているのだから」

そこで女は軽く息をつき、語ることに疲れたのか、ゆるゆると瞼を落とす。

「今回の北方異民族の動き、その動静には帝国議会のそれが係わっていると見て間違いないわ。ただ、過去のそれと同じように見えても、主導の主体が諸侯ではない時点で意味合いはまったく異なるけれど」

そこで謳われているのは領主たる存在の変容。それは現在の帝国というものの形態の変容をそう遠くない未来において約束している。

「それに気づいていたから、彼は何もしなかったんだわ。何もしいということを得るために、すべてを投げ出した。本人にそんなつもりはなかったのかもしれないけれど、結果的には、そうなってしまったも同然ね」

ぱたり、と、夜を切り取る硝子を叩く水滴は、その数を増すほどに流れを増す水の膜を外気に曝し、その流れに辿り着いてしまった天から落ちてきた水滴は流れゆく波紋を幾重にも重ねた。

「デシエルト総督としてのウォルセヌス・アクイレシアは、デシエルト地方に封じられているわけではなかった。総督なのだから、領主ではないもの。だけど、だからこそ北方異民族は帝国議会の動向に敏感だった。そして、先の帝都解放からウォルセヌス・アクイレ

イアには僭称の疑いが纏わりついていて、庶子たることからもとより脆弱なその足場は更に不安定になっている。相性の良い帝国総督、その頭が挿げ変わることにへの不安。そればかりか、土地ごとそこに住まう者も含めて買い上げられてしまいかもしれないという疑念。だからといって、デシエルト地方が帝国の後盾のない状態で現行の異民族自治領の体制そのままをもって独立を表明するのなら、地勢と力関係からして今度はアレスの傀儡となることはほぼ確実。そこまでいかなくとも、帝国への足掛かりとして彼の地を欲しがるアレスに干渉されることは目に見えている。こうなってくると、彼らが総督を立てようとしたのはごく自然な流れであって、不思議がるようなものでもない」

かすかに女の睫毛が震え、持ち上げられる瞼の下、澄んだだけの蒼が露になる。

「過ぎたる英雄、といったところかしら」

蒼が映すのは夜の闇。漆黒を透かす蒼は雨の透明を煌かせる。

「皮肉なものよね。帝国にとっての英雄は、帝国という秩序に漣を立てる者と恐れられ、肥大化した疑惑によって絡め取られ溺れて沈んだ。彼ほど帝国の安寧を渴望した者もいなかったでしょうに」

小振りな朱唇から零れるのは、呆れ果てているのか怒りを秘めているのか、奇妙なまでに抑揚のない乾いた音律とささやかな熱をもった少しだけの吐息。

「現状への固執であれ権力と呼ばれるものへの執着であれ、既存と呼ばれるものを護るということはある面において要するにそうだったこと。ここにおいては、あるものを求める者が同じものを求めた

者をその手にかけたことだけは確か。あるものを護ろうとする者が、同じものを護ろうとする者を排した。それによってそこで求められているものが実現されるのかは誰にも判らない。もしかすると、それは解決にもなっていないければ何を変えたことにもなっていないのかもしれないし、漣を感じ取った彼らがその中心を目につく傑出の英雄に帰してしまっただけで、それを排したところで何も変わってはいないのかもしれない」

主の背中を護りながら、主の緑髪が散る白い肌に眼を落として無感動に従者が問う。

「無駄死にであつた、と？」

人物を明確にしないこれに、女は小さく息だけで笑った。

「現象に対して都合のいい理由を見出すのは生きている者よ。どんなかたちであれ利用できる要素を見出せるのなら、その者にとっては、それは価値のある犠牲だわ」

従者に背を向けたまま、女はしなやかな所作でゆったりと長椅子に横たわり、その長い睫毛に蠟燭の橙を艶めかせながら目を伏せた。

「彼は何を見ていたのかしら。彼であれば、帝都包囲の折にであれ帝都召喚に応じる際であれ、麾下の兵と北方異民族を率いて帝都に迫り、軍人皇帝となることも夢ではなかったはず。その気になれば、その剣をもつて敵を屠り、その手をもつて希求していたであろう安寧を帝国にもたらすことができたでしょうに。それなのに、おそらくは、己にかけられた嫌疑が根拠の薄弱な畏めいたものであると勘づいていながら、訪れるであろう結末を予想しながら、反駁することとも叛旗を翻すことも、しなかった」

降りしきる雨は静寂に潤んだ旋律を奏で、冷えた夜を透明に蕩かしてゆく。

「彼が、自らが剣を掲げることによって生じる波紋を恐れていたのだとしたら」

ささやかな沈黙に、従者は目を細めた。

「綻びゆく地盤を目の当たりにしていても、それでもまだ帝国というものに価値を見出していたのかしら。彼が大切としていたものにとって、この帝国はまだ意味があるものだったのかしら。だからこそ、あの子は帝国のかたちを護るために奔走したのかしら」

女の唇は答えを求めている問いだけを紡いでゆき、

「帝国という形骸は、あのふたりにとっては命を懸けるに値するものだった？」

女の蒼の目は答えを求めることなどできない確信にゆらぐこともない。

そこに響くのは雨音だった。

静寂という音の間隙を間断なく降り注ぐ大粒の水滴が埋めてゆく。

「もっと巧く立ち回れるはずだった」

鼓膜が雨音に満たされるような、雨音の中に独り佇むような、押し潰されそうなまでの圧倒的なそれらに囲まれながら、まるやかで透明な音律が夜を叩いた。



「そう思い上がっていたことだけは、確かね」

眠りに落ちるように緩慢に落とされた瞼は蒼を覆い、眠りに沈むように長椅子に沈むそのしなやかな肢体は、その身を覆う漆黒を闇に溶かし、その肌は月光に湧くように映えて見えた。

泥濘のような眠りと、底の知れない雨の乱打。

音もなくその身を引き摺りこみ絡め取るそれらに囲まれながら、女はその朱唇にゆるい弧を描かせた。

沈みゆくその身を嘲笑うかのように、その朱唇にゆるい弧を描かせた。

沈むだけのその身をせせら笑うように、その朱唇にゆるい弧を描かせた。

The second act - 08 (後書き)

生棲地

片足靴屋 / Leith bhrogan

<http://id>

12.fm-p.jp/20/LIR/

## The second act - 09

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 2 / 02

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

薄暮の青めいた闇に溶ける濃紺。ラズ河から地を這うように湧きあがる霧が剣戟を覆い、敵も味方も判然としない曇った視界を天より降り落ちる大粒の雨が過ぎる。

地を抉り地が吸った血をその透明に滲ませる驟雨が深さを増した闇に弾ける。

ファウストウス歴423年、マルティウスの月の第19日    ノヴ  
アラ。

城門の上、雨に打たれながら眼下を見据える小柄な老人はこのノヴァーラの長。城門の前に広がる平地では    闇と雨とに景色が翳んではいるが    骨を碎き肉を裂く同色の対峙がいつ終わるとも知れない。

「かけられた濡れ衣をその身に刻まれたくなくば何に代えても勝利をもぎ取れ！」

剣戟と怒号に塗れてなお手綱を繰るのは、雨を吸い血に濡れた老将。地を叩きのめす雨音を、張り上げられたその声が切り裂いてゆく。繰り出せば何者かを傷つけることは必至といった混戦の中、自らに迫りくる剣をそれを握る腕ごと断ち切って、

「死人には真実を語ることなど許されぬのだから」

傍らを走り抜ける馬上から崩れ落ちる濃紺の後を追う赤黒い血潮を横目で捉えながら、老将ヴァルター・ヘルツォークはその口許を歪めた。

ファウストウス歴423年、マルティウスの月の第19日　　キイルータ。

闇に染まる丹、細かな砂の軋みが縫い留めるほどの静寂。冷えた破璃のごとき大気に揺らぐ影が、砂丘に燃え盛る炎を目指す。

鮮烈にひらめく炎の熱を孕む砂丘の裏側、陣形を整えた影が一気に丘を越えて帝国軍の宿営地に雪崩れこんだ。

凝る闇、透きとおり星のみを象嵌しその清廉さに軋みをあげんばかりの漆黒の下。丹砂の砂漠に閃く炎が乱れたことを離れた位置にて目視したクラウディウス・ディオが、その濃紺を闇に蕩かして身を潜めていたその場より馬を駆りひとり砂漠に身を曝し、麾下の兵に命じる。

「突撃」

キイルータの城門を目がけて破砕槌を伴った一陣の騎馬が疾駆した。帝国軍の奇襲に気づいた異民族が城壁の上から攻撃を繰り出す。騎馬の背を追うように放たれるのは援護の矢。降りしきる火矢や石の間を縫って濃紺は城門に到達し、堅く閉ざされていた木製のその扉を破った。

「総督府を押さえる、アレン・カールトンを引き摺り出せ！」

城壁付近にて押し戻され味方ごと敵を馬で蹴散らしながら入城を果たす濃紺を無感動なその蒼に映しながら、ディオは命令を重ねる。その視界の片隅に、遠く、抜け殻の宿营地にて乱れる炎がちらついている。

「砂漠の民を相手に砂漠で戦うなど、誰がする？」

鋭いだけの蒼が一瞥にも足りないほどの眼を砂丘に投げ、馬首を反転させた。

皇帝直轄領都、帝都ティエルの東　ノヴァーラ。

降りしきる雨と夜の闇、噓せるような血の香に世界は塗り潰される。濃紺に圧される濃紺、多数に圧される少数。疲弊と血に塗れた老将がひとつの命を下した。

「撤退！」

ノヴァーラの城壁は堅牢。街を囲むそれらの外部に廻らされた塹壕のようなラズ河から引いた水を湛える堀。地と街とを繋ぐのは、城門に繋がる跳ね橋。

城門の上、組まれた石を叩く雨粒。それにその身を与えながら、目を眇めてすら景色が読み取れぬほどの視界の中で、小柄な老人は傍らの男にひとつの問いを投げる。

「街の者の避難は完了したか？」

「いま暫くの間を」

そうか、と、老人は眼を城壁の外に転じ、

「橋を上げる」

こちらへと向かってくる軍馬と濃紺の集団を翳む景色に捉えながら命じた。狼狽が滲む街の男に眼を戻すことなくノヴァーラの長は重なる。

「上げる」

長の言を仲間に伝えるべく男は転がるように去り、それを確認した老人は軋みを上げ始めた跳ね橋をその目の隅に置きながら息だけで失笑して身を翻した。

「厄介事を呼びこんだのだ。時間稼ぎくらいはしてもらわねば、な」

雨音に紛れる呟きは、何者の耳にも届くことなく、雨に融けて地に落ちる。

トリノウアンテス族自治領領都、丹砂の砂漠のオアシス都市　キ  
イルータ。

漆黒の夜、街を一望できる総督府の一室。机上に置かれた燭台の炎がやけに鮮烈に閃く。不安定な燈に踊る人影は黒く、夜そのものを映すがためにそれを眺める者を映し出す硝子は透きとおった外気の冷ややかさに軋んでいた。

「城門を破られた？」

「主力は夜営しているのでは？」

蠕動の濃紺と、蠢動の異民族。総督府の窓から垣間見えるのは、夜に覆われた市街の様。それは、火薬の閃光であり破碎の剣戟であり、潰走の呻吟でもあった。

「そう驚くようなものでもありませんよ。独立を宣言した時点においてすら、総督麾下の兵はここキールタにはほとんど残存しておらず、また、兵站も蓄えてあるとは言い難い。いくら彼らが少数とはいえ、市街地という平地に入ってしまったえば、地の利に頼った奇襲を得意とする相手など敵ではない。そして、元同胞というかたちで彼らと残存の我々が相対しない限りは、その剣を振り下ろすことを躊躇いはしないでしょう」

泰然と悠然と、常と変らない様で執務机に着くアレン・カールトンが、窓辺にて立ち尽くす蒼の目を持つ者と紫紺の目を持つ者に声を投げる。帝国軍と相対している主力が総督府を警護するために残したトリノウァンテスとテウトニーという音をその身に刻む者たちが本来であれば帝国臣民たる者の裏切りの際に備えて警護という名目で監視をも担っているその者たちが 無言のまま背後を振り返った。

鮮烈にひらめく炎の透明な熱にその横顔を与えながら、かすかに、カールトンの口許に微笑が浮かぶ。

「デシエルト地方を帝国の軛から解放することをこの私が許すとも？ その身に不利を負ってまで総督が阻止しようとしたそのことを、よりにもよって、総督が目になっているものと同じものを目の当たりに行っているこの私が？ この地が分離すればアレスの足掛かりとなり吞まれることは確実。しかし、領内に高まった帝国への反感と独立の気運はそのままでは回収しきれない。なれば、こちらからその捌け口を与え、その上で完膚なきまでに叩き潰す」

ぎしり、と、床が軋み、冷氣に窓枠ががたついて。

「与えられた希望を踏み潰されることの絶望がどのように働くか。見もの、といったところでしょうか、ね」

冷えた鋭さを増して沈む温度にその身を遊ばせながら、静かに穏やかに、緊迫を纏う眼前の者たちを見据えたまま、カールトンはその目を細めた。

帝都の東、ラズ河の畔　　ノヴァーラ。

視界と聴覚を奪う雨粒。濃紺に追われる濃紺。後ろ盾となる堅牢なる城壁、その城門に到達する濃紺の目の前で鎖の残響が雨音に溶けゆくまま地と城塞とを繋ぐ跳ね橋が閉じられる。

絶望が駆け抜ける夜、城壁に廻らされた水に追いつかり雨が掻き立てるそれよりもさらに高く無様な飛沫を上げる濃紺を纏う人のかたち。

城壁の上、それらを見下ろすひとりの老人。叩き潰される痛みに肌に赤味が差すほどの雨に打ち潰されながら、ノヴァーラの長たるその老人の目に映ったのは水際に到達した馬上のヴァルター・ヘルツオークの姿。

老将の蒼が長の蒼を捉え、睨めつける老将に長の冷笑が返る。

濃紺を踏みしだく濃紺。蹴散すそれは抗う暇すら与えず、蹴散られるそれは一瞥の暇すら与えられない。

闇を蕩かし降りしきるは透明なだけの雫。

馬に群がる濃紺、引き摺り下ろされる老将。麾下の濃紺に埋もれ、再びその姿を大気に晒した時、そこにあったのは老将のかたちをした肉塊。



司令官の胸から上を高らかに掲げ、追い詰められた濃紺は迫り来る軍馬に悲鳴のような叫びを投げつける。

「投降する！」

地を圧し決るのは無数に降りしきる大粒の雫。

帝都を背に迫る濃紺がその勢いを緩めることはなく、降伏を表明する叫びなどないもののようにすべてを圧し潰し呑みこみながらノヴァーラに迫る。

震えたのは堅牢なはずのその城。それは瓦解が奏でる崩壊の気配。大地を埋め尽くす濃紺が城壁を穿ち始めたその時、長の顔から冷笑が消えた。

「南に物が流れている。それ自体は珍しいことではないしむしろ歓迎すべきことなのだろうが、そこに集まっているものに偏りがある上にその動きはどうも性急だ。それこそ不自然なまでに、な」

深く潤む漆黒の夜。虚飾と嬌声とが絢い交ぜになった極彩色の煌きの隘路の奥底、甘く気だるい紫煙が蟠る酒場のその奥。表通りの喧噪とは程遠い静寂に、ひとりの女が長椅子に寛ぐ。

帝国東南部　　歓楽の街メルヴィル。

豪奢な金髪を波打たせるその女の双眸は碧く、年若いという以上のことはその容貌からは窺い知れない。

女の前に立つのは黒の短髪を持つひとりの少年。十六歳ほどのその少年の顔立ちは蝋燭の炎が生み出すばやけた鮎色の闇においても精悍で、その蒼の目は挑むように女を見据える。それがおかしいのか、口の端を釣り上げる女の唇の濃い紅が、ゆらめくだけの灯に艶めく。

「これをどう解釈するか、その結果はそれこそ無限だ。だが、あらゆる者の主観によって形成された事物を伝達されたからといっても、それを読み解く道筋を得ている者にとっては到達する結果など限られよう?」

試すように女は少年を見遣る。細い煙管で優雅に紫煙を燻らせる女を見据えたまま少年は少しの間だけ考えこみ、

「北との呼応?」

短く、どこか抽象的な響きをもって己が到達した答を投げた。これに女はくつりと笑う。

「その割には動きが遅い。女帝の目を逸らすには同時に拳兵する方が得策だ」

押し黙る少年。そんな少年に、女は嫣然と笑んだ。

「だが、着眼点はなかなかいい。帝国は広い。ましてや先の帝都包囲によってより一層顕在化した諸侯の分断は皇帝の指揮系統をどれだけ妨げるのだろうな」

女の唇から紡がれた紫煙が細く長く昇りゆきながらさざめく飴色の闇にたゆたう。

「今のこの時に動けば女帝が後手に回することは必至だろうよ。帝都ですら手いっぱいだ。ましてや北にアルバグランド駐屯部隊以上の兵を割くこともできていない。この状態ではアルウェルニーやカドベリー・カースルを正面から相手にする余力もなかるう」

北方異民族と対比される南方異民族の呼称を挙げながら女は身を起こし、すらりとしたその脚を高く組んでその膝に肘を寄せ、頬杖をつきながら上目遣いに少年を見上げた。

「学ぶがいいよ、サーレ・ニールセン。私にはどれがどうなどと言うことなどできないが、騎士団との連絡役として団長がお前を選んだのにはそれ相応の理由があるはずだ。あの団長がただひとつの目的で大切な騎士を野に放つわけがない。それに――」

そこで女の目許がわずかにやわらかくなり。

「お前の師は相当な遊び人だったようだが、酸いも甘いも噛み分けて何かを得てゆくのなら、いつそのことそのくらいで丁度いいのさ」

きょとんとしている少年に、夜の女王を異名とするリヴィエールと名乗っている歓楽の街の支配者は、それこそ、極上の笑みを披露してみせた。

帝都ティエル第一層　異民族街の裏路地の酒場。

不意に近くなる雨音、流れこんでくる水の香と潤んだ冷ややかさ。

雨音に掻き消されそうな涼やかな金属の音色は、扉に吊るされた来客を告げる小さな鐘が奏でる音。

雨に翳む夜中の街を背に、ひどく濡れそぼった小柄な人影が酒場の扉を開けたその場に佇んでいた。

箒を片手に床に散らばった硝子片を片づけていたトウルスがそれに気づき、眼を上げる。そして目を眇めて雨を滴らせているその人影を観察し、その上でこう言い放った。

「悪いけど店はやってないよ。他を当たって」

雨に叩かれながらも少年のような青年のようなその人影は微動だにしない。その蒼の目はトウルスにひたと据えられ、無表情ではあっても驚愕がゆらめくその蒼にトウルスは不愉快そうにその緑の目を細める。

かすかに風向きが変わったのか、吹きこんでくる大気の匂いが変わった。それとも、それは人影が一步店内に足を踏み入れたがゆえだろうか。

トウルスの表情が誰が見ても不機嫌としか取れないそれに変わる。

「あのね、店の入り口の鍵閉めとかなかったことは謝るけど、生憎、都合により今は店主不在。勝手に酒出したりしたらそれこそ店主に怒られるから、僕のためだと思って他を当たってくれない？」

鼻腔をくすぐる硝煙の残滓めいたものに眉をしかめながら、トウルス。箒を手にしたアルウェルニー族から眼を逸らさずに、人影は更に歩を進める。

そこに、カウンター脇の扉が開き、倒れた店主をその私室まで運んで行ったオーギュストが帰ってきた。

「トウルスくん、予備の水さしってどこに」

淡い金髪を掻きながらの多分に辟易したその様は情けなさ頼りなさが見え交ぜになった見事なもので、扉を開けてから店の入り口を見遣って後の一瞬にして軽薄さを払拭し警戒を纏ったその様も実に見事なものだった。

ゆるやかに笑みながら、半月眼鏡の優男は人影へと歩を進める。

「申し訳ないけれど、今日はもう店仕舞いなんだ。ついでに言うな

ればここは酒場であって宿屋じゃない。もう日付も変わる。よって、ここからは宿屋の領域だ。この店じゃ安眠を提供することはできない。そんなわけだから、お引き取り願おうか」

にこやかにそんなことを口にしながら、にじり寄るように半ば強制的にオーギュストは人影を外へと放り出して扉を閉じ鍵をかけた。遠くなる雨音と、滞留するほのかな火薬の香と焦げ臭さ。

階段を下りてくるオーギュストにトウルスが呆れ気味の声を投げる。

「あの遣り方が風評被害の素になったらどうするのさ。営業妨害もいいところじゃない」

これに半月眼鏡の優男はへらりと笑う。

「店舗炎上の可能性を排除したと言ってもらいたいなあ。あの少年外出禁止のこの時間に歩いているあたりで立派な火種だよ。匿ったことが帝都警察にでも知れたら面倒なことこの上ない。まあ、どんな火種かは判らないけど」

オーギュストを見るトウルスの深い緑の目に怪訝そうな色が浮かび、それを察知したオーギュストは笑んだまま困ったように眉根を寄せる。

「信用ないなあ」

返すトウルスは素っ気無い。

「信用されてると思ってたわけ？」

「相変わらず口さがないねえ、トウルスくんは」

「にこやかに悪口言うのやめてくれない？」

「寝めてるのになあものすごく。どうも心の距離は果てしないようだ、と、いうことに、なんだか淋しさが過ぎるのはどうしてだろう。それなりに付き合いは長いはずなのに」

「いつ近くなつたのさ、そんなもの」

どこことなく遠い目をするオーギュストにトゥルスは盛大な溜息をつく。そんなトゥルスに気づかずかあえてか、オーギュストは軽薄に笑いながら背後を親指で示してみせた。

「そうだ、床の硝子片を片づけてくれたとこ悪いんだけど」

これにトゥルスは疑問符を浮かべ、

「雑巾、よろしく」

指し示されたその先、店の出入り口になっている扉の前、風雨によつて水溜りと化した床を発見して。

「余計なことを」

文字通りの招かれざる客がもたらした掃除の手間を直視したトゥルスは、背後にあるカウンター脇の扉の閉まる音でオーギュストが颯爽と面倒事から逃亡を図ったことを確信したと相まって、それこそ盛大に肩を落とした。

地を叩く雨の音が消える気配はない。

「急な訪問、失礼する」

開け放った扉を早足に抜けるのは、紅を纏う壮年の男　近衛軍長  
官口バート・ベルナル。蒼の炯眼のその先には、扉の正面に置かれた執務机に着いている不安定な蠟燭の灯に浮かび上がる枯れ枝のような老人とその前に控える夜の闇とは異なる平坦な黒。  
夜中の闇をさざめく灯火はわずかだけ駆逐し、彼らの横手にある大窓は叩きつけられる雨粒によって滝のような流れの半ばに重なり流れゆく波紋を無数に形成する。

「何事かな、ベルナル殿」

不躰とも取れる来訪者に声を投げたのは、この部屋の主たる老人  
帝都総督エマニユエル・ガデ。強面の若年に位置する黒を纏う先客　帝都警察長官アルノルト・クリーアが、一步、ガデの視界を妨げぬよう身を引く。

帝都を管轄する老人の正面、近衛を統べる者が一礼した。

「ご許可を、いただきたい」

ベルナルのこれに、椅子に座ったままのガデのそこだけが妙に生気の漲っている蒼の目が細められる。探るような値踏みしているようなそれを流し、ベルナルは黙したままのクリーアにも眼を転じた。

「できれば、クリア殿にも」

反応の見受けられないクリアからガデに眼を戻し、ベルナルは続ける。

「今宵、帝都第一層に設けている我が近衛軍の備蓄倉庫より物資が持ち出された。建物を爆薬により破壊するという派手なものだ。それを許したことはこちらの不手際でもあるのだが、なされた行為は紛れもない窃盗。そして、帝都の治安を揺るがすものでもある。本来なれば帝都警察に一任すべき事柄だが、持ち出されたのは武器弾薬。ことがことだ、できれば近衛がこの件の解決に奔走することを許可していただきたい」

闇を透かす硝子に、闇を透明に蕩かした波紋が幾恵にも重なって流れてゆく。

ふ、と、ガデの口許が緩んだ。

「身内の不始末は身内でつけたい、と、いうことか」

皺に埋もれた蒼に納得したようなせせら笑うような色が浮かび、受け止めるベルナルは言葉を呑みこんでいるのか唇を引き結んだままわずかに顎を引く。口許に笑みのようなものをたゆたわせたままガデは臉を落とし、冷えた静寂を転がる雨音を聞いた。

「帝都にて犯人捜索を行うのなら帝都警察の権限と被ることは明白だな。これは私よりもクリア殿の意を仰ぐがよいだろう。が、わざわざこうして赴いて来るとは、本当に用件はそれだけか？」

静寂に満ちる雨音。ベルナルは横目でクリアを見遣り、訊く。

「レーム塔は、どうなった？」

帝都の東と西、ここにおいて話題に上っているのは帝都第一層の対極に位置する場所。帝都の治安維持を担っているはずの帝都警察が一方には鎮圧に赴き一方にはその影すらないことについて含みを帯



びたベルナルルの目。それにクリアは表情を動かすことなく淡々と答える。

「鎮圧は完了した。囚人の確認はまだ途中だが、首謀の面々は異民族街に逃げこんだようだ。現在はそちらを風漬しに当たっている。よって、正直、そちらの倉庫を襲った連中まで手が回らない」

声音の間に、老人のそれが響く。

「ならば話は早いな。勅書でも持ち出すのなら話は別だが、現段階においては、帝都にて近衛が動くことを一部黙認しよう。それに、時が経てば経つほどこの件は帝都だけではとどまるまい」

どこか愉悦を覗かせるその響きにベルナルは眉をひそめ、

「だからこそその直談判なのだろう？ ロバート・ベルナル」

見上げてくる蒼を彩る試すような色に、近衛を率いる長は一礼すること顔に滲むであろう不快感を隠した。

破璃めいた宙はどこまでも深く、散らばる星は澄んだ水面に沈んでいるようにゆらめいていた。薄氷めいた大気はどこまでも鋭利で、透明で冷やかなそれは刃の感触すら想起させる。

闇に閃く篝火は、踊るように薄く激しく燃え盛り、淡く白んだ家々の壁を光とその残像で濡らしていた。

家々と道の間を繋ぐ日除けの屋根が組まれている路地は入り組み、迷宮の様相を呈しながら地上と地下に展開する。街の中央の泉と、そこに聳え立つ総督府。ささやかな緑は今葉を落とし、陽に焼け

て乾燥し粉吹いたその幹を夜風に曝している。

ぐらりと、と、篝火が揺れ、それが華麗に艶やかに火の粉を撒き上げながら倒れゆく軌跡にて照らし出される壁にいくつもの人影が躍った。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第20日　キールタ。

城門を破った帝国軍は、一部を城壁の制圧に残し、市街地を駆け抜ける。城壁に残った隊は防衛の異民族を引き摺り落とし突き落として武器と場所を奪い、砂漠より帝国軍を追うかたちになった異民族の分隊に投石を始め矢を射かける。一方、市街地に抜けた隊はあまりの傾斜と隘路に馬を捨て、疎らに篝火が闇を裂いてゆらぐ冷えた道を進む。分岐を重ねるにつれ隊は分散を余儀なくされ、ざらつく砂は喉を荒らし、砂の軋む静寂は異物たる濃紺の気配を隠してはくれない。

踏み固められただけの足場、ゆらめいて光の残像となる一瞬前までの光に満ちていた壁。

倒れた篝火。薪が転がり、燃えかけの灰が煙を生み、火の粉が湧き立つ。生まれた闇と、殴打の鈍い振動と。剣戟と呻き声と叫びとが空を閉ざされた隘路に反響して渦巻く。

横合いの小道から現れた異民族が帝国軍を襲撃し、付近の家々にて息をひそめていたキールタに住まう者たちも鍋や短刀を手に進路を塞がれた濃紺の退路を塞ぐ。

「剣は使うな、同志討ちになる」

そう命じながら後方に眼を遣ったディオの眼前に剣の切っ先が走り、それを躲すために上体を後方に傾げる眼を戻しがてらの視界に、部下が斬り伏せられ頰れゆく影が紛れこむ。闇に慣れ始めたディオの目は自らに向けられる刃を捉え、咄嗟に身体を沈めるも、左肩を挟まれて壁際に追いつめられた。背中に土の感触を覚えながら、肩を

押さえる手を己の血で滑らせながら、前だけを見据えるディオの炯眼は己に相対する異民族とは別の新たな人影を捉えて。

そして、それが味方ではなく敵の増援であることに気づく。

鋭いだけの蒼で薄闇の影を見据えたまま、血に濡れた肩から手を獲物の柄へと運び。

血の香の満ちる酸鼻なる隘路で、自らに迫りくる剣を見据えて。そして。

投擲された短剣に背を貫かれた異民族が己に覆い被さるように倒れたことで、クラウディウス・ディオは、先刻よりも距離を縮めた新たに現われた人影が濃紺を纏っていることに気づいた。

「で、あれっていったいどういうことなわけ？」

帝都第一層 異民族街の酒場。 尚も止まない雨の気配を壁の向こうに聞きながら、店主のいないカウンターにて、勝手に持ち出した肴をつまみながらトゥルスが傍らを見遣る。その鋭さを纏った深い緑の目に、こちらも勝手に持ち出した酒を嘗めていたオーギュストが困ったように天井を仰いだ。

夜半と黎明の挟間の闇にさざめく 燭の炎は、鮮烈で艶やかで、かすかな大気のゆらぎにすら翻弄されつつも燃え盛る。 ゆらぎ踊るそのれの足許から、透明になった蠟が朝露のごとく鈴が鳴るような軽やかさで転げ落ちた。

しばらくの後、トゥルスに眼を戻したオーギュストは、これは俺が言うようなものでもないとは思っただけだねえ、などとぼやきつつ、困ったような笑みをつくったままひとつの問いを投げる。

「突然だけど、右利きと左利き、シャルはどっちかな？」

これにトゥルスが怪訝そうに目を眇めた。

「それが店主が倒れるのとはどう関係するっていうのさ？」

半月眼鏡の奥で、オーギュストがへらりと笑う。

「関係あるから訊くんだよ」

さあ、どつちかな？

どこか楽しげなオーギュスト。脳裏に普段の店主を思い描いたトゥルスは、導き出した結論に疑念を抱いているのか、わずかに首を傾げながら答えた。

「右？」

「はずれ、左利き」

腑に落ちないでいるトゥルスとそれを苦笑しながら眺めるオーギュスト。そこに、店主に安静を与えと兄妹を寝かしつけたリーザが降りてくる。そして、こちらも勝手に棚から酒瓶を取り出し、トゥルスの隣に座った。これでトゥルスはリーザとオーギュストに挟まれるかたちになる。

彷徨うように、蝋燭の炎が揺れる。

「まあ、最近は随分と右手使うのにも慣れたみたいだね。見ていて違和感はないだろ？」

リーザの杯に酒を注ぎながら、オーギュスト。目の前で繰り広げられる一連の動作など意に介さず、トゥルスが問う。

「それこそどういうことなのさ？」

「なんということはないんだ。今のシャルの左腕は、左手が利き手になるほどには使えない、というだけの話だよ。もともと右でもそれなりに剣が扱える程度には器用だったけどね」

半月眼鏡の優男の酒を嘗めながらのこれに、発言者以外のふたりの目が集中する。深い緑と淡い翡翠のそれらに気圧されてか、杯を片手にオーギュストは目を瞬いた。

「シャヴィエル・ディアスは元傭兵だよ。もしかして知らなかったのかな？」

「知ってたらこんなに驚いたりするわけじゃないじゃない」

どこことなく目つきの悪いトゥルスと、へらりと笑うオーギュスト。

「そう不自然でもないと思うけどね。シャルはシルウア族だし、シルウア族と言えばアルバグラードの山岳民族。彼らが一族を挙げて傭兵を生業としていることは有名だ」

「まあ、それは、そうなんだけどさ」

「それを説明しようとする、俺とシャルの馴れ初めからの話に

」

「まどろっこしいのは眠くなるから要点だけ」

口上が長くなりそうなオーギュストをトゥルスが容赦なく切り捨てる。

「いいじゃないか、少しくらい年長者の語りを聴いてくれたって」

「ばやくオーギュストの傍ら、

「リーザ、呑みすぎない」

「平気よ、セルヴじゃないもの」  
「あのね」

トウルスは手酌にて杯を重ねるリーザを窺めるも、効果はほぼ皆無だった。呆れを隠しもせず、その様を眺めながらトウルスはオーギユストに先を促す。

「それで？」

「本当にひとの話を聴く気があるのかな？」

「勿論じゃない」

「誠意の欠片も見当たらないんだけどねえ」

両者、薄い笑みを浮かべながらの視線を合わせない遣り取りの後、改めてオーギユストが唇を持ち上げた。

「もう十年以上前になるのかな。場所はノヴァスコシア　テウト  
ニー族自治領に隣接する一種の緩衝地帯。君たちには言うまでもないだろうけど、当時は皇帝が異民族自治領を名実共に属州化しようとしていた時期だね。そういった意味で、ノヴァスコシアは最前線だったわけだ」

わずかに細められたどこか皮肉っぽい深い緑と、ゆるく瞬きを繰り返す淡い翡翠の目。冷酷帝侵攻の名で知られるその過程においてすべてを奪われ故郷を追われたふたりのアルウェルニー族が各々の仕事で半月眼鏡のウエネティー人を見遣る。

「最初は土地争いだったのかな。そもそもは皇帝なんて関係なくて、領主と耕作者の争いが発端だったはずだ。火山の麓でもともとそんなに肥沃な土地ではないのも手伝って　解りやすいところだと、租税としての収穫物が生きていけないくらいに徴収される、とかね

領主への不満が爆発し、裁判権をはじめとするその地における領主の権限をほぼ強奪したとされている。その状況で、領主を助けるとか領民を援助せよとか、そういったかたちで諸侯をはじめとする面々が介入し始めたのが泥沼化の始まりでね。何が本場で何が虚偽なのかすらよく判らなくなってしまった。緩衝地帯の鎮圧、異教との対峙。何を全面に出して挙兵したのかさえ、大多数は忘れてしまっただに、ね。火種を残しているとはいえ最終的な決着がついたのは女帝の即位によるとされているそれを冷酷帝は己の都合の良いように手のひらの上で転がしたとも言えるかもしれないけれど、その実、その頃にはもはやその地で争いが続いているというそれ以上の事実なんてなくなってしまうていたんだ」

やれやれ、とでも言いたげにオーギュストは肩をすくめてみせる。

「それでも物は回るし、畢竟、人も金も回る。第三者として係わるのならそれこそ特需だし。あの土地が北方異民族とウエネティー人が混在した土地であったということもあつて政治的な意味での落としどころがなかなか見つからなかったこともあるのだらうけれど

直接であれ間接であれ係る人が膨大になってしまったからこそ、だからこそその泥沼化ではあつたのかもしれない。まあ、そんなことはノヴァスコシアだけに当てはまることでもないだらうから。ひとつの物事は立ち位置によって数多の利害を生むものだし、それをどう操るかこそがそこに係わる者に求められる素質なのかもしれない。それこそそんなことはその渦中に在る者にとつてはそれこそどうでもいい思惑でしかなくて、迷惑を通り越したところに在る憎悪と絶望の対象になるようなものでしかないだらうけど」

「そんな感情を抱く余裕すら、ないだらうさ」

無表情に吐き捨てるトゥルスの横顔を、呼吸の間隙に黙したオーギュストがわずかに上げた目に映す。そして半月眼鏡の優男はゆるい

笑みをつくりながら臉を落とし、続けた。

「十年以上に亘る俺とシャルの腐れ縁が始まったのはそんな状況下にあるノヴァスコシア。当時のシャルは誰に雇われていたのかは知らないけど傭兵で、俺も傭兵として敵陣潜入みたいなことをしていたから、要するに同僚としての出会いだったわけだ」

「敵陣潜入？」

このもつともなトウルスの問いに、オーギュストは臉を落としたままわざとらしく両腕を広げて首を横に振ってみせる。

「それ以上は立ち入って訊いちゃいけない。実は俺もいまだに当時の状況がよく理解できていないんだ」

一瞬にして冷ややかになる緑の目。その気配を感じ取ってか、オーギュストは軌道の修正を図る。

「勿論、あれは長丁場になったからね。その間にシャルは村外れに住んでるテウトニー族の少女と懇意になって、生命も生まれた。それでも戦況は変わらず、終結しないという状況だけを保ったまま時だけが過ぎていった。そんな歓迎したくもない日常の中で、ある時それまで前線とは少しだけ距離を置いていた村の集落にまで戦禍が達して。そして、彼女たちは生きるということを断たれた。あの日はひどい雨で、遠雷みたいな砲弾の音が地を震わせていて。丁度、さっきみたいに、ね」

翻るように踊る炎と、弾けるような雨音。その深淵に吞まれるだけの夜の闇がわずかに薄まってきているのか、焰の鮮やかさがかすかに滲む。



「あれで本人は忘れたつもりでいるらしいけど、たとえ意識的に記憶を消滅に追いやったところで身体は覚えてしまっているらしくてね。あの時に負った傷のせいで一線を退いたことになっているけど、それに加えての理由があれ。反射みたいなものだから本人にもどうにもならないみたいで、それは今日のシャルの態度を見てれば判るだろう？」

酒を嘗めながら、苦笑しつつ、オーギュストは横目でトウルスを見遣る。

「ま、おかげで今のシャルは帝都におけるシルウア族の情報中継拠点をやってるわけだし、シルウア族の情報網で得たものを安く提供してくれて俺も随分と助かってる面があるから、お互いさまと言えばお互いさまなんだけどね」

「まったく、どこもかしこも馬鹿しかないわけ？」

軽く肩をすくめて溜息をつくトウルス。気のない様子で肴をつまむトウルスにオーギュストは楽しげに笑う。

「否定はできないなあ」

「否定するような生き方してよ、頼むから」

「これはまた手厳しいね」

「主観という名の一般論」

やわらかな苦笑を深くするオーギュストの視界の片隅でゆるく波打つ淡い栗色の髪が躍った。それまで大人しく話を聞いていたリーザが不意に背後を振り返り、天井を仰ぐ。

薄まりかけた夜の闇、淡くさざめく焰の熱。そのあたたかな橙に濡らされた首筋はすべらかで、淡い翡翠が見えない何かを見据えようとしているその者の脈打つ血潮の熱すら雨に冷えた大気に奪われて

ゆく。

「リーザ？」

疑問を孕んだトゥルスの声に応えてか、それまで不思議そうに天井を眺めるだけだったリーザの目がわずかに鋭さを帯びた。

「来るわ」

落とされた眩きに小刻みな振動が覆いかぶさり、杯という閉じられた筒に湛えられた酒がまるやかな光沢を放ちながら流動してゆるく円を描く。

やがて立ち現れた地が震えるほどのそれに杯の中の酒が撥ねて。

「ディアスさんの様子、見てくるわね」

不規則に地を震わせるのは紛れもない砲火の振動。青褐に取って代わる薄闇の青が世界に満ち始める時刻、潤んだ大気を叩くのは大粒の雨。

立ち上がったリーザが扉の向こうに消えてゆく。

「近いな」

泰然と杯を傾けるオーギュストと、あえて傍らの優男が言わないでいることを察して黙するトゥルス。

「トゥルスくん、年長者から一言」

聞くともなしに雨音を聞くトゥルスのその耳に、わざとらしいくらいに明るさを含んだ声が届く。

「さっきの話だけど、少しだけ追加しておくよ」

緩慢に上げた緑の目に映るのは、軽薄なだけのへらりとした笑顔。

「テウトニー族の彼女はね、集落から少しだけ離れた森に居を構える、薬草や風読みに長けたひとだった。村人は病めばその家の扉を叩いたし、天候を読んでもらったりもしていた」

ぱらぱらと、踊るように軽やかな雨音が地を叩く。

「彼女は敵対する誰かに殺されたわけじゃない。止まない惨劇を招き続ける者として、秩序を損ねた者として、いつもは薬草を処方してやったり旱を推測してやったりしていた者たちによって焦げかけた樹に吊るされ晒され鳥が啄むに任せられた。それを理の女神を冒瀆し秩序を損なったとされる者の末路と見るか、生者への供物と見るか。それは人それぞれだろうけどね」

すう、と、トゥルスが目が細められる。

「彼女にそれができたのは、それだけの知識と経験を受け継いでいたからだろ？」

「その通り。だけど、トゥルスくんがそう判断できるのは、君もリーザちゃんも少なからずその方面の知識や技能に触れているからだ。そういったものにまったく携わずに生きている者にはそんなことは思いもよらないとしたら、彼女が起こす現象のすべては奇跡みたいなものとその目に映ったとしてもそう不自然なことじゃあない」  
「たとえそうであったとしても、全員が全員そうだったかなんて判らないじゃない」

これにオーギュストが苦笑する。

「あの時代のあの場所には、それを赦すだけの、それを受容するだけの、何かがあった。それは確かかな」

「赦す、ね」

冷笑とともに吐き出された声音はひどく冷ややかで、対するオーギュストは苦笑するしかない。

「冷酷帝が現出したとされる動乱期、叛徒として立ち現れた指導者たちの思想的背景にはトーマス・ワーディングのそれがあつたとされている。これは今では周知とまでなっていることだ。この帝都でワーディングが処刑された時、その死体は千千に裂かれて帝都の四方を護る城門に晒された。女神の理を侵し冒瀆した者として、その怒りを鎮め秩序を取り戻す礎となるように。それが裁きの本質であり受容の要素であるのなら」

オーギュストの蒼が、トゥルスの目を正面から見据えて。

「俺の言いたいことは、判るかい？」

雨音に紛れて静寂を蹴散らす騒がしさが次第に迫っていることを感じながら。

「肝に銘じておくさ」

皮肉っぽい笑みを浮かべたトゥルスが軽く肩をすくめたその時。

涼やかに鈴が鳴り、雨音が溢れ。

まるやかに潤んだ冷気が狭い店内を駆け抜けて。

開け放たれた扉が切り取る薄闇にぼやけた外界の前、黒を纏う人影

がその身を降りしきる雨に叩かせていた。

The second act - 09 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 10

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 2 / 03

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

闇を切り裂く炎は燃え盛り、燐粉のごとく拡散する火の粉は閃きに似た軌跡を大気に刻む。

迷宮のように入り組んだ隘路、細やかな砂が零れ落ちる夜に冷えた壁。湧き立つように翻るようにゆらめく炎が照らし出すそれに、黒々とした人影が獲物を手に交錯する。剣戟と呻吟とを撒き散らしながら繰り広げられるそれがひと段落した時、その場に残った呼吸をする存在は濃紺を纏う者だけだった。

肩を押さえ壁に背を預けて立つディオの前、濃紺を纏う青年が略式の礼を取る。そして布でディオの肩の止血をしながら唇を持ち上げた。

「ご案内します」

しばしの沈黙の後、現在はカールトンの麾下となるキールタに駐留する帝国軍であることの明白な青年に、常と変らない他者が感情を察することの困難な表情と声音でディオは問う。

「カールトンの命か？」

困ったように青年は曖昧な笑みを浮かべ、ディオの問いには答えずに言葉を紡いだ。

「どちらにせよ案内なしでは総督府に到達することすら難しいですよ。ここキールタの街は構造そのものが迷路みたいなものですから」

閃く炎にその身を曝しながら、青年はディオの前に膝を折る。

「他の隊にもこちらから増援に参ります。キールタの死守こそが我らが責。その為の助力は惜しみません」

無言のまま青年を見つめるディオ。炎が生み出す世界に身を浴す青年はわずかに目を伏せる。

不意に、青年の口の端が淡い笑みのかたちに持ち上がり、

「最初から、何も、変わってなどはいないんです」

眩きにも似た懐古めいた音律を零した。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第20日 黎明。

いずれは暁を招くであろう夜明けの空は仄蒼く、夜が留まる中天に星を残したまま、山稜から零れ溢れた黄金が丹砂の砂漠に朱金の煌きをもたらす。冷えて滞留していた大気が流動を始め、砂丘の風紋が数多の漣を描きながら移動していった。

砂を揺るがす火薬の華は次第にその鮮烈さを朝陽に馴染ませ、澄んだ大気に馴染まない煙が吹き抜ける風に攪拌されてゆく。

砂に吸われゆく朱と、砂に吞まれゆく折り重なる肉塊。



濃紺がもたらすのは殲滅。

天を裂くように立ち現れる陽光は砂漠のすべてを曝け出し、その潔癖なまでの明白さは砂漠に息づくものの身を隠す術を奪ってしまう。キイルータの城門を占拠した濃紺はそこを拠点に砂漠から攻撃を仕掛けてくるテウトニー族とトリノウアンテス族の連合隊を迎撃し、キイルータの市街地に展開した濃紺は同朋の手引きを受けてこの地を本拠として挙兵した彼らを追い詰める。

低い天井の砂壁で囲まれた狭い道。外界から隔絶されたそこは高い位置にある小さな明り取りの正方形に穿たれた穴から差しこむ日脚に砂埃が舞い沈む。仄暗く涼しい十字路。曲がり角から現れたテウトニー族を斬り伏せて、目線だけで背後を気遣いながら、青年はデイオの先を進んでゆく。

「こちらへ」

先導されるままに歩を進めるデイオの頬を大気のゆらぎがかすめ、肺に心地よいそれが周囲を満たすとともに、突然に溢れ満ちた光の攻撃的なまでの目映さにその視界が白に潰れた。

そこは、オアシス都市のほぼ中央。蒼穹に祝福された、輝きが湧き出ずる銅の大地。

灼けんばかりの色彩の対比に目を眇めるデイオの、立ち尽くすしかないその一瞬、砂漠を吹き抜ける風がその長身に纏う濃紺を翻す。ふと、青年の足が不自然に停まり、無造作に手にしている剣の切っ先から、その白刃に纏わりついてた血が雫となって滴り落ちた。それはいつしか到達していた総督府の一室の、開放たれた扉の前。どうやら室内の窓も開放たれているらしく、机の上の書類を撒き上げながら、風だけがやけに通る。

青年の前には濃紺の背中。不安定に揺れるその背中を支えることなく、青年は腰を落として床を蹴り、剣を繰り出す。代わりにその背中を支えたディオの目の前で、トリノウァンテス族が青年の剣にその胸を刺し貫かれていた。青年が剣を引き抜いたその軌跡を男の血が追って描き、返り血に濡れる青年を目にしながらディオはその身で濃紺の背中を支えたまま左手で逆手に持った剣を背後に突き出す。それは剣を振り上げていたテウトニー族の腕を抉り、その一瞬に反転した青年が男の胸を横薙ぎにした。その弾みで机上に置かれていた小さな額が血溜まりの広がりゆく床に落下する。

額の中にはひとりの女性とふたりの女の子。微笑みの満ちるその肖像に描かれた幼子は、ディオに背を預けてなお満足に立つこともできないでいる、濃紺を纏う男の面差しによく似ていた。

それは幼子が無邪気に笑いながら泥を跳ね上げて走るがごとく。

世界に零れ落ちた光は生まれたその瞬間に大地を奔り、あたたかく明るいその熱は優しく大気を流動させながら拡散しすべてを明るみに出してゆく。大気が孕む玻璃の欠片の切れ端に似た鋭さは小川の水のまろやかな冷やかさに取って代わり、幾重にも緑陰が重なって生まれた夜の残滓のような薄暗さの中、針めいた陽光が黒々とした土に突き刺さる常緑の森にも朝の訪れを告げた。

森に敷かれた石畳。苔むしたその道を走る簡素な馬車の中、小さな窓から外を眺めていた女の子が正面の座席に座る母親に問いを投げる。

「これからどこに行くの？」

膝に頭を載せて寝息を立てているもうひとりの娘の栗色の髪を手櫛で梳きながら、母親は静かに微笑んでみせた。

「森の中にね、小さいけれど、素敵なお家があるの。お父さんが見つけたお家よ。近くにひとはいわないのだけれど、静かでいいところだわ」

「おじいちゃんのとこじゃなくて？」

不思議そうな表情をする女の子。そんな娘から母親は微笑を浮かべたままわずかに眼を逸らした。それで何かを察したのか、女の子は、もうひとつ、問いを投げる。

「お父さんは？」

これに母親はにこりと笑って。

「すぐに会えるわ」

ただ強いだけの笑顔で、ただ強いだけの断言を。虚勢でしかないような毅然とした笑顔で、脆いだけの願望を既に手にしたものであるがごとく。

仄かな緑の香が鼻腔をくすぐる爽やかな朝の森で、鋭く零れ降る細やかな曙光でその身を飾りながら、母親はただ穏やかに微笑っていた。

大地に横たわる峻厳な山稜は、背後に隠した太陽が滲ませる黄金と青褐とが縋い交ぜになった閃光の白にちらつく紫紺めいた煌きによって次第にその姿を浮かび上がらせ、やがてその縁から零れ落ちた曙光は一瞬をもって世界に鮮烈な影を与える。  
きい、と、開け放たれていた窓が風に揺れた。

「ああ、貴方でしたか」

安堵が満ちるその声音は囁きのようであり、かすれたそれは吐息にこそ近い。

赫怒に似た鋭い煌きを放つ砂が絶えず流動する砂漠はひどく穏やかで、その赤と空の蒼とが色彩を二分する世界は、硬質な光沢に覆われながらもひどく透きとおっていて、やけに目に痛い。

「よかった」

ふ、と、その目許を緩めるカールトンの背中をその身に凭れかからせることで支えながら、ディオはさほど背の高くもない男の白磁のようなつくりもののめいた顔に眼を落とす。その白磁が意味するものが蒼白であることにディオが気づいた時、不意にカールトンの背中がずり落ちかけ、ディオは動かすに支障のない片腕でそれを掬うように抱きとめようとした。だが、失血により自らの肉体すら支えられなくなっている男を片腕だけで立たせることは困難で、結果、床に近い位置でなんとか落下を食いとめる。その際、斬り伏せられた異民族のものである以前に異民族に斬りつけられたカールトンのものであった血溜まりを叩いたディオの片膝が、緋から黒へと色を変え硬化しかけているその飛沫を撒き散らした。

ぐ、と、ディオの服の胸元を掴むカールトンの手に力が籠もる。自らの流した血がこびりつく蠟めいた艶と白さの震える指を足掛かりにしながら、カールトンは緩慢に面を持ち上げる。時折結ばれる焦点が鋭いだけのディオの蒼を捉え、

「私を首謀として晒してください」

希望ですらない判断を、血の気のない唇が音にした。

「私を、首謀として、晒してください。総督は私に踊らされたのだと、老将は私に騙されたのだと、麾下の者には何の責もないと、そう表明して」

呼吸すらままならないその喉から絞り出される音は、どこか喘ぐようなそれに似ていて。

ずるり、と、蠟の指が布を掴んでいることすらできなくなつて滑り落ちる。

落下する視界の、ぼやけた光景の中。血溜まりに落ちた小さな杵を辛うじて捉え、そこに在る微笑みを脳裏に描く。ぱらり、と、風に書類が舞つて。

「私が護ろうとしたものは、私が護りたかったものは。すまない。結局、私は。私は、何ひとつ、護れてなど」

風が立てる漣が弾く陽光はその緋を底に滲ませながらただ眩く。

大気を叩く羽音が響き、閃光の白を放ちながら飛ぶ鳩の群れが軽やかに吸いこまれるように蒼穹を旋回する。

黎明に溢れた曙光は果てなく続く砂丘に朱金の煌きを湧き立たせ、晴れ渡った凜冽たる蒼はどこまでも透きとおっていて。

陽だまりに佇む濃紺。動かなくなつた男を見つめたままのデイオが、余人には感情を覗かせないその横顔をもつて、静かに奥歯を軋ませた。

譬えるならそれは、曙光であり黄昏であり、落日であり黎明でもあるものの種の最初の若葉が土を押し上げる様に酷似しているのだろう。

アクイレシア公爵家の消滅、ノヴァーラ戦、キイルータの曙光。

麾下の兵がウォルセヌス・アクイレシアの解放を求めたことを発端とすると思われるノヴァーラ戦は、ヴァルター・ヘルツォークとアクイーノ侯ヴァレリアスの衝突とされている。これにより前者は後者によって殲滅されるが、ノヴァーラという街そのものもデシエルト総督麾下の兵の駐留を許したとして徹底的に潰され瓦礫と化した。一方、キイルータは帝国軍アルバグラード駐屯部隊による鎮圧を受け、北方異民族独立の萌芽とされるこの出来事は、指導的立場にあった三人と北方異民族の主要部隊の壊滅により終息を迎える。

ファウストウス暦423年におけるデシエルト総督ウォルセヌスに絡むこの一連の出来事は、後世においてはその首謀はアレン・カイルトンであったという統一見解に纏まるが、その出来事が立て続けに生じたこの時点においては、すべて、アクイレシア公爵カトウルスに端を発するアクイレシア家の帝国皇帝への叛逆と見なされていた。

だが、それだけであつたのなら、これより先の帝国史の展開はいささか奇妙と形容するしかない。

暁と茜を包括するそれらは、ある視点において斜陽と呼ばれるものごとをも内包する。

雨の気配とともに差しこむのは雨雲に覆われていてすら漂う夜明けの気配。それらを纏わりつかせながら、半地下の店内より一段高くなっている扉の前で、黒を纏う男が狭い酒場に佇むふたりの客を眺める。黒を見上げる蒼と緑のふたつずつの双眸は、黒という色彩が意味するものを的確に察し、二者二様に目を細めてみせた。

帝都第一層　異民族街の酒場。

雨音が静寂を侵蝕し、その騒がしさに慣れた耳に淡々とした声が届く。

「昨夜から未明にかけて、不審な人物を見かけませんでしたか？」

黒という帝都警察に属する者が放つ問いかけにオーギュストとトウルスが顔を見合せたその時、

「ご用件ならば僕がお聴きします。この店の主は僕ですから、この店に係わるすべてを管轄し把握する義務は僕にある」

やわらかを通り越して場違いなほどにのんびりとした声が響き渡った。

いつの間に現われたのか、にこにこと笑いながらディアスがゆつたりと店内を横切つて扉へと段を上つてゆく。カウンター脇の扉を横目で見遣るトウルスの視界には、扉に隠れるように店内の様子を窺ういささか不安そうなりーザとその膝あたりに纏わりついて同じように店内を見つめているシングルとアニタの兄妹。そのトウルスの傍らには、悠然と構えていているように見えてもどこか足許のおぼつかない店主を苦々しげに見据えるオーギュストの姿がある。

やがて扉の前に到達したディアスは正面から来訪者に相対し、にこりと笑んだ。

「それゆえに、この酒場に踏みこむのであれば、たとえ力ずくであれ、店主たる僕の許可を得ていただけませんか？　それが礼儀というもの。だからこそ、僕らと貴方がたは今までそれなりにうまくやっていられたのでは？」

冷えてまるやかな潤んだ大気がかすかな気流となつてディアスの頬を撫でる。

「それとも、余所者と酒場は陰謀の牙城、といった通説を素直に信

じておられるとか？」

雨に霞む外を黒の肩越しに捉える店主の蜜蝋の目は、絶えず大気に舞う細やかな水の粒子と雨雲を薄めたかのような朝の薄闇に陽炎のように揺らめく黒の群れを映しながら、眼前の来訪者に試すような色をちらつかせる。どこまでも穏やかなそれがどこまでも挑発ではないことに最初に気づいたのはディアスとそれなりに付き合いの長いオーギュストで、扉の前の遣り取りから眼を逸らすことなく半月眼鏡の優男は壁に立てかけてあった箒を音も無く手にした。

「外に待機している皆様についてお訊きしても？ 窓から拝見した限りですが、どうも、この異民族街の端から端にまで広がっているご様子。何を求めておられるのかまでは存じ上げませんが、お互いに仕事です。穏便にいきましょうか」

長閑さを前面に押し出し、にっこりと、ディアス。

雨音だけが響き渡る、軋みをあげそうなまでに硬化し冷えた透明な大気が満ちるその場所に。

「やあ皆さん、元気してました？ たまたま近くまで来たもので」

それこそ場違いな、お気楽なだけの声と燦々と輝く太陽のようなはちきれん笑顔が現れた。

「ユベール？」

啞然とした形容こそが相応しい雰囲気か渦巻くそこにおいて最初に我を取り戻したトゥルスが新たな来訪者の名を呟く。そして周囲の緊張感などおかまいなしに店内に下りてくるそのひとに、トゥルスは詰め寄った。



「何してるのさ、こんなところで」

「おや、いてはいけませんか？」

「そういう意味じゃなくて、なんでここにいるのさ？」

「夜警ですよ」

「夜警？」

怪訝そうにトゥルスが目を細める。にこにこと、どこか胡散臭いまでの笑顔を振りまきながら、傭兵ユベール・ギイは続けた。

「このところあまりにも物騒なので、自分たちにも何かできないものか、と、帝都市民が立ち上がったわけです。先の帝都包囲でかたちになった市民軍が主な母体ですけどね。ま、あっちこっちで砲火が上がって今日なんてそれこそ活躍のいい機会じゃないですか。それで、たまたま近くを通りかかったものですから、おつきくなっちゃいましたが可愛い子どもたちの様子でも見ていこうかと」

「それ夜警の範疇なのかは知らないけど、それにしてもそれは随分といいかげんな……。って、そうじゃなくて」

なぜか肩を落とすトゥルスと、不思議そうに小首を傾げるギイ。やがて決意したように面を上げたトゥルスは、小柄なギイの両肩をしっかりと掴んで、お世辞にも友好的とは言えない目つきで正面からその目を見据える。

「と、いうことはさ。もしかして、まだ、帝都との契約は続行なわけ？　むしろ条件変えて新たな契約結んだり、契約更新したりしたんだろ。仕事内容の危険度とかめんどくささとかまったく考えずに、オルトが」

しまった、とでも言わんばかりに、笑顔のままのギイの動きが停ま

る。  
そこに。

「セルヴ、リーザ。久しぶりだな、変わりはないか？」

泰然と悠然と、どこか楽しげな低く重量感のある声音が響き。

扉の前に現われて店内にいる者すべての注目を浴びて立つのは、白の方が勝つ灰色の頭髪と髭の、初老に片足を入れかけている壮年の男　オルトヴィーン・ヴァースナー。大陸に名を馳せる大傭兵であり自らの育て親でもある男を見据え、トゥルスはそれこそ不機嫌そうに目を眇める。

間断なく地に叩きつけられる雨粒だけが、変わることなく、弾かれ砕け跳ね返って舞い踊る細やかな水の粒子を景色を霞ませるまでに舞い踊らせた。

そして。

「とりあえず、一発殴らせろ」

やり場のない苛立ちの捌け口を見つけたトゥルスは　もつとも、その苛立ちの発生源こそが突然に現われた大傭兵であるのだが　久々の再開に嬉々としているらしい育て親を見据えたまま、武器にすべく、傍らのオーギュストが手にしていた箒を奪い去る。箒を手にしたところで力の差など微塵も埋められないことが明白な貧弱な青年の鋭利な緑の目の先で、見るからに大柄で厳つい大傭兵は心なしかその口許をひきつらせた。  
かくして、親子喧嘩が開幕する。

そこにはやわらかな淡く白い陽光が満ちていた。あたたかな中空に

光の粒子がやわらかに沈みたゆたう。黒の大窓が横たえる影は硬質で薄く、澄んだそれはひどく浮いているようにも見えた。

「それこそ不躰にもほどがあるというものだ、イエレミアス」

ふわふわとした目眩めいた浮遊感に苛まれそうになるようなそこに、どこかからかうような、それでもその根底には棘を潜ませた、悠然とした声音が響く。

帝都第五層　サディヤ侯爵邸。

光に満ちた大窓のある一室、そこには三つの人影。椅子に寛ぎ談笑するこの邸の主と董色の目の少年、そしてそのふたりを見守るように立つ銀髪の青年。

突如、その穏やかさの中に現われたのは第四の人影。家人の静止をなきものとして優雅な所作で扉を開いたのは、すらりとした印象の黒衣を纏うひとりの青年。招かれざる客たるその青年の光に曝されてなお透きとおった白皙の肌はどこか無機質で、ほのかに紅がかった深い茶の髪の際には白銀めいた煌きを放っていた。

蒼の目を細め、青年　ヘッセン・ダルムシュタット大司教イエレミアスは慇懃な礼を取る。この邸の主　サディヤ侯爵ヨーヴィルは、皮肉めいた冷笑を隠すこともしないまま、椅子に座ったままわずかに眼を上げることとそれに応えてやった。微笑を湛えるイエレミアスが唇を持ち上げる。

「こうでもしなければ、隠されてしまうと思いましたので」

ふ、と、ヨーヴィルの目にせせら笑うような気配が過ぎる。

「誰が？　何を？」

小さく笑みを深め、イエレミアスは侯爵の傍らの董色の目の少年

に眼を遣った。

「そちらの公子をお迎えに参りました」

「これは愉快なことを言う。だが、おいそれと渡してやるわけにも  
いかないよ。私はこの子の庇護者からこの子を託されているのでね」

「この者を庇護しているのは他でもないシルザ大司教。その座が空  
席の現在、それに代わるものは何であるのか。勘違いしないでいた  
だきたいものですね」

これにヨーヴィルは呆れたような表情をつくってみせる。

「事あるごとに臥せっていた子どもが、随分と口が達者になったも  
のだな。まったく、君といいあの青年といい、啓典を謳う者は例外  
なく舌鋒が鋭いのかね」

嘆かわしいことだ、と、嘆息する侯爵に、

「褒め言葉と受け取っておきましょう」

イエレミィアスはかすかな目礼に苦笑を滲ませる。そして、席を立  
って佇んでいた少年と相對した。

「貴方に会いたいという者が」

わずかに伏せるようなイエレミィアスの蒼の目に、長身の大司教を  
見上げるあどけない少年の顔が映る。

「ジルベルト・ヴェリ」

大司教の唇から紡がれた名に、少年の目が大きく睜られた。

「」存じですね」

満足そうに大司教は顎を引いてみせる。そこに、その様を目を細めながら眺めていた侯爵の、鋭利さを帯びた胡乱げな声が飛んだ。

「その者はカルヴィニア公国の重臣だったはずだ。なぜそんな大物を教会が手許に置ける？」

ゆるく結ばれていたイエレミアスの唇が、わずかに、その端を持ち上げた。

「それは、彼の者が我々に宛てて亡命を望み、それを我々が受諾したからです」

少年を見つめたままの大司教と、

「いつから理の家は泥に塗れ血肉が育ち腐る地上の国となった？」

吐き捨てるように嘲笑を零す侯爵。呆然と立ち尽くしているようにも見える少年の澄んだ董色の目の中で、静かに瞼を落とした大司教がその唇をもつてゆるい微笑とともに謳うような音律を紡ぐ。

「理の女神の御名において」

ゆるく、ヨーヴィルの薄い唇が弧を描いた。それは、笑うしかないとても表明するかのような、零下という熱を灯した単眼鏡の奥の蒼の他の者に与える印象を和らげるためのような、ひどくつくりものめいた笑みのかたち。

そこは、眩いほどに明るい、閃光のような陽光がたゆたうあたたか

な場所。

薄い笑みを湛える黒衣の青年の狡猾の蒼と、その場に満ちる陽光に  
気配を蕩かしている銀髪 of 青年の静観の藍。 思案に沈みながら唇を  
噛んで佇む少年を、脚を組み頬杖をつきながら椅子に座るヨーヴィ  
ルが穏やかな目で見つめる。

やがて響いた声音はひどく優しく。

「私のことを気にすることはないよ、リラ。 行くか留まるか、選ぶ  
のは君だ。 どちらにせよ君が選ぶしかない。 できればはどうしよ  
うもないことだ」

淡い苦笑を孕むヨーヴィルの目が映すのは、俯いたまま握った手に  
力を籠める小さな少年。 だがね、と、常と変わらぬ人を食ったかの  
ような飄々とした雰囲気を纏ったまま、ヨーヴィルの目が静かに鋭  
くなる。

「君が今こうしていることができるのは、君を庇護していたのがあ  
の青年だったからだ。 君が今こうして道を選ぶことができるのは、  
君が知っている誰かや君の知らない誰かが生み出してきた現在に至  
るまでの数多のものが絡み合った、偶然であり必然でもあるそ  
れらの、その帰結だ。 この状況が君の望んだものであれ望まぬもの  
であれ、君の前に選択肢が在るということに変わりはない。 それが  
君にとって利となるのか不利となるのか、そんなことは私には判ら  
ないがね。 だが、君がそれを忘れずにいてさえくれるのなら、君が  
何を選んだとて、私には何も言うことはないよ。 生きるとは選択の  
連続とはよく言ったものだが、何を選んだとてすべてを得ることほ  
ど難しいことはないのだから」

淡々と紡がれる声音と、俯いたまま動かない少年。 たゆたうような  
光の微粒子の流動に包まれている少年の束ねられた黒髪が淡く艶め

く。その唇がかすかに息を吸い、ひとつひとつの音を大気に刻みつけるように、少年は声を押し出す。

「ぼく、は」

そこにゆらいだ狼狽と、その狼狽が導き出される根底に在るものを敏感に察知して、にこりと笑んだヨーヴィルは面白がるように言の葉を撒く。

「迷っているのなら踏み出してみることもだ。後にそれを悔いたとしても、別な道を選んだとて結局は別なことを同じように悔やむことになるのだからね。ただ、何を選んだとしても後戻りなどできないことだけは確かだ。それなら、捨て去ることのできないものを抱えて歩いて、せめてそれだけでも護りながら進むしかない」

それができれば上々だ、と、懐かしむような慈しむような目で弾かれたように面を上げた少年を見つめてヨーヴィルは笑う。

「行くといい」

と、侯爵は言った。

「誰にも理解されなかつたがどんなに嘲弄されようが、喉が哽れてすら泣き喚こうが無様に這いずり回ろうが、君が君の足をもって君の道を歩まんことを」

少年が握りしめた決意などお見通しだと言わんばかりに、侯爵は細めた透徹の蒼に楽しげな色を滲ませる。

「どうか、君のゆく末に幸あれ」

決別の響きはどこまでも軽やかで、かたち無きものへの純朴な希求は妄執のようで。

淡い後ろめたさを抱いてすら覆せない決意をかたちにする上手な言葉が見つけられないまま、どこか苦笑するように底無しに明るく笑む侯爵を、リラ・コトウスはわずかに揺れる目をもって見つめるしかない。

そこはあたたかな光が満ちていた。淡くたゆたう光の粒子は少年のなだらかな曲線を描く頬の産毛を撫でるようにゆったりと踊る。

そこに溢れる静寂はひどく穏やかで、そこに在る眼差しはひどく優しかった。

帝都の底、石壁と鉄格子の独房。

刻を覆い隠す滞留し澱む闇と、鼻腔をくすぐる黴の臭い。束になった鍵が擦れる耳障りな金属音。水の塊を喉に押しこまれたかのような湿気に辟易しながら、エイステン・ヴィロックは手燭を片手に先導の牢番が錠を開けた格子を自らの手で押す。

足を踏み入れたそこは闇の色。わずかな気流にヴィロックが手にした灯りが瞬くように踊った。

前を見据えるその眼の先には、手にした灯りが拓くささやかな世界。錆びついた鎖が石壁から伸び、独房の片隅に凝る闇に消えていた。

闇に浸かるように壁に凭れかかる塊は、さざめく炎のささやかな光に濡らされ、片膝を立てて座る誰かの乱れた襟元と鎖骨の浮く痩せた首筋の、手燭の炎が曝け出す側だけを白く浮かび上がらせる。灯火に薄れた飴色の闇に融けるのは、わずかに開いている乾いた唇と、壁にその重さを預けて反るように擡げられた喉。蒼白を印象とする血の気の希薄なその囚人は、白磁のようなつくりものめいた肌を晒し、かすかに上下する胸だけが呼吸というほのかな生気を証明して



いた。

更に足を踏み出したヴィロツクの鼻腔を、それまでとは異質なものが刺激する。一步、ヴィロツクが歩を進めるごとに、その手燭から零れる光が動き、照らされる視界がゆらぎ、影が動いた。

独房の片隅、ずり落ちるように力無く壁に背を預けている青年。それまでの影に代わった光が照らし出すのは、顰められている眉と、落とされている薄い瞼。引き千切られたかのような短い白金の髪が、薄く汗ばんだ額や項に貼りついていて。意識があるのかないのかそれすらも定かではない青年に近づくにつれ、影に沈んでいた側のその顔を捉えたヴィロツクは、わずかに目を瞠った後、盛大に眉をひそめた。そして背後を振り返る。

「おい！」

鋭く声を発したヴィロツクが目にしたのは半開きの鉄格子。そこに人の姿はなく、変わりに距離感の測りにくい凝った足音が反響していた。だが、かまわずにヴィロツクは続ける。

「誰だか知らないがここに来る奴に伝えろ。こいつを使うつもりならここまでだ。これ以上はやめておけ」

石壁に跳ね踊る己の声を聞きながら、ヴィロツクは苦々しげに唇を歪める。

そこに、苛立ちを喚起させるほどに泰然とした、囁れた声が響いた。

「そう言っな。息子を見殺しにされた親が為したこと、涙ぐましいじゃないか」

牢番と代わるように現れたのは枯れ枝のような小柄な老人。突然の来訪者に驚愕を隠せずにいるヴィロツクを、老人は試すような目で

見上げた。

「だが、人体を知り尽くした元刑吏からの忠告、聴いておいて損はない。私としても、まだ、この者が使えぬとなれば困る。だからこそ、こうして医者を呼び、わざわざ様子見に下りてくるのだ」

これに、傲然と顎を上げ、ヴィロツクは腕を組んだ。

「期待されても困るぜ。俺が知ってるのは、在ろうが無くなるうが顧みられることすら稀な辺境の集落の作法だ。帝都なんてとこの洗練された作法なんぞ知らんね。そもそも人の治癒力の限界を超えたものなど手に負えるか」

口の端を持ち上げながら、どこか皮肉っぽい失笑を浮かべるヴィロツクと。

「そうだったかな」

皺に埋もれた目を細め、笑ってみせる老人。

忌々しげに舌打ちをするヴィロツクの背後、青年の片方の瞼だけがわずかに持ち上がり、その茫洋とした片目がわずかな気流に閃く手燭の炎を映す。踊る灯の鮮やかな橙は焦点の合わない闇を蕩かした淡い藍に紫めいた色彩を流動させた。熱に浮いているらしいその目は潤んで艶めき、やがて疲れたのか静かに薄い瞼に覆われる。青年の闇に溶ける半身には上着を濡らした朱が乾きかけていて、その朱は、溢れたそれが乾いて動かない瞼から、涙のように伝い落ちていた。

The second act - 10 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 11

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 2 / 04

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

帝国北東部、アルバグランド山脈。

岩盤を抉るのは水の雫。数多のそれは天から降り注ぎ、緩慢さすら覚えるその落下は破碎の衝撃をすら水滴に孕ませながら地を叩く。

地を覆う岩板に弾かれて逆巻く霧とも煙ともつかない細かな水の粒子は、そこにたゆたう熱を包みこんで地に落としてゆく。雨脚が世界を埋め尽くすそこで、天に低く凝る雨雲は、日中であるにもかかわらず、透きとおった掬い取ることのできそうな黒で大気を染め上げていた。

ひんやりとした水の香を伴って執務室の扉を開けた濃紺に、やる気なく机の上に両足を投げ出しながら手にした書類を眺めていたアルバグランド駐屯部隊副長クリストフ・レーヴィは　本来それを処理すべき者がキイルータの事後処理を一手に引き受けているがためにデシエルト総督府を離れられないことの影響を直に受けた　未採決の書類の山の影から首だけを動かしてそちらを窺う。

「どうした？」

壁一枚向こうのざわつくような雨音を聞きながら、濡れそぼり服の裾や髪から雫を滴らせる戸口に立ち尽くす部下の様子に目を細めて、

レーヴィはわざとらしく手にしていた書類を無造作に机に投げた。そして、やや苦笑気味に部下を見遣る。

「まずは報告だ、起きてしまったものは仕方がない。俺としては報告を受けるのが遅くなればそれだけ後手に回る。その方が問題だろうか？」

軽々しく磊落に、レーヴィは肩をすくめてみせた。これに報告をもたらす者は思い切ったようにぎこちなく口を開く。

「帝国領よりアレス領へ、数騎に国境を突破されました」

す、と、レーヴィの目が眇められ、その纏う雰囲気は鋭利さが交じる。

「この雨に乗じたか」

淡々と紡がれるのは、苦々しさでも憤りでもなく、状況を状況としてだけ捉えた末の帰結。

帝国とアレスの国境に配置されているアルバグロード駐屯部隊は、そもそもの任務は国境警備であり、もとよりその規模は大きくないうち、先のキイルータ鎮圧ならびに事後処理のため、隊長のクラウディウス・ディオ以下その大多数が本来の配置から離れている。この現状においては、職務怠慢云々以前の問題として、従来の任務に隙ができるのは必至。それゆえにレーヴィはやれやれとも言いだげにかぶりを振る。そして、野良猫でも追い払うかのように、あえてぞんざいに手を振る。

「ご苦労、通常任務に戻れ」

上官のこれに気まじめにも食い下がる気配を漂わせた部下に、それこそレーヴィは心から苦笑する。

「気にするな、俺が顛末書でも書いておくさ」

そこは地を削る雨脚から壁一枚を隔てた場所。改めて机の上に足を投げ出たレーヴィは、

「しかし、正直、まいったなこれは」

天井を仰ぎ、片手で目を覆う。

落下し地を挟る雨音の重さが、心なしか、増したようだった。

帝都第三層    ユスキュダル・バニヤス邸。

「そんなものもはや記憶の彼方であるということを申し上げておきますが、おそらくは、それは本物です。矛盾はない。だからといって、直系に当たる誰かがそれをばら撒いているなんて短絡思考は願いませんけど」

よく晴れた日の、芽吹き始めた木々に囲まれた離れ。邸宅の主の前、飴色に焼けた机に一枚の紙切れを置きながらトウルスは断言する。口調だけは丁寧なものの不機嫌さを隠そうともしないトウルスに太い苦笑を見せて、バニヤスは鷹揚に顎を引いた。

「充分だ」

何がどう充分なのか、ゆるく笑みながら葉巻を燻らせるバニヤスを

見据えたまま、判然としないトゥルスが眉根を寄せる。眩いだけの陽光が枝のかたちの影をもたらすほのかな翳りに、ゆらりと、紫煙が昇っていった。

そんな豪商邸の一室、腕を組んで窓に背を向けながら顔だけを巡らせて白壁が並ぶ街並みを眺めていたトゥルスに声がかかった。

「貴方がいらつしやるなんて、珍しい」

ほのかな微笑を浮かべるのは、長身で瘦身の、艶やかな黒髪をゆるく束ねた紫紺の目の青年。見知った細面のテウトニー族を横目で見遣り、トゥルスは盛大な溜息をついてみせる。

「うちのいい歳した大きな子どもの雇用主に出資してる最大手の豪商のご機嫌取り」

一息で言い切る先客の億劫そうな拗ねたような物言いに、長身のテウトニー族　アルベルトウス・ラエルティオスは思わず苦笑を零した。

「今はその豪商と私の連れが談話中でしてね。要するに手持無沙汰なんですよ」

聞いてもいないことを一方的に話してくる相手に、トゥルスはいささかげんなりした色をその緑の目に浮かべる。それに気づいてか気づかずか、どこか学者然とした物静かな微笑を湛えて、ラエルティオスは続ける。

「まだ異民族街に？　望めば彼の大傭兵と同じ扱いを受けることもできるでしょうに」

あらぬ方を見遣つて、トウルスは軽く肩をすくめる。

「趣味じゃないだけさ。そんな不毛なこと話したいなら、悪いけど、失礼させてもらうよ」

「どちらにせよサディヤ候の私兵とでも一緒にでなければ、危なくて市内など歩けたものでもないでしょう？ 先日的一件以来、異民族街においては日中以外の外出は禁じられてしまっていますし、三層以下であっても我々への視線は友好的なものとは言えない。お互いに待ち時間を持て余しているんです、雑談でもしませんか」

「暇人」

思わず相手に向き直ってしまった、やや目つきが悪くなったトウルスが即答する。そんなトウルスに黒髪のテウトニー族は決して冷たいわけではない透きとおった薄氷のような微笑を浮かべた。

「レーム塔襲撃から二週間ほどですが、首謀者はまだ捕まってはいいらしいですね。帝都警察と、近衛軍が、搜索に当たっているようです」

深い緑の目を正面から絡め取るためにわずかに持ち上げられた紫紺の目に、燦然と降り注ぐ陽光の煌きが流動する。

「見つからないにもほどがある」

薄い唇から紡がれた断言に、口調の穏やかさとは裏腹な意思を打ちこむ楔のような響きを感じ取ったトウルスは少しだけ目を細める。

「そうは思いませんか？」

どこか挑むような問いに、トウルスは失笑を零して。



「もう帝都にはいないんじゃないの？」

「それこそ近衛軍が気づきそうなもの。皇帝直轄領に張り巡らされている彼らの網は、諸侯の私軍の寄せ集めでしかない帝国軍の比ではありませんから」

「なら、帝都にいるんじゃない？」

「では、なぜ見つからないのでしょうか。帝都においては職務が被りがちであるために何かと摩擦の絶えない二者が協力までして臨んでいるのに」

「そんなこと、僕が知るわけないだろ」

降参、とばかりに、トゥルスは軽く諸手を挙げてみせる。

「では、こうは思いませんか？ 帝都警察の目をかいくぐり、近衛軍の目をすら眩ませることのできる何ものかが、彼らを匿っているのではないか、と」

この話題から逃れたいのかどこか投げやりなトゥルスと、そのトゥルスを掬うように絡め取るラエルティオスと。

空を彩るは透明の蒼。晴れ渡った蒼穹から落ちてくる陽光が、窓の前に佇む青年の明るい橙の髪に黄金を与え、その前に立つ青年の黒髪に白銀のきらめきを与える。

ふ、と、トゥルスの唇が冷笑をつくった。

「何が言いたいのか」

細められた紫紺の目に探るような色が浮かんで。

「なに、ただの暇つぶしですよ」

陽に透かされる白晳の薄い臉が、ゆつたりと、冷たいわけではない冷やかな印象を纏う青年の内面をちらつかせる紫紺を隠した。

ファウストウス暦423年、マルティウスの月の第19日。帝都におけるこの日の夜の出来事はレーム塔襲撃という呼称を獲得して語り継がれてゆくこととなるが、その意味合いまでを含めてこの後に連なる出来事を俯瞰できるようになるまでにはいささかの時間を要する。

その頃、ヘッセン・ダルムシュタットにて開催されていた都市会議にて可決された議案は、その最終的な承認を得るため 通常帝都で開催される帝国議会の諸侯会議は、帝都の治安の不安定さを理由に近郊都市のトリーアにて開催された 諸侯会議にて審議されるも否決。これを受け、都市会議を牽引した西部都市同盟が遺憾の意を表明、実業家をはじめとする帝国内の新興階級ならびに一部の諸侯がこれに同調。それによって、住まい耕す土地が奪われると認識した耕作者をはじめとする領民が、立ち位置の転換を求め領主に詰め寄るといふ事件が多発。それは一部にて暴動と化し、領主の要請をもってその鎮圧に近衛軍が動くこともあった。

また、キイルータを主な舞台とした北方異民族 トリノウアンテス族とテウトニー族 の鎮圧に眼が行っている状況を利用してかその動きに呼応してか、南方異民族 アルウェルニー族とカドベリー・カースル族 も独立を掲げて帝国に対峙。皇帝より鎮圧を命じる勅命が發布されるも、南方異民族自治領に面する領地を治めるのは土地柄として先の帝国議会の議決に不満を有する諸侯が多数を占め、その多くは西部都市同盟との関係を何らかのかたちで持つがゆえに 諸侯に資金提供する新興階級の立ち位置とも相まって

事実上かたちだけの出兵となり、ゆえに長期化を約束する。  
前述の状況は帝国の物流網を寸断し、交易を前提として建設された

がゆえにもとより都市市民を自給では養うことのできない帝都において、それは食糧をはじめとする生活に必要なものの不足として表層化した。

ここで帝都に生きる者はある決断を迫られる。

そこで餓えるくらいならば漂泊の民となることを覚悟で帝都を去るか、それとも、帝都に留まりそれらが潤沢であると思わしきところから奪うか。

ファウストウス暦423年。

帝国史に刻まれるこの年代は、やがて、落日とも黎明ともつかない印象を後世に生きる者に想起させるものとなる。

街並みを見下ろすその場所からは、本来ならば耕され黒々としてるのであるう荒廃した大地が広がる、白亜の城壁の外までがよく見渡せた。

清廉なる白を濡らすのは斜陽の銅。翳りを帯びたほのかな熱と、昏さを秘めた鮮烈な艶。

それらが満ちる世界で長椅子に座るのは漆黒を纏う緑髪の女。背後より落ちた影に動じることなく、風にその髪を遊ばせながら、女は黄金と青褐が緋い交ぜとなった落日の空をただまっすぐに見つめ続ける。

影をもたらししたのは紅を色彩とする者。片手ですら縊り殺せそうな華奢なだけの女の後ろ姿を見据える男の、その身に纏う紅が風に翻った。

「帝都総督府前の広場に、帝都市民が押し寄せているようです」

男がもたらした音は風に攪われ、その残滓をとらえた女は唇だけを動かして音律を紡ぐ。

「現段階においては総督と警察の領域よ。近衛たる貴方には関係のないことだわ」

断定に近いこの物言いに、男はただ押し黙る。

そこには翳りを帯びた艶やかな朱金が満ちていて。

「だけど、彼らがないはずのものを振りかざしているというのなら、話は変わってくるかもしれないわね」

今や影と成り果てた遠くの山稜に溢れる落日を見つめるだけの女の髪を、まろやかな冷ややかさをもった風が散らしていった。

黒の大窓が聳え立つその場所には夜の闇が滲み、ゆらめく燭台の灯の光沢がひとり椅子に座る男の単眼鏡に踊る。

「さて、気づけば取り残されてしまったようだね」

瞼を落としたまま、かすかに笑みのようなものをたゆたわせる男。男から少しだけ離れた壁際、その横顔を眺める位置に佇む銀髪の青年が、無言のまま、夜に融かしていたその気配をわずかに押し出した。

「実は君についてもあの青年から預かった言葉がありはするのだが」

ゆらめく蠟燭の灯にその身を与えながら、男は思索に沈むように唇を落とす。

やがて男は組んだ指で口許を覆い、静かにその瞼を持ち上げる。

「アクイレリアの一件については、正直、腑に落ちない」

闇を見据えるその目はひどく鋭く、橙という光がちらつくその蒼はすべてを呑んだ上で静謐を呈する夜の漆黒に近い。

「腑に落ちないが、そんなことはどうでもいいとも言える。だが、公爵家の連中が次に潰しにかかるとしたら、素直に考えて、それは選帝侯たる我々だ。そして、我が身は何よりも可愛いもの。私に足許を掬われる趣味はないし、斃れてやる義理もない」

そこで男は首を擡げ、背後を見遣るように首を巡らせて、悠然とした笑みを浮かべながら青年を見据える。

「ここに来た大司教も君には触れなかった。それが彼の意味によるものなのか他の者の意思によるものかは別として、あの青年の片腕として知ってはならないことまで知っているであろう君を放置するなどは、不用心にもほどがある」

愉しげに紡がれるのはどこか含みのある言葉。

「君が行きたいところにはどこへでも行けるよう手配しよう」

単眼鏡の奥の蒼に宿るのはふてぶてしさをすら超えた不敵の色。

「休暇など、取ったらどうだね？」

これに青年は呆れを隠すことなくその藍の目を眇めた。

「随分と都合のいい」

遠慮のない青年に男は楽しげに声を上げて笑って。

「生き延びること、血を繋ぐこと。あの青年やあの少年を傍で見てきた君になら解るだろうが、それが生まれ落ちてより土地と人とを背負っている我々の義務であり責務だ。そのためには、いくらでも狡く姑息に生きてみせるさ」

面白がるような声音を響かせながら、緩慢に首を戻すにつれ視界の隅に移ってゆく青年を横目で捉え続けながら、男はその口許にたまたう笑みを深くした。

抜けるような蒼穹の下、眩いだけの陽光とやわらかくなり始めた冷えた風。白茶けた壁に囲まれた天空に祝福されているような庭園で、ひとり、流れる黒髪をゆるく束ねた長身の青年が空を仰いだ。氷めいた雪明かりを連想させる白皙の肌と、空の蒼を映す切れ長の紫紺の目。北方民族たるテウトニー族の典型的な容貌を持つその青年の耳が風に運ばれてくるざわつきを捉え、ゆったりとした所作で青年は眺めるような距離にて背後に横たわる回廊を見遣った。

芽吹きかけている枝の薄い影と、蒼穹より降り注ぐ陽光。それらが織りなす重なりが乱舞する風の吹き抜ける回廊を行き交うのは、回廊の始まりになる黒々とした重厚な扉より吐き出されたいくつもの人影。整然と並ぶ同じ造形の柱が重なるその景色を構築するのは、やや気難しさを覚えるような、同一なる精緻な配列の連なり。壁が弾く陽光は爛漫で、その反射光は大気に細かな輝きをばら撒いている。

しばらくの間、そんな光景を目を眇めながら眺めていた黒髪の青年は、地に敷き詰められた石畳と小石とが擦れる小さな音に瞼を落と

した。そして、かすかな微笑を含みながら問いを投げる。

「再審議は、いかがでした？」

ひんやりとした心地よさが沁みわたるような穏やかな声音に返ったのは、

「踊りもしない」

苦々しげに吐き捨てられた皮肉めいた響き。

「我々にとっては、状況はあまり芳しくないようですね」

ひっそりとした苦笑を浮かべながら、黒髪の青年は身体を反転させる。そこに立っていたのは砂色の髪を後ろに流したウエネティー人の青年。常であれば自信に裏打ちされ泰然とした光を宿している蒼の目に、今は抑えきれない苛立ちが溢れている。だが、奔流めいた感情に吞まれることなく、蒼の目の青年は持論を展開した。

「だが、所詮は時間の問題だ。西部都市同盟を敵に回しては、そう長くもないだろう。帝国中に網を張る彼らをもってすれば、所領のひとつやふたつ、孤立させ潰すは容易。物と金の流れを澱む以上に滞らせることができれば、あとは自壊を待つだけでいい。自給自足だけで持っている領地などどれほどある？ 自領を疲弊させるだけの領主など、もはや存在する意味はないからな」

わずかに首を傾げ、それでも無言のまま、黒髪の青年は聞き役に徹する。冷静と酷薄の境界の色を湛える紫紺の目はほのかな笑みを孕み、対する蒼の目に漲るのは この場にはいない誰かとどこにいてすらも絡み纏う枷のようなすべてを見据えた 鋭利なだけの冷

えた苛烈さ。

「女神を冒瀆？ 秩序の崩壊？ その決定ひとつ程度で均衡が失われるなどとは、笑わせるにもほどがある。そこで言う均衡なるものが既にゆらいでいるからこそ、そのことを俎上に載せざるをえなくなつたからこそ、この議会だ。現在において維持したい秩序を現出するために、綻び指の間から零れ落ちる秩序を回復するために、かつてのそれを維持するために適合していた何かにいつまでも固執して何になる」

澄み切り高いだけの蒼穹と、その蒼穹を背に傲然と笑みを刻む青年と。頭上に広がる凜冽たる蒼とは似ても似つかない熱を秘めたその蒼は、数多の色彩を包括する鋼の光沢めいた流動を鋭さとして宿らせる。

「規定の枠が変わっている、決定の主体が変わっている。混沌を招く、か。素晴らしい。それこそが表舞台に躍り出るための条件だ。裏舞台でしか踊れなかったものが、華やかな演者として表舞台を席捲する嚆矢となりうる条件だ。理の女神が剣という秤を振りかざすのなら、我らは貨幣という秤を掲げよう。力も感情も安寧も、物もひとも大地もすべて、等価を示すことで遍く交換を可能にする万能の秤を」

黒髪の青年の紫紺を真正面から見据え、蒼の目の青年は挑むことを楽しんでるかのような笑みを更に深くする。

「まだまだすべてはこれからだ。手にできるものは、得ることのできるものは、まだまだ数え切れぬほどに沢山ある。見せてやろう。得ているものがそのままその手に在ることが当然ではないということとを、得ているものがそのままその手に留まり続けることなどない



ということ。貴きとされているものが必ずしも普遍ではないということを、尊きとされているものが必ずしも不変ではないということ。強きとされるものが脆弱である様を、塵埃とされるものが遥か高みへと昇りつめる様を。すべてにおける変転を、反転を、逆転を」

一瞬だけわずかに目を瞠った黒髪の青年は、

「面白くなってきただろう？」

遊びにでも誘うかのようなこれに、ゆるく微笑してみせる。

「ご期待どおり、成り上がってみせようじゃないか」

ゆるく、笑みの残滓を残しながら蒼の目の青年は踵を返して。吹き抜ける風は、テウトニー族の髪を流し、ウエネティー人の外套を翻し、そこに蟠るすべてを果ての知れない蒼穹の高みへと攫っていった。

The second act - 11 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
1 2 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /  
http://id

## The second act - 12

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 3 / 01

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

神様に祈ったことがある。

それは手のひらに掬えるような    それこそ言葉に模せるような

確かなかたちをしたものではなかったけれど。

漠然とした飢えにも似たそれを祈りと呼ぶことができるのなら、早  
の空に雨粒を掴もうとするように、ひどく現実味のない夢物語を馬  
鹿みたいはこの手に手繰り寄せたことだけは確かだった。

音の無い世界で繰り広げられるすべては、見慣れた舞台と見知った  
誰かが織り成す、よくできた寸劇のようで。

一階と二階をつなぐ階段の踊り場。唯一の肉親たる祖父を捜して家  
に駆け戻った僕は、家中を捜し回ってもその見慣れた背中曲がつ  
た瘦軀が見当たらないことに焦りのようなものを覚えながら、外を  
捜しに行こうと階段を下りる途中だった。

見下ろせるのはさして広くもない我が家の玄関。祖父を捜して駆け  
回るよりも先に祖父に届け物を頼まれて近所の届け先に向かった際  
に突然の地の破裂に遭遇した僕の打撲と擦り傷だらけの身体は、と  
うに軋みをあげている。音が聞こえないのも、その時に鼓膜が麻痺

してしまったからだ。勿論、届け物など品物そのものをその時に放り投げて、混乱する頭を抱えながら僕は家への道を駆け戻った。その程度には軽傷だったらしい。よくは解らないが穏やかではないことだけは判ったから、祖父の無事を確かめようとしたのは反射みたいなものだったのかもしれない。

ともあれ、平衡感覚がおぼつかないままにうろつくのはもとより無理があつたわけで、気がつけば、僕は家の階段の手摺に縋るようにへばりついていていた。

影の動きで、玄関の扉が開いたことを知る。

焦げるような臭いがした。木が燃えているのかそれとももっと別なものが燃えているのか判然としないそれに混ざるのは、鉄と硫黄のささやかな刺激。

そんな臭いを、僕は知らない。

背の低い木組みの家が立ち並ぶこのクシカに満ちるのは、抜けるように遠くて青いどこか淡い色彩の空の下、暑くはあっても乾燥した肌触りのよい大気に満ちる、商売をする人びとがごったがえす丘の上の神殿前の広場に立ちこめる果物や食べ物の匂いや裏路地に染みついた水煙草や香の匂いであつて、独特ではあつても刺々しくはない。

濃紺が、見えた。

ひくり、と、息を吸いそびれた咽喉が痙攣する。

あんな色を、僕は知らない。

その濃紺は服の裾、床に突かれた銃剣の向こうに、仰向けに投げ出された祖父を見つける。

その祖父と、目が合った。

ゆらり、と、透明なゆらめきが陽炎のように階下を歪める。

濃紺を纏う者の数が増え、彼らに向かって祖父が何かを喚んでいる。開け放たれているであろう扉からは煤が舞いこみ、炎の橙が光としてちらつく階下から気流に乗って天井に舞い上がる。熱を吸いこんだ肺が痛い。細かな煤が入ったのか、刺すような刺激に視界が潤む。

こんなもの、僕は知らない。

不意に、祖父がこちらを見たような気がした。皺に埋もれた緑の目が僕をとらえ、その唇が動き、言葉を放とうとする。

そんな祖父を、立ち位置を変えた濃紺が僕の視界から奪った。

その頃には、その濃紺が意味することを、ぼんやりではあっても理解し始めていた。

だから。

僕は、笑う膝を押さえながら立ち上がり、そして。

助けてください、と、祈った。

僕を助けてください、と、祈った。

階段を駆け上り、部屋の奥の納戸の隅に隠れ、膝を抱えて蹲って、祈った。

祖父ではなく、他でもないこの僕を。

助けて、と。

そう、祈った。

ファウストウス暦413年、南方異民族自治領の片翼　クシカ陥落。

アルウェルニ族自治領の領都にしてダーナ神教の聖地であるこの都市の帝国軍の奇襲による陥落は、当時の帝国西方の情勢の不安定さをそのまま物語るような事象であるが、この二年前にテウトニ族自治領領都コルチエスターが陥落したことを引き合いに出すのなら、帝国が抱える異民族自治領そのものの勢力が名実ともに強大化していたことに気づくだろう。少なくとも些事と無視できないほどには影響力を有していたことは確かであり、侵略ではなく略奪と評されるように、一連の鎮圧の過程においては温厚と知られていた男が冷酷帝の異名を得るほどに徹底した攻撃を加えている。

ともあれ、一説には西方における新興階級への資金流入の母体を叩

くためとされるアルウェルニ族自治領侵攻に端を発する南方異民族領への帝国軍の進攻は、この数年後、最終的にはブランドンブルク伯爵領領都ウェルラムウムにて領主の処刑をもって集結する。それは血に狂った皇帝の所業とも皇帝と女伯との確執によるものとも噂され、おそらくは、もはや誰の手にも真相は握られていない。

首を鷲掴みにするように顎を掴まれ、上を向かされた。

格子の間から腕を伸ばしてきた男の傍らには、小さな帽子につながる薄い布で目許を隠した身なりのよい女。口許を覆っていた扇子をぱちりと閉じ、紅の唇が吊り上がる。

「傷だらけね」

おそらくは僕の纏う辛うじて服と呼べるような襪襦布から覗く身体を見て、女は男に眼を遣った。

「何度も逃げようと」

「大切な売り物に鞭を振り下ろすほどに？」

閉じた扇子の先で僕の顎を持ち上げ、黙する男に女は朗らかに笑う。仄暗い灯を反射しながらたゆたう埃が薄暗さをもつてすら目に見えるここは、ひどく喉がざらつく。饅えて滞留する大気は肌に纏わりついて重く気だるい。

男の手が僕から離れた。女に場所を譲るその蒼の目に一瞬だけ映ったのは、睨めつけるだけの、抱いている感情などどうでもよくなっているにもかかわらず突っ撥ねることだけはやめられないでいる、緑の目をした十歳ほどの子ども。

「これにするわ」

僕の咽喉に扇子の先を食いこませながら、愉しげに女が笑った。そして、意外そうに念を押してくる男に相對するために、女は僕に背を向ける。

「年頃は丁度いいし、手負いのやんちゃな子猫を手懐けるといっても楽しそう」

「それでは、お支払はあちらで。その間にこれに印を」

格子の向こうのそんな遣り取りはひどく遠くて、格子の内側から連れ出される時に僕の両脇を固めた男たちを振り解こうと暴れたのは意思あつてのものというより反射のようなものだった。

己の声を震わせて発せられているはずの叫びのような喚きのような音は声などと呼べるようなものではなく、それこそ、獣の唸りのようなものでしかない。

クシカが濃紺に蹂躪されたあの日、祖父の命を踏み台にして生き延びようとした僕は、敗者の例に漏れず、略奪に精を出す兵に見つかって金にされたわけで。そして、今、品物は商人の手から客の手へと渡ろうとしているわけだ。

どうにもならないことがあることくらいは知っている。

どうにもできないことがあることくらいは、知っている。

どうにかしようとしなかったことは、解ってる。

あの時、納戸の隅で震えながら望んだものは祈りと呼べるようなものでもないことくらい、頭のどこかで解っていた。それでも。

「……る」

知らず、唇から零れたのは。

連れられた先の、小部屋とも呼べないような、申し訳程度に布と組み合わせた木材で空間を確保しただけの場所。土を固めただけの床に投げ出され、背中に片膝を置かれて押さえつけられた僕は、片頬を土に押しつけて伏せざるをえない。

陽炎を生み出すほどに燃え盛る炎が見えた。炉の前に屈んでいるのは僕を押さえつけているのとは別の男の背中。炎の熱が彩る不安定な色彩が揺れるそこは、夜の闇がひどく甘く、滞留する熱気には夜風の心地よさなど微塵も感じられない。

炎の前に屈んでいた男が、先端を炎に浸していた鉄を手には立ち上がった。治りかけの傷にへばりついた布を肩口から引き剥がされる。

「やめろ」

片肘を振り上げて身体を起こそうとするも、すぐに押さえこまれた。

「はなせ」

土に爪を立て、絞り出すように、呻く。

「放せ」

言葉そのものを、陽炎に刻むように、声を上げて。

喚いたところでどうにもならないということくらいは解っていた。所詮、濃紺から逃れたとて、焼け爛れた土地で飢え朽ちるか身ぐるみを剥がれるか、行き着く先にあるのはそんなものであることくらいは判っていた。

ここで逃げ延びたとて行く末はさほど変わらないことくらいは解っていて。

それなのに。

漂う熱に背中が泡立った。ひりつくその気配に更に抗い始める僕を、



痙攣を起こす子どもを押さえつけるように、男が圧する。女のものであろう紋章が彫られた蕩けそうなまでに熱せられた鉄が、その図形をこの身に焼きつけることは確実で。

爪が剥がれるまでに手に力を籠めることも、喉を仰け反らせて悲鳴のような声を撒き散らすことも、無様に四肢をばたつかせることも、いくら潰されたとてやめられない。

それがどうしてなのか、そんなことはわからなかったけれど。

「放せ！」

他に生き延びる術など皆無に近いことを理解していてすら、漠然とした蟠りしか抱けないくせに、この先に待ち受けるであろうものを是とすることができない。

何を手にしているわけでもないのに、何を失うのかなど判っていないくせに、それを手放すことだけはしてはいけないような気がして、鼻腔を擽る臭いに、感覚は麻痺し、意識は現実を追い出す。

おそらく。

あの時、僕の中で何かが消えた。

そして、女の館で僕はひとりの男と出会う。

「時折、ふと、脳裏を過ぎるものがあってね」

堆く積まれた文献に埋もれる椅子に腰掛けた物静かなそのひとは、羊皮紙を捲りながら、そのひとから受け取るよう命じられた。すっかり忘れていたのかは知らないけれども準備されていなかったことだけは確かな。壁一面では飽き足らず床にも山になっているそれらの中から目的の古文書を探す僕に向かってかそれとも独り言なのか、とにかく、零れ落ちる思考をそのまま言葉にしたかのような声音を紡ぎ始める。

「あるひとつの名を共有する彼らが織りなす世界に生きていながら、彼らから完全に距離を置いている　置かざるを得ない、と、そう言った方が的確か　誰かの目には、自らを取り巻く世界がどう見えているのだろうか、と。隔絶ゆえに排斥を得、乖離ゆえに客観を得る。所詮は距離を置けるひとつの対象に対しての視座でしかないが、それでも、完全なる孤立からのそれは得難い。相対した他者を概観するようには、自らが無意識の裡に同化しているそれを眺めることができないのなら、それはある者にとっては少しの救いとなるかもしれない。もつとも、手にしたささやかなそれを振りかざすのなら、割れた海の底に再び水が押し寄せるように、潰されゆくのが精々かもしれないが」

おそらくは返答や相槌など期待していないであろうそれを聞きながら、僕は探しているひとつを求めて周囲に眼を這わせる。

「相違にして差異。ゆえに、ある領域における平穩を突き破りそれを当然とする者。だが、同じではないという意味での異物をすら取りこまねば得られない利に目覚めてしまった時、ある領域における既存というものに　できることならばそれを構築する者にとって最大の利となるように　彼らを溶けこませようとするのなら、そこに現出するのは一種の相克。同類であつてすら争いが絶えず、それゆえに構築されてきた感情の回収と利害の整理を目的とする諸々は、当然、ある程度において良否や善悪の定義が共有されている者たちが構成する一定の領域においてしか意味はなさない。極論するのなら、それは、納得を生み出すために感情を排するという選択の極致が吐き出した帰結。同類ですらそれなのだから、相対する者たちにおける純然なる利害の一致など、夢想するにもほどがある」

ぱらり、と、羊皮紙が捲られた。

「だが、もしも普遍たる一致が在るとするのなら」

ゆるやかな上澄みに沈む執着のような響きに、思わず、背伸びをしながら壁に並んだ本の背表紙に指をかけていた僕は肩越しに背後を振り返る。

そこにいたのは、少しだけ離れた位置に置かれた燭台にゆらめく控え目な橙にさざめく、羊皮紙を捲り続ける眼鏡をかけた男。穏やかな蒼の目で文字を追いながら、ゆったりと、男は唇だけを動かす。

「何ものにも左右されず干渉すら弾きながら立ち続けるそれが在るとするのなら、夢想は理想へと変転するのではないかと、そんな夢物語を描いてしまうほどには」

ひどく惹きつけられ、ひどく甘やかで、焦がれるほどに魅せられる。それが衝動とは別なものである、と、そう断言することは誰にもできないであろうけれど。

あのひとの言葉を借りるなら、結果として、あのひとは水に漬され吞まれたのだろう。

その時、あのひとの目には何が見えたのだろうか。望んでいたのかもしれない立ち位置に納まった時、あのひとの目は、何が。

結局はあのひとの思惑など何ひとつ明らかにならないまま、ふわふわとした憶測といささか刺々しい思惑だけが絡まって、あのひとを首謀としたあの出来事はいまだ着地することができずに浮遊しているようでもある。

まあ、そんなことはどうでもいいのだけれど。

「僕はね、何が正しいことなのか、とか、何がいけないことなのか、とか。実のところ、よくわかってはいないんだ」

おそらく、あの時、僕は寝ぼけていたのだと思う。口をついて出た唐突な僕の言葉に、淡い翡翠色の目を瞬いた後、君はゆっくり首を傾げた。

なんとか瞼を持ち上げながら、陽だまりに丸まりながら包る毛布のあたたかさに甘え、眠りに火照った肌を撫でる窓から迷いこんだ風の涼やかさに満たされた気分になる。鼻腔をくすぐる爽やかな酸味に肌が泡立つような錯覚を覚える。窓辺に置いた椅子に腰かけて林檎の皮を剥く君の風に揺れる髪が、太陽の祝福に煌いて、淡い黄金に見えた。

ぼんやりとした視界の中において、その煌きだけがひどく鮮やかで。

「それなのに」

唇から零れ落ちる声がかたちづくるのは、ろくに回っていない思考に基づいて紡がれたものではなく、無意識よりも反射に近い言葉。

「それなのに、これだけはしたくない、とか、それだけは許せない、とか。そういったことなら、なぜかあるんだ」

僕は、何を、言っているんだろうか。こんなことを口走ったところで、何も生み出さないし、相手が困るだけだ。これ以上もなく無意味で、これ以上もなくくだらない。にもかかわらず、なぜか堰を切ったかのように唇は動くことを止めなくて。

「綺麗なことを言うのが偽善者で、理想を騙るのが痴れ者で、夢を追うのが愚か者なら、僕は偽善者の痴れ者の愚か者でかまわない」

ああ、くだらない。

僕はもう為す術もなく焼き出された子どもではないし、助けられたかもしれない誰かを見捨ててあの館を襲った炎から逃れた程度には

この身が可愛い。誰かを踏み台にしなければ蹴散らされて喰らわれるだけだということくらい、知っている。

それでも、そんな薄っぺらなものにでも縋らなければ立っていられなくて。

僕が盾にしているものは理不尽でしかないことなど解っていて、僕が盾にしているものは身勝手ではないことは解っている。

世界のすべては正しいのだろうか？

だからこそ僕は、この身を取り巻く世界なるものに、わがままを振りかざして対峙するんだ。

眇めた目にぼやける視界を満たすのは、微粒子がゆらめき踊るような錯覚を覚えるまでに明るい、陽光の黄金。その感触は月光よりもやわらかく、そのあたたかさは暖炉の炎よりも優しい。

皮を剥き切り分けた林檎を盛った皿を窓の棧に置き、毛布から抜け出す気配のない僕を見かねたのか、君はゆったりとした所作で立ちあがる。

気がつけば、部屋を出ていこうとした君の手首を掴んでいた。

不思議そうに目を瞬く君に、そもそもどうしてこんなことをしているのかを理解できていない僕は君の淡い翡翠を見上げることしかできない。

不意に、心地よい冷ややかさが落ちた。

身を屈める君の薄い影が僕に重なり、ゆるやかな笑みのかたちを描く君の唇が前髪の上から僕の額にそっと触れる。

「おはよう、よ。セルヴ。いい加減に起きなさい」

ほんの少しだけ低い苦笑を孕んだ君の声が、僕の耳をくすぐる。

くだらないものを手にしていたくて、大切とされるものを投げ捨てた。

くだらないものを手にしていたくて、何かを信じようとすることから躊躇した。

他の誰かにとつては塵芥でしかないものを宝物だと思いこんでいる僕は、それを失うことが怖くて怖くてどうしようもない。

僕にとつて価値があればそれでいい。

他の誰かにとつてのそれがどんなものであるのかなど、それこそどうでもいい。

ただひとつ、確かなことは。

この陽だまりを手放さないために、僕は、愚かとされる選択肢ばかりを選び続けるのだらう。

七層から成る白亜の城塞都市の、その三層と四層とを跨ぎ聳え立つ、莊嚴なる信仰の家　聖テルム大聖堂。

仰いですら遠い天より降り注ぐ透きとおった陽光が直線的に折り重なるその大聖堂は、硬質な目映さをもつて落ちる光の筋と比した翳りの裡に、絢爛と美麗の黄金と極彩とを煌かせながら漣すら忌避するような静寂を満たしている。

理の女神とふたりの聖人。彫像における彼らは豪奢であり、絵画における彼らは壮麗であり、啓典における彼らはいずれ舞い来たるであろう神代の残滓でもある。

天を仰ぎながら祈りの場に立つのは、どこか淡い印象のある黒の髪の毛、碧の目を持つ、背の高い壮年の男。偶像として具現した啓典に圧倒されながらも、その身に刻まれた疲弊のようなものが薄れることはない。それは、圧倒されるしかないものに晒されてすら男を男と成す、脆弱な砦のようなものであるのかもしれない。

不意に、音の均衡が乱れる。軋みというさざめきが、そこに満ちる静寂をゆらめかせた。

天を仰いでいた男が、ゆつくりと、身体を反転させながら眼を降下させる。

降り注ぐ光、煌きを秘めた翳り。

重々しく開かれた扉。扉の前に立つのは、董色の目のひとりの少年。わずかな驚愕をその目に閃かせながらまっすぐに男を見つめる少年の肩を、少年の背後に佇んでいた黒衣を纏う青年が軽く押して先に進むことを促す。少年と青年を隔てるように閉じられゆく扉、その様を黙したまま見据える男。やがて少年は歩を踏み出し、透きとおった光に艶めくその黒の短髪が揺れた。

顔立ちに幼さを残す小さな少年の、あどけなさなど微塵も見当たらない董色の目に、穏やかに目を細める男の姿が映る。

やがて少年は男の前に辿り着き、男は当然であるかのようにその場に跪いた。表情を動かさないままわずかに困惑を滲ませる少年を知ってか知らずか、床に眼を落としたまま、男は声を響かせる。

「お元気そうで何よりです」

男は鷹揚に顔を上げ、穏やかな微笑を浮かべたまま、鋭いだけの碧の目で少年を見据えた。

「公爵」

紡がれた呼称に、少年はかすかに顎を持ち上げ、数度、目を瞬く。そして、一瞬だけ眼をあらぬ方向に遣った後、ほのかに失笑のようなものをたゆたわせながら、ゆったりと目を伏せた。落とされたその眼の先には、無言のままに少年を捉える臣の碧。

帝国の東の小国群立地帯。その筆頭とされていたのが、ヴォルガ河を挟んで帝国と接するカルヴィニア公国。

終結から一年も経たない第二次ヴォルガ河防衛戦　あくまでこれは帝国側からの見方ではあるが　において公爵を喪った公国は、事実上、宗主たるアレス王国に併呑された。そして、少年の前に跪くこの男こそ。

「あなたも、ジルベルト・ヴェリ」

第二次ヴォルガ河防衛戦にて公国を率いたカルヴィニア公爵アロルドの嫡子　リラ・コトウスの冷徹とも取れる董色の目の中で、ヴァルナ神教ファウストウス派の総本山たる帝国国教会を頼り亡命してきたカルヴィニア公国の重臣　ジルベルト・ヴェリはその碧の目に満足そうな色をちらつかせた。

「さて。どこまで華麗に踊ってくれるか、あの子どもは」

瀟洒なる大聖堂の裏、質素なる枢機卿長の執務室。執務室の主よりも主らしく長椅子に寛ぐ老人　オリヴィエーロ枢機卿の蒼の目に、どこか愉しげな色が閃く。黒髪の少年を大聖堂に送り届けた黒衣の青年　ヘッセン・ダルムシュタット大司教イエレミアスが、重厚なだけの扉を背に、執務室の最奥、組んだ指の上に顎を載せて机につく壮年の男　枢機卿長アルノー・アルマリックに礼を尽くした。オリヴィエーロの寛ぐ長椅子の背後にイエレミアスが立つことを待ってから、薄い皮肉を滲ませながら枢機卿長が唇を持ち上げる。

「華々しく踊ってもらうさ。そうでなければ意味がない」

瞼を落とし、オリヴィエーロは笑む。

「ついに重い腰を上げるか」

「時機を待っていた、と、言って欲しいものだな」

微苦笑を孕む枢機卿長に、オリヴィエーロがおかしそうに笑う。



「どちらとて同じことだ。だが、それでこそあの子どもを飼っていた甲斐があるというもの。我らの煙幕だ、存分に暴れてもらおう。亡国の臣があの子どもを使って得ようとしているものを、あの子どもが欲しているとは限らないが」

「それを彼らが得ようが得られまいが、そんなことは我々にとって些事でしかない。ただ、彼らがそれを手にするのなら、そこに我らが根を張らないでいることは愚かではないだろうな」

「そのために手を打つことなら、厭わぬかな？」

悠然と枢機卿長を見据えるオリヴィエーロ。

「我々が理の女神の婢たんとするのならば」

どこことなく神経質そうな不敵さを滲ませる音律が枢機卿長の唇から奏でられ、

「あらゆる頂を越え遍く大地の果てまでもを、蒼穹の理の恩恵に浴せしめよう」

泰然と傲然と、無邪気さを秘めた沈むような声音を響かせるオリヴィエーロの口許の笑みが深くなる。その背後、わずかに眼を上げたイエレミールアスの薄い瞼が、ゆっくりと、平坦を印象とするその蒼を隠した。

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の第3日。トリーアにおける帝国議会は否決をもって閉会したが、その議決に反対する議員等が連名によって議会の招集を要請。皇帝はそれを容認。同9

日、再びトリーアにて議会が持たれるも、議論の帰結の方向そのものは変化することなく平行線を辿り、一時休会を迎えた。この間、帝国議会における新興階級の筆頭たるウィリアム・アリンガムが、その母体を代表する者として、帝都における議会再開を一方的に宣言。独断で再開を表明するに飽きたらず、独断をもつて都市議会をも同時開催させるとしたこの宣言は、来たるアプリリウスの月の第30日にその舞台を約束する。

そして、ファウストウス暦423年というこの年代は、帝国史においてはもとより、ヴァルーナ神教 特にファウストウス派 においても特筆すべき年として語り継がれることになる。

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の第6日。この日、帝国国教会枢機卿長の名においてひとつの招集が生まれた。

帝国中西部ストラスクライド山脈、そこを彩るは天空を統べる理。漆黒が広がる不毛の土地 ヴァルーナ神教における聖地ファリアス。

帝国国教会によるファリアス公会議開催決定。

これにより、帝国における皇帝と教会との関係は一変する。

The second act - 12 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 13

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 3 / 02

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

見上げた空は果てもなく高く、弓なりに広がる雲は蒼穹の蒼を透かす。

大気に潜むのは若葉の香。芽吹きのかきざしさを秘めた風が、まろやかな触感をもって肌を撫で、決して手が届くことのない透明な半球に閉じこめられているかのような錯覚を呼び起こす空へと吹き抜けてゆく。

帝都第一層　異民族街。ほとんど密着するように立ち並ぶ家々が競うように空へと伸び、石畳の細い道がそれらの間を縫って走っている、どこか窮屈で雑然とした印象の街。

そんな街並みを見上げたり見下ろしたりできる半端な高さの建物の屋上で、トウルスは見るともなしに降り注ぐ陽光に映える白亜の上層を眺めていた。

はたり、と、鳥の羽音が大気を叩く。

トウルスの傍ら、餌をやるために鳩小屋の扉を開けたディアスの手にはばたく白い鳩が集まり、やがてそのはばたきは蒼穹へと旅立っていった。やわらかいもののどこか鋭さを帯びてきた陽光に鳩の白が煌き、群れを成して大気を泳ぐその白は閃光めいた目映さを撒く。穏やかな笑みをたゆたわせながら飛びゆく鳩の軌跡を追うディアスの蜜蝋の目に、帝都の白に交じる黒煙が映った。図らずも、それは

トウルスの眼の先と重なる。それに気づいたトウルスが、どこか皮肉っぽい薄い笑みを含みながら、傍らのディアスに眼を遣った。無言のまま向けられてくる深い緑の目に、ディアスは軽く肩をすくめる。

「今日はあつちみたいだね」

帝都の上層と下層の境目、帝都総督府のある第三層を見上げながら、ディアス。

「どこまで暇なのかな？」

不機嫌さを隠しもしないトウルスが、棘を孕む冷笑とともにそう吐き出す。そんなトウルスに、無理もないといった様でディアスはおらかな苦笑を浮かべた。

「必死、って、言うんだよ。ああいうのは。生きることに対してね」  
「日常が脅かされてなければ僕だって同じことを思うさ」

臉を落としてため息をつくトウルス。そんなアルウェルニー族に同意しながら、ディアスは再び白亜に眼を向ける。

「あつちで黒煙が上がってるってことは、とりあえず、今はこちらが安全ってことになるのかな」

「あまり好きじゃないけどね、そういう判断基準。どうでもいいけど」

「でも事実だからねえ」

「だから嫌いなんだよ」

げんなりと失笑を浮かべるトウルスにディアスが思わずといった様

で笑みを零す。

吹き抜ける風に融けた緑のきらきらしさがひどく心地よい。  
緒の髪を風に遊ばせながら、ディアスがトゥルスに向き直る。

「とりあえず、中に戻ろうか。そろそろリーザちゃんも帰ってくる  
だろうし、一緒に闇医者殿と子どもたちも来るかもしれない」

明るい橙の髪を風に弄われながら、トゥルスが首を傾げた。

「そういえば、最近、オーギュストの姿を見ないけど」

これにディアスは困ったように笑い、

「詳しいことは判らないけど、まあ、異民族街が物騒だったり、今は第三層で黒煙が上がってるみたいにな、このところの帝都はあつちこつちで騒動が絶えないから、忙しいんじゃないのかな？」  
「だから出歩くのは控えろって言うてるのに」

闇医者と一緒に仕事をしている薬師を脳裏に描いたトゥルスは苛立ちと心配とが縋い交ぜになった声音をその唇から吐き出した。

仰いだ蒼はあまりにも高く、その透きとおった球形を連想させる閉塞感と果ての無い広がりを感じさせる寄る辺の無さと、平坦にしてどこまでも沈んでしまいそうな深淵に、目眩めいた浮遊感を覚える。

帝都第七層　　皇宮。

ほのかに緑の香が雑じる、心地よく冷えた風が吹き抜ける廊下。開け放たれた窓から射しこむどこか白んだ印象の鋭さを孕んだやわら

かな陽光は、緩慢に微粒子が舞い踊るがときそのあたたかさを幾重にも重ねながら廊下の暗がりには滞留してゆく。

回廊を歩んでいた緑髪の女が、ひとつの扉の前で足を停めた。それに合わせて、女の数歩後を歩んでいた金髪の従者も足を停める。風を取り入れるためかただの不用心なのか、その扉だけが細く開いていた。

そこには、扉の向こう、部屋を通り過ぎたところにあるはずの中庭に溢れる緑の、小川の流れのようにさざめくその緑陰に浸りながら佇む黒の巻き毛の少女の後ろ姿が覗いている。少女の周囲の床に散らばっているのは絵筆や鋳物の欠片といった画材であり、その正面にあるのは描きかけの肖像画。未完成のそれを見つめたまま、誘われるように女　ラヴェンナは画材を片づけているらしい少女の背後まで歩み寄り、悪戯っぽく微笑しながら呟きを落とす。

「実物よりも、底が深そうだわ」

弾かれたように首を擡げ、それでもなお無感動に見上げてくる黒髪の少女　ジジの硝子玉のような蒼の目を、それによって呟きを零したことに気づいたらしいラヴェンナは蒼穹をそのまま嵌めこんだかのような蒼の目をもって申し訳なさそうに受け止める。

「驚かせてしまったのならごめんなさい。たまたま通りかかって、扉が開いていたものだから、つい」

どことなく悄然と小さくなった印象のラヴェンナに、ジジはゆるやかにぶりを振る。ジジの表情に変化はないものの、無機質な人形めいていたその雰囲気、ほのかなやわらかさが混じった。それに安堵したのかラヴェンナはゆるい微笑をつくる。

「貴女の後ろ盾であるはずのイエレミアスは枢機卿長と供にファ

リアスへ赴いてしまったから、置いていかれてしまったのかと思っただけれど。これではしょうがないわね。貴女に肖像を描いて欲しいというヴァレリアスの希望を無碍にすることなど、いくらイエレミアスであってもできないだろうから」

色を載せかけの肖像画を見つめて、ラヴェンナ。そんなラヴェンナを見上げたまま、ジジはわずかに首を傾げる。

「陛下は」

ジジのこの一言でラヴェンナはその言いたいところを汲んだらしく、はにかむような苦笑を浮かべながらその華奢な肩をすくめた。

「私は、あまり、描いてもらうのが得意ではなくて」

そんなラヴェンナに、数度目を瞬いた後、ジジは微笑ましいものを目の当たりにしてしまったかのようにくすりと笑う。

ざわり、と、抱きすくめればふわりとした弾力をその触感としていそうな樹々の葉が風に踊った。窓から吹きこむ土の香ときらきらしさとを孕んだ潤み冷えた風は、淡い陽だまりに蟠るやわらかなあたかさを掬うように攫って、細く開いた扉をその道筋として廊下へと抜けてゆく。晴れ渡った蒼穹から降り注ぐ陽光は芽吹いたばかりの若葉のまろやかなやわらかさを透かし、葉脈を浮かす緑はこここで重なりながら風に揺れた。その度に、ひんやりとした緑に和らげられることなく直に地上に落ちる陽光の鋭いだけの白が閃光のような煌きを放つ。

窓に歩み寄り、吹き抜ける風に緑髪を遊ばせながら外を眺めていたラヴェンナが、風にそよぐ大樹の硬質な透明を印象としながら漣めいた煌きとゆらめきとを撒く緑陰にその身を浸しながら目を眇めた。



「綺麗」

その朱唇から零れた感嘆に、

「お好きですか？」

純朴な問いを、ジジは抱く。相変わらずの対象を明らかにしないその問いに、扉の外、壁に背を預けて風に運ばれてくる主と画家の会話を耳にするしかなかった金髪の従者が静かに瞼を落として。

「そうね」

首を横に廻らせてラヴェンナを見つめるジジと、窓を背にその眼を正面から受けとめるラヴェンナ。

「好きよ」

その口許を彩ったのは、ゆるやかな微笑。

「とても、好き」

きらきらしい緑を背に、問いを放ったジジがきょとんとしてしまうほどの微笑みをもって紡がれた耳にまるやかな声音は、吹き抜ける風に誘われて、弓なりに広がる蒼穹を昇りつめながら潤んだ大気に散じてゆく。

ぱたぱたという軽やかな足音の気配が近づいてきた。印象としてそれらを遠ざけていた扉が勢いよく開かれ、涼やかな呼び鈴の音が鳴

り響く。

帝都第一層異民族街の酒場。

「こんにちは！」

「こんにちはっ！」

元気な挨拶と満面の笑顔を弾けさせて店内に駆け下りる幼子たち。

「いらっしやい、シグルくんにあニタちゃん」

棚の酒瓶を整理していたのっばの店主がにこやかに小さなお客様を迎える。

「と、闇医者殿」

子どもたちから上に移動した蜜蝋の目が捉えたのは、ついでのように付け加えられたヴィロツクのやや不満げな顔。闇医者 of のささやかな刺々しさなどまったく意に介さず、シルウア族の店主が浮かべるのはのどかな笑み。

そこに、店主の手伝いをしていたトウルスの不機嫌な声が滑りこんだ。

「リーザは？」

心なしか鋭い深い緑の目が、高いところにあるヴィロツクの蒼の目を見据える。そんなトウルスにヴィロツクは首を傾げる。

「今日は途中で別れた。薬草を仕入れに行くって言うてたが、俺は俺で回らなきゃならないところがあったんでな。まだ帰ってきてないのか？」

色めき立つように踵を返すトゥルスの背にディアスが穏やかな声を投げる。

「探しに行くのかい？ もうすぐ夕暮れだ、危ないよ」

「それは僕だけに当てはまることじゃないだろ」

歩を緩めることなく扉に向かうトゥルスをヴィロックが見上げた。

「一緒に行こうか」

「それこそ君に何かあったらその兄妹はどうするのさ、闇医者さん」

冷笑めいた皮肉っぽい笑みを浮かべ、トゥルスは拒絶を置き残して扉の外へと駆け出してゆく。

踊るように舞い散るように、呼び鈴の残響が落ちた。

「おい、トゥルス！」

忌々しげに舌打ちをして段を上るヴィロックの目の前で、閉まっていたはずの扉が開く。

そこにいたのは、きょとんとした顔の、半月眼鏡の優男。

「オーギュスト」

呻くように名を零すヴィロックと、

「リーザちゃん？」

ヴィロックの背後から顔を出すディアス。その様子を不安そうに兄

妹が見上げている。状況が呑みこめないでいる半月眼鏡が困ったように頭を掻いた。

「さっきそこで会ったから一緒に来たんだ。血相変えてトウルス君が出てくのが見えたけど、なにかあったのかい？」

どうして呼びとめなかった、などと無茶なことを喚きながら胸倉を掴んでくる闇医者にそれこそ困り切った悲鳴をあげるオーギュストの数歩後、扉の外、艶めいた陽光に包まれながら立ち尽くすリーザの淡い翡翠の目が揺れる。それを見かねて、というわけでもなく、純然たる判断としてディアスにはこりと笑った。

「フィル」

夕焼けの艶やかな翳りを孕んできた大気の中、やわらかくも筋の通った声音が響く。

「ちょっと頼まれてほしいことがあるんだけど」

それまで必死になって闇医者をいなしていたオーギュストがするりとディアスの前に進み出た。躲されたヴィロツクは軽く肩をすくめる。

射しこむ陽光の、その鋭さこそが華やかで。

「トウルスくんを追いかけられないかな？」

シルウア族の蜜蝋の目に斜陽の銅が過ぎる。いささか芝居がかった仕草で、悪戯っぽく、オーギュストが首を傾げた。

「報酬は？」

「秘蔵の林檎酒を一本」

にやり、と、オーギュストは笑みを浮かべると、

「承った」

その長身を翻して、茜の滲み始めた街へと繰り出して行つた。

ざわり、と、樹々の葉が躍つた。ほころびかけている黄や赤の花の蕾と、風に遊ばれながら蜜を求めて舞う蝶。水を孕んでどこかぼんやりとしている青空と、大気に満ちる白くやわらかな陽光。花壇や木々が噴水を中心に等しく咲き乱れそよいでいるのは、高台に宮殿を仰ぐ、対象を旨とする広大にして平坦な庭。

精緻なる庭園の噴水の前、咲きほころぶ花々を眺めていた初老の男の耳に土が踏み固められる音に重なるいくつかの衣擦れが届く。ゆったりと身体を反転させる男の目が捉えたのは、離れたところに側仕えの者を待たせているのであるう、三つの人影。それらのひとつは 宝石をちりばめた華やかな衣装を纏う肉の弛んだ小柄な女が唇を持ち上げた。

「ようこそ、アレスへ」

前アクイレシア公爵ガイウスの正妻にしてアクイレシア公爵カトウルスの母 クロディーヌ。扇子に隠された微笑に懐かしさを覚えるわけでもなく、男はクロディーヌのやや後ろに佇む癖の無い絹糸のような金髪を風に流す細目がちな女の碧の目にひたと己のそれを据えた。薄い唇が笑みのかたちに吊り上がり、淡々と氷を掻き削ぐような女の声が男の名を紡ぐ。

「マデルノ卿」

初老の男　帝国宰相メルキオルレ・マデルノ。かつてのその肩書きは、男の眼前で微笑むクロディーヌとの繋がり、ひいてはアレヌとの繋がり、今となつては意味するものとなっている。  
金髪の子を見据えたまま、マデルノが問うた。

「迎えを寄こしたのは、貴女か？」

女は微笑をたゆたわせながら眼を傍らに落とす。

「陛下の、御意志ですよ」

つと、女がいとおしむような眼差しを向けるそこには、碧の目を持つ金の癖毛の少年。

アレヌ王国第121代目国王　ロシュフォール。

俯いたまま地を見つめ続ける少年王の傍らで、その母にして摂政たる先王の愛妾　ベレンガリア・ファルジアは、研ぎ澄まされた氷のような嫣然たる微笑をもって、黙然と少年王の様子を窺うマデルノを絡め取った。

「逗留先を用意させます。それまではこの王宮でお寛ぎを」

問いへの答えが用意されないことが何よりの肯定であるのなら、女の傍らで挟らんばかりに地を見つめ唇を噛みしめる少年のその様こそが、少年王の無力さの何よりの証明でもあった。

アレヌの王宮、アウグスト同盟に連なつた者たちの亡命の先。

風が運ぶのは甘やかな花の香。蜜に戯れる蝶と、飛沫を煌かせる噴水と。

その完璧に編み上げられた緻密なる庭園の片隅で。

「御心に、感謝します」

口許を扇子で覆って満足そうに目を細めるクロディーヌと冷笑をたゆたわせるベレンガリアと、どこまでも正面から眼を向けられることに半ば呆然としている少年王を前に、メルキオルレ・マデルノは優雅に膝を折った。

艶やかな茜が背の高い建物がひしめく街の壁や道に黒々とした影を投げかける。それは、夜の青褐に比すれば重く、あたたかくやわらかで、これより眠りを迎えるひとびとの息吹と斜陽の光沢とが緋い交ぜになった冷ややかな翳りだった。

帝都第一層　異民族街。空を目指して増築された、どこことなく不均衡な建造物。異民族街では珍しくもない、左右にそれを配する閑散とした石畳の道。溪谷とその底の小川にも似た佇まいは今にも崩れてしまいそうで、薄皮一枚のところどころで保たれている均衡は斜陽の冷やかさに塗り固められている。

薄暮に頬を濡らされながら歩んでいたアルウェルニー族の青年が、不意に、背後から伸びてきた腕に首を抱えるように掬われて裏路地に引きずりこまれた。

石畳を撫でる風に含まれるのは、息を殺す警戒心と、そこからの解放へ渴望を潜ませる緊迫。

猫が裏路地から銅の小道へと駆け出してきた。石を砕くような、柔らかなものが打ちすえられるような、鈍い重みを孕む振動が幾度も重なりながら音と化す。

夕陽の華やかな艶を滲ませる、薄暗い裏路地。煌きという陽光の彩りを羨望するかのような饅えた翳りの中、連れこまれた裏路地で数

人の青年に殴打され蹴り伏されるアルウェルニー族。異民族を壁際に追いつめ、ひとりの青年が馬乗りになって拳を振り上げる。その周囲の高いところで弾けたのは、いくつもの嘲笑。このひとつを排せば、おそらくは、一步、穏やかな豊かさへと近づく。正当を手に笑みを撒き散らす数と力とに優越を抱いていた青年の蒼の目に、突然、驚愕と焦燥が走った。

「そんなに意外かな」

そこに咲き乱れたのは、唇の端に血を滲ませるアルウェルニー族の、皮肉っぽい冷笑。

「こんなこと思ってもみなかった？ 羨ましいくらいにおめでたい頭をしているね」

懐から出した小銃を青年の眉間に密着させ、アルウェルニー族は失笑を撒く。

世界に満ちる翳りの、やわらかさなど微塵も見当たらない斜陽の、冷やかな熱が心地よい。

「異民族のひとりを消せばウエネティー人の取り分が少しでも増えると、そんなこと素直に信じてるわけ？ どこまで単純なのかな。いや、それこそが善良さの証明か」

狼狽に蒼の目をゆらめかせる青年と、恐慌寸前の恐怖をもって動きを停める周囲の青年たち。否応なしに視界に入ってくる彼らに不愉快そうに眉をひそめながら、アルウェルニー族は小銃を構えたまま軽く肩をすくめる。その際にどこか痛んだのか、小さな舌打ちが響いた。

夕陽の銅は黄昏の黄金にその色をゆらめかせ、夕暮れと夜の挟間の



薄闇が異民族街を染める。

ふ、と、アルウェルニー族が口の端を持ち上げた。

「相手の存在を否定しておいて、自分の存在が否定されることがないなんて、そんなことがありえるとも？ そんなに世界は君の味方をしてくれたのかな？ そんなに理の女神は君に祝福を降り注いでいてくれた？ さて、どうだった？」

ぐ、と、青年の眉間の肉を銃口が持ち上げる。

「遠慮することはないさ」

痛めつけられ弱っているはずの異民族の、迷いこめば吞まれるしかないであろう鬱蒼とした森を想起させる深い緑の目が細められて。

「ほら、答えてみなよ」

ゆるい笑みをかたちづくる唇から放たれる催促と、力の籠もる引金にかけられた指。

もはや影でしかないものたちが折り重なる夜の異民族街に。

「はい、そこまで」

緊張感など欠片も無い、どことなく軽薄な調子の声が響き渡った。

肉が衝撃を受けとめた鈍い音と呻吟とを纏いながら立つ呆れを隠そうともしない半月眼鏡の青年が、アルウェルニー族の緑の目に映りこむ。その半月眼鏡は、路地裏に集っていたウェネティー人のひとりの鳩尾に拳を入れて動けなくした後にその傍らのひとりに彼を投げ渡し、異民族に銃口をつきつけられているひとりを羽交い締め

するようにして立たせ、こちらも朋友らしい動きを停めている青年たちに投げ渡した。そしてにこりと微笑む。

「夜の街は物騒だからね。こんなところで夜遊びなんかしてないで、まっすぐ家に帰りなさい」

壁に背を預けたまま石畳に座りこんで不機嫌に黙りこんでいるアルウェルニー族を庇うように立つ半月眼鏡が、胡散臭いばかりの笑みをひけらかしながら、ひらひらと軽薄に手を振った。その腰に佩かれている剣に気づいたからか、ひとりを見失神させられたことに敵わないと自覚したからか、青年たちは散るようにその場を去ってゆく。青褐が街の黒を染め上げる、静寂に緊迫を潜ませる路地裏で。

「まったく、年長者の忠告は聞くものだよ。リーザちゃんにもシャルにも闇医者一家にも心配かけて」

やんわりとした糾弾とともに苦笑を零しながら、オーギュストが座りこんだままのトゥルスに手を差し出した。半月眼鏡の語る言葉に大方の事情を察したのか、素直に差し出された手を取ったトゥルスは立ち上がりながら皮肉っぽい笑みをつくる。

「僕の値段はいくらなのさ」

よろつきながら銃をしまいつつ、上目遣いに見上げてくるトゥルスの試すようなこの物言いに、

「内緒」

と、からかうような面白がるような笑みを浮かべながら、オーギュストは踵を返した。

The second act - 13 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 14

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 3 / 03

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

艶やかな軌跡を残像としながら、蠟燭の炎がさざめく。熱に濡れ煌きを孕む闇に、緩慢に逆巻く紫煙がその深淵を透かすように浮かび上がった。

帝都第三層    ユスキュダル・バニヤス邸。

紫煙を吐いた口許を撫で、バニヤスがその蒼の目に愉しげな色を閃かせる。

「なるほど、妙案ではある。名目上は同列であるとはいえ、議会において貴殿らの力は弱い。なれば、どこから追い風を得るか。各代表の利益調整を旨とする議会の一面を強調するのなら、味方につけようとするに不足はなからう。個々の発言が脆弱であるのなら、数を揃えるまで。この帝国において最も多数であるのは彼らだ。だが、どうやって餌を撒く？」

椅子に寛ぐバニヤスの眼の先、辛うじてさざめきに照らし出される、灯りと夜の挟間に立つアリングラムがゆったりと唇を笑みのかたちにする。

「亡命者の」

対象を明確にしないまま踊る空論に、明瞭な発音で放たれたのはそれそのものを省いた端的な結論。だが、さほど驚くこともなく、その場に居合わせた椅子に寛ぐふたりの男　バニヤスとヨーヴィルは二者二様に一応の納得を示す。前者は面白がるような顔で若輩の議員を見遣り、後者は単眼鏡の奥の蒼の目を細めた。曇った燐光を纏うように紫煙を纏うバニヤスが唇を持ち上げる。

「アウグスト同盟に連なった諸侯の領地か。領主の亡命によって封土が浮いているのは確かだな。それをばら撒ければ願ったり叶ったりではある。だが、残念ながら、その権限は貴殿にはない。勿論、議会にも、だ。帝国という大地を意のままにするは皇帝のみ」

求める議決を既成事実として先行させるつもりか？

バニヤスの蒼の目には興味深いものを見つけた少年のような純心な煌き。ゆるく、アリングムの口の端が吊り上がる。薄い笑みの気配をたゆたわせながら、ヨーヴィルが口を挟んだ。

「異教の神話では破壊を司る神は再生をも司るという。変容を破壊と言い換えるのなら、順当に考えて、それを成す者はそこで破壊されるものによってゆらぐことのない足場を持つ者。もしくは、ゆらいだとしても、その程度は瑣末事、と、一笑に伏せるだけの地盤を他に持つ者。既存の変容とは素地の移行と同じ。ゆえに、零れ落ちゆく何者かが生まれるのは必至。君が味方につけようとしているのは、君と同じものを求めているようで、その実まったく君とは別のものを求めている。生きていくために必要なものを求めるが、生きていく以上のものは求めている。一方、君が立っているのは、生きていく以上のものをもとにその最大の価値をもつての交換を実現する。その意味においてのみ何ものにも干渉されないことを求め、その意味においてのみ規制という保護を求める。その場とそ

れに係る者の繋がり。だが、君たちは少数であり、一面において数は力。それは間違いない」

淡々と語るヨーヴィルの捉えどころのない横顔を眺めながら、バニヤスは煙を喫む。単眼鏡の先に在るのは、窺うように探るように老練なる銀行家を見据えるアリンガムのふてぶてしいまでに泰然とした笑み。

「だが、どうするつもりかな？」

軽やかな口調がさざめきに踊り、

「上手に捌わないと、後に足を取られる」

悠然とした笑みがさざめきに弾けた。

「それとも、そんな余力など与えないつもりかい？」

脚を組んで椅子に寛ぐヨーヴィルは、頬づえをつきながら、わずかに首を傾げてみせる。

「どうなのかな、ウィリアム・アリンガム」

試すような面白がるような、それでも相手の眼を絡め取るだけの鋭さをもって、ヨーヴィル。単眼鏡が弾く灯は橙に濡れ、その奥の色を覆い隠す。

「求める結論が同じであれば、手を組むには充分ですよ」

唇に笑みを描かせたままアリンガムはゆったりと瞼を落とした。

そこに在ったのは、拒絶めいた断絶。

不遜なまでに傲然と持論を呈するアリンガムに、バニヤスが愉しげに喉を鳴らした。

同じ館の別の部屋、窓から滲む冷気に頬を撫でられながら立つトウルスに、ひとりの客人を伴って現れたラエルティオスが苦笑を零す。

「ひどい顔ですね」

「君には関係ないだろ」

やや腫れ気味の湿布を貼った顔をあらぬ方に向けながら、トウルスは不機嫌さを隠すことなく吐き捨てる。

「そんな態度は初対面の相手に失礼ですよ」

押し黙り唇を引き結んだテウトニー族に更に苦笑を重ねて、ラエルティオスは一步脇に退いた。閉じた扉の前で立ち尽くしているウエネティー人に場所を譲る。自らを凝視してくる少年とも青年ともつかない小柄なウエネティー人に、夜を跳ね返す窓を背に佇むトウルスは冷笑を零した。どこか含みのある深い緑の目がウエネティー人の蒼の目を見据える。

沁み渡るように満ちた沈黙に、蠟燭の芯の焦げる音が落ちた。

その場における年長者たるラエルティオスが、その紫紺の目を薄い瞼で隠しながら微笑をかたちづくる。

「そろそろ連れが用を済ます頃合いなので、私は席を外します。時間があればまたお会いしましょう」

「そのまま帰ればいいじゃない」

眉根を寄せながら突き放すトウルスに、

「そうおっしゃらずに」

ラエルティオスは隙のない微笑を浮かべる。その長身が室から消えて後、トウルスから眼を逸らすことなく、ウエネティー人が唇を持ち上げた。

「私はクロード・シャル」

その身に纏うどこかあどけない印象を裏切って堂々とした響きの短い名乗りに返ったのは、

「セルヴ・ノレーイア・トウルス」

名乗りとすら呼べないような自らを示す単語。

「バニヤス氏より、氏が懇意にしている親方の工房で手伝いをして  
いると聞いた」

「どうにかして稼がないと生きてけないだろ」

気の無い様子でトウルスは軽く肩をすくめる。

「どこで習った？」

身じろぎすらせず、眼を逸らすことなく、シャル。

「数ヶ国語と、古文書でしか見ないような言語から成る、写本を拝  
見した」

「写本は写本でしかない。意味が解らずとも写すだけなら誰だつて  
できる」

「原本と異なる部分が意味をもって成立しているとしても？」



目を細めながら、ゆつくりと、トゥルスは首を傾げてみせる。

「だから何？ どうしてそれが僕が僕の意図をもって生み出したものだと？ 誰かが提示したものを僕が写したただけかもしれないの？」

その透明の向こうに夜を封じる窓に蝋燭の炎が揺れる。軌道の残像すら鮮烈なそれは、ひどくやわからかに、対峙するアルウエルニ一族とウエネティー人を浮かび上がらせた。

「トーマス・ワーディング」

持ち出された名に、トゥルスはわずかに眉をひそめた。シャルルの蒼の目は、どこまでもまっすぐに、苛立ちを過らせた深い緑の目に据えられている。

「女傑と呼ばれた者の許に一時であれ身を寄せていた方の名だ。その際に、女傑の子息の教師をしていたらしい。事実上の、最後の直弟子という見方もできる。そして、子息の従者としてともに教鞭を受けていた異民族がいたと。その異民族は、緑の目をしていたと」

ゆらめく炎が濡らすアルウエルニ一族の横顔に、失笑が湧いた。

「まさか、それが僕だとか言い出すわけじゃないよね」

呆れているような苛立っているような、刺のある声音が響く。無言のままその声を受け止めるシャルルに、トゥルスは盛大な溜息をついてみせた。

「暴論。世の中にどれだけのアルウェルニ一族がいると？」

失笑に歪む頬を、失笑をかたちづくる唇を、さざめく灯が濡らす。

「もしそうだとしたら、どうするのさ？ もしそうだとするのなら、僕に何をさせたいわけ？ もっとも、何かをするつもりはないけどさ」

蒼の凝視を受けとめる深い緑。語られていることは裏腹に挑発めいているこの物言いに、初めて、シャルの蒼が揺れた。

「なぜ」

呟きのように零れた音を、断言をもってトゥルスは拾う。

「理解と受容は違う。心酔なんて論外だ」

沈みながら鋭くなる蒼に、炎の軌跡が映えた。

「なぜ？ あの方から直に教えを受けたということがどれだけ僥倖であるのか、解らないわけではないだろう？ あの方の理念を、理想を、理解しているのに、なぜ？」

「君、僕の話、聴いてた？」

眉をひそめ、トゥルスは不快を表明する。しかし、アルウェルニ一族のささやかな反駁はウエネティー人の勢いに潰された。

「なぜそれを体現しようとしない？ すべての基礎に、思考の方法に、その視野に、直に触れたはずなのに、なぜ？」

他の選択肢を認めない口調に、トゥルスの目に苛立ちが閃く。

「どうしてそれが当然だと？ 無条件での肯定なんて、それこそ、相手と正面から向き合うつもりであるのなら侮辱以外の何ものでもないだろ。だいたい、そのひとの意図をそのまま受けとめられているかどうかなんて誰にも判らないじゃないか。所詮、理解なんて主観だ。君が後生大事に抱いているそれがあのひとの抱いたそれと微塵も違うなど、どうしてそんなことが言える？」

皮肉めいた冷笑が声音に棘めいた鋭敏を与える。

「独りというひとりが、生まれ落ちて育まれゆくことも、生存を前提とすることも。それが当然であると、それを遍く者が生来に会得していると。すべてを投げうつてまで生きることにしがみつかなければ息をすることすらままならないのに、どうして疑うことなく受容することができる？ 定義しなければ存在しえないもの、定義しなければ生まれないもの。それがひとであるというのなら、それがひとが生きるに足る舞台であるというのなら」

夜を弾く大窓、外界より滲む夜の熱。残響が拡散した後に訪れた静寂、ゆらめく炎の鮮烈なる残像。それらを背に立つ青年の、蒼を射抜くだけの、冷徹なだけの深い緑の目。その目をもって、トゥルスは失笑とともに大気を震わせる。

「そんなものは幻想にすぎない」  
「貴様！」

張り詰めて軋む玻璃の鈍い振動が静寂を掻き騒がす。殴打するに似た勢いをもってトゥルスの背を硝子に抑えつけたシャルの蒼に、嘲弄を湛えた見下すだけの緑が映った。

「クロード！」

鋭く諫める声の主がシャルルの薄い肩を掴み後方に引く。それは、シャルルよりひとつ年上の、しなやかな赤毛を肩下に流す青年に近い少年。その少年が鋭さを帯びたままの蒼の目をアルウェルニー族に据えながら数歩後退するシャルルを己の腕の後に押しこんだ。

挑むように弄るように、赤毛の少年などそこにいないかのように、トウルスは薄い笑いをたゆたわせる。

「定義とは浮遊するものさ。それを成すのは言葉という一種の抽象であって、それをもって編まれて成るのが定義だとするのなら、その時点でそれはそれが示しているはずの実体から乖離せざるをえないのだから。だけど、抽象をもってでなければ同じものを見たわけでも触ったわけでもない多くの誰かの間で同じものがそれなりに共有されることは難しいというのも事実。使い方さえ知ってさえいればそれによって編み上げられている世界を理解することができもの。それが言葉という記号であり道具であり、その意味においてそれはどこまでも平等で公平であって、そして、それを解する者たちにある種の共有をもたらず。そこでもたらされる利は、それこそ、はかりしれない」

ふたりの少年の背後、扉の前に佇むラエルティオスの熱の希薄な白暫の面をトウルスは含みをもって一瞥した。

「定義の変転、もしくは再編ないし発見」

闇を封じた窓を背に立つトウルスの深い緑の目が、扉を背にした相対する三人を映し出す。

「君たちが何をしようとしているのかは知らないけど　あくまでもこれは僕がこう理解しているというだけのことではあるけれど　彼が意図したものを端的に言ってしまうばそうなる。だけど、別段それは特別なことじゃない。それは変わっていることに気づかないくらいに常にゆるやかに動いているものであり、だからこそ、それがあえて注目される時には注目されるということに対する理由がどこかに生じていて、むしろその状況の方が特異なんじゃないかと僕は思うけどね」

小さく肩をすくめるトウルスに、ほのかに楽しげな色をその紫紺に浮かべたラエルティオスがわずかに首を傾げてみせた。

「あえてそれを為すことには、意味がない、と？」

紫紺を見返す緑には、億劫そうな呆れているような色。

「あえてもなにも、それは常に誰かによって為されていて、成されているものさ。ここで問題になるとしたら、それがどういったものであるのかということと、それによって何を拒否し何を手にするかということ。そして、それが誰によって誰に広まっていくかということ。それだけが、敵と味方を　利害や損得といったものを生み出す」

アルウエルニー族を見据えるだけの少年と、その少年を無言の背中をもって諫める少年。そして、彼らを眺めるだけのテウトニー族。夜を弾く大窓、ゆらぐ蠟燭の灯。聳える硝子に透けるのは、アルウエルニー族の背中とふたりの少年と、悠然と咲き乱れるテウトニー族の微笑。冷笑をたゆたわせる緑の目が、ふたりのウエネティー人とひとりの異民族を捉えて。

「編み上げようと、しているんじゃないの？ 君たちは、君たちが君たちをもつて踊るに足りる舞台を、君たちが君たちをもつて決めることのできる世界を。生まれた瞬間に選択肢が消失しないことを、変えられないものを理由として可能性が摘み取られないことを。君たちなりの定義をもつて、それらが実現できるであろう原理を、編み上げようとしているんじゃないの？」

残像を閃かせながら踊る炎に片頬を曝されるアルウェルニー族の唇が、ゆるく、皮肉っぽい笑みをかたちづくる。

「そこに必要なのは血肉かな？ それとも蒼穹の女神が撒くに代わる理？ 多くの誰かが同じものを素晴らしいと礼賛すること？ 依存を引き千切ったところにしか成立しえない孤高？ 曖昧を駆逐しての明瞭？ その末の断片？ 擁護たる曖昧を拒絶して、依存たる扶助を断絶して。そうやって生み出した独りなるものを振りかざす君たちは、いったい何を欲しがってる？」

君たちが欲しがっているものを得るためには、それを成すことが必須なんだろう？

背後の気配がかすかに和らいだことを察して、赤毛の少年はゆっくりと腕を下ろした。

「なんて、ね。君たちがばら撒いてるものにはそういったことが書いてあったと記憶してるだけさ。僕の解釈が的を得てようが得てまいが、正直そんなのどうでもいいけど」

目に見えて億劫そうな気だるげな雰囲気を纏ったトゥルスに赤毛の少年が目礼する。

「連れの無礼をお詫びする」

「君は」

目を細めるトゥルスの眩きの誰何ではない響きに、ラエルティオス  
がその紫紺の目に不思議そうな色をたゆたわせた。テウトニー族の  
それに気づいたトゥルスは失敗したとばかりに眼を逸らす。

重々しく扉を軋ませながらふたりの少年が退室した後、扉に背を向  
けて佇んだままのラエルティオスが窓を背に佇んだままのトゥルス  
にひとつの名を投げた。

「ラモン・ダルファロ」

あたたかくも冷たくもない滑り落ちるだけの声音。窓硝子に背を預  
けて腕を組んで立つトゥルスの細められる緑の目には、紡いだ名の  
持ち主を好く思っているのか悪く思っているのかすら判然とさせな  
い白皙の面。

「彼は、クロード・シャールと行動をとともにする、フィツジェラル  
ド大学の学生です。ご存じのようでしたが」

テウトニー族の探るような目に、

「何度か見かけたことがあるだけだよ」

あらぬ方向に眼を遣りながら、トゥルス。北方民族のゆるやかに弧  
を描く薄い唇が、滑らかなだけの音を紡ぐ。

「クロード・シャールはワーディングの子どもたちと呼ばれる者の  
代表です。フィツジェラルドを放逐された学生であり、今なお地下  
に網を張るワーディング教授の亡霊に支えられる者たちの中核。で  
すが、貴族の出ではないそうです。彼の最高学府を学び舎とできる

ほどの、本人の実力と人脈と財力を有する家の一市民」

そこでラエルティオスはわずかに眼を持ち上げ、熱の希薄なその紫紺にどこまでもはぐらかすつもりであるらしいアルウェルニー族を映した。

「そして、先日のレーム塔襲撃の主謀格でもある」

トゥルスが盛大に眉をひそめる。

「なんでそんな厄介な人物がここにいるのさ？」

「さて、どうしてでしょうかね。ただ、彼は貴方と話をしたがつていましたよ。以前から、ね」

小さく肩をすくめるラエルティオスに、眉をひそめたままのトゥルスの目が鋭くなる。これに、おやおやといった様で、再び長身のテウトニー族は肩をすくめてみせた。

「随分と白熱していたようじゃないですか」

「あれのどこを見ててそう思ったわけ？」

「それでは、おとなげなく食いさがっていただけ、と」

おかしそうな笑みをつくる薄い唇から滑り出たからかうような声に、諦観すら漂わせながらトゥルスは溜息を吐く。

「まったく、誰から聞いたんだか」

くすりと、ラエルティオスが微笑した。

「羨ましいですか？」



トゥルスの眼が上がる。ほのかな苦笑を孕むテウトニー族の紫紺を見返すのは、胡乱げな深い緑。怪訝に覆われながらもそこに閃いた疑問を、目聡くもラエルティオスは掬う。

「あの子は貴方が羨ましくて羨ましくてどうしようもないようですけどね」

「ないものねだり、の、間違いじゃないの？」

「憧憬からの嫉妬、みたいなものなんじゃないですか？ あの子にとってはどれだけ渴望したとて手にすることのできない経験を、貴方は持つてしまっているのですから。それが貴方にとってどんな意味を持つものであるのかは別として、ですが」

ゆるく、トゥルスの口の端が吊り上がった。

「迷惑なだけだ」

ゆるゆると、ラエルティオスの薄い瞼が落とされた。

「私は、羨ましいですよ」

わずかに首を傾げて無言のまま疑問を呈するトゥルスの深い緑の目の中で、透きとおっているだけの印象を撒く微笑をたゆたわせたラエルティオスが唇を持ち上げる。

「私は、あの少年が、羨ましい。どうしてあそこまで独りが生きるということが他者によっても肯定されていると疑わずにいれるのか。私などと一緒にされてはお気に障るかもしれませんが、私や貴方のような生き方をしてきた者とは同じものに対しての捉え方がもとより違うのかもしれないね。ともあれ、それを見出そうと、それに

普遍を与えようと。そう躍起になっている私のような者にとっては、正直、あの純粹さに妬いてしまいます」

水底にたゆたう光のような煌きを孕むやわらかな苦笑を映したまま、腑に落ちない様のトゥルスは眉根を寄せて目を細める。ゆるやかに瞼を持ち上げながらラエルティオスはトゥルスを見据えた。

「トーマス・ワーディングはひとなるものを掲げました。それは、誰よりも貴方がよくご存知のはず。貴方が彼らをどう思っているかは知りませんが、その実現に命を懸けようとするほどに、彼らがそれに意義を見出していることだけは確かでしょう。少なくとも、皇帝と理の女神とが成すこの帝国は信じるに値しないということを、彼らは信じている」

呆れを隠すことなく、投げやりであることを繕うことなく、トゥルスは言葉を投げ捨てる。

「君にしる彼らにしる随分と僕を買い被ってくれているようだけど、僕が彼から得たものといえば最低限の読み書きくらいでしかない。だいたい、十二三歳の子どもにそんな話するわけないだろ」

困ったように、ラエルティオスは笑う。

「それを差し引いても彼らは貴方が羨ましいんですよ。そして、私は、たとえそうであつてすら、貴方はそれなりに　たとえその材料となったものが理解できないでいる欠片や断片のようなものでしかなくとも　彼の持論に近いものを自力でつくりあげているのではないかと思っているのですが」

「それこそ過大評価だね」

「そうですか？」

冷笑ではないものの冷えた水のようなまるやかな熱を湛える微笑をもって、ラエルティオスはわずかに首を傾げた。

「完全なる相違ゆえに決して叶わぬもの、ほぼ同一というわずかな差異により手を伸ばすことだけは叶うもの。喉から手が出るほどに渴望するその先に在るものがそういったものであったのなら、もどかしさを覚えるのは、どちらなのでしょうね」

眩きでしかない独白。トゥルスはやや面倒そうにテウトニー族を見遣る。

「利害の一致？」

「少し違います。彼らと我々の目指す表層における終着点が同じであるだけです。そして、私はウエネティー人ではない。それは差異でしかありませんが、決定的な差異。同じことを口にしたとて、その影響は、あまりにも違う。私は結果が得られればかまわないのです。誰がそれを成すのかはもとより手段でしかない」

皮肉っぽい笑みが、トゥルスの口許を彩った。

「何を掬いあげ、何を編みあげようとしてる？　そうまでして緻密に構築しないとかたちには成らないそれは、そうまでして雁字搦めにしないと生まれないそれは、果たして、これからにおいてその存在を当然とされることができるのかな？」

「不文律という同意、常態という無意識。すべての差異をねじ伏せる普遍。より多くの者のその領域にまでそれを刷りこむこと、それを前提とする利得の交換と保護とを　日々の糧を得るということそのものを　実現するということ。それらが差異をすら歯牙にもかけずに浸透してゆくとするのなら、おそらくは、可能でしょう？」

それまで気の無い様子でテウトニー族を眺めていたアルウェルニー族の緑の目に、ふと、興味を抱いたような関心を向けるような色が過ぎった。

「君とアリンガム卿は、同志というわけでは、ないわけ？」

わずかに顎を引き、わずかに眼を落とし、ラエルティオスはゆるい笑みをたゆたわせる。

「それこそ利害が一致しているだけです。彼が欲するものを実現するために必要なものが、私が得たいとするそれにも必要であるだけ。現状を後追いし、名目上は否定されているそれに肯定を与え、その過程において最大限の利を引き寄せること。既存を廃するとともに既存を存続させるという試み。万人に共通する秤を掲げ、その価値を浸透させ、それを必要なだけ得ることができるのであれば何者であっても欲するものを手にすることや成すことができる可能性を拓くという企み。ただし、私と彼とでは同じものに対する認識も展望も異なります。それは立ち位置の違いからくるものであって、それ以上のものではありません。そして、だからこそ、私は彼とともに歩んでいる」

持ち上げられる眼の先、黙したまま佇むアルウェルニー族。眺めるように見据えるように深い緑を向けてくるのは感情の希薄な青年。切れ長の紫紺の目に閃くのは、鮮やかにさざめく蝋燭の灯の残像と、静謐にして伶俐な薄氷めいた苛烈なる熱。

「つくりあげてみせますよ。私は、つくりあげてみせます。ひとなるものが生まれ育ち、ひとなるものが織り成す、ひとなるものが望む世を肯定する、未来と呼ばれる希望を」

静かなだけの微笑に彩られた言の葉は、ゆるやかに穏やかに、沈黙という透明に融けていった。

帝都第一層、異民族街の裏路地の酒場。子どもたちを寝かしつけた大人たちがカウンターを囲む。

「遅いな」

ヴィロックの呟きに、傍らに座るリーザが杯を傾けた。

「今日は帰ってこないんじゃないかしら」

杯の中で回転する氷の涼やかな音に、いつものようにグラスを磨いているのんびりとした店主の声が重なる。

「久々の私兵殿のご登場だったからね。おそらく、フィルはセルヴくんを迎えに来たんだと思うよ。だから、ふたりが遭遇したのならここに帰ってこないでそのまま目的地に向かうかもしれない」

「大丈夫よ、オーギュストさんが一緒なら」

ゆるやかな笑みをつくるリーザに、何か言いたげに唇を持ち上げかけたヴィロックは感情を呑みこむかのように一旦それを閉ざした。そして、高いところにある店主の蜜蝋の目を見据え、決定事項を音に乗せる。

「近いうちに帝都を出ていこうと思う」

ヴィロックのこの断言に、ディアスはわずかに目を睜り、わずかに首を傾げてみせた。そんなシルウア族にヴィロックはふてぶてしいまでの泰然とした笑みを浮かべてみせる。

「理由は、まあ、言うまでもないとは思うが、少なくとも、これらにおいて下層はろくな目に遭いそうにないからな。火種がなければ噂は生まれない。あんたには俺なんかより状況が見えているだろう?」

闇医者がほめかした噂というものに触れることなく、店主は困ったように笑う。

「それは判らないけど、仕事柄、裏に通じていることは確かだね。だけど、それは階層を問わずに診療廻りをしている君にだって言えることだ。闇医者殿にしか診せることのできないような、そんな患者たちを廻っている、君にも。だからこそそのその判断なんだろう?ともあれ、僕は限界までここにいるよ。仕事があるし、君と違って護らなきゃならない子どもたちがいるわけでもない」

「下手すると城門から出られなくなるぜ」

口許の笑みを深くするヴィロックに、ほのかな苦笑をたゆたわせながらディアスが瞼を落とす。

「できる限りのありのままを集めることが、僕の仕事さ」

呆れたように肩をすくめながら、ヴィロックは傍らの薬師を見遣った。

「リーザはどうする?」

「セルヴに相談するわ。オルトさんたちは今の場所を離れたくても

離れられないだろうし」

両手で包むように持った杯の、きらびやかに灯の橙を弾く氷を見つめながら、リーザ。

「本当に、そう思っているのか？」

余裕ともとれる笑みを消し去って、闇医者は薬師を眺めた。眇められる闇医者の蒼を見つめるために、リーザはゆっくりとした瞬きを伴いながらその翡翠を持ち上げる。

「いくら今の帝都が物騒だとはいえ、たかが異民族のひとりに侯爵の私兵がつかんてことは異常だろう？　護られるだけの何かを、護られなくてはならない何かを、相手にとってはそれだけの価値がある何かを、あいつがしているとは思わないのか？」

グラスを磨いていたディアスの手が停まった。ヴィロックを見つめたままのリーザはわずかにその翡翠をゆらめかせ、わずかに眼を逸らし、わずかに眼を落とす。そこに在ったのは、驚愕でも動揺でもなく、漠然と抱いていた推測を他者によって言い当てられたことに對する　リーザがそれを抱えていることにトウルスが気づいていなかったわけでもなく、リーザのそれに気づいてすらあえてトウルスが口にすることはなかった何かへの　追想めいた得心。失笑のような微笑のようなものに彩られた艶めいた唇から零れ落ちるのは、ほのかに皮肉めいた響き。

「もし、そうなら」

片眉を跳ね上げている怒っているのか不機嫌なのか判然としないヴィロックの蒼に、探るような色が浮かぶ。

「もし、そうであるのなら。いつの間にか黙ってふらつと姿を消したとしても、おかしくはないわね」

黙したまま目を細める闇医者。空の杯を弄うリーザの前に、ことんと酒の湛えられた杯が置かれた。リーザが眼を上げると、ディアスがにこやかに笑んでいる。

「僕の奢り」

どこまでも穏やかな店主に薬師の目許がやわらかくなった。

「ありがとう」

「どういたしまして」

そこに、

「怒らないのか？」

試すような腑に落ちないでいるようなヴィロックの声が滑りこむ。

「どうして？」

杯を片手にヴィロックに眼を遣り、おっとりと、不思議そうにリーザは首を傾げた。

「彼の生き方を評価できるのは彼だけよ。彼の生き様を左右できるのも、彼だけだわ。それはわたしが口出しするようなことではないし、口出したところで何をどうするのかを決められるのは、それによって諦めなければならぬことや負うであろう不利を呑みこ



む覚悟をすることができるのは　それこそ彼だけよ。彼の生き方を見た誰かがそれを愚かと謗ろうが無意味と見なそうが、強がりであつてもそれを突つ撥ねることのできる軸のようなものを、幸か不幸か、彼は得てしまっている。その面においてだけはとてつもなく頑固だから、ひとによつては我が儘としか取れないかもしれないけれど」

煌びやかに灯を弾く氷が、杯の中で涼やかな音を立てて回る。

「いつそのこと、わたしの知らないところで野垂れ死ねばいいのよ」  
淡々と穏やかに、ほのかな微笑すらたゆたわせながら、リーザ。わずかに目を瞠るヴィロックと瞬きを繰り返すディアスの眼の先で、リーザは杯を傾ける。

「わたしの目が届いてしまふのなら、そんなこと、赦しはしない。それがどんなに彼を彼たらしめる何かを侵すものであつたとしても、彼を彼として立たせる何かを潰すものであつたとしても。どんなに泣き喚かれようが、どんなにその矜持を踏み躪ろうが。ねじ伏せてでも殴り倒しても、引き摺り倒しても蹴り伏せてでも、絶対に逃したりしないわ」

生きるために生きること、無駄であるとは言わせない。

ここにはいない誰かに同情するかのように、ヴィロックは天井を仰いだ。そんなヴィロックにつられてか、ディアスは苦笑しながら肩をすくめる。

「だから」

笑みを刻む唇を濡らすのは酒の琥珀。

「それが厭なら、わたしの目が届かないところで野垂れ死ねばいいのよ」

聖テルム大聖堂　帝都第三層側告解室。

平坦にして掬えそうな、視界を塗り潰すだけの闇。ひとひとりがつとのことで座れるほどの狭い房。隙間風とともに漏れ光る燭台のゆらめきの気配だけが、細く仄かに、夜に凍えた大気を緩ませる。

「東へ行かねばならなくなつた」

闇を震わせたのは忌々しげな男の声。壁を隔てた傍らにいたのであろう男の声を、赤毛を闇に融かしている少年は聞く。

「枢機卿長の命だ。私をファリアスに赴かせたくないだけなのか厄介払いをしたいだけなのか、ともあれ、一時的にシルザ大司教の権限を委託されたことだけは確かだな。相変わらずカジミエシエ司教としての権限はオリヴィエーロ枢機卿に委任されたままだが、これなら、いつそのこと、私をカジミエシエ司教から解任しシルザ大司教に叙階してしまえばよいものを」

「選帝侯のひとりにフィツジェラルドの系譜の者を就かせること。それは我々と教会との暗黙の了解。それに、叙任を手中にするは陛下であり、枢機卿長ではありません」

淡々とした宥めるような少年の声。その残響に絡むは冷笑を含むささやかな棘。

「いまだ形骸を繕う程度には気を配っているらしい。もっとも、ど

こちらのどちらに対する牽制で手綱であるのか、今となつては曖昧にもほどがあるが」

「お互いのお互いに対する発言の窓口としての、ひとり。それが本来の旨であつたはず。猊下がその座に坐すことそのものが、何ものにも代えがたき意義そのものである、と」

「随分と賢しうな口を利く。なるほど、お目付け役には適任か。扇動者としても申し分ないな」

呆れたような声はやわらかに苦笑を孕んでゆき、

「すぐにでも私は帝都を離れ、シルザに行かねばならない。ゆえに、これより帝都にて何かが起きたとしても、迅速に君を支援することは不可能だ。同じ理由で助言をもたらすことも不可能となる」

筋の通つた声が壁を隔ててすら凜と大気を震わせる。

「決してあれの手綱を手放すな。もしあれを操ることが叶わぬのなら、機を逸してはならない。今は亡霊に傾倒した輩の炙り出しに使えるゆえ泳がせているが、使えぬとなればフィツジェラルドの不利は芽のうちに摘み取れ」

眼を伏せていた少年の、その瞬きが停まつた。闇を見据えるその蒼に、持ち上げられるその唇に、薄い失笑がたゆたう。

「すべては真理の探究のために」

大気に刻まれるのは瑞々しい音律。

「堆き叡知の守人たる我々に、理の求道者たる我々に」

踊るように謳うように、声だけの男が音律を重ねて。

「自明としての不可侵を約さん」

希求を孕む音律は、冷えた床に散らばっていった。

The second act - 14 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

<http://id>

## The second act - 15

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 3 / 04

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

帝都第三層    ユスキュダル・バニヤス邸。

豪商の館の一室。待たせていた顧問の許に足を運んだ准爵は、緞帳が夜を隔てる大窓の前の長椅子に座り冊子を手にまどろんでいるテウトニー族を見つける。炎がゆらめく燭台の、透明となつてその身を伝い融け零れる蠟の一滴が再び冷えて凝るまでのわずかな間。苦笑を浮かべて対となる椅子に腰かけるアリンガムの、その動作が生み出すわずかな椅子の革の軋みに、扉が開いたことにすら気づかず眠りの淵を彷徨っていたラエルティオスがぼんやりとその臉を持ち上げた。

ゆらめく橙の熱が、冷えた紫紺に艶めきをもたらす。

「随分とお疲れのようだ」

からかうように笑むアリンガムを、ラエルティオスは茫洋とした目に映す。そして、常の伶俐さが湧きあがるにつれ、その薄い唇がかな苦笑をたゆたわせた。

「申し訳ありません」

到達した感情だけを言葉にするテウト二族に、アリングムは小さく肩をすくめる。

「眠れる時には眠っておくべきだ。別段、謝るようなことではない」  
泰然と語るアリングムに、今度はラエルティオスが笑みの残滓をたゆたわせながら小さく肩をすくめてみせた。

「ところで、黒猫は？」

指を組みながら、アリングムがラエルティオスを見据える。笑みのかたちを保ったままの唇と、鋭利さを隠そうともしない蒼の目に橙のきらめきが閃いた。

ゆるく、ラエルティオスはその薄い唇に弧を描かせる。

「飼い主が遠くへ行ってしまったそうです。その間、その縁者の許に預けられることになった、と」

北方民族の面白がるような物言いに、アリングムはやや芝居がかった仕草で眉を寄せてみせる。

「それは、また、大丈夫なのか？」

これにラエルティオスは困っているような楽しんでいるような微笑を浮かべ、

「私もそう思いましたので、訊いてしまったんです。そうしたら、どうやら、怒らせてしまったようでして。甘くみないで、と、睨まれてしまいました」

呆れたように、アリンガムは天井を仰いだ。

「それはまた頼もしいな」

楽しそうに笑っている相棒に眼を落とし、アリンガムは溜め息をつく。そして、訊いた。

「黒猫に引っ搔かれたのは、いつもの鉱物屋か？」

わずかにラエルティオスが顎を引く。

「ええ、第三層の」

「しかし、よく出歩かせてもらえているな」

「あの辺りの店は、扱っている物が物であるだけに、流れの移民族から士官までそれこそ様々な人種がいますから。黒猫の一匹が迷いこんだところで目立つことはありませんし、硫黄や硝石を取り揃えている店がほとんどなので 帝都警察のお膝元ということもあつてか 極力揉め事は持ちこまないという暗黙の了解があります。図らずも帝都においてそれなりに安全な一帯となってしまうたわけですね。それに、他人任せにはできない、などと食いがれば、黒猫であれば外に出してもらふことは比較的容易ではないかと」

ふと、アリンガムの目許がやわらかくなった。

「その目で見つめた色だけを描き出す画家、か。よくあそこまで巧く立ち回ってくれている」

冷やかかではない硬質な微笑をラエルティオスが浮かべる。

「貴方の目に狂いはありませんでしたね」



「よく言う。最初に黒猫を拾ってきたのはどこの誰だ」

「さて、誰でしたか」

これに関しては徹底的に流すことを決めこんでいるらしいラエルティオスに、アリンガムが清々しい笑顔で笑った。その笑顔を残したまま、アリンガムは冗談めかして相棒の紫紺の目を覗く。

「だが、その縁者とやらの噛みつかないかどうかだけが心配だ。あの黒猫、見た目に反しておとなしくはないからな。噛みつくにしても、時期を見計らってもらわなければ」

「大丈夫ですよ。どちらにせよ、貴方に背を向けられては黒猫の居場所はなくなってしまう。貴方に自由を買い与えられた意味も、それにより求められていることも、よく理解している。それを含めての、甘くみないで、でしょうね。私が黒猫の位置に立つよりは好ましい結果が得られると思います」

その微笑をかすかにやわらかなものにしながら、ラエルティオス。アリンガムの口許に試すような笑みが広がった。

「酷薄とさえ評される冷静を売りとする者の言葉とは思えないな」

紫紺の目を持つ異民族が苦笑する。

「買い被りすぎです。怨嗟など、それをもたらしただ相手を潰したところで、今までが変わるわけでもありませんし、何が返ってくるわけでもない。私がどんな蟠りを抱こうと、その者が生きているのならば、それはその者がその者の生を生きているというそれだけのこと。ただ、その蟠りを生んだそのものと、その周りのすべてを葬り去り、一瞬の晴れやかさだけのために生きることが赦されるのならば」

その意味において同類である蒼の目を持つ黒猫と、その意味においては相容れない目の前の男。かつて北方異民族自治領と呼ばれる土地で蟠りを刻みつけられた何者かとある意味においては同族である目の前の男に、黒髪の異民族はその紫紺を向ける。

「それこそ」

極寒の地の晴れ渡った蒼穹の軋みを想起させる微笑をもって、遍くものを凍てつかせる凜冽たる大気に舞い煌く細やかな氷の粒子を想起させる紫紺をもって。

「それこそ、私など、傍に置くものではありませんよ」

アルベルトウス・ラエルティオスの薄い唇は穏やかなだけの声を奏で零した。

まろやかに涼やかに、頬を撫でる大気の流れがあった。

外壁となる側の壁の、等間隔で並ぶ硝子窓にぼやける月影だけが夜を滲ませる、名ばかりの回廊。壁の向こうの葉擦れにすら掻き乱される静寂。どこかあどけない面差しの、ふわりとした長い金髪の小柄な女が、自室とされている部屋の扉を開けた。

夜を満たすのは仄かな月光。天蓋より溢れる薄布。ひとりしかいないはずのそこに、薄布越しにはふたつであることだけが判る人影。女の手には早咲きの百合。咲き誇る一輪を傍らの卓の上の水差しに挿し、足音も高らかに寝台に歩み寄り、女は薄布を跳ね上げる。その華奢な後ろ姿を見守ることなく、月光に映える、女に挿された勢いを殺しきれないでいる夜露に濡れた百合がくるりと回った。

「無礼な」

蕾のような愛らしい唇から放たれた、静寂を叩き砕くほどに鋭利な声。それとほぼ同時、金髪の女の目の前、身体の均衡を崩したたおやかな背中を覆う艶やかな黒髪が散った。寝台に投げ捨てられた黒髪の女を掻き抱きながら、可憐を印象とする金髪の女はその紫の目をもって月光に影を刻むひとりの男を睨めつける。

ヴォルガ河河畔の都市　テゼ口。カルヴィニア公国において中枢とされていたその地の、公爵邸とされていた建造物の一角。それは、コトウス家に嫁いだふたりの女が囀る鳥籠であり、献上を待つ宝石を泳がせる檻でもあった。

愉快そうに唇を歪ませ、口の端を伝う血を手の甲で拭いながら、獲物を弄ることを愉しむように、無骨と形容するが相応しいその男は碧の目を細める。金髪の女に抱かれたまま、黒髪の女は紅の乱れた唇を引き結び、肩越しに背後を振り仰ぎ、鋭いだけのその碧の目を男に据えた。

グリエルモ・クルト・コトウスに嫁いだ金髪の女　エレオノラ。  
グリエルモの実弟たるアロルドに嫁いだ黒髪の女　ティツイアーナ。義妹を抱くエレオノラの唇に嘲弄が湧く。

「アレスも堕ちたものですね」

これに、先刻、黒髪の女に舌を噛み切られかけた男　デウドネ・シャリエが冷笑を閃かせた。

鳥籠で身を寄せ合うのは亡国の妃。ふたりの女に睨めつけられながら立つのは勝国の将。淡い月光がたゆたう天蓋の下、衣擦れすら赦されぬ静寂の裡、シャリエの唇が笑みを刻む。

「ジルベルト・ヴェリが公国奪還を謀っているらしい。一兵卒も持

たない亡国の臣が、亡国の君を担ぎ出すそつだ。かつての臣が我が祖国なるアレスに牙を剥こうなどとは忘恩甚だしいが、さて、どうなるのかそれこそ見物だな」

男を睨めつけたままの碧がわずかに揺れた。淡雪のような面を揺らさせることなくわずかに身体を強張らせた義妹を抱く腕に、義姉は力を籠める。

「下がちなさい」

闇に融ける冷えた紫は沈むように細められ、月光をすら弾く声音は硬く。

「どうぞ、お好きなだけ平穩を」

哄笑を連想させる優美な笑みを見せつけながら、シャリエは慇懃なまでの礼を取る。

現状におけるテゼロの主たる男が消えた扉が閉まり、水差しの百合がわずかに震えた。

淡い月光にその金の髪を蕩かしながら、エレオノラは小首を傾げるように義妹の顔を覗きこみ、氣遣いの滲む穏やかな音を囁くように紡ぐ。

「ティツイアーナ」

義姉に抱かれる義妹の百合よりも白く強張った頬に癖の無い黒髪が流れる。口許に手を遣り中空の一点を見つめるティツイアーナの唇が震えた。

「お兄様、何を」

アレスの将が落とした名はカルヴィニア公国の重臣であつた男のもの。歳の離れた兄のものであるそれがもたらした衝撃の余韻に、黒髪（くろかみ）の女の目が揺らぐ。崩れ果て夜に吞まれ尽してしまいそうなティツィアーナを、黙したまま、エレオノラは抱きすくめた。

「リラ」

黒髪（くろかみ）が絡むわずかに動かすことすらぎこちない指の中、血の気の失せた唇が、吐息のような喘鳴（ぜんめい）のような音を零す。

「アロルド」

石膏のような臉が碧を覆い、悲哀のような平坦な悲鳴のような響きが声を霞ませて。

「お願い。どうか、あの子を」

それは決して届くことのない懇願であると知りながら、理を統べる女神よりも先に縋（すが）つてしまう名に寂莫だけを抱きながら。夜の静寂にさざめきをもたらすように、月光に影を与えられたティツィアーナの睫毛が震えて。

「あの子を、どうか」

私が産み落としたあの子を、貴方が慈しんだあの子を。  
お願いだから。  
どうか、護（まも）つて。

穏やかな静寂が満ちる、昼なお暗い路地裏の一室。極彩の煌きと陽光な喧騒が眠りに就いているうらかな昼下がり、紫煙が湧き踊るその場所で、長椅子に腰掛けた豪奢な金髪の女がその紅い唇に弧を描かせた。

「金の動きが停まった」

女の正面、壁に背を預けて立つのは黒髪の少年。精悍を印象とする面差しのその蒼の目が、探るように悠然と笑んでいる女を見据える。

「その領域を握っているのは主に修道会 要するに教会だ。このあたりにおけるそれが騎士団の意図ではないというのなら、教会の意図。もしくは、シルザ大司教の意志か、その権限を有している者の意志か、その者を御す者の意志。我々が憶測できるのはその程度だな。そして 先の帝都包囲で敗北を喫した貴族の、主に亡命によつて 浮いた土地の所有者が動いている」

煙管に火種を落とし、くつりと、愉しげに女は喉を鳴らした。

帝国東部 歓楽の街メルヴィル。大陸中に情報網を広げるその街の女王が、皮肉めいた笑みをつくるその唇から、ゆつたりと紫煙を昇らせた。

「いつから自由に売り買いできるようになったのかは知らないが、まあ、皇帝の許可などなくとも契約でそれらが動くという既成事実は成立しかけているようだ。少なくとも、ある者たちの間においては契約書という紙切れが通用している。そこで取引をしている主な面々は、どういった者たちだと思う？」

暗がり映えて逆巻く紫煙越しに、面白がるような碧が少年を捉える。獲物を射抜くような女の眼に臆することもなく、少年は己が掴んだ答えを音にする。

「ハンスユルゲン・ザリエルのような？」

「当たり前だ。貨幣を掻き集めることのできる、新興勢力と呼ばれる者たちだな。だが、それだけではまだ足りない。帝国はそんなに狭くはないさ」

押し黙ってしまう少年。そんな少年に、どこか慰めるように女は言葉繋げた。

「ちなみに、そのザリエルだが、どうやら帝国西部に物資を集中させていた黒幕であるらしい。おかげでジールフト地方をはじめとして東部における物の値段は急騰だ。そろそろばら撒きに出るかもしれないな。どう使うつもりなのかまでは判らないが」

やれやれとでも言いたげに肩をすくめてみせる女。女を見据えたまま、唇を結んだままの少年の蒼は動かない。女の唇が煙管を咥え、細く、紫煙を紡いだ。

「買い取るという手段で帝国から大地を得た主だったものは、先ほど拳がった者たちに加え、もうひとつ」

わずかに細められた碧の目が、黙したままの少年に据えられる。

「教会、だよ。サーレ・ニールセン」

それは淡々と紡がれるだけの音。  
あたたかく穏やかな昼下がりに、わずかに睨られた少年の蒼が揺れ

た。

光の粒子が舞い踊るそこは、あまりにも明るくあたたかく、神に祝福された陽だまりに思えた。

若葉が透かすきらきらしい緑陰の揺れる硝子張りの温室。燦々と降り注ぐ陽光はきらびやかに光を弾かせ、甘やかな土の香が鼻腔をくすぐる。咲き零れる彩りの蜜は芳しく、その花卉はやわらかく陽光に濡れていた。

アレスの王宮の整然と並ぶ柱の見事な装飾に眼を奪われ、その柱が並ぶ回廊の導くままに歩を進め到達してしまった緑の箱で、メルキオルレ・マデルノは若葉に埋もれるように樹の枝に腰掛ける金髪の少年を見上げた。ロシユフォールという名のその少年は、木登りが得意なのか樹の上で過ごすのが性に合っているのか、幹に背を預けて片足を枝に置いた姿勢で何かを読んでいる。少年が読み耽る本の作者を示す文字を目にしたマデルノの蒼に驚愕が揺らいだ。

「それは」

零れた呟きに、樹上から苦笑気味の声が落ちる。

「ただの本だ。ただし、黙許ですらない。扱いとしては、禁書に準ずる、といったものか。ある土地にて露出できないのならそれは可能な土地でば撒くまで、といった部類のものだな。ひとの繋がりが在る限り、こちらに流れてきていることには何の不思議もないそれに、帝国に限ってならば、有名なところではファリアスやヘッセン・ダルムシュタットの書庫にこういったものが収蔵されていること、私ですら耳に挟んだことがある。その内容は異にするだろうが、現象だけを追うのなら、古来より連綿と続く営みだ。珍しくも



ない」

領土大国アレスの少年王　ロシュフォール。その実権を摂政たる母とその一族が握っている王が、碧の目をもって空を仰ぐ。硝子の向こうに広がるのは晴れ渡った蒼。そこから落ちてくる陽光の眩さとそれを透かす若葉のきらきらしさに王は目を眇めた。

「これらを集めておられたのは兄上だ。禁縛と蔓延は表裏一体、と常々そうおっしゃっておられた。他を知るには労力を惜しまず、視野が狭まることを何よりも恐れていらっしゃった」

ファウストウス暦422年、アルバグランド会戦。帝国とアレスとの衝突であるこの会戦においてその衝突を回避しようと最後まで尽力した帝国における筆頭たる人物が、樹より下り地に足を着けた少年王の自嘲をすら孕む独白を聴く。

「メルキオルレ・マデルノ」

老人を正面から見据えて、少年は口の端を持ち上げた。

「貴殿は、このアレス宮廷で、何を得たい？」

穏やかでしかない老人の蒼の目に、わずかな鋭さを帯びた探るような色が過ぎる。それに気づいてか、満足そうに愉快そうに、少年の碧の目が細められた。

「クロディーヌごときの意のままに踊る貴殿ではあるまい。勿論、我が母ごときにも」

黙したまま、ゆるやかに微笑するだけの老人。温厚を絵に描いたよ

うな佇まいで緑陰に染まる老人に、少年はやや皮肉めいた響きの声を投げた。

「小国群立地帯にて動きがある。いや、動きそのものは、表面上は穏やかだ。ただ、その穏やかさは身動きが封じられかけているがゆえの硬直でもある。元手を得る術が失われかけている、といった意味での、硬直だ。これが長引けば、その理由が我がアレスによるカルヴィニア公国併呑であるというのなら、その周辺がどう出るか。いくら小国の寄せ集めであるとはいえ、油断はできまい。そして、アレスに余力というものは無い。未だ宮廷には兄上を担いだ一派が跋扈している。母の苦勞も絶えまいな」

失笑を浮かべる少年と、少年を見つめたまま目を細める老人。踊る緑陰、香る花。きらきらしさを零す若葉、熱を零す陽光。瑞々しい春の息吹に包まれながら、金髪の少年は唇を持ち上げる。

「ところで、私はひとつの権限を手に行っている。それを振りかざす実質が母に在ろうと、名目上、王の許可無しに摂政は兵を動かすことなどできない。そして、私はひとつの疑問を抱いている。今この時に、帝国が東方を刺激するのはなぜか。我が領地における篡奪を後押しするのはなぜか。そもそもそれは皇帝の意志だろうか。それとも他の何ものかの意志か。ならば、それは何ものであり、その真意は何処に在るのか」

ゆるく、融けるように、老人の顔から微笑が掻き消えた。伶俐なだけのその蒼が見据えるのは、受けとめるだけの澄んだ碧。

「帝国のために」

老人の唇が、淡々と、音を紡ぐ。

「我が身は帝国のために。皇帝ではなく、帝国のために」

ゆるく、艶やかに、少年の口の端が持ち上がる。

「それを呑んだ上で求めよう。この私に仕えないか？」

わずかに面を上げ、老人は少年を見つめた。ゆつたりと、少年はその瞼を落とす。

「私はこのままおとなしくしているつもりはない。母とその一族の権勢なるものが大陸の安定に寄与せぬのなら、我が手に王たる権を取り戻すまで」

遊びにでも誘うように、少年の唇が笑みをつくる。

「私は貴殿の進言が欲しい」

持ち上げられる瞼と、鮮烈な光に曝されるまっすぐなだけの碧。

「箴言には、もう、うんざりだ」

呆れて何も言えないでいる老人に、燦然と降り注ぐ陽光に光を糸にしたかのようなその髪を煌かせながら、少年王は悪戯っぽく笑みでみせた。

The second act - 15 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 16

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 3 / 05

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

どことなく灰色がかっているような錯覚に溺れてしまう陽光と、昼日中だというのに街に満ちる静寂。天井に近いところに穿たれた窓からばやけ滲むそれらに満たされるのは半地下の酒場。

帝都第一層    異民族街。

誰に命じられたわけでもなく散じ始めた人々と、誰に命じられたわけでもなく留まっている人々。移動を妨げられない代わりに生存を保障する後ろ盾が存在しない者が多い異民族街特有のその現象の果て、誰に命じられたわけでもなく人々は息を潜め、誰に命じられたわけでもなく気配を殺しながら、生きる糧を時に分かち合い時に奪い合う。

掃除を終えて箒を壁に立てかけ、ディアスは椅子に腰を下ろした。

小休止、と、一息ついたところに、来客を告げる呼び鈴が響く。店の入り口を仰いだディアスの蜜蝋の目がそこに現われた人物を捉え、驚愕を隠し切れずにわずかに揺れた。

「セルヴくん」

半ば呆然と、半ば見るはずないものを目にしているかのように、ディアス。扉から店の床へと続く段を降りながら、トウルスは小さく

肩をすくめた。そして、椅子に座ったまま見上げてくる店主の前に到達すると、周囲を窺うように眼を走らせた。

「リーザ、いる？」

わずかな安堵とそれを覆い潰すまでの緊張を纏うトゥルスに首を傾げながら、あえて穏やかに店主は口を開く。

「闇医者殿のとおこのお子様たちと一緒に部屋にいるよ。呼んでこようか？」

「できれば、僕が来たことは内緒にしてもらいたいんだ」

これにディアスが苦笑する。

「おやおや、何日ぶりの帰宅かな。顔でも見せて安心させてあげたらどうだい？ 気丈に振る舞ってはいるけど、随分と心配しているよ」

一瞬だけ押し黙るトゥルス。しかし、店主の提案は無きものとしてか、あくまで話を進めてゆく。

「頼まれてほしいことがあるんだけど」

やわらかく、ディアスは嘆息した。

「珍しいね、君がごり押しするなんて。そんなに余裕がないのかい？」

トゥルスの口許をどこか皮肉っぽい冷笑が彩る。

「否定はしないよ。それに、迷惑を顧みないにもほどがあるということも否定しない」

「まいったね。面倒事は遠慮させてもらいたいな」

穏やかな苦笑を更に苦い笑いに変えて、ディアスはいつになく率直な眼前の青年を見上げる。見守る深さを崩すことのない蜜蠟に、どこか申し訳なさそうな様で喉につかえるように言葉を吐き出すアルウェルニー族の青年が映った。

「ディアスさんが店を閉めることになったら、その時は、帝都の外まででかまわないから、リーザと一緒にいてもらいたいんだ」

わずかに俯いてほのかな失笑をたゆたわせる青年を、ディアスは黙したまま見つめる。穏やかな蜜蠟色の目にちらつくのは、探るような鋭さと、氣遣うような緊迫。やがて、常と変わらない笑顔をつくって、ディアスは首を傾げた。

「セルヴくんじゃ、できないのかな？」

小さく肩をすくめて、トゥルスはあらぬ方向に眼を遣る。

「僕は、僕ひとりをすら、生かしていけるのか自信がないからさ」

「随分と弱気だね」

「困ったことに、持て余しても余りあるくらいに予想外なことばかり起きるんだ。もっと力量が欲しいよ、切実に」

「どんな？」

「全力で厄介なことをすべてから逃亡する力量」

真摯に断言するトゥルス。ディアスは声を上げて笑う。

「逃れられないなら、立ち向かうしかないよ」

朗らかな笑みの残滓をたゆたわせながらのディアスに、トウルスはやれやれとでも言いたげにかぶりを振った。

「立ち向かう振りをしながら、逃げ道を見つけてるところ」  
「どこまで受け流すつもりだい？」

笑みを深くしながら、その蜜蝋をもって、ディアスは眼前の青年の緑を見据える。絡め取られた眼を逸らすことなく、挑むように、トウルスは口の端を持ち上げた。

「生きるのに一生懸命だと言ってほしいな。これぞ生き抜くための叡知だよ」

耳が痛いほどの静寂と、肌が痛いほどのぼやけた光。冷えた石壁に囲まれたその場所の、季節に潤んだ大気の、翳りを帯び始めた陽光にふたつの人影は包まれる。  
そこに割りこんだのは蝶番の軋み。

「セルヴ？」

カウンターの脇、扉を開けたまま立ち尽くす女の翡翠色の目が瞪られて。

床を見つめたままやや低い聞き慣れた声で紡がれた己の名を耳に刻みながら、表情と呼べるものを消し去ったトウルスの、その深い緑の目がわずかに揺らいだ。



見上げた空は裏路地をそのまま頭上に持ち上げた幅でそこにあつた。背の高い家々とその間を縫うように走る石畳の狭い道の組み合わせによって成り立つ異民族街では、こころなしか、空は遠い。水の粒子を孕む風はまるやかで、果てなどないのであろう蒼穹はどこか白んでいた。

寒いわけでもないのに大気はあまりにも硬く透明で、少しの声の振動ですら碎け散ってしまいそんな脆さと手を伸ばせば掻き消えてしまうのではないかと本能が覚えるような現実味のない光景がそこにはある。街並みもその佇まいも、どこにも変化はないはずであるのに沈む雰囲気は何かが違っていて。

馴染みの裏路地の馴染みの店の前で、壁に背を預けて空を仰いでいた半月眼鏡の青年は違和感を払拭できないままに空を仰いでいた。やがて、青年は何かに思い至ったのか、ぽつりと呟きを落とす。

「そうか。熱が、ないんだ」

ここにあるのは形骸だけで、形骸の内部に息づいていた。炊事の匂いや痴話喧嘩や、走り回る子どもたちのはしゃぎ声や客引きや洗濯物の翻る様や叱り声といった。ひとの営みの気配が希薄にすぎる。

路地裏を潤んだ風が吹き抜ける。その風が運んできたかすかな硫黄や餿えた果物の臭いに。そう遠くないところでは確実にひとがいるという事実。青年は安堵を覚えた。そこに、

「オーギュストだ」

「オーギュストだー」

突如降ってきた賑やかな声に、半月眼鏡の優男は頭上を見上げたまま目を瞬く。そして、立ち位置を変え、道を挟んだ反対側の壁に背中を預けて、二階の窓の鉄柵によじ登りかけている幼い兄妹を見上

げた。

「シグル君とアニタちゃんじゃないか。どうしたんだい？」

両手で鉄柵を握って、兄が快活に答えた。

「リーザがね、ここからオーギュストを見つけたの」

兄の傍らで鉄柵の上に両手を揃えて置いている妹が続ける。

「みつけたのー」

「だから、セルヴが帰ってきたんじゃないかって、お店に下りてった」

「おりてったー」

これに、オーギュストの動きが停まった。

「もしかして、まずいことになっちゃったかな」

ごめんとウルスくん、と、胸中で謝りながらオーギュストはかすかに引き攣った笑いを浮かべる。部外者はいない方がいいだろう、と、気を利かせたのが裏目に出たらしい。半月眼鏡のそんな胸中を知ってか知らずか、シグルは不思議そうに首を傾げた。その隣でアニタが同じように小首を傾げる。

「オーギュストはなにしてるの？」

「してるのー？」

「そうだなあお兄さんは、って、危ないから身を乗り出さない！」

困ったように頭を掻きながら言葉を選んでいたオーギュストが、転

落防止用であるはずの鉄柵を乗り越えんばかりに身を乗り上げて大きく手を振り出した兄妹に鋭い声を投げる。だが、目を輝かせる幼子たちの耳には、そんな注意など届かなかった。

「ヴィロック！」

「ヴィロック！」

兄妹の眼の先、気の無い様子で申し訳程度に片手を振りながら裏路地を闊歩するのは、幼子たちの保護者にして闇医者、一見近づき難い雰囲気纏う青年。窓の下まで到達したヴィロックは、ふたり揃って鉄柵からはみ出した上半身を折って下を見つめているシグルとアニタを見上げ、どこか眠たげで不機嫌そうな顔のまま声を投げる。

「おまえら、いい子にしてたか？」

「してたよ」

「してたっ！」

「そうかそうか。そりゃ良かった。とりあえず中に入ってる、危ない」

片手を挙げて眼をオーギュストに転じるヴィロック。

「はい」

「はい」

シグルとアニタが返事したところを、丁度二階に上がったらしいディアスがふたり纏めて背後から抱き上げ、朗らかな笑みを路地裏のふたりに落として去って行った。そんな友人を目の当たりにしてオーギュストが呟く。

「流石、慣れてる」

窓を見上げるオーギュストの傍ら、軽く片手を挙げたままのヴィロツクが首だけを動かしてその横顔を眺めた。

「で、侯爵の犬殿はここで何してんだ？」

これにオーギュストは苦笑する。

「避難つてとこかな」

眉をひそめるヴィロツク。オーギュストは闇医者 of の片手を封じている荷物を指さした。

「それは？」

「その辺の空き家から拝借した。無駄にされちゃ食いもんが泣く」

そうか、と、納得したらしいオーギュストが力強く頷く。そんな半月眼鏡にヴィロツクは辟易したような億劫そうな眼を向けた。

「嘘だ。ちゃんとした診療報酬だよ。妙なものの食わしてあいつらに腹でも壊されたら目も当てられん」

「流石はお父さん、よく考えてる」

にこりと笑いながらオーギュストは背中を壁から剥がし、数歩の前進の後、道を挟んだ正面の壁に身体を反転させて背を預ける。

「いいお父さんだろ見習え」

どこかげんなりとしながらヴィロツクはオーギュストを受け流す。

荷物で塞がれていない方の手でディアスの店の扉を開けようとしたヴィロツクに、傍らに立つような格好で対峙しながらの横顔を眺めていたオーギュストが不意に眼を正面に移した。そして、囁くような音を撒く。

「総督が候と接触したらしいね」

扉に据えられていたヴィロツクの目がわずかに細められ、手の動きが停まる。

やわらかなあたたかさが心地よい冷ややかさに転じた。細長い空を横切る雲の影が、ゆつたりと、建造物の高低が安定しない街並みを撫でてゆく。

正面を見据えたままのオーギュストと、薄い笑みをたゆたわせる侯爵の私兵を横目で見遣るヴィロツク。薄い影に覆われた裏路地に、微風にすら散じ果ててしまうような声音が舞う。

「総督府は、三層以下と三層以上の挟間の、総督府と帝都警察による上層にとつての防衛線。それが破られるのなら、上層に下層の波が押し寄せることは必至。増援要請なのか報酬要求なのかまでははっきりしないけど、窓口としての伯を通して、総督は候に接触したらしい」

ここでオーギュストは傍らのヴィロツクを窺う。眉間に皺を寄せ、どこか睨むように 常と変わらない仕草で 己を見遣る闇医者  
の眼を捉えたまま、私兵はおどけたように肩をすくめてみせた。

「そこで総督が切り札としたらしいもの。噂になっているその真偽を、我が主は確かめたいらしくてね。君なら、知っているんじゃないかと思っただ」

これにヴィロックは呆れて物も言えないといった様で盛大に嘆息してみせた。オーギュストは続ける。

「同業者の連なりから外れている正規の医者ではない闇医者。経歴上、君にしかできないであろう、秘密裡に生かしたい者への施術。ついでに、君が手にしてるそれ、報酬なんだろう？ 君の患者ないし依頼者は西部都市同盟と東部における修道会における事実上の物的にも金融的にも封鎖状態にある今の帝都においてすら払いがいらしい。そんな君なら、噂くらいは小耳に挟んでいるんじゃないかな」

ヴィロックが浮かべたのは鋭利なまでの冷笑。

「屁理屈もいいところだな」

どことなく軽薄な笑みをもってオーギュストは話を進める。

「そこで切り札とされたのは」

蒼穹を流れる雲の淵から陽光が零れた。心地よさと冷やかさをもたらす硬質で透明な影の間隙に眩い白の熱が降り注ぎ、光と影が漣に似たゆらめきを織り成す、あたかな明るさと冷えた翳りとが繰り返される裏路地で。

「アクイレアの生き残り」

へらりと笑う半月眼鏡の優男は、滅んだとされているひとつの名を持ち出した。

ぼんやりとした光が満たす石壁に囲まれたそこには、静寂がたゆた  
い沈む冷えた大気が滞留していた。

静けさという透明な均衡を、杯の中で氷が崩れるささやかな振動が  
伝う。

馴染みの酒場の馴染みのカウンター席。今は二階に上がってしまった  
店主がお茶だよと朗らかに言い切って出てきた杯を両手で包む  
リーザの傍らには、これのどこかお茶なんだよ胸中でぼやき続けて  
いるトゥルス。並んでいるふたつの背中では身じろぎすることも近づ  
くこともない。

氷を見つめたままのリーザが唇を持ち上げる。

「どこに、行つてたの？」

前を向いたままのトゥルスが小さく肩をすくめた。

「オルトたちの手伝い」

「そう」

そして、沈黙が落ちる。

お茶だとされるものを口に含み、前を見つめたまま、リーザが杯を  
置いた。

「ふたりとも元気だった？」

前を向いたままのトゥルスが頷く。

「うん」

「そう」

そして、再び、沈黙が落ちる。

杯を呷るリーザを密かに心配そうに窺っていたトウルスは、傍から眼の前の杯に伸びてきた手を一瞬の差で阻むことができずに杯を奪われる。二杯のお茶とされる液体を飲み干したリーザが横目でトウルスを見遣った。酩酊の艶を纏う挑むような翡翠に、わずかに、トウルスは気圧される。

「次は、いつ、会えるかしら」

「リーザ、呑みすぎだって」

トウルスの唇が音を紡ぐその間にも、彼が舌を噛んでしまうのではないかといった勢いをもって、リーザは卓に肘をついたまま青年の襟首を片手で掴んで引き寄せる。そして、うろたえるように宙を彷徨う青年の眼を絡め取り、その深い緑を正面から覗きこんだ。

「いつ、四人で、揃えるの？」

数をかたちにする声はわずかに震えていて、それでもその唇は感情をかたちにすることはない。

「お手伝い、しているんでしょう？」

ふわり、と、ぼやけた光に淡く透ける波打つ髪が揺れた。小首を傾げて、それでもトウルスの眼を放さずに、リーザは問いを繋げる。

「それなら、予想くらいは、できるわよね？」

さあ、答えてみせなさい。

押し黙るトウルスと、その様を映しながら細められる淡い翡翠。ふ、と、口の端が持ち上がったリーザの唇から息が零れる。



「吐き通せない嘘は吐くものじゃないわ」

失笑に乗せる音は漣のような振動。肩口に押しつけられた額の、近くなつた身体から伝わる普段よりも高い体温の、その今にも震え出しそうな華奢な肩を抱くことすらできずにいるトウルスは、わずかに目を伏せて襟元を握り締める力を増す熱を帯びたリーザの指を見つめるしかない。

「いなくならないで」

胸のあたりで、吐息が漏れた。喉にひりつくようなその響きに、トウルスは弾かれたように面を上げる。

「いなくなったりしないで」

潤んだ熱はくぐもつた音を模し、次第に音を音として成すことすらできなくなつて静寂に蕩けてゆく。

「置いていかないで」

融解する囁きはもはや声と呼べるようなものではなく。

「お願いだから、置き去りにしないで」

そこに留まり流動するのは、感情と夢想と希望のような我が儘。ひとつどころに蟠るそれらは、伝播の漣と化することなく、ただ、静謐が潤む大気に融けて滲んで消えていった。

うつすらとした笑みをたゆたわせながら横目で窺ってくるオーギュストに、ヴィロックは眉根を寄せる。

「ウォルセヌス・アクイレアが実は生きている、っていうあの噂か？ 暇なのか臆病なだけか、どこまで想像力が豊かなんだろうな。もつとも、なぜ上層の連中がそんな戯言を気にかけるんだ？ 奴らの目の前で事は決してるんじゃないのか？」

見せつけるような嘆息と、挑発するような冷笑。それらを受けとめるオーギュストの蒼はふてぶてしいまでに泰然としている。

「すべてを目の当たりにできたのは、それこそ少数だからねえ。立ち振る舞いひとつで足を掬われかねないところに生きている彼らとしては、満更他人事でもない」

「おまえの職場を垣間見た気分だよ」

あらぬ方に眼を遣り、やれやれとでも言いたげにヴィロックは肩をすくめた。半月眼鏡は軽薄に笑う。

「ご一緒するかい？」

「遠慮する」

闇医者者の即答に愉しげに笑った後、笑みの残滓を纏いながら、オーギュストはヴィロックを見据えた。

「ひとつ助言だ。今、君が診ている患者。もし可能ならば早々に手を引いた方がいい。闇医者である君の存在は消すに容易い。そのくらの自覚はあるだろう？ それとも、何か伝手があるのかな？」

これに、ヴィロックは笑みを深くしながら片眉を上げてみせる。

「さて、どうかな。なんにせよ深追いはお勧めしない。おまえと俺は、その意味においては、同じではない。俺に触れてみるか？ おまえは、おまえの友人知人の目には映らなくなるかもしれないぜ？」

挑発するようなその物言いに、オーギュストは苦笑を浮かべる。そんな半月眼鏡に闇医者　わざわざ荷物を小脇に抱えて　わざわざとらしく諸手を挙げてみせた。

「それを差し引いたとしても、もとより俺は余所者だ。あいつはなんか怪しい奴だと帝都市民数人によって同じ胡散臭さが裁きの場で主張されれば、俺は帝都から追い出されるしかない。だから、心配しなくともそれなりに保険はかけてある。そう簡単に殺されてはやらんさ。今のところ、それでも、食って寝て呼吸してを繰り返しているからな」

「なら、尚のこと俺の話を聴いてもらいたいものだね」

おどけたように主張する半月眼鏡を闇医者は胡乱げに見遣る。侯爵の私兵はいささか滑稽な仕草で肩をすくめた。

「なに、大したことじゃないんだ」

苦虫を噛み潰したかのように口の端を下げたヴィロックは、柄の悪さを増長させながら眉間に皺を寄せる。どこまでも軽薄にオーギュストは笑った。

「近いうちに総督府は炎上する」

上着の袖を掴む指には意外なまでの力が籠められていた。酔い潰れて卓に突っ伏してしまっているリーザの駄々をこねる子どものようなその仕草に、大切なものを愛おしむような穏やかな目をわずかに細めたトウルスはやわらかな苦笑をたゆたわせる。起こさないように慎重に、青年は己の袖を握り締める指を丁寧に解き、ゆっくりと椅子から腰を浮かせた。

そこにひとつの問いが響く。

「行くのかい？」

カウンター脇の扉に背を預けて立つのは、ぼやけた光に赭の髪を鈍く艶めかせる長身のシルウア族。朗らかに落ち着いた蜜蝋の目がわずかに落ち、腕の中に顔を埋めるリーザを捉えた後、その傍らに立つアルウェルニー族の青年を窺う。そして、僕はセルヴくんでもリーザちゃんでもないけれど、と前置きをして、

「こつという護られ方は、怒るんじゃないかな」

ディアスはゆるやかな笑みを湛えてみせた。床に眼を落とし、疲れのようにトウルスは嗤う。

「同じことを、僕としては、僕らを育ててくれた大きな子どもたちに言っただけだね」

「確信犯、か。案外、セルヴくんも性質が悪いね。例えば、腹立たしくてどうしようもないことがあったとして。それは嫌がらせでもなんでもなくて、ただ純粹に自分のことを相手が想ってくれているがゆえのことであると理解できてしまったら。それを拒絶することも否定することもできなくなって、だからといってそれを肯定することもできなくて。呑みこめたとしても事ある毎に脳裏に浮かんで

きて、結局は裡に渦巻くしかない悔悟みたいなものに蝕まれて、場合によっては自壊してしまう。君は、それを解っていて、いなくなることを選ぼうとしているように見える」

眼は床に落としたまま唇だけに薄い笑みを描かせて、一步、トゥルスは歩を進める。

「行くよ。できるだけ早く、また皆でわいわいしながら食事でもするために、さ。面倒なことはさっさと終わらせてくるから」

横手にディアスを振り返って、トゥルスは口の端を吊り上げた。

「だから、それまで、リーザを護っててよ」

細められる緑の目には決して退かない頑固さを、常よりも投げ遣りに聞こえる声には理不尽をすら喰らいながら押し通すだけの硬さを。否定を許さない子どもじみたその姿勢にディアスは朗らかな苦笑を零してしまう。

ぼんやりとした光が満ち、ひんやりとした大気が沈む、静寂がまどろむ石壁の酒場。その店の主が、外への扉に向かって段を上る常連客にからかうような眼を投げる。

「報酬は？」

扉の前で立ち停まったトゥルスは、肩越しに店主を振り返り、その緑の目を細めた。そして、扉を開けながら悪戯を企んでいるような皮肉っぽい笑みを浮かべる。

「遠慮なくオーギュストにたかっというて」

鮮烈な陽光に曝された人影は迷うことなく外へと踏み出してゆき、店内に残された店主は、扉につけられている鈴の残響を纏いながら、困ったような笑みを浮かべてひとり肩をすくめた。

蒼穹と大地の挟間に息づくは、天空に棲まう女神の理。混沌の渦に理という種が撒かれ、芽吹いたのは秩序という若葉。それは、土に水が滲みるように大地に根を張り巡らせ、次第に世に安寧をもたらしてゆく。

蒼穹にまどろむ女神、決裂を語り継がれるふたりの聖人。聖人を記したふたりの弟子、彼らの名を冠するふたつの潮流。そのうちのひとり、時に名を刻む者 反射鏡研磨技師にして天文学者たる聖ファウストウス。

ヴァルナ神教ファウストウス派の本山、すなわち、帝国国教会の本拠 聖テルム大聖堂。白亜によって築かれたそこは、女神の婢が理を撒く、時を護る祈りの家。

蒼穹を戴く白亜、莊嚴と優美とを現出する大聖堂。帝都の第三層と第四層とを跨ぐように屹立する絢爛たるその大聖堂は、果ての知れない蒼穹を戴きながら、眼下の街並みを睥睨する。

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の末。潤み始めた風が若葉の香を運び、樹々の枝に溢れ始めた葉がきらきらしさを弾かせ、凍てゆるむ大地に草が萌ゆる季節。やわらかさと鋭さを挟間にたゆたう陽光が燦然と世界に降り注ぎ、山稜をばやけさせる水の粒子が澄んだ蒼穹に雲と成って浮かぶ。

音という振動が大気を震わせた。大聖堂の鐘楼から放たれたそれは、蒼穹を仰いで轟めく白亜の街並みを覆い、そこに住まうひとびとの鼓膜を揺さぶり、うねりのように逆巻きながら、それでも蟠ることなく空に散じてゆく。

爛熟の帝国、白亜の帝都。皇帝の居城が置かれる帝国の象徴。蒼穹

に祝福され、理の女神の恩恵に浴す、約束の地。  
そこに鳴り響くのはまろやかな大気を切り裂く鐘の音。  
それは、穏やかなまどろみを踏みしだく、時告げの鐘。

The second act - 16 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
1 2 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

<http://id>



## The second act - 17

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 3 / 06

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

帝国東部ヴォルガ河河畔の大司教都市      シルザ。

「ようこそ、ファイナ騎士団へ」

淡い蒼穹、陽光を反射してきらめく河面。芽吹き始めた若葉の瑞々しさを孕む潤んだ風が吹き抜ける、シルザの街を見下ろせる丘の上。帝国における騎士団の双壁、その片翼を担うファイナ騎士団本拠の門前。ファイナ騎士団団長ベルトラン・ダン・マルティンは三人の来訪者を出迎える。丘を上り来たる馬上の男      カジミュシェ司教。ユーグを捉えたベルトランは、司教に続いて馬を駆るふたりの来訪者に眼を移し、その蒼の目を眇めた。

そして、シルザ大司教の執務室にて。椅子に座り組んだ指を膝に置いて寛ぐカジミュシェ司教と机を挟んで立つベルトランが唇を持ち上げる。

「猊下がお持ちの書簡を拝読いたしました」

無言のまま司教はベルトランを一瞥し、その眼を傍らの窓へと転じる。そこでは芽吹いた淡い緑が薄い影をつくる大樹が風に揺れてい

た。

ゆるく、司教の唇が笑みを描く。

「不服か？」

いえ、と、否定を示すベルトランに、司教は試すような眼を投げた。

「私をシルザ大司教と同等として扱うことが腑に落ちないか？ シルザ大司教が空席のまま放置されていることが不満か？」

笑みのようなものをたゆたわせながら、ベルトランは穏やかにかぶりを振る。そうか、と、司教はひとつ頷き、それまでひとつどころに据えられることのなかったその蒼の目を高いところにあるベルトランのそれに定めた。そして嗤う。

「それとも、その剣をもって、亡国の夢を華と咲かせてやることが解せないか？」

ベルトランの纏う雰囲気からやわらかさが消えた。静寂の裡、厳然と、ベルトランは見定めるように司教を見下ろす。司教の口の端が吊り上がった。

「背命を叩きつけるか？」

ベルトランの蒼の目が細められる。

「お戯れを。枢機卿長の、理を撒く者の、その命なれば。私などには及ばぬ思惟が含まれることもありましょう」

愉快そうに司教が笑う。

「つまり、騎士団として命は拝するが、貴殿としては解せないわけだ。アレスに吞まれたカルヴィニア公国の正統なる後継者による公国奪還の後押しを、他ならぬ帝国国教会を率いる枢機卿長そのひとが　ファウストウス派の東の防衛線として永きに亘り対峙してきたカテル・マトロナ派を奉じていた相手に手を貸せと　ファイナ騎士団に命じたということが」

「我々には彼らを後押しする義理も理由もない」

淡々とベルトランは持論を述べる。胸中に渦巻くすべてを握り潰した末に立ち現れた冷静は、激情を裡に孕みながら、上塗りされるだけの平静によってひとりの男をその肩書きを模すひとがたと成す。そこに、

「理由なら、ありますよ」

場違いなまで穏やかな、澄んだ少年の声が響いた。

振り返るベルトランの背後で司教が興味深そうに眼を上げる。二対の蒼の先には、開け放たれた扉の前に立つ碧の目の男。そして、扉を潜る黒髪の少年。

ファイナ騎士団が迎えたふたりの客人。鋭利を宿した碧の目をもって蒼に挑む亡国の重臣ジルベルト・ヴェリ。その傍らに到達した少年が、その董色の目をベルトランに据えた。

窓を越えて床に落ちる緑陰は漣のようで、河面に弾ける陽光のようにきらきらしく踊る。

黙したまま目を眇めるベルトラン。冷徹でしかないその蒼に相對するのは、小柄な少年の老成を印象とする董色。カルヴィニア公爵アロルドの嫡子、公国の血脈を継ぐその者が微笑する。それは、ベルトランにある人物を想起させるに足るほどの、やわらかくも甘くもなく、かといって冷たいわけでもない、ひっそりとした優美な微笑。

かつてこの執務室の主であつた者に酷似した雰囲気を纏う少年  
リラ・コトウスは、その微笑を崩すことなく、遊ぶように謳うよう  
に音を紡いだ。

「カルヴィニア公爵は、ヴァルーナ神教ファウストウス派を、奉じ  
ていますから」

帝都第五層      サディヤ侯爵邸。

「ティナ」

と、ひとつの扉を前に、サディヤ侯ヨーヴィルは娘の名を呼んだ。  
扉を軽く叩いた後に名を呼ぶということを、侯爵は何度となく繰り返す。

薄暮が黄昏に移ろい、廊下を満たす斜陽が青褐へと蕩け、夜の薄闇  
に染め上げられた沈黙に疲労と辟易とを滲ませる声が散じてゆく。

「これで何日になる？ 閉じ籠もるのも大概にしなさい。あまり皆  
を困らせるものではないよ」

溜め息とともに吐き出される言葉への返答は沈黙。扉に背を預けて  
天井を仰ぐヨーヴィルの単眼鏡が夜を弾く。困ったように零される  
父の溜め息に苦笑が混じった。

「頑固だな、君も。いったい誰に似たんだ」

緩慢に滞留する静けさに、意思をかたちにした音が舞った。

「嫌です」

扉越しにヨーヴィルの鼓膜を震わせるのは、会話とは成りえていない、返答。扉を挟んだ父と娘は、互いに互いの意思だけを、散らかすように投げ放つ。

「君が守ろうとしているもののためにも、食事くらいしなさい。このままでは君も倒れてしまっただろうに。それこそ本末転倒というものだ」

「嫌です」

「ティナ」

「嫌です」

「我を張るにも程度というものがあるよ」

やわらかな口調にちらついた苛立ちの余韻と、その後を訪れた沈黙。静止した大気は息苦しさを覚えるほどの透明な塊と化す。

「いや」

ささやかな振動が透きとおった夜を伝う。脅えているような思い切るようなその声は、囁きよりも儚く弱く、にもかかわらず確固とした意思を主張した。

夜に染まった一室、扉に背を預けて床に座るアルシエティナ。俯いた女が護るように抱くのは己の腹。やわらかな髪の間隙から、大気を呑み下せずに音も無く喘ぐ、わずかに開いた唇が覗く。

夜に染まった廊下、扉に背を預けて立つヨーヴィル。天井を仰いだまま、男がたゆたわせるのは自嘲のような苦笑。単眼鏡に夜を弾かせたまま、その奥の蒼の目がわずかに細められる。

「譲歩を、しよう」

沈黙を碎いたのは父。

「その子が生まれ落ちる時、ウォルセヌス・アクイレアの立ち位置が今とは真逆となり得ているのなら」

譲歩という条件をヨーヴィルは淡々と紡ぎ、自らを抱き締める腕に力を籠めるアルシエティナは息を殺す。

「僭称者ではないと、そう見なされるようになっていくのなら」

眼を落としたヨーヴィルは、顎を擡げ、首を傾げるように背後の扉を見遣った。

「私はその子を生かしてあげるよ」

帝国中部ストラスクライド山脈　聖地ファリアス。

漆黒の大地を睥睨する高台の修道院の一室。祝福のように降り注ぐ眩い光を黒枠として切り取る大窓を背に、オルルク騎士団団長デルモッド・リアリは椅子に座る老人とその背後に立つ青年を眺めながら柔らかな笑みを浮かべる。

「血迷いましたか？　このファリアスは、言わば、帝国におけるカテル・マトロナ派の牙城。ファウストウス派の枢機卿と大司教がほぼ単独で乗りこんで来るとは」

椅子に座る老人　ヴァルーナ神教ファウストウス派枢機卿オリヴィエーロとその背後に立つ青年　ヘッセン・ダルムシュタット大

司教イエレミースを見遣り、やわらかな微笑をかたちづくったまま、デルモッドは目を細めた。

「我々が手を出さない、とでも？」

オリヴィエーロの口許に悠然とした笑みが刻まれ、傲然とデルモッドを見返すイエレミースがその薄い唇を吊り上げる。

「確信して、おりますよ」

わずかに顎を擡げ、イエレミースは嗤う。

「先の帝都包囲にての振る舞い。帝国におけるオルルク騎士団の立ち位置を正確に捉えているであろう貴殿がそのような愚を犯すはずはない」

見下すような大司教の蒼を、ゆるやかな笑みをたゆたわせたままのデルモッドの目がしなやかに弾く。

「理由を、お尋ねしても？」

「我々は先遣りです。ここファリアスにて、公会議を開催すべく、訪れる者たちの。じきに、ここには、多くの理の女神の婢が集いましょう」

不遜なまでに淡々と、イエレミースは言葉を繋ぐ。

「そんな話は初耳ですね。この聖地をいったい何に使っておつもりですか？」

目を灼かんばかりの光の中、その影をすら苛烈な光に塗り潰されな

がら、デルモッドはにこりと笑った。

光の裏として横たわる影に融ける黒衣。背後にて生まれた唇を持ち上げようとする気配に、聖地を護る騎士を見据えたまま、オリヴィエーロは軽く片手を挙げてイエレミアスを制する。そして、思惑を覆い隠すデルモッドの笑顔を値踏みするように眺めながら、ゆっくりと、オリヴィエーロは組んだ指を膝に置いた。

「帝国国教会は皇帝と訣別する」

枢機卿の唇よりもたらされた音に、やわらかな微笑をたゆたわせたまま、デルモッドはわずかに首を傾げる。

「ファウストウス派は、皇帝と袂を分かつ、と？」

「本来の在り方に戻るだけだ」

「皇帝を立てておく利がなくなりましたか」

眇められるデルモッドの目に、鮮烈なだけの光が艶と宿る。

「それとも、皇帝という庇護膜に包まれていては、この先において不都合が？」

オリヴィエーロの唇が、描いていた笑みを、一層、深いものとした。光が満ちる静寂に声を響かせたのは、大司教たる青年。

「この度の公会議、その開催を謳うはファウストウス派の教皇です」

大司教の奏でる音律を、枢機卿が引き継ぐ。

「カテル・マトロナ派が戴くは法王、ファウストウス派が戴くは教皇。そして、女神の婢が仰ぐは、調和の色たる天空の蒼。帝国領内



に唯一所領を有するカテル・マトロナ派の修道院が　ファイナ騎士団とともに帝国における騎士団の双璧を成す　オルルク騎士団。カテル・マトロナ派の法王がファウストウス派の大地に打ちこむことに成功した唯一の楔、帝国における法王の目。そして、ファウストウス派にとつては、帝国における法王への唯一の耳。帝国という対象に変化が生じた際、いち早くそれを法王庁へと伝えるのが貴殿らの役目のひとつであるのなら」

「これからにおいて生じるであろう帝国における皇帝と教会との分離を　それが未来であるうちに　オルルク騎士団に枢機卿たる者がもたらすことをもって、帝国国教会はファリアスにおける公会議開催の対価としますか」

失笑のような吐息とともに、デルモッドは小さく肩をすくめた。

「悪い話ではないはずだ」

悠然と、試すような笑みをもって、オリヴィエーロは断言する。

「カテル・マトロナ派にとってではない。皇帝を教皇が凌ぐであろうこれからを予見するのであれば、教皇の手の上に所領を有するオルルク騎士団にとつては、その存続を望むのなら足許を固めることは必須であるはずだが？」

「抜かりないですね」

デルモッドの口許を、冷笑が過ぎった。

「今、貴方がたは、カルヴィニア公爵を使って、帝国の東にてアレクサンドリア王国とアレクサンドリアの出身者が多数を占める小国群立地帯のカテル・マトロナ派教会の目を引きつけているはずですが。それをもってすら教皇再誕を円滑とするには足りないとお考えですか」

「そちらこそ抜かりない」

く、と、枢機卿は愉しげに喉を鳴らす。

大司教を従えるように、ゆつたりと、枢機卿が立ち上がった。閃光の白に黒という色彩が刻まれる。

「女神ヴァルーナとふたりの聖人が最初に出会ったということこファリアスは、紛うことなき我々の聖地」

光に潰される騎士と、光に彩りを刻む枢機卿。理の女神に剣を捧げる者と、女神の理を撒き謳う者。対峙する天空の婢、黒を纏うひとりが嗤う。

「理をもって世を導く者が再び生まれるには、これ以上もなく、相応しかろう」

帝都第七層　皇城。

艶を孕む斜陽に濡れる皇帝の執務室。帝都を一望できる大窓の前に立ち、眼下を眺めながらアクイーノ侯ヴァレリアスは問う。

「近衛は動かさないのか？」

翳を孕む落日の煌きに溺れる緑髪。執務机に肘を置き、組んだ指の上に顎を載せている女帝がその臉を持ち上げることはない。

「帝国における至尊の剣。帝国を統べる者にとっての、平時における唯一の剣にして有事においては切っ先を向けられるこのと想定せずともよい剣。せつかく手にしているそれを鞘に納めたままにして

おくは、それこそ宝の持ち腐れといったものだ。主に頭を抑えられたままでは流石の近衛も浮かばれまい」

瞼を落としたまま、女帝はその小振りな唇を持ち上げる。

「動いてなら、いるはずよ」

銅に染まる帝都を眺めたまま、アクイーノ侯は嗤う。

「平常任務の遂行を指しているわけではないのだが」

「待機ならさせているわ」

「帝都駐留部隊にだけ、だろうに。他部隊の動きは平常と変わらぬはずだ」

これに、瞼に隠されていた蒼を薄暮に曝して、女帝が小首を傾げた。

「変える必要があるとでも？」

前を向いたまま、アクイーノ侯は眼だけを後方に遣る。

「帝都における現状を鑑みるに、なぜ、帝都駐留部隊を動かさない？ 第三層と第四層の境が破られるは時間の問題だ。皇帝直轄領の治安を維持するように、帝都の治安を維持するのも近衛軍の役目だろうに」

「帝都の治安維持を職務とするのは帝都警察。少なくとも、三層以下は彼らの管轄よ」

「四層以上において帝国貴族が殺されたのならば動かしてやろう、ということかな？」

ささやかな皮肉に、女帝の唇がゆるい弧を描いた。

「好きに取ればいいわ」

夕陽に沈む白亜の街を見下ろすアクイーノ侯の背中を、女帝は上目遣いに見つめる。

「でも、どうして、貴方は帝都に留まっているの？」

「なぜ、教会を野放しにする？」

疑問を弾いたのは、返答ではなく、異なる疑問。

「教会が帝国から分離しようとしていたこと。ひいては教会が皇帝による教皇の叙任という現状を転換しようとしていること。そここに目と耳を持つとされる皇帝が知らなかった、と？」

くすりと、女帝は笑う。

「やはり同じエマヌエーレね。教会の内情、貴方に零したのは枢機卿？」

「では問おうか。エマヌエーレ公爵にして帝国皇帝たるラヴェンナ・ヴィットリオ・エマヌエーレ。西方諸侯を中心とし、帝都へ出向している者を通して各自由都市に 味方につけるまではできずとも 中立を約したらしいアクイレア。それは事実上の皇帝への反目。なぜ彼らを泳がせておく？ 叛徒たるアクイレアの存在をその対応において肯定するのか？ それは公爵としての判断か？ それとも皇帝としての視野からか？」

静寂に耳を澄ましながら、アクイーノ侯はゆっくりと瞼を落とす。

「それとも、シャグリウス・アクイレアの遺志を、継ぐうとでも

「？」

女帝の口許を過ぎったのは、微笑のような失笑。

「面白いことを言うのね。あの者が何を意図していたのかすら判然としないというのに」

アクイーノ侯の口許に、面白がるような笑みが浮かぶ。  
響いたのは、耳にまるやかな澄んだ声音。

「枢機卿に伝えたということは、貴方にも教会にも、あわよくば皇帝にも、あの者は自らが連ねた名が伝わることを見越していたということ。そして、その名を得た何者も、今のところは何の動きも見せていない」

執務室の隅、やわらかな闇に気配を蕩かして佇むのは、紅を纏う金髪の従者。

「あれは、贈り物などではなくて、手を出すなという牽制」

斜陽の翳り、落日の煌き。蒼穹をそのまま嵌めこんだかのような蒼の目にアクイーノ侯の後ろ姿を映しながら、女帝は薄暮に艶めく鋭いだけの目を細める。

「少なくとも、皇帝への意図は、その者たちだけは肅清はするなという意思表示。それが、あの者が描いた、あの者の望んだ何かを実現するためには必要な条件の一端」

澄んだ声音の残響が、夕暮れと黄昏の挟間のまろやかで冷やかな大気に融けた。茜を帯びた闇を纏いながら、ゆったりと、アクイーノ

侯は身体を反転させる。

「辺境伯が来た」

青褐と銅が緋い交ぜとなった黄金が降り注ぐ帝都。大窓の前、街並みを背負う男の唇がゆるい笑みをつくる。

「帝都総督からの要求を携えて、だ。内容だけならば伝えたはずだが？」

「帝都市民によって帝都上層と総督府が同一視される場合、すなわち、帝都市民が総督府に牙を剥くことを想定した場合。その際の、事態の鎮圧と総督府保護のための近衛軍出動要請」

男を見つめるだけの怜悯な目。まろやかな声が奏でる鋭利な口調には冷笑が返った。

「結果として聞き容れられなかったようだが」

男の眼の先には斜陽に溺れる女帝。つくりの甘い蒼の目が見据える先は変わらぬまま、その口許に艶やかな微笑が花開く。

「アクイーノ侯。貴方なら、私の許可など得なくとも、その程度のことはしてみせるでしょう？」

これに、無言のまま、男は口許の笑みを深くした。黄金の煌きが舞い融ける薄闇に染まる落日に、女の微笑が艶めく。

「ただ、帝都総督の狙いが保身であるのなら、その申し出はいささか危ういわね。そのようなことが起きた場合、貴方のような者には防波堤としか見なされないであろうこと、躊躇なく切り捨てられる

だけであるということ。あのエマニユエル・ガデが解さないはずはない。では、帝都総督は何を得ようとしたのかしら？」

「帝都の自立の維持、だ」

ひとつの断言を、男は紡ぐ。

「帝都と新興階級が組んでいることは明白だ。そして、新興階級は西方都市同盟と近い。西方都市同盟と辺境伯はいささかなりとも関わりがある。だからこそ、お互いの間の取り持ち役として辺境伯が使えるわけだが」

微笑を浮かべたまま、女帝は小首を傾げた。

「何が言いたいの？」

「皇帝の居城はあれど、帝都は皇帝の庭ではない。一時的にであれ総督府が倒れば、帝都は皇帝にその自立性を奪われる、と、帝都総督は考えている。おそらくそれは、帝都を拠点として活動する者たちの総意だ。だが、現状においては、潰されないためには手段など選んでいられないと踏んだのだろう。牙を剥かれる相手が帝都市民では皮肉でしかないが、相手が相手であるだけに、帝都警察は手が出せない。そこで、近衛に出動願おうというわけだが」

ここでアクイーノ侯は傲然と顎を上げ、見下すように、女を見遣る。

「この茶番の報酬として、奴らは何を持ち出してきたと思う？」

そして。

男によってもたらされたひとつの名に、一瞬だけ、女の蒼の目が揺らいだ。

The second act - 17 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /



## The second act - 18

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 3 / 07

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

アレス王国王都エヴル    王宮。

ゆるやかに満ちる眩いまでの光、潤んだ風にきらめく樹々の葉。ほのかに甘い土の香と爽やかな若葉の香が綯い交ぜとなった、肌に心地よい風が吹き抜けてゆく。

石造りの噴水と咲き乱れる花々。そこここを行き交う蝶と蜜蜂。春の絢爛が弾けている素朴な造りの中庭を囲む回廊で、ゆったりと歩んでくるひとりの女の姿を捉え、メルキオルレ・モデルノは回廊の隅に寄り膝を折る。回廊を歩む女の名はクロディーヌ。跪くモデルノの前で歩を止め、ぱちりと扇を閉じ、クロディーヌはモデルノに立つことを許した。そして問う。

「このようなところで、何を？」

「見事な庭でしたから、散歩など」

柔和に笑むモデルノと、開いた扇で口許を隠しながら目を細めるクロディーヌ。あたたかな陽だまりで対峙する老人と女。小鳥の囀りがやわらかな大気を震わせた。

「帝国は混迷を極めています」

口許を隠したまま、クロディーヌは値踏みするように老人を眺める。

「帝国の安寧に尽力すべき帝国三大公爵家のアクイレシアに嫁いだ者として、ガイウス・アクイレシアの正妻として、妾にはこの事態を看過することはできません。混迷を助長する輩に正統の何たるかを思い知らせてやらなければ。メルキオルレ・マデルノ。かつては帝国宰相としてその手腕を振るい、亡命の果てにすら帝国を想う卿ならば、勿論、協力してくれますね」

肯定も否定も口にすることなく、柔和な笑みを浮かべたまま、マデルノは疑問を呈してみせた。

「どのような、手段をもつて？」

「アレスの後ろ盾を得て、アクイレシアを再興します」

自信の漲る断言に、マデルノの顔から笑みが消える。

「それは」

酷薄なまでの犀利さが、マデルノの蒼の目に灯った。

「それは、現実的ではありませんね」

クロディーヌの眉間に皺が刻まれる。

「なぜです？　こちらにはカトゥルスの子がいます。アクイレシアの直系であるカトゥルスとアレス王家の血を継ぐ子が。大陸において、これほどの高貴なる者は稀有なはず」

「そういった意味で申し上げたわけではありません。御子の血統ほ

ど高貴なものもない。私が申し上げたいのは別なこと。冷酷帝により生み出された動乱期。その収束に選定侯が動いたことはご存じですね」

「エマヌエーレの小娘を皇帝に据えることで帝国に安定をもたらそうとしたようですが。表向きは兎も角、所詮は不義の子。あの者を皇帝に据えるなど、選定侯も愚鈍な。正統を欠く者を選ぶなど。いずれ帝国に不利益をもたらすことは判っていたでしょうに」

「では、先の動乱期よりも帝国の危機と見なすことも可能な現在、どうして選定侯は動きを見せないのです？ 皇帝なる者を引き摺り降ろす正当なる権限を有するは、聖俗五選定侯のみ。それは、帝国において、皇帝により生じる混乱を收拾する責を有するということ。その選定侯が、動きを見せてはいない。ヘッセン・ダルムシュタット大司教とカジミューシエ司教が教会を代弁するは明白。前者はベルナドットの利となるよう動くでしょうし、後者はエマヌエーレたるオリヴィエーロ枢機卿の意思を無視できない。ブランドンブルク伯爵が、その封土の経緯からして女帝に背を向けられないことも、場合によっては西方都市同盟を代弁するであろうことも明白。先のアルバグラード会戦にて親皇帝であったナツセレディーン侯爵ベルナールを喪ったテルム家が、その姻戚関係からベルナドットに寄るであろうことも、可能性としては大きい。そして、何より、先の動乱の際にはその收拾に率先して動き、聖俗五選定侯の中で最も帝国三大公爵家に囚われないはずのサディヤ侯爵が沈黙を守っている」

ひとつ息を吐き、マデルノは正面からクロディーヌを見据えた。

「サディヤ侯爵ヨーヴィルは、無駄なことは一切しない男です。あの者が動かないということは、皇帝を挿げ替えたところで意味がない、と、そう判断したということ。すなわち選定侯制度そのものの無力さを認めたということ。ゆえに、そこでは帝国三大公爵家という位置づけは意味を持たない。ベルナドット公爵家は 当主が幼

いことを差し引いても　冷酷帝と無冠帝の長期に亘る出兵により財政基盤が弱体化している。そして、先の帝都包囲を契機として、アクイレシア公爵家は断絶。唯一公爵家に相応しい権威と財力とを有するエマヌエーレ公爵家がこの混乱の中心であるとするのなら、それこそ、そこにアクイレシア家を再興したところでより事態の深刻さが増すだけ。アクイレシア家を再興したところで、事態は何ひとつ解決しないのです。たとえ再興が叶ったとて、以前のように公爵家として立つことができるとも限らない。そこその影響力は維持できるでしょうが、以前のように絶大なそれとはなりえないでしょう。その理由が、その図式が、貴女には見えていない」

ぱちりと、クロディーヌが扇を閉じた。

「お黙りなさい」

「これは公爵家だけに言えることではないのです。諸侯のすべてに当てはまる。ただし、かたちを変えて、それなりに君臨することは可能でしょう。元手と人脈が在るというのは、それだけで強みです。ですが、その社交界はもはや王侯貴族のみによつては成立しえない」

「黙りなさい」

「同じ役者を揃えたとして過去が取り戻せるわけではないのです。ゆえに、私が貴女に手を貸すことはない。その程度の目すら持たぬ者と共に歩むなど、もとより後ろ盾の貧弱なこの身、できるはずもないでしょう？」

「お黙り！」

硬いもので肉を打ち据える音が大気を裂く。

透きとおった幾重もの緑陰がきらめきと翳りとを地にもたらし、まるでやかな風が咲き綻ぶ花々のやわらかな花弁を撫でて蒼穹に吹き抜けた。

「口が過ぎる」

優美に扇を開いて口許を隠し、穢れを拒絶する蒼の目をもって老人を見遣りながら、クロディーヌは踵を返す。  
雨音のような葉擦れに、苦笑を含んだ声が響いた。

「意外と齒に衣着せぬな、貴殿は」

扇で打ち据えられた頬の裂傷を指でさすりながら、マデルノは申し訳なさそうに背後を振り返った。

「お見苦しいところを」

回廊と中庭の境に立ち並ぶ石柱の、その一本。マデルノの背となる位置に佇む石柱の影、回廊に背を向けて茂みに隠れるように置かれている長椅子に座る金髪の少年が首だけを巡らせて背後を見上げた。その碧の目には気遣わしげな色がちらついている。

「気にすることはない。それより、大丈夫か？ いささか痛そうだが」

「ご心配には及びませんよ」

そうなのか、と、腑に落ちない様でぎこちなく頷く少年に、老人はやわらかな微笑をつくってみせる。

「クロディーヌは昔から変わらぬ。正統なる血脈を継ぐ者の正当なる婚姻こそが、秩序を体現し維持するには必須であると。それだけが繁栄と安寧を実現する素地であると。そう信じて疑わぬ。自らに脈打つ血に相応しく生きようとすることも、それに縋って成る矜持も、必ずしも間違っているわけではないがな。だが、万事が万事あ

の調子だ。クロディーヌを娶ったアクイレア公爵ガイウスも相当に苦労していたのではないか？」

苦笑と沈黙を返答に代えるマデルノに、金髪の少年　アレス王口シュフォールは然もありなんとばかりに肩をすくめてみせた。そして、少年王は膝に置いていた本に眼を戻す。ゆるやかな微笑をたたわせながら活版印刷の文字を追う少年王の金髪が緑陰を揺らす風に踊った。

「誘いのすべてを断わっているようだが、共に歩むに値する者は見つからぬか？」

「お気を悪くされましたか？」

困ったように笑むマデルノを背に、楽しげな声を弾きながらロシュフォールは瞼を落とす。

「そんなことはない。無責任ゆえの好き勝手な戯言、楽しみにしている」

そして、少年王は物想いに耽りながら首を傾げた。

「それにしても、トーマス・ワーディングを名乗る著者は、いったい何人いるのやら」

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の第30日。

夜の冷やかさを名残とする朝、若葉の香を孕むまるやかな風。静寂という眠りと、沈黙という静止。鮮烈に過ぎる夜明けの光が世界に満ちて、蒼の薄闇が次第に霞みゆく時刻。

目覚めを告げる振動、城門が開かれることを示す時告げの鐘。渦巻くように霧散する荘厳なる残響。一時だけ大気に滞留するそれが反響した果ての蒼穹に、白の閃光が散った。それは、纏まることとばらけることを繰り返しながら帝都の街並みを撫でるように旋回し、やがてはいくつかの群れと成って方々へ飛び去ってゆく。異民族街の一角、鳩の羽根が舞い降る屋根の上。鳩小屋の扉に錠前をかけていたシルウア族の耳に聞き慣れた声が届いた。

「ディアス、さん？」

夜明けの風にふわりとした髪を煽られながら、やや強張った面持ちのリーザが窓から身を乗り出している。錠前がかかったことを手の中で確認しながら首だけを巡らせて、ディアスはにこやかにリーザを見つめた。

「おはよう、リーザちゃん。朝食の準備はもうできてるから、食べれるようだったら店において。セルヴ君の分も、用意してはあるけど？」

「ありがとう。だけど、昨日も帰ってきてないの。だから、申し訳ないのだけれど」

「リーザちゃんが謝るようなことじゃないし、セルヴ君が謝るようなことでもないよ。必要ないなら必要ない、というだけの話さ。誰かが気に病むようなことじゃあない」

リーザの翡翠色の目がわずかに瞠られ、それはすぐに蕩けるような穏やかさに変わった。ゆるやかな微笑を浮かべる唇が、安堵と感謝とが綯い交ぜとなった声を紡ぐ。

「ありがとう」

蒼穹を背に立つディアスが困ったような照れているような微笑をたゆたわせた。風に赭の髪を遊ばせている長身のシルウア族の周囲に漂っていた鳩の羽を、潤んだ風が攫ってゆく。

綿のような寄る辺ない羽毛が踊り舞う様を追っていた翡翠が、ゆっくりと、シルウア族に戻されて。

無言のまま見つめてくるリーザが問わんとしていることへの返答を、風に遊ばれて立つディアスは音にした。

「同じことを記した紙を、各地のシルウア族に。それこそ、伝えるべき相手の数は、ここの鳩だけでは足りなくらいではあるんだけど。自分、僕も鳩たちもここには帰ってこないからね」

肺が軋むような澄みすぎている大気に包まれながら、リーザが息を呑む。

「だから、戸締まり、だよ」

静かに断言を落とすディアスの背後で、扉を閉ざした錠前が風に揺れて鳴った。

帝都第三層　帝都総督府。

太陽が蒼穹の中心に昇る頃、帝都総督府前の広場を総督の執務室の窓から見下ろしながらブランデンブルク伯カークが眉を顰める。

「何だ、あれは」

伯爵の背後、執務机にて組んだ指に顎を載せている老人が瞼を落としたまま唇を持ち上げた。



「あれは、帝都市民、です。食糧に困窮した市民を見かねて皇帝が国庫を解放する、という報が駆け回りましてね。ああして大勢でおしかけて、第三層と第四層の間の門を開ける、と、要求しているわけです」

傍観者めいた口調で老人　帝都総督エマニユエル・ガデは事実を紡ぐ。眉を顰めたまま、伯爵は身体を反転させ、総督に向き直った。

「皇帝が？」

「真偽のほどは判りません。その話をばら撒いたのが何者であるのかさえ、定かではありません。しかし、腐汁の滴る果実すら貴重となってきた帝都において、その話に食いつかないでいることが難しいということは理解できる」

「だが、門を開放するわけにはいくまい」

「そうですね。彼らがあの門を突破するようなことになれば、国庫だけでなく、四層以上において貴方がたが略奪と呼ぶものの限りを尽くすことは目に見えている」

総督の臉がゆつくりと持ち上がり、底の知れない生気が光る蒼の目が伯爵を射抜いた。

「近衛軍は、未だ、動いてはいないようですが」  
「何が言いたい」

軋むように鋭さを増す伯爵の目を、冷徹なだけの総督の蒼が弾く。そこに満ちるのは、刺すような光と張り詰めた沈黙。窓硝子にくぐもるのは、群衆が生み出すうねりのような音の重なり。退路を断つかのごとく総督府を包むその渦は、狂乱と秩序の境界にたゆたう熱を孕みながら質量ではない重さを膨張させ、静止という滞留が堰き

とめる勢いを加速させてゆく。

「不愉快だ」

吐き捨てる伯爵と、それを流すかのように肩をすくめてみせる総督。ガデの前を横切って廊下への扉を開けた伯爵を、帝都警察の黒が押し返す。帝都の治安を預かる黒が、四方から伯爵を囲み、その首筋に銃口を据える。鋭さと眩さを増し続ける陽光に影が落ち、四つの黒から伸びる四本の銃の長い銃身は十字のような図形を床に描いた。怯むことも身じろぎすることもなく、前を見据えたまま、伯爵は背後に問いを投げる。

「何のつもりだ」

「伯にはここに留まっていたいただきます」

動じることも身じろぎすることもなく、前を向いたまま、総督は状況を音にした。

「人質のつもりか？」

対象を明らかにしないこの伯爵の問いに、

「ええ、おっしゃる通りです。自らがそれに値する自信もありなようですから」

ゆつくりと瞼を落しながら、総督は冷笑をその口許にたゆたわせた。

帝都第三層　ユスキュダル・バナヤス邸。

穏やかであるはずの昼下がり、閑静なはずの邸宅街。緊迫を孕む静寂に、葉巻の紫煙がゆったりと逆巻く。

「ようこそ、帝都へ。ハンスユルゲン・ザリエル」

泰然と椅子に寛ぐバナヤスが、苦笑しながら卓を隔てて置かれている椅子に腰かけた客人に葉巻を勧める。陽に焼けた肌と黒の短髪を持つ壮年の男　西部都市同盟代表ハンスユルゲン・ザリエルは、バナヤスから葉巻を受け取ると慣れた手つきで火を点し、美味そうに紫煙を燻らせた。ゆるやかな煙は流動を繰り返しながら昇ってゆく。

昼日中の明るい陽光にはどことなく夕暮れの気配が潜み、やわらかなあたたかさに交じる冷ややかさは薄く硬く翳りを広げていった。若葉に彩られた淡い裏庭、紫煙のたゆたう離れにて、ふたりの男が言葉を交わす。

「到着が帝国議会開催予定のその日になってしまったが」

「なに、舞台は今この時をもって築き上げている途中だ。そして、西方より帝都に至る道程における貴殿の働きもその一端を担っている。そちらの首尾はいかがかな？」

「時を俟たずに、この帝都には土を耕す者の群れが現れよう」

紫煙を燻らせながらの断言に、ほう、と、バナヤスの目に好奇心のような煌きが生まれた。

「どうやってそれを仕組んだ？」

「この議会において決される法案によって彼らの土地は奪われる、と、吹聴させた」

「アリンガム卿とは逆の意見だな」

く、と、バニヤスは愉快そうに喉を鳴らす。

「だが、それこそが彼らの懸念そのものであり、ゆえに領主を押し  
のけてでも動き出す原動力となる。ある意味においては真実だが、  
騙すような理由であることも事実。しかし、それゆえに、彼らに同  
調する諸侯も存在する。求める利は異なれど、その利を得るに必要  
な条件は同じだからな。ところで、その様子では、気に食わない遣  
り方かな？」

ゆるやかな笑みを浮かべるザリエルに、バニヤスはかぶりを振る。

「理由などいくらでも後づけできる。我々が欲しいのは現象だ」

ふわり、と、紫煙が渦巻いた。

「貴殿を通しての我々による南方異民族への秘密裡の援助により、  
西方は膠着。諸侯にも異民族にも横合いから叩かれることを一  
時的にはあれ　気にかける必要のない帝都は、帝都だけにおい  
て事象を完結できる」

臉を落とし、バニヤスは愉しげに言葉を紡ぐ。

「さて、舞台はどれほど整ったかな？」

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の第30日　夕刻。  
帝都第三層、中央広場。総督府や教会に囲まれている群衆で埋め尽  
くされた広場と、その一角を占める上層と下層を隔てる城門。白亜

の街を染め上げるのは、艶やかな翳りを帯びた、鮮やかな薄暮の陽光。

蒼穹の名残、黄金の煌き。夜の青褐と斜陽の茜が綯い交ぜとなった空。地を覆うは満ちる大気が雫となって滴り落ちてきそうな透明な半球。天空と呼ばれるそれは、透きとおっていて荘厳で、果てが無く底も知れない。

帝都包囲を契機として毎日のように繰り返される光景。群衆の頭上を駆け抜けるまろやかな風と、散じてゆく喧騒。

繰り返されるといふ安定に、ひとつの振動が不均衡をもたらした。ばらける音が不規則に鳴動する大気を銃声が切り裂く。生まれたのは悲鳴と怒号。石畳の白亜に溜まる緋の流動は、世界を濡らす斜陽の彩りに覆われてすらどこまでも黒い。

帝都第三層、城門前。倒れこむように閉じられた鉄扉に背を預け、硝煙を纏わりつかせる銃口を上に向けて銃を抱え、充血した目で前を見据えながら喘ぐように肩で息をするのは、右の大腿に短剣を突き立てられた帝都警察の黒。その眼の先、石畳に蹲るのは左肩を打ち抜かれた男。異変に気づいた黒が動くよりも早く、石畳に溜まる黒としか見えない熱を孕んだ流動が乾きゆくよりも早く、狼狽と恐慌から派生した赫怒が漣のように広がってゆく。

### 帝都第三層 帝都警察本部。

その窓からは城門に殺到する群衆がうねり狂う波のように見えた。窓の前、群衆の向こうに総督府を置いて中央広場を眺めていた帝都警察長官アルノルト・クリーアの背中に声が投げかけられる。

「近衛軍が動く気配はありませんね」

淡々と響く声は、酷薄なまでに冷徹に、事実だけを並べてゆく。

「動かさないのか、動けないのか」

帝都警察長官の執務室の扉の前に佇む細身で長身のテウトニー族  
アルベルトウス・ラエルティオスの紫紺の目が細められた。

「それとも、動けないことは事実であれ、それゆえに起こるであろうことを待っているのか」

黙したまま群衆を見据えるクリーアの蒼の目が鋭さを帯びてゆく。

帝都第七層　皇城。

斜陽に染まる白亜、心地よい冷ややかさを帯び始めた夕暮れの風。  
やわらかな若葉の葉擦れ、静けさの満ちる部屋。絵筆を操る画家の  
前、椅子に座る男が窓の外を見遣る。  
そこから見えるのは、平坦な黒と化した山稜に融ける、融解する金  
属の熱を色彩として纏う鮮烈な落日。

「美しい太陽だ」

艶を孕む銅に頬を濡らすヴァレリアスが笑んだ。肖像画を描く筆  
を停めたジジが首を傾げる。翳りを孕む黄金に、少女の軽やかに揺  
れる黒の巻き毛が煌いた。

画家の硝子玉のような蒼の目に、冷笑めいた失笑をたゆたわせる男  
の横顔が映る。

「これぞ、世に君臨するに相応しい」

帝都第三層　帝都総督府。

斜陽に溺れる帝都。そこで生まれた波紋と、反射し折り重なることを繰り返した末に立ち現れた激流。

窓辺に歩み寄ったガデが城門に押し寄せる波と化した群衆を見据る。そして、昇り押し返され倒れその上を踏みつけながら進む人々の地平の果てに、跳ぶが如く前脚を上げて停まる馬を見た。

遠く、銅に沈む影のような馬。眇めた目に馬上にて手綱を繰る者を捉えたガデが苛立たしげに吐き棄てる。

「オルトヴィーン・ヴァースナー、だと？」

The second act - 18 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /



## The second act - 19

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 3 / 08

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

帝都第三層、中央広場地中    帝都警察本部地下牢。

闇が覆う石壁の挟間、追いつめるようにまとわりつく水気を孕んだ大気を置き去りにしながら、ひとりの女が靴音を響かせる。螢火のような手燭の残像と、迷いのない歩調。女が歩む道筋の左右には牢の鉄柵。闇に融けかけている鉄扉の錠はすべて外され、牢の中はすべて空となっていた。

囚人が逃げた末の、看守のいない牢獄。

左右を鉄格子に挟まれた道の行き止まり。結露に濡れ光る壁に穿たれた、ひとひとりがやつのことで通れるほどの長方形の闇。更なる闇が蟠る階下への入り口に、躊躇うことなく女は足を踏み入れる。地の底へと続く階段と、そこに反響する靴音。立ち眩みを覚えるほどにうねり踊る靴音が、喉につかえるほどに水を孕んだ大気の満ちる静寂に渦巻いた。

やがて女が辿り着いたのは独房の並ぶ更なる地階。それまで歩調を崩すことのなかった女がひとつの独房の前で歩を止め、凜とした立ち姿はそのままに、蒼の目で横を見遣った。

そこに蟠るのは纏わりつくような闇。鉄柵を軋ませながら、一步、女は闇に近づく。そして、手燭が仄かに拓いた闇に一瞬だけ浮かんだものを前に立ち尽くした。

寄る辺無さと遣る瀬無さに揺れる蒼の目が見つめる先には、眠っているかのように、壁に背を預けて座るひとりの男。立てられた片膝と投げ出された片足、投げ出された片腕と手枷を填められた片腕。服の裾や袖から伸びるのは、華奢を通り越して細いだけの、肉の薄い骨の浮いた四肢。大気に曝されている肌には包帯が目立ち、緩められている上着の襟元から覗く鎖骨は影を生む。

男の前まで歩を進めた女は、その場にしゃがみこみ、手燭を床に置いた。

漆黒を纏う女の傍らで、わずかな気流に炎が乱れる。

石膏よりも滑らかで、陶磁器よりも透明な、無機質な触感を想起させる肌を冷えた大気に曝す男。右目を覆い頭に巻かれた包帯と、落とされている薄い瞼。生物としての熱が希薄なそれは、ひとつのかたちを模した人形のように、生きているのかすら判然としない。

躊躇いがちに伸ばされた女の指先が、大気に強張っている男の耳を掠り、白金の髪に触れた。指に絡まることなくばらけていく髪の毛のやわらかさを懐かしむように、ほのかに留まっている微熱の名残を愛おしむように、女は男の髪を梳く。

女の親指が男の頬を撫でた時、かすかに男の睫毛が震え、ゆるゆると緩慢に、薄い瞼が持ち上げられた。大気に曝されたのは、女が記憶しているよりも一回り小さな印象の男の、女が記憶している通りの藍とも紫ともつかない光のゆらめきによって色彩が流動する左の目。その身に刻まれた傷が生む熱に浮かされているためか、揺れ踊る炎の仄かな光を捕らえたその目は艶を孕む。ぎこちなく擡げられた首と、ぼんやりとした面。やがて、茫洋としていた片目は焦点を定め、軽く睜られると同時に驚愕に揺れた。額を覆うことも頂を隠すこともない男の髪を梳きながら、女は小首を傾げる。

「随分と好き勝手にさせているみたいだけれど」

石壁の高い位置に礎を打ちこまれた鎖に繋がれている男と、冷え切

った男の耳に温さを与えるように纖手を伸ばす女。

「らしくないわね。こんなところで何をしているの？」

淡々と紡がれる音律に潜むのは、呆れのような怒りのような感情のゆらめき。

驚愕に揺れていた男の目が冷徹さを帯びる。男の肺が大気を吸いこんだ。喉につかえたそれに咳きこみながら、それでも男が女を見据える眼を逸らすことはない。

鮮烈な残像を闇に灼きつけながら、蠟燭の炎が踊った。

「君こそ、らしくない。こんなところで何をしている？」

乾いた唇から零れたのは、玲瓏とは程遠い、かすれた音。

「そうね、何をしているのかしらね」

ゆるく、女の朱唇が弧を描く。沈むように緩慢に、男の目が鋭くなった。睨めつけてくる淡い藍を、つくりの甘さを裏切って伶俐さの際立つ女の蒼が受けとめる。張り詰めた冷ややかさを纏う男の目とほのかな苦さを孕みながらわずかに細められる女の目。女の親指が男の脛をなぞり、目を伏せざるをえない男は震えるように浅く息を吐いた。胸につかえるような蟠りやぐらつく悲憤のようなものを上手くできないでいる呼吸に紛れこませながら、男は目を伏せたまま女から眼を逸らす。闇を蕩かした淡い藍にゆらめく炎が映りこみ、煌きのような艶が生まれた。

静寂が闇に染み渡り、静謐が沈黙を駆逐する。ささやかな灯がやわらかな光をさざめかせた。

「そこにいるのが君である必要はないだろう？」

囁きのような吐息のような音が、唐突に、意味を撒く。

「そうかもしれないわね」

まろやかで澄んだ声が、響いた。

「だけど」

問いかけと納得だけが理解を無視して交錯する闇。

「それなら、どうして、貴方はここにいるの？」

唇だけが微笑をつくる女。小首を傾げる女の、すべてを覆う闇の中においてすら艶やかな緑髪が散る。女を見上げる男の口の端が吊り上がり、嘲笑のような失笑のようなものが刻まれた。

「愚か、だよ」

かすれた断言は返答と呼べるようなものではなく。

「貴方も、どうしようもない愚か者だわ」

「そんなもの、棄ててしまえばいい」

わずかに顎を引いて俯く男の、聞き分けのない幼子のような、平坦を欠いて揺れ動く声音。女の投げる言葉と男の放つ言葉は、どこか噛み合わないまま消えてゆく。

不意に、鎖が鳴った。

男に覆い被さるように身を傾げ、女は男の顔の横で肘を折る。そして、女は男に填められた手枷と壁とを繋ぐ鎖をその細い腕に絡ませ

ながら掴んだ。男の目が瞪られ、纖手に反らされた喉が大気に曝される。細い顎を指で持ち上げて男の呼吸を奪った女は、石壁をずり落ちる男の背にそれまで鎖に絡んでいた片腕を回した。やわらかな白金の髪を掬うように指を滑りこませながらその手のひらに男の頂を捕らえた女の肩に、手枷の鎖を鳴らしながら抗うように持ち上げられた男の手が掛かる。華奢な肩を掴む握力すらないその手は、辛うじて、触れるようにそこに留まった。女に捕らわれたままの男は、かすかに眉根を寄せ、眼を横に遣り、そして、何かを手放すかのうにわずかに潤んだ目を薄い瞼で覆う。

石壁を伝わったのは荒々しい鳴動。頭上の中央広場にて生まれたいしいその振動は、地鳴りのように鉄格子をがたつかせる。

女の肩から男の手が滑り落ちた。わずかに開いた朱唇から零れる吐息が男の唇に熱を与える。男に大気を吸いこむことを許した女は、その朱唇をもつて男の冷えた瞼を撫で、白金に唇を這わせながら、男の薄い身体に大樹に絡む蔦がその幹を締めつけるがごとく両の腕を回した。傷の軋む苦痛に眉をひそめる男が小さく呻くが、男の耳裏に吐息を零す女が抱擁する腕を緩めることはない。それは、掬い取った雪の結晶を大切に抱いていればいつまでもそこに留まると思いいこんでいるかのような、抱いたものを固く握りしめていれば決してその指の隙間から零れ落ちることはない信じこんでいるかのような、ただ頑なな、我が儘めいた仕種だった。

不規則に重なる振動が大地を穿つような鈍い轟音を伴ってゆく。それが砲撃によるものと知る女の腕は、冷えた肌と温い肌を布越しに重ねたところに生まれたささやかな熱を掻き抱くかのように、固く互いの骨を軋ませる。潤み冷えた大気に奪われゆく温さを手放せないまま、ともすれば嗚咽に転じてしまいそうなくひくつく喉を落着かせるかのように、唇だけで女は笑った。

「行かなきゃ」

ぬくもりと共に耳もとで生まれた音に、ゆつくりと、男の臉が持ち上げられた。

「ねえ、シャヴィ」

慈しむように愛おしむように、女はひとつの呼称を落とす。

「甘えることを許してくれるのなら」

くすぐるように甘噛むように、手燭の炎に艶めく朱唇が男の耳朵を撫で。

「どうか、貴方は生き延びて」

男の耳もとから離れる朱唇が身勝手なだけの願望を撒いた。

絡まっていた腕が解かれて剥がれゆく熱と、その瞬間から奪われゆく温さ。女の刻んだ音律が意味することを理解した男が揺らぐしかない目を瞪る。無防備な幼さを纏う男に、漆黒を纏う女が浮かべたのは、甘くもなく酷薄でもない、澄みきった蒼穹のような、透きとおった微笑。

ゆつくりと持ち上げられる淡い藍に、漆黒を翻しながら踵を返し、迷いのない歩調でその場を立ち去る女の背中が映った。

肌を湿らせるほどに潤んだ闇にゆらめくのは、わずかな気流に翻弄されるささやかな手燭の灯。滴るような闇を際立たせるだけの炎が融かした透明な蠟の雫が、短くなった蠟燭を伝い落ちながら濁り凝り、やがてはその動きを停める。

「だめだ」

と、声のような息が零れた。

「だめだ、いくな」

あどけない制止はかすれた声となって霧散する。立ち上がろうとした男の脚は自重を支えることができず、均衡を崩した身体はなんとか鉄格子に右の指先を絡ませながら頼れた。開いた腱の傷が包帯を赤く滲ませ、男の動きに引き摺られて浮き撓む鎖がけたたましく鳴る。

鉄格子を掴んだ手に力を籠めて上体を引き摺るように前進しようとする男の視界には、振り返ることなく去ってゆく女の背中。追いつめるように伸ばした左腕の指先が女をかすめるはずもなく、遠くなる靴音だけが反響する。

「行くな」

小さくなってゆくしなやかな背中を見つめたまま、鉄格子を握り締める男の指先の包帯には朱が滲む。

「行くな」

這いずりながらも前に進もうと鉄格子を掴む男。その傍らには鎖に弾かれて横倒しになっていた手燭。石畳に零れた蠟にゆらめく炎が、一瞬だけ燃え盛り、消える。

床に融け崩れた蠟に埋もれた黒焦げの芯からは色を失った煙だけが淡く細く立ち昇っていて。

「行くな、ラヴェンナ！」

喉が裂けるような血を吐くような、慟哭めいた叫びが闇に渦巻いた。

The second act - 19 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

<http://id>



## The second act - 20

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 4 / 01

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

翳りが生む冷ややかさは、やがて、雨粒が生む冷たさに取って代わった。落下する水滴が針葉樹の葉を叩き、細かな水の破片は透明な滴に吞まれながら地に落ちる。雨粒は、鋭いだけの落ち葉が折り重なる森の土を抉り、融けることのない粒子を孕みながら跳ね返り、薄い流れとなって地表を削った。

歯を噛みしめてみると、知らぬ間に口腔に入っていたらしい土を噛み砕く。鼻腔を満たす潤みすぎた大気には土の匂いしかない。頬に貼りつく泥の感触も、身体を打ちすえてくる雨粒も、雨音も獣の鳴き声も、森のすべてがひどく遠い。だから、手に力を籠めてみた。結果は、泥と一緒に握りしめたはずの針のような枯れ葉がもたらした、ささやかなだけの、刺すような痛み。薄く瞼を持ち上げていることすら億劫になって、森に埋もれるように倒れこんだまま、鈍感という感覚に沈んでゆく。

この身体すら、己のものではないような気がした。雨音だけがすべてを覆い潰してゆく。

精々がこんなものか。麻痺していく四肢と肺を軋ませる重苦しさに、所詮は身体など肉の塊にすぎないと思い知らされながら、そんなことを思う。根づく土地のない浮き草は、どんなに他者を蹴落としたところで咲き誇ることはできないらしい。

しがみついていたかったから、逃げ出したはずなのに。

僕が抱きしめている漠然としたものは、おそらく、執着や固執の対象であるということ以上の意味を持たない。それでも、それを手放してしまっただのなら、僕は浮き草をやめることすら躊躇わないだろう。

その結果がこれなわけだけど。

瞼が生み出す闇に、結晶のような雨粒の残像が跳ね踊る。やがてそれは炎が這い広がる様に転じ、舐めるように踊り狂いながら視界を埋め尽くす鮮烈な熱は、僕が逃れてきたものそのものになった。

まだ、灰燼になど帰するつもりはなかったから。

浅い眠りに浮いては沈む夢のように、記憶の中の事象は融解して混濁して原形を留めない。

眠りの淵に叩きこまれるような、無理矢理に意識を奪われるような眠気と呼べるような優しいものではないものが僕を襲う。在るということを押し潰す、圧倒的なそれに溺れかけた時。

「生き延びたいか？」

声が、聞こえた。

「面白いこともあったものですねえ」

小さな街の宿屋の一室。濡らした布で僕の頬を拭きながら、愉しげにユベールが目を細める。水の染みるひりつくような痛みには顔をしかめた僕は、その反射でしかない頬の動きを後悔した。いくら泥や血を拭ってもらったところで、擦り傷がなくなるはずもない。

背凭れのない椅子に座る僕の顔を、立ったままのユベールが小首を傾げながら覗きこむ。

「襲われかけてる女の子を助けようとしたなんて、どういう風の吹き回しです？」

「助けようなんてしてない」

顔を背けた僕の頬に、わざとらしくユベールが布を押し当てた。

「名誉の勲章、でしょう？」

とりあえず、否定を表明するために眉をしかめてみせる。

霧のようなやわらかな熱がつくる陽だまりは、明るくてあたたかくて、あまりにも居心地がよかったから、まどろみに溺れそうになった。

「とはいえ、この程度で済んだからよかったものの、オルトヴィーンが通りかからなかったらどうするつもりだったんですか？」

笑顔を向けてくるユベールの声が、少しだけ、責めるような響きを帯びる。ユベールを満足させるような答えを口にするなどできないことは判っていたから 心配してくれるのはありがたいのだけれど 僕は背後の扉に眼を遣った。

「どういっつもりなのさ」

僕の頬から冷たさが離れる。上目遣いにユベールを見遣ると、苦笑をたゆたわせながら肩をすくめていた。

「セルヴくんが気にすることはありませんよ。オルトヴィーンの判断です。お父さんとして嬉しかったんじゃないですか？」

「何それ」

「だって、セルヴくん、本当に無茶だと思うことは口にしないじゃないですか。あれでも気にかけてるんですよ。甘えてくれない、って」

「飛躍のしすぎじゃない？」

「いいじゃないですか。甘えてしまいなさい」

呆れを隠さない僕に、ユベールはにこりと笑う。そんな僕たちの背後で、わずかに、扉が開いた。それに気づいたユベールが扉から出てきた人物に問う。

「フレデリック、あの子の様子は？」

長身の傭兵は表情らしい表情を浮かべることもなくわずかに眼を落とした。そのわずかさすぎる所作から何かを読み取れるのは、ユベールのユベールたる所以だと思う。

「会いに行っても大丈夫みたいですよ」

弾けるような笑顔を僕に向けて、ユベールは水差しと杯の載った盆を僕の手の上に置いた。

橙だったり紅だったりするものが、壁を這い床を舐める。それらが生み出す熱によって、目の前がゆらめき、柱が焦げる。夜を跳ね返すそれは炎と呼ばれるもので、やっとのことで部屋から這い出た廊下には、昼よりも鮮やかで灯よりも艶やかな光と熱が満ちていた。屋敷を喰らう炎がもたらした煙を吸いこみかけて息を停める。少しだけ離れたところに炭と化した梁が落下して、砕けた破片が籠もった火種を撒く。産毛が逆立ち、肌が痛い。ひりつく喉に咳きこんで、

ふらついた。壁に手をつこうと触れた一瞬、それは触れられるようなものではないと知り、慌てて手を引き剥がす。壁に籠もる熱によつて火傷を負ったか皮膚が剥がれたかしたかもしれないけれど、周囲に充満する熱のせいで判断がつかなくなった。外に、出ないと。

どこへ向かえばよいのかなど判らなかつたけれど、ここには火に吞まれることだけは確かだったから、頭に叩きこんである屋敷の間取りを頼りに前に進む。

崩れ落ちる柱の軌跡を火の粉が追う。逆巻き渦を巻いて上昇する炎が目にはちらついて煩わしい。

重いだけの身体を引き摺って、それでもこんなところで燃え尽きる気など更々なかつたから、肺いっぱい吸いこめる大気を求めて燃え崩れる廊下を彷徨っていると、不意に足首を掴まれた。焦げて灰と成りかけている屋敷だったものの断片が、半開きの扉を内側から押し開けるように積み重なっている。僕の足を留めた腕は、融けるような紅を火種として孕む、折り重なる燃え落ちた柱や梁から伸びていた。

足もとに落とした眼を、足首を掴む手から煤けた袖が包む腕へと移してゆく。焦げて重なる屋敷だったものの隙間から、炯々と光る、蒼の目が見えた。

それは、僕が仕えるとされている少年の目。

悪寒が背筋を這う。僕を捕らえる手に籠もる力が増す。

僕が救うべきは、誰なのだろう。

少なくとも、主を戴く従者であるのなら、炎に卷かれた段階で、主の身を案じなければならぬのだと思う。では、僕はどうしたらいいのだろう。炎の中、折り重なる炭と化したものから主を引っ張り出して、肩でも貸して一緒に外まで辿り着く。それができるのならやってもいい。

だけど。

それを為すことは、果たして、僕を救える？

傍らの壁が燃え崩れて、熱を孕んだ灰が華やかに舞った。

そして僕は悟る。

誰かを救っていたら、僕は僕を救えない。

僕はここで終わる？

湧いてきた感情は冷笑をつくる。

「ふざけるな」

そして、生きることを乞う手を蹴り払い、僕は先へと歩み出す。

「どうして僕を拾ったりしたのさ」

そんなことを訊いたことがある。

あれは、僕がまともに動けるようになってしばらくしてからのこと  
で、流れの傭兵稼業をしている者のご多分に漏れず根無し草をして  
いる傭兵たちにくっついて街と街を移動していた時のこと。夕暮れ  
に染まる世界の中、街道の先に街の灯りがちらつき始めた、そんな  
時刻と目的地への距離での出来事。夜盗に襲われた僕たちは　こ  
の場合は襲った相手が悪かったとしか言いようがない　何を盗ら  
れることもなくその場を凌いだけれど、かつては地方領主に匹敵す  
るほどの勢力を誇った傭兵一門の長とその相棒ふたりが剣を教える  
ことを諦めたくらいにどうしようもない動きしかできない僕を庇っ  
て、オルトが腕を負傷した。

あの問いを放ったのは、その日の宿に落ち着いて、ユベールとフレ  
デリックが街の酒場に繰り出して行っただけのことだ。

部屋の隅に置かれた椅子に膝を抱えて座りこむ僕に、夜の冷気を滲  
ませる窓辺にて腕に包帯を巻いていたオルトが眼を向けた。

「塩鉦の街に一番近い森で、こつちを見てきたからだ」

包帯を巻く腕に眼を戻したオルトの唇が笑みを刻んだ。蝋燭の炎が、その横顔を、陽に焼けて飴色になった窓枠を、不安定にあたたく照らす。

「ああいった目は、嫌いじゃない」

僕への言葉であるのか呟きでしかないのか判然としないその音律は、はつきり言って、意味が解らなかった。蒼の目がこちらに向けられる。

「覚えてないのか？」

「覚えてない」

「そうか」

かすかにやわらかさを帯びる蒼の目に、このひとはとても静かに何かを慈しむということを思い出した。

「怪我はないか？」

唐突に、オルトがそんなことを訊いてくる。

「ないよ」

その時の僕はひどく無愛想だったかもしれない。それでも、瞼を落とし愉快そうに笑んで、オルトは僕に横顔を見せた。

「なら、それでいい」

拾った子どもを庇って怪我をした傭兵は、満足そうに笑みを深くする。漣のような橙の熱が闇に浮き彫りにするその横顔を眺めながら、僕は揃えた膝に顔を埋めていった。このお人好し、と、声には出さずに呟きながら。

ユベールに渡された盆を片手に、数回、扉を叩いてみた。少しだけ待ってみたけれど、返事はない。だから、入るよ、と、声をかけながらゆっくり扉を開ける。

ふわりとした陽光に透ける粒子が緩慢に流動していた。あたたかさをもたらず窓に嵌めこまれた 反射なのか輝きすぎているのか判然としない 白銀のような白金のような硝子の眩さは外界を遮断する。その白銀を背凭れに、毛布に覆われた両膝を抱えるように寝台に座る、ひとりの少女がこちらを見ていた。

わずかに少女の面が持ち上がる。やわらかな陽光が過ぎる淡い翡翠の目に、透きとおった水晶が色をゆらめかせるが如く、きらめきと色彩とが緋い交ぜとなった流動が生まれる。

翡翠に眼を絡め取られ、僕はその場に立ち尽くした。僕の背後で、蝶番が軋み、扉が閉まる。

重くはない沈黙は静寂のようで、僕は静寂に溺れかけていた。

「水、飲む？」

飢えてはいないことを確かめるように、渇きが錯覚であると確かめるように、他愛のない言葉を音にする。音を投げかけた相手の唇は結ばれたまま綻ぶことはなく、その翡翠はこちらに向けられたまま揺らぐことはない。

睨まれているわけではなかったし、撥ねつけられているわけでもなかった。その眼は鋭いというわけではないし、ましてや拒絶されて



いるわけでもない。それなのに、僕を捉えているだけのはずの翡翠は、対象を圧して射すくめる。

この目は、何？

そこに在るのが憤怒や悲哀であつたのなら、解りやすかつたのだと思う。だけど、翡翠に内在しているものは、感情と呼ばれる類のものではなかつた。むしろ、そこだけを見るのならひどく穏やかで、無感動に近い。それゆえに、存在に圧倒され、潰される。

そこで僕は理解した。どうして僕が裏路地でこの少女を気に掛けたのか、僕を拾つた傭兵が話していたことの意味合いがどういったものであつたのか、理解した。

これは在ろうとするものの目だ。他を喰らい蹂躪することから逃れられない存在するという現象を、その背後のすべてを 意識的にあれ無意識にであれ、己が存在するということをもって 相殺した足場を基点として始める、在るという事象に固執し執着ししがみつく者の目だ。

だからだ、と、僕は思う。

あの時、裏路地で数人の男に囲まれていた少女から眼が離せなくなつたのは、男たちの脚の隙間から少女がこちらを見てきたからだ。憎悪に燃え盛っているわけでも恐怖に染まっているわけでもないあの目で僕を捉えたからだ。他を圧倒するだけの翡翠を飾つた透明な雫が、見えたからだ。

僕は助けたかつたわけじゃない。ただ、その頬を伝う一粒が、あまりにも綺麗だつたから。

僕は、綺麗なものが、欲しくなつただけだ。

「どうぞ？」

水差しの載つた盆を少しだけ持ち上げてみせる。こちらに向けられた翡翠が揺らぐことはない。

警戒、されない方が変か。

小さく肩をすくめて、一步、足を踏み出してみる。少女の身体が目に見えて強張る。数歩の前進で、僕は寝台の脇に置かれている棚の前に辿り着く。そして、棚の上に盆を置いて、白銀の窓硝子を横にして、僕の動きを追ってきた翡翠を覗きこんで首を傾げてみせた。在るということ、ひとであるということは、多分、同じではない。ひとであるということ、ひとと見做されるということも、多分、同じではない。ひとはどういったものであるのかを定義するということ、どのような存在をひとと見做すかということも、多分、同じではなくて。

それでも、それはそういったもの、という暗黙の了解だけが浮遊する世界に僕らは生きている。

「喉、渴かない？」

その翡翠に僕を映したまま、少女は両手で掴んだ毛布で胸元を隠す。でも、肌に焼きつけられた紋章を隠し切れてはいない。

ひりつく図形を刻まれている、逃げ出してきたゆえに存在を証明されない、僕と少女は同じものだ。

小さく息を吐いて、僕は扉へと歩き出す。かすかな衣擦れの音がして、袖をひかれた。だから、足を停めて振り返る。

振り返って真つ先に目にしたのは、追いつめるように僕の袖を掴む少女の、怯えているような不安に蝕まれているような、淡い翡翠だった。

吸いこまれた。いや、それよりも、蹴り落とされたとか引き摺りこまれたとか、そういった感覚の方が近いのかもしれない。とにかく、それは不安定で危うくて芯に灯が煌いていて、あまりにも綺麗である。しかし形容できないものだったから、僕は息を呑んだまま立ち尽くす。

さざめく水面から覗きこんだ、光が踊る水底に灯る炎のようなものを、僕だけのものにしたいと思った。他の誰にも見せたくない。他

の誰にも渡したくない。

では、そうするにはどうしたらいいのだろう。

「僕は、セルヴ」

気がついたら、声を落としていた。

「君は？」

陽の光が、眩く鋭く、残酷に世界を塗り潰す。

「リーザ」

翡翠に囚われたままの僕の耳に、少女を模る音が届いた。

おそらく、ひとである誰かにとって、僕らは同じものではない。だけど、僕らは息をしているし、痛ければ泣き喚く。飢えもすれば哀しみもするし、怒りもすれば絶望もする。楽しければ笑うし、嬉しさのあまり歌い出したりもする。

そうか。

それなら、いつも、笑っていられるようになればいい。彼女が笑って生きていけるように、僕が笑って生きていけるように。そうやって生きていくためにはどうすればいいのかを試行錯誤しながら、そうやって生きていくために手にしたいものを望みながら、生きていけばいい。

では、そう在ろうとするものを弾くものとは何なのだろう。同じではないというその認識は、どうして、同じではないとしたものを拒絶するのだろう。それは、あまりにも漠然としすぎていて捉えられないだけなのかもしれないし、あまりにも明白すぎて気づいていないだけなのかもしれない。もしかすると、そこで生じているのは、否定でも拒絶でもない　存在として同列ではなく、何かが起きた

としても事象としてひっかかることのない 断絶のようなもの  
のかもしれない。

だけど。

何かを求めることすら身勝手に、何かを望むことすら分不相応で、  
ただ生きようとする事すらおこがましいのなら。

なけなしの虚勢を、なけなしの見栄を、なけなしのわがまを。

そんなどうでもいいものを振りかざしながら、僕は、何も言わずに  
不敵に嗤ってやる。

宵闇に百合の香がゆらいだ。

夜の大きに華やきを撒く一輪の花を手にした女が、衣擦れの音をも  
って静寂にささやかな波紋を広げながら、ゆったりと、回廊を歩ん  
でいた。女の金の髪は淡く薄闇に映え、女が手する夜露に濡れた百  
合は鮮やかに薄闇を弾く。

ヴォルガ河河畔の都市 テゼロ。カルヴィニア公国において公爵  
邸とされていた建造物の一角で、風に踊る蝶のように歩む女の足が  
停まった。

「どこへ行っていた？」

回廊の角、壁に背を預けて立つ男が声を投げる。男の正面、数歩の  
距離をもって立ちどまった女は、やわらかく咲き零れる花のように  
微笑した。

「囚われのお姫様が見張りの目を盗んで散歩に繰り出す物語は、珍  
しくありませんよ？」

微笑をたゆたわせたまま、エレオノラの目がシャリエを射る。

「随分と破天荒なお姫様だ。では、眠り姫の様子は気にならないか？」

「あの眠り姫は、ただ護られるような女ではありません」

「その通りだ。そして、それは、貴女にも当てはまる」

壁に預けていた背を伸ばし、一步、シャリエはエレオノラに近づいた。

「どこへ行っていた？」

厳冬の雪原のような征服者の目を、その日の出来事を親に語る子どものような無邪気な様でエレオノラは見上げる。

「百合を摘みに」

「どこへ？」

「わたくしよりも貴方の方がこの館に詳しいと？」

「質問を変えよう」

一步、シャリエが歩を進めた。

「貴女の愛人は、今、どこにいる？」

エレオノラが小首を傾げる。金の髪がふわりと揺れる。

「おっしゃることの意味が解りません」

シャリエが目を細めた。ささやかな苛立ちと多分な含みが緋い交ぜとなった声音がその唇から紡がれる。

「その百合は？」

「摘んできたものです。その程度の気晴らしは許していただけにかしら」

「貴女と語らう者がいないのであれば、喜んで」

夜に漂うは百合の香。エレオノラは可憐に微笑み、シャリエは泰然と笑んでみせる。

「どの程度の檻であれば、舞い遊ぶに事足りる？」

ふわり、と、蝶が金の髪を靡かせた。男の傍らを通り過ぎ様、蝶は横目で男を見遣る。その口許を彩るのは艶然たる微笑。その微笑が音律を奏でる。

「檻に囚われたのはどちらか、お気づきなのではないですか？」

闇に映えるは女の手の白。夜露に飾られた早咲きの百合が、より一層、芳しさを増す。

The second act - 20 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

## The second act - 21

TIERRA DE NADIE / The second act

- Chapter 4 / 02

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + + +

抜き身の剣の切っ先が、少年の肩に触れた。音を吞んだ静寂、さざめく燭台の炎。凍てつく夜の、氷に鎖された聖堂。蜜蛭にゆらめく淡い光を、少年の肩に置かれた鋼が鈍く弾く。

「天空に栄えを、地に豊饒を。恩恵の享受を、絶対の赦しを。混沌を鎮める理を、安寧を齎す秩序を。蒼穹と契り、秩序の現出を約す、婢たる汝」

聖堂に跪くのは黒衣の少年。少年の前、説教壇を背に立ち、剣の柄を握るのは黒衣の青年。青年の唇が言の葉を撒き、精緻な彫刻の施された柱に支えられた広大な空間に、その言の葉は音律として反響する。

少年の肩から剣の切っ先が離れた。優雅な所作で剣を鞘に納めた青年は、両手で剣を持ち、上体を屈めて跪く少年の目線の高さに鞘を横たえる。

蜜蛭の側面を、融けた蛭が透明な雫となって零れ伝う。かすかに甘い香を孕む淡い炎に、肩口から零れ落ちた青年のプラチナブロードがまろやかな光沢を放った。



「汝、女神ヴァルーナの剣と成りて」

かたちの良い唇が玲瓏な声を奏でる。跪いたままの少年が、青年の手から剣を受け取り、その頭上に捧げ持つ。

「我、理の体現者として、理たる蒼穹を戴かん」

騎士に叙任された修道士が、張り詰めて澄んだ大気に音を刻む。跪く騎士を見守る大司教の目が、ゆらめく炎にその色彩を流動させながら、かすかにやわらかさを帯びた。

ファウストウス暦四二三年、春。

ヴォルガ河河畔、帝国領シルザ　ファイアナ騎士団本拠。

やわらかな闇に染まった回廊。控え目な靴音を伴って、手燭のおぼろげな光が浮遊する。終課の後、祈りと眠りとが満ちる神の家。まるでやかに頬を撫でた気流に、沈黙と孤独とを己に課しながら夜の巡回をしていた騎士が足を停めた。回廊に滞留する大気ではなく、かすかな花の香を孕むそれは外から迷いこんだものであることは間違いない。騎士は夜に慣れた目を眇め、回廊の一角に細く開いた扉を見つけた。その扉が誰の部屋のものであるのかをよく知っている騎士は、そこにいるのであるう人物が誰であるのかの見当をつける。そして、音も無く扉の隙間から室内に滑りこみ、開け放った窓の前に立って外を眺めている少年の背後に立った。

「怒られるぞ」

そこに在ったのはほのかな苦笑。己の手でゆらめく手燭がもたらす光に、ささやかに、皮肉っぽく呼称を紡ぐ騎士の口許が闇に浮上す

る。

「カルヴィニア公爵」

窓の外、影として佇む大樹の葉が風にざわめく。河の水面はひどく穏やかで、対岸に煌く街の灯を引き延ばしたかのような艶が浮き沈みを繰り返していた。

ゆつくりと身体を反転させ、窓の外を眺めていた少年が騎士に相対する。手燭の灯が過ぎる董色の目は愉しげに細められ、からかうような声音がその唇から零れた。

「騎士サーレ」

華やかな蜜の香と甘やかな水の匂いを孕む風が窓から吹きこむ。それは、リラの癖のない黒髪を揺らし、サーレの癖のある黒髪を掻き混ぜ、扉の隙間を通り抜け、回廊へと抜けていった。冷やかでまろやかな潤んだ風は、水の粒子を含んだまま、春の気配を夜に撒いてゆく。

シルザ大司教の執務室、その大窓の前。相対するふたりの少年は二者二様に笑みをつくった。

「ここで何をしてた？」

どことなくふてぶてしい笑みを刻む少年が問う。

「ヴォルガ河の向こう側を、見ていたんです」

やわらかく微笑む少年が答えた。

「ここは、もう、あのひとの執務室じゃないぜ」

「そうですね。でも、ぼくは、この場所が、ここで過ごした時間が、忘れられないんです。だから、こっそりシルザ大司教の執務室にお邪魔してしまいました」

笑みを掻き消したサーレが、探るように、淡く苦笑するリラを眇めた蒼の目に映す。

「随分と大人しく担がれてやってるんだな？」

にこり、と、リラが笑った。

「公国を取り戻すために、アレスに楯突くことになりました」

「帝国国教会の手駒として、か？」

「公国再興という夢に憑かれた伯父の甥として、といったところで。公国に生きるひとびとを思つてのことなのか、祖国への執着であるのか。誰かを救おうとしているのか、己への気休めではないのか。ぼくにはよく判りませんが」

夜の闇に貼りつく黒でしかない大樹の葉がざわめく。相対するふたりの少年の頬を撫でる潤んだ風は、優しく温さを奪ってゆく。目を眇めたままのサーレと、笑んだままのリラ。対象的な表情は、同じように、内在する真意を覆い隠す。

風に遊ばれて瞬く手燭の灯が、灯を持つ騎士の蒼と、騎士に相対する公爵の董色に閃いた。

「何がしたい？」

と、騎士が問うた。

「この状況をつくったジルベルト・ヴェリではなく、この状況を使

って、リラ・コトウスは何をしたい？ 改宗をもってフィアナ騎士団を得たお前は何をしたい？ ヴオルガ河はファウストウス派とカテル・マトロナ派の境界だ。現状においてフィアナ騎士団がカルヴィニア公爵につくということは、カテル・マトロナ派にとつてはファウストウス派による勢力図の侵害を意味する。だが、カテル・マトロナ派の法王より要請があつたとて、帝国に本拠を置く限り、オルルク騎士団は我々の後背をつくことはできない。そんなことをしては、先の帝都包囲で得た帝国国教会との不可侵関係は破綻する。だからこそ、皇帝と袂を分かち自立するつもり教会は、アレスとの盾として公国復活の背を押すんだ。第二次ヴオルガ河防衛戦で、カルヴィニア公国とフィアナ騎士団は対峙した。その結果は関係ない。勝とうが負けようが、そこで命の遣り取りがあつたことは、公国も騎士団も変わらない。そして、そこで生まれた感情は、蟠りは刻まれ継承されることはあつても消えるものじゃない。今回、この二者の手を組ませたのは利害の一致だ。だが、そこで手を組む二者がすんなり手と手を携えられると思うか？ そんな、いつ暴発してもおかしくないようなものを使おうとしているのが、帝国国教会とジルベルト・ヴェリだ。それを理解できないはずはなく、そういう場合は極力別の方策を探すであらうと思つていた者が 有無を言わずに担がれているのである 素直にここにいるからこそ問う。お前は、リラ・コトウスは、奔流に吞まれることをもって、いったい何を手にしたい？」

風が窓枠を揺らす。公爵の口許から微笑が消える。ざわつく影を背に、試すような色を湛えた董色の目が騎士を射る。

「流されているだけかもしれませんよ？」

やわらかくも冷ややかでもない眼を受け止める騎士は不敵に笑む。

「誤魔化すな。俺の知るリラ・コトウスはそんな扱いやすい奴じゃない」

「随分な言われ様です」

朗らかに、公爵は笑った。ゆるやかな笑みを口許にたゆたわせながら、董色の目だけが冷徹さを帯びる。

「ぼくは、公国にファウストウス派を蔓延させます」

穏やかな声が騎士の鼓膜を震わせた。優しげですらある微笑を、騎士はその蒼の目に映す。

「ヴォルガ河の対岸はカテル・マトロナ派の領域です。だからこそファイアナ騎士団はシルザに本拠を置いている。ファウストウス派とカテル・マトロナ派 各々、帝国とアレスを後盾としている

この二派の緩衝地帯の最前線であるがゆえに公国は揺れてきました。だから、ぼくは、公国にファウストウス派を蔓延させたいんです。伯父が何を考えているかは知りませんが、ぼくは、緩衝地帯を、今よりも東に追い遣りたい。公国よりも東に群立する小国を、今まで緩衝地帯として存在してきた公国に取って替えようと。ぼくはそう画策しているんです」

騎士が目を細める。

「俺には、公国以外の小国を両派の境界の前面に立たせた上で、間接的に公国からアレスの勢力を排除する、と言っているように聞こえるんだが」

「ご明察です。帝国国教会の高位聖職者に帝国貴族が多いように、カテル・マトロナ派教会の高位聖職者にも各国における貴族が多い。小国群立地帯のカテル・マトロナ派教会には、教会内の力関係

勿論、これにはカテル・マトロナ派を国教としている国の勢力関係が反映しますが、からアレスの貴族が派遣されることがほとんどですから、事実上、各国にはアレスの影響力が存在するも同然。だから、公国には後盾が必要なんです。アレスにもカテル・マトロナ派教会にも対抗できる、後盾が」

「それが帝国国教会、か」

「ついでにフィアナ騎士団も使わせていただきます」

苦笑する騎士と、微笑する公爵。

「ついでとは随分な物言いだな。だが、それは、公国にとって、アレスが帝国に替わるだけじゃないのか？」

「そうですね。干渉される相手が変わるだけ、だと、思います。ですが、それを見越してすら、伯父は公国再興のために帝国国教会を頼った。実際のところ、独力で公国を再興することは不可能です。経済力であれ軍事力であれ、それだけの力を亡国の臣は持ち得ません。だから、悪い選択ではない思います。帝国国教会に近いところに公爵家の血筋に連なるぼくがいたわけですし、それなら、使わない手はない。ただ、気がかりが、あるとするのなら」

不意に、リラの眼が落ちた。

「怒られますね」

リラの唇から零れる音が自嘲めいた響きを帯びる。

「ぼくは、誰かを救いたいわけでも、何かを成したいわけでもないんです。伯父の信条も公国の再興も、正直なところ、あまり関心はありません。どうせ奔流に溺れるのなら、せめて一粒でも多くの収穫を掴んで溺れようと。ぼくが収獲と見做すものを、意味があると

判断するのがぼくだけであるかもしれないものを、掴もうとしているだけなんです」

サーレが手にしている灯が風にゆらめく。まろやかな大気は水の甘さと緑の爽やかさを孕み、涼しくて心地よい。

「お前が決めたんだろ？」

潤んだ風が吹きこむ窓を背に俯く少年を、サーレは見据えた。

「大切な誰かを踏み躪らなければならないとしても、大切な何かを棄てなければならぬとしても。そこで生まれる不利も憎悪も矛盾もすべてを受けとめて、それでもそれを求めると、他の誰でもないお前が決めたんだろ？」

黙したままリラが頷く。サーレの目許がやわらかくなる。大樹の葉がさざめきを撒く。

「だったら、猊下は怒ったりしないさ」

遠くに聞こえる水音に、静寂を震わせる大樹のざわめきに、瞼を落としたサーレの囁きが馴染んでゆく。

アレス王国王都エヴル 王宮。

硝子を通して降り注ぐ陽光が眩い煌きを撒いた。瑞々しい若葉と、絢爛と咲き誇る花々。静謐に満たされた、王宮の庭に佇む硝子張りの一室。土の香が甘く漂うそこに、甘さとは程遠い調子の声音が響き渡る。

「シャリエより増援の要請があつた」

淡々とした、しかしどこか辛辣な声が、老人の頭上に落ちる。穏やかな面持ちを崩すことなく、老人は頭上を仰いだ。茂る若葉の隙間から零れ落ちる陽光の眩さに目を眇める老人の目に、樹の幹に背中を預けて膝に載せた本の頁を捲る少年が映る。眼で文字を追いながら、樹上の少年は唇を持ち上げた。

「本日の謁見時、摂政がその話を持ち出してきた。リラ・コトウスを旗とする公国再興の動きが見受けられ、最悪の場合、手持ちの兵では鎮圧できない可能性がある、と」

柔和な笑みを湛えたまま、老人は蒼の目を細めた。

「どのような判断をなさつたのです？」

少年が、一瞬だけ、その碧の眼を老人に呉れた。

「不要、と」

「摂政は？」

「そのように、と」

ゆつくりと少年は瞼を落とす。

「近々、フィアナ騎士団がテゼロを訪れる。おそらく、シャリエはその際に何か動きがあると踏んでいる。もとよりカルヴィニア公国を呑んだのはカテル・マトロナ派教会の意思。ゆえに、この件における母の意図は、おそらく、アレス本国を教会の非難から躲すという、その一点のみ。摂政が王へシャリエを援護するよう進言したと



いう事實は、その場に居合わせた複数の者が証言できる。そして、名目上、王の承認がなければ摂政が軍を動かすことはできない。これで、たとえ法王からの非難があつたとて、その矛先が王だけに向けられる素地ができたわけだ」

少年を仰ぐ老人の笑みが深くなる。

「御身が危ういのでは？」

ゆるく、少年の口の端が吊り上がった。

「シャリエには悪いが、親離れの口実には丁度いい」

帝国東部　　歓楽の街メルヴィル。

朝であれ夜であれ燭台の灯がゆらめくそこに、ゆつたりと逆巻きながら、紫煙が立ち昇った。

「デュドネ・シャリエがアレス本国に増援を要請したそうです」

ささやかな炎だけがさざめく闇に半身を浸しながら長椅子に寛いでいた豪奢な金髪の女が、煙管を咥えたまま、壁際にてやわらかな闇に身を融かしている翁を見遣る。そして、無造作に髪を掻き上げながら女は上体を起こし、紅が艶めく唇から煙管を離した。

「その話ならば聴いた覚えがあるな。それで、その後、動きは？」  
「特には」

翁がもたらした音に、女は冷笑を浮かべる。安堵をもたらす灯に、

女の唇が艶めく。

「小国群立地帯では、金の流れが停まっている。つまり、物の流れが滞っている。物流にしろ金融にしろ、為政者に向けられる感情にしろ、その地に素地を持たないシャリエがカルヴィニア領内の現状を維持するのは難しいだろうよ。兵站を確保するのも一苦労となれば、己の兵すら手駒としての信頼に欠ける。シャリエが憐れだな。忠誠を捧げている相手の出方がそれでは、見放されたも同然だ。あとは自滅を待つのみか」

紫煙を燻らせる女の背後で、長椅子の背凭れに組んだ己の腕の上に己の顎を載せていたプラチナブロンドの髪の少女が、あどけない仕草で小首を傾げた。それを知ってか知らずか、女は闇としか見えない壁を注視する。

「しかし、デウドネ・シャリエは何ものかと剣を交えているわけではない。この状況で下手に増援に応えれば、安らかに眠っている赤子を起こしてしまいかねない。そういった意味では、摂政の判断は間違っていない」

「王の判断ではなく？」

「あの少年王が声を張り上げたところで、摂政がその気となれば障害にはなるまいよ。アレス王宮において、味方となる門閥を手にしているのは、子ではなく母。独断で蜜を撒けぬ者に蟻は寄りつかないものさ」

愉しげに女が目を細める。

「近々、フィアナ騎士団が通商協定の調印のためにテゼロを訪れる」

宙空に紫煙が渦を巻いた。瞼を落とし、女は唇に笑みを描かせる。

「ヴォルガ河は境界だ。東における帝国の端であり、帝国国教会の勢力の端でもある。だが、それは、金や物の境界ではない。度量衡や為替といったものの再認。ヴォルガ河の両端においては、その治世者が変わる度、その取り決めによって運営される現実に不都合がない限りは、同一内容の更新というかたちで協定の調印が行われている。ゆえに、このフィアナ騎士団の訪問は、恒例行事のようなものだな」

闇に融ける翁が声を落とす。

「本来ならば、その訪問は、穏やかなものであるはずです」

「そうだ。穏やかに事を運ぶための、妥協の果てに選択された仲介役だ。なぜフィアナ騎士団がその任を負うのか、理由は単純。フィアナ騎士団は聖界に属すものであり、世俗に属するものではない。ゆえに、俗界のしがらみなど意に介する必要はない。カテル・マトロナ派とは対峙するが、世俗諸侯と対峙する理由はない。帝国でも王国でもないがゆえに、その二者が睨み合う土地に足を踏み入れることが、たとえ国交が断絶していようと二者を仲介することが、フィアナ騎士団には可能だ。それこそが平時におけるフィアナ騎士団の価値となる」

「ですが、この度に限るのであれば」

「少なくとも見た目通りの勢力争いではない。そして、アレスに限るのであれば、これはただの親子喧嘩だ」

「カルヴィニアを欲しがっているのは」

闇から響くギニョルの声を、灯のさざめきに曝されるリヴィエールが引き継ぐ。

「おそらくは、アレスではない。そして、現王を廃すること己の

権力が増長すると夢想するほど摂政は愚かではない。少年王がこれから起こる物事をどう使うのかは憶測するしかないが」

そこで声が途切れたことを不思議がるように、エレが首を傾げた。

「だからこそ」

紅の唇が煙管を咥える。どことなく気だるげに、碧の目が瞼に覆われる。

「シャリエは憐れだな」

沈むでもなく透かすでもなく、ただ闇に馴染むことなく渦巻きながら、緩慢に紫煙が立ち昇ってゆく。

皇帝直轄領領都　帝都ティエル。

天井に近いところの曇り硝子から薄ぼんやりとした光が滲む半地下の場。朝と夜の境目に満ちる薄闇が零れ落ちる闇に、葡萄酒のもととなる果実を圧搾するための原理を流用したという鉄の塊が並ぶ。静止という沈黙の裡に佇むそれらの隙間に置いた椅子に座るトゥルスが、傍らに置いたカンテラの灯だけを頼りに文字を追っていた紙束の一枚を捲りながらばやいた。

「何でこんなもの僕が目を通さなきゃならないのさ」

「我々としてはそれが破綻していかないかどうかを知りたいだけです。数いるワーディングの中で、貴方が最も適任ですから」

腕を組んで壁に背を預けて立つラエルティオスが微笑する。眼は文

字を追いながら、呆れたようにトゥルスが肩をすくめた。

「勘違いも大概にしてほしいな」

「貴方は、自身を過小評価なさってますよ」

「君が僕を過大評価してるだけだろ」

「さて、どうでしょうね」

唇に微笑を描かせて目を細めるラエルティオスを、横目でトゥルスが見遣った。

「何かが変わると、本気で思ってるわけ？」

「石は投じてみるものですよ」

微笑をたゆたわせたままラエルティオスが瞼を落とす。紙面に眼を戻したトゥルスが、確かにね、と、気の無い返事をした。

「ファリアスで公会議が開かれていたこと、ご存知ですか？」

ラエルティオスの問いに、文字を追いながらトゥルスが軽く肩をすくめる。

「開かれている、じゃなくて？」

「開かれていた、です。先日、教皇による教理の再認が発表されて閉会しました。これだけを見るのなら、なぜ公会議を開いたのか、疑問に思ふべきではありませんね。そこにおいて調整されるほどの教派間の軋みは、傍から見ただころ、ではありませんが、見当たりません。カテル・マトロナ派からは、唯一、ファリアス司教が主席したようですが。先の帝都包囲を直接の契機として、帝国におけるファウストウス派とカテル・マトロナ派の関係は史上類を見ないほどに良好ですから」

トゥルスの眼が停まった。

「教皇？」

首を傾げながら、トゥルスは微笑をたゆたわせるテウトニー族を見遣る。

「主催したのは皇帝じゃないの？」

「枢機卿長が教皇に選出されたそうです。もとより、この度のファリアス公会議を主催したのは、皇帝ではなく帝国国教会。その内実を私などが知ることはできませんが、かたちだけを眺めるのなら、この公会議の開催に皇帝は囁んでいない。むしろ、意図的に排されたとも見なせます。もしそうであるのなら、名目においてのみ諸侯に戴かれている皇帝は、実質的な意味での勢力の基盤に見放されたことになる」

探るように目を眇めるトゥルスの唇に冷笑が湧いた。

「珍しく無防備に喋るね」

愉しげに、ラエルティオスは紫紺の目を細める。

「あくまで仮定の話ですから」

「どうぞご勝手に？」

微笑を崩さないラエルティオスに呆れたのか、トゥルスが物を持ったまま両手を挙げる。漣めいたゆらぎを呈する橙が照らす壁に、アルウェルニー族の影が動きを刻んだ。再度、紙面に眼を落とすトゥルスの動きを影が追う。灯に濡れた異民族の横顔を紫紺の目に映し

たまま、ラエルティオスは唇を持ち上げた。

「ですが、もしそうであるのなら、皇帝は帝国において孤立したことになる。使える手駒は精々が近衛軍程度。しかし、孤立と分断は同じこと。では、誰が、皇帝と帝国教会の分断を図ったのか」

面を上げたトゥルスが、深い緑の目をもって、ラエルティオスの紫紺を射る。

「それでは、まるで、何者かが女帝から剣を奪ったみたいだ」

平静のみを湛えた紫紺をもって、ラエルティオスはトゥルスを見据えた。

「そして、その者が、奪った剣を手中にした。そう突飛な話でもないでしょう？」

「混乱に混乱を重ね、それにより疲弊が加速し、迷走するしかない帝国を。三大公爵家と選帝侯、そして帝国教会の傀儡にすぎない皇帝という定義そのものを廃し、強権による統一という手法で帝国を保とうとする者がいてもおかしくはない、とでも言いたいわけ？」

失笑するトゥルスに、ラエルティオスは笑みのようなものを浮かべてみせる。

「それこそ、あくまで仮定の話、ですよ」

曙光に融けかけた灯の、ゆらめく艶の過ぎる緑の目をトゥルスは細めた。

「虚言が事物の格子だと、そう見せかけようとしている、誰かのね」

The second act - 21 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n

<http://id>

12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /



## The second act - 22

TIERRA DE NADIE / The second act  
- Chapter 4 / 03

作者：南風野さきは

初出：片足靴屋 / Leith b h r o g a n    <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

+ + + +

ファウストウス暦423年、アプリリウスの月の第18日。アレス  
領カルヴィニア    領都テゼロ。

夜露に濡れた早咲きの百合が月光に映える。夜に灯を零す統治の中  
枢たる建造物を見下ろす丘で、呆れたように、男が唇を歪めた。

「随分と手薄だな」

男の傍らに立つ女が、唇を微笑で彩りながら、瞼を落とした。

「もとよりシャリエの兵は少ないですから。そして、今夜は、彼ら  
のほとんどがファイアナ騎士団との調印式とその後の酒宴の警護に回  
っているはず。そもそも人手が足りないのです。こうなるのは必然  
でしょう」

可憐を印象とする女が、男を上目遣いに見遣った。咲き零れる花の  
ような儚さを纏う女の、その紫の目だけが伶俐さを覗かせる。

「貴方が描くように、事は運んでいますか？」

潤んだ風に、女の金の髪がふわりと踊った。

「貴方の妹も、貴方の甥も。貴方が思っている以上に、簡単に御せような者ではありませんよ？」

「忠告か？」

男が愉しげに笑む。女は楽しげに笑う。

「そんな遠回しなものではありません」

冴えた月光に濡れる白百合が、闇を透かして艶やかさを撒いた。水のまろやかさと破璃の鋭さの境界にたゆたう大気が夜に沈む。ゆるく、女の唇が弧を描いた。

「言葉のまま、です。それ以上でもそれ以下でもありませんよ」

窺うように目を細めるヴェリに、エレオノラは酷薄なだけの音を突きつける。

蠟燭の灯が揺れていた。夜であるにもかかわらず、薄暮のような色彩に濡れるそこでは、軍人の佩いた黄金の鞘や料理の盛られた銀食器が赤橙に照り映えていた。天井は高く、三方の壁を棧敷が回廊のように巡り、その手摺より垂らされる旗が二枚、大広間の隅に蟠った冷やかな大気に沈んでいる。厚く重い布に刺繍されたアレスの紋章とフィアナ騎士団の紋章が、酒宴を満たす不安定な灯に煌いた。アレス臣デュドネ・シャリエとフィアナ騎士団団長ベルトラン・ダン・マルティンによる調印式の後。カルヴィニア公国の中枢とされていた館では、ヴォルガ河を挟んで対峙するアレス兵と騎士とが葡

葡萄酒を酌み交わす。かつてはカルヴィニア公爵の席であつた椅子に座るシャリエの杯に、黒髪の女が葡萄酒を注いだ。その傍らに座るベルトランは空の杯を手に宴の様子を眺める。整然を脱ぎ捨てたそこは、辛うじて罵倒と殴打を免れながら、陽気と緊迫とを持て余していた。

ぎしり、と、広間を満たす上澄みのような穏やかさに、聳え立つ扉の軋みが割りこむ。

零れることをやめない軋みに、ベルトランは眼を上げた。零れることをやめない灯の煌きが、天井に吊るされている燭台たる玻璃の細工を透過して華やかさを撒く。宴の熱の底流に冷やかな気流が滑りこみ、それが回廊に沈む夜気であるとベルトランが確信する頃には扉は軋みを上げることがやめていた。取って代わるように、開け放たれた扉の前に立っていた少年が靴音を響かせ始める。

シャリエの傍らで、黒髪の女が息を呑んだ。

硝子に拡散された光が煌びやかに舞い落ちてゆく。談笑が躍り、打ち合わされる杯が鳴った。肉が湯気を立て、葡萄酒が注がれ、酒に高揚した男たちが手を叩く。爪弾かれる弦に交じる笑い声と拍手の間、修道士を示す黒衣を纏った少年は、混沌と形容するが相応しい様相を呈している大広間を、雑然と重なり躍る男たちの間を縫いながら進む。やがて少年はシャリエの前に辿り着き、その董色の目をもって、アレスの臣を射った。

「お初にお目にかかります」

跪くことも敬意を表することもなく、ただその場に立ち、黒髪の少年は微笑を浮かべてみせる。

「私はリラ・コトウス。以後お見知りおきを」

シャリエの眉間に皺が生まれた。傍らのアレス臣が鋭さを纏ったこ

とを見逃さずに、唇に笑みを刻ませながらベルトランが臉を落とす。

「ご同行を望まれましたので。従騎士に身を賣していただいたところ、すんなりと」

波が退くように酔いが醒めゆく大広間に、具足の音が雑じった。開け放たれた扉より、武装した兵が雪崩れこむ。それがアレス兵ではないことを見てとったシャリエは、舌打ちとともに傍らの女を引き寄せた。艶やかな黒髪が舞い、シャリエを護る盾のように、女が引き摺り出される。

闖入者が連れてきた夜気に追われるように、リラの短髪が揺れた。一瞬にして歓談の場を覆い尽くした緊張に、宴にて杯を交わしていたはずの男たちが各々の得物を手に静止する。紅を刷いた唇が、破璃に煌く灯に艶めいた。

「何をしているのです」

少年の董色の目がゆらぐ。

「わたくしごとこの者を刺し貫きなさい！」

訪れた静寂を砕くように、黒髪の女が声を響かせた。子を睨めつけるティツイアーナの喉笛にシャリエが短剣を喰いこませる。目を眇めてその様を見据えるリラが動くことはなく、結ばれたままの唇は吐息を零すことすらない。

夜風に、緞帳のような二列の旗が、ゆったりと泳いだ。

目前に在ったティツイアーナの手首をベルトランが片手で掴み、そのたおやかな身体を引き寄せながら、もう一方の手でシャリエの手から短剣をもぎ取る。金具の鳴りが溢れ返り、棧敷よりひとつの影がシャリエを目がけて降下した。色めき立ったアレス兵に騎士が対

峙し、そこここで乱闘が繰り広げられる。杯の破片が壁に突き刺さり、葡萄酒が飛び散った。歪んだ銀食器が床に落ち、悲鳴を上げながら跳ね躍る。

棧敷より降下した騎士は、シャリエが座る椅子の背を掠り、床に抜き身の剣の切っ先を食ませて着地した。背後のアレス兵が降り落とした剣をベルトランは、ティツイアーナを抱くように身体を反転させ、その勢いをもって斬りつけられる剣を短剣で弾く。最初に降下した騎士に続くように棧敷からは次々と騎士が降下し、夜と煌きとを繋ぐ扉からは、この地に在った亡国が掲げていた旗を翻す兵が押し寄せた。

突如として生まれた混乱をすら無いもののように佇むリラの目に、椅子の背から伸びた剣の腹に首の横を捕らえられたシャリエの姿が映る。更に、アレス臣の首は、その身体と繋がったまま、四方から伸ばされた剣の交差する支点となっていた。

夜風が揺らす破璃に、閃く灯に、華やかな煌きが星屑のように降り注ぐ。

最初に己を捉えた騎士の持つ剣の腹を、シャリエが掴む。剣の主サーレ・ニールセンがわずかに首を傾げながら蒼の目を細めた。

「駄目ですよ」

と、そこに湧いた静けさにリラが漣を立てる。

「貴方はアレス王の臣。ゆえに、貴方の命の行く末を貴方が決するようなことがあれば、それは貴方が仕える王を蔑ろにしたことになる。臣の命は王のものです。王の赦しなくして、その命を存続させることも、その命に終わりを迎えることも、貴方にはできない。そして 伯父は違うようですが 私としては、貴方に生きていてもらいたい。アレス王と謁見する手土産に、貴方は極上の品ですから」

一步、リラが歩を進めた。それを合図とするように、シャリエを捕らえていた剣が、サーレとシャリエの握る一本を残して退かれてゆく。

「これが公国の臣の総意だと思っっているのか？」

シャリエが喉を鳴らした。ゆっくりと歩を進めながら、リラが笑う。

「まさか。いくら疲弊していたとはいえ、第二次ヴォルガ河防衛戦後の公国併吞があそこまですんなりで行えたのは、公国内にもアレスに協力する者が多かったという証明です」

董色の目が細められ、リラは灯に照り映える剣を握んだ。

「ですが、そんなことはどうでもいい」

シャリエの眼を絡め取ったまま、シャリエの手から引き剥がすように、リラは剣に手をかける。傾いた鋼を伝い、緋の雫がその切っ先から滴り落ちた。

「私は、公国を返してもらえれば充分なんです。カルヴィニア公爵として、公国領と領内における領主裁量権の返還を、私はアレス王に求めます。ゆえに、貴方には生きていてもらわなければならない。公国民の血が流れることを最小限に留めるための駒は、それが時間稼ぎにすらならないようなものであったとしても、ひとつでも多い方がいい」

あどけない少年の唇が、懇願を模した断定を紡ぐ。

「返してください」

耳に心地良い意味が、耳を滑る綺麗な音が、大気に舞った。

「公国民に、返してください。つくりあげたものを、つくりあげた者の手が掴むことを当然とする祖国を、返してください。怯えることなく日々を営み、飢えることなく眠りを迎えることのできる祖国を。そこに生きること誇りとし、そこに生まれたことを至福とできる祖国を。生き延びることを肯定する土台となる祖国を、返してください」

にこり、と、カルヴィニア公爵は微笑む。

「よろしいですね？」

埋められたのは、これらからにおけるひとつの種。芽吹くに相應しい時を、種はまどろみの裡に窺い続ける。

ファウストウス暦423年における帝国を取り巻く情勢は、ファリアス公会議の開催とカルヴィニア公国の復権をもって、劇的に変化したとされる。前者は帝国国教会における教皇の誕生を内外に知らしめるものとして、後者はファリアス公会議にて誕生した教皇がヴァルーナ神教カテル・マトロナ派の法王と対峙することを明確にしたものとして。つまりは、帝国皇帝の手綱をファウストウス派が噛み切り、教皇の威光が皇帝に降り注ぐことを宣言したことになる。皇帝によって生まれていた教皇の空位を、帝国国教会が皇帝の意を無視して教皇を生み出したという事実。皇帝を教皇が凌駕すると示した一事。は、以後の大陸史を左右する一要素と成るが、この

時点においては、後世の文筆家や劇作家の創作意欲を刺激し続けることとなるある事柄の、直接的な契機と見なされることになる。すなわち、それは。

「ひとり、か。珍しいね」

石壁に囲まれた半地下の印刷所。朝と夜の挟間、青褐の薄闇にぼんやりとした靄のような光がたゆたう刻限。一時に比すればやわらかくはなったものの、朝露をもたらす大気が浸透する石壁からは冷気が滲んでいた。

隙間無く置かれた動力と駆動部の集合に埋もれるように、椅子に座っていたアルウエルニー族が眼を上げる。その傍らの光源に灯は無く、鈍い光沢を滲ませる黒鉄の塊とともに、その異民族は事物の輪郭を蕩かすような淡い光に沈んでいた。

「交代、で、いいのかな？」

深い緑の目を細めながら、椅子に座ったまま、トゥルスは来訪者を眺める。壁際に立ったままのウエネティー人は、トゥルスの問いに答えることなく、唐突に問いを放った。

「これから何が起ころ？」

紙束を手渡そうと挙げた手をそのままに、トゥルスは探るように真摯としか形容しようのないダルファ口を見遣り、不機嫌そうに眉根を寄せる。

「そんなこと聞いてどうするのさ」



口にしようとした音を詰まらせたのか、ダルファロが引き攣るように息を吸いこんだ。畳みかけるように、トウルスは続ける。

「君たちが種を蒔いたんだろ？ 君たちがその芽を育てたんだろ？ 咲かせたい花を咲かせるために、その花の種を、植えたんだろ？ それなら、これから咲く花の色が何色であるのか、それを誰よりも理解しているのは他ならぬ君たちになるんじゃないの？」

腕を下ろし、脚を組んで、トウルスはわざとらしく首を傾げてみせる。そのからかうような挑発するような仕草とは裏腹に、ウエネティー人に向けられた緑の目に渦巻く熱は無い。次第に眩さを増すぼんやりとした光の中で、ダルファロはかぶりを振った。

「それは違う」

黙したまま、興味深そうに、トウルスの目がわずかに細められる。窺われていることだけは明白な、底の知れない異民族の眼に臆することなく、ダルファロはその緑を見返した。

「誰も種なんて撒いてはいない。誰も芽なんて育てていない。それは、偶然に発生し、育っていただけだ」

断言は残響となって石壁を撫でる。椅子に座った青年と、壁を背にした少年と青年の境界にたゆたうもうひとりの上に、淡さを透明さに代えゆく光が上窓から零れ落ちた。

沈黙に塗り固められて、蒼と緑は対峙する。ゆるく、トウルスの口の端が持ち上がった。

「君が独りで来た理由が解ったよ」

わずかに、ダルファアの目が揺れた。うつすらと皮肉っぽい笑みをたゆたわせるアルウエル二族に、ダルファアは心持ち肩の力を抜く。常のどことなく投げ遣りな雰囲気を纏ったトゥルスが宙に眼を泳がせた。

「クロード・シャルルはトーマス・ワーディングによって今のこの事態が引き起こされる種が蒔かれたと信じている。だから、そうではないということを前提とした世間話をするには同席は遠慮願いたい。そんなところ？」

ダルファアの沈黙を肯定と捉え、トゥルスは呆れたように肩をすくめる。

「僕は、あの潔癖な少年の相棒は君だと思ってたんだけど。どうやら、君にとっては、違ふみたいだね？」

やれやれとでも言いたげにトゥルスは溜息をつき、おもむろに腕を持ち上げて紙束を振る。

「それより、交代なら交代でさっさとこれ受け取ってくれない？」

僕、眠くてどうしようもないんだけど。状況からして、そうそう時間に残ってないだろ。間に合わなかったらそれこそ話にならない」

風にそよぐ樹の葉のように左右に捲れてゆく紙束を見つめたまま、ぽつりと、ダルファアが声を落とした。

「信じているのか？」

トウルスの手が停まる。わずかに遅れてその手で揺れていた葉が停まった。その片眉が跳ね上がる。

「まさか」

数歩、ダルファロが歩を進めた。目前に立った少年に、トウルスは手にしていたものを渡す。

「それが変化をもたらすかもしれないと捉えることと、それを信じることは、同じではないよ。そして、ウィリアム・アリンガムやユスキュダル・バニヤスに代表されるような者たちは、もしかするとそれを鋏や時計みたいなものと捉えてるかもしれない。使えなければ棄てればいいんだ。使えるのなら使い続ければいい。既存のそれと天秤にかけた時、どちらが都合の良く傾くか。使われるか棄てられるかを決めるのは、その程度のものさ。だけど、だからこそ、彼らは今になってトーマス・ワーディングを引っぱり出した」

トウルスの笑みが深くなる。

「ワーディング事件は過去ものだ。フィツジェラルドという大都市をどれほど震撼させたとしても、帝都にとっては数ある皇帝暗殺未遂のひとつにすぎない。そして、犯人と目された者が公衆の面前で処刑されることは、暗殺未遂なんかよりもずっと多くの罪とされるものが転がってることを慮れば、別段、珍しいことじゃない」

「それを理解しているからこそ、フィツジェラルドはクロード・シヤールを独りにはしなかった」

淡く滲んでいた光が、いつの間にか、透きとおった玻璃のような煌きを撒いていた。眇められる緑に、異民族を正面から射抜く蒼が映

る。

「現在においてワーディングの子どもたちと呼ばれている者のほとんどは、トーマス・ワーディングそのひとに直に触れたことはない代表のように目されているが、クロードだってそうだ。ただし、少数の例外がいる。冷酷帝時代ならびにフィツジェラルドに近衛軍が介入した時期を、地下に潜るか亡命するかした、トーマス・ワーディングそのひとの友人もしくは支援者。ないしは、同志。クロードが傾倒したのは、密かにフィツジェラルドに舞い戻っていた、そういった者のひとりだ」

「傾倒、か」

薄く、トゥルスの口許に失笑が湧く。

「あの少年には、トーマス・ワーディングの遺したものが、そんなにこれからを拓くようなものに見えたのかな」

大仰に、トゥルスは首を傾げてみせた。

「諸侯の領地を単位として創られた諸々は、基本的には諸侯 間 接的にその臣や領民 を利するものではあるけれど、それなりの均衡と、執行のための利害関係を内包する。どんなに完璧に見えるものであれ、不利を伴うことから逃れられるものではないけれど、利を享受する先と不利を被る先をそれなりに方向づけることは可能だ。そして、創られたものである以上、その枠に何を容れるかを左右することができる」

異民族と少年を取り囲む、冷えた鉄の塊が、量産される言葉の原本たる活版が、透き通った光に曝される。

「何を持ち上げるとしても、何を排するにしても。そこに在るのは、見方によっては、虚言や戯言と変わらないものだ。それが在るものであるように捉えられるのは、それに基づいてひとが動くからだ。それが素晴らしいと捉えられるとするのなら、それは、そういうものだと思なしてひとが動くからだ。ユスキュダル・バニヤスのような成功者は帝国の庇護がなくともやっていける。ウィリアム・アリソングのような野心家には帝国が組み上げてきた既存への配慮は煩わしい。西部都市同盟やフィツジェラルドのような帝国都市や自治都市にとって、帝国の頸木は邪魔なだけ。帝国国教会に至っては、帝国などなくてもヴァルナ神教ファウストウス派の信仰の要として存在できる。そこで、彼らは帝国に代わるものを探すことにした。要らなくなったものを捨てようとしているとも、誰かに護ってもらわずとも歩んでいけるだけの成長を遂げたとも言えるけど、遊び古した飽きた玩具を新しい玩具に代えるというのは、単純ではあっても簡単ではない。それで遊んでいたのも、それに飽いたのも、全員ではないんだ。そして、新しいものを手にしようとしている彼らだって、仲が良いわけじゃない。だからワーディングの子どもたちに眼が向けられた。皇帝でも神でもなく、過去に生きた者の、思考上の遺児に、ね」

ゆつくりと、異民族は瞼を落とした。

「理を欲する者には理を、利を欲する者には利を。価値を欲する者には意味を、理想を欲する者には綺麗事を。枷としかならないものを解体し、その崩壊によって溢れ出たひとつひとつに意味を持たせること。世界とは枷によって規定されるものではなく、そこで溢れたものが寄り集まることによって成立するという枠を組み上げること。肯定を得るために成される破壊と否定。否定を得るために為される崇拜と礼賛。それは、それまでとは分断されて輝かしいものとして

ばら撒かれる　その礎から、変革と変化を取り違えているだけかもしれないという可能性から、反転したように見えて何も変わっていないかもしれないということから、眼を逸らしているだけのまやかしに似た詭弁にすぎない。それはまず最初に机上において効力を発揮する。生存するだけのものではない、と定義されることで、世界に溢れているひとつひとつは、選ぶという可能性を、選べないことと引き換えにした庇護を、机上において獲得する。選べないものを選ぶ際に生じる壁を崩し、選びたいように選ぶということを実現するために集う彼らのために、僕らは言葉をもって世界の法則を編み上げてゐるわけさ。更なる効率化を進め、敵を潰す口実を造り、味方に騙る、まるで現実そのもののような幻を、まるでそう在ることが当然であるかのように、ね」

失笑を孕む残響が静寂に融け切る前に、細く、ダルファロが息を吸った。気圧されているような困惑しているような、狼狽のようなものを滲ませながら、ウェネティー人は問う。

「虚しくはないか？」

億劫そうに瞼を持ち上げながら、その疑問がなぜ生じたのか解らない、といった様でアルウェルニー族は口の端を持ち上げた。

「生き抜くことができるのなら」

青年の唇から零れた音は、澄み切った光の中を舞い落ちる。

「僕はそれで充分だよ」

The second act - 22 (後書き)

棲息地

片足靴屋 / Leith b h r o g a n  
12 . f m - p . j p / 2 0 / L I R /

<http://id>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8568w/>

---

TIERRA DE NADIE/The second act

2011年11月20日01時14分発行